



価値・規範を中心とした社会システム理論の再生のための比較文明学的研究 — パーソنز社会学とトッド人類学の接続を基調として —

小川, 晃生

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2018-03-25

(Date of Publication)

2019-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7061号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007061>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

平成 29 年 12 月 7 日

価値・規範を中心とした社会システム理論の再生のための
比較文明学的研究
—パーソンズ社会学とトッド人類学の接続を基調として—

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程

社会動態専攻

小川晃生

目次

序論	1
付論 A	19
第一章 比較文明学という共通性—おもにパーソンズ社会学再考	25
1-1. パーソンズ社会学における変動論の一貫性についての再確認	25
1-2. パーソンズ社会学における文化システムの変動論の一貫性について	27
1-3. パーソンズ社会学における科学の変動に関する記述について	28
1-4. 『社会的行為の構造』再考	30
1-5. 結論—比較文明学という共通性	31
第二章 「構造主義」を基準としたパーソンズ=トッド接続	34
2-1. 本章における「構造主義」について	34
2-2. トッド人類学と構造主義	39
2-3. パーソンズ社会学と構造主義	44
2-4. 構造主義を基準としたパーソンズ=トッド接続	49
第三章 「サイバネティクス」を基準としたパーソンズ=トッド接続	54
3-1. 本章でのサイバネティクスの定義とその位置づけについて	55
3-2. パーソンズ社会学についての検討	59
3-3. トッド人類学についての検討	63
3-4. 「サイバネティクス」概念を出発点とした「土台」の提供	67
第四章 パターン変数と人類学的基底との接続	74
4-1. パターン変数についての基礎事項の確認	74
4-2. 人類学的基底についての基礎事項の確認	77
4-3. パターン変数と人類学的基底との接続の基礎事項	80
4-4. パターン変数の「二重性」問題	82
4-5. 接続のための諸要素の整理—人類学的基底	85
4-6. 接続のための諸要素の整理—パターン変数	91

4-7. 規範科学としての接続	9 5
結論	1 2 1
付論 B	1 4 1
謝辞	1 4 3
引用・参考文献	1 4 4

序論

近年の社会学理論は社会学という学問の中で不人気だ。特にそのなかでも、社会システム理論は不人気だ。例えばいわゆる「ルーマン＝ハーバーマス論争」のなかでハーバーマス (Jürgen Habermas) は、ルーマン (Niklas Luhmann) が社会システム理論に依拠することで生じる様々な問題点を指摘した (Habermas&Luhmann, 1971＝一九八七)。その一例が、柳沢謙次 (一九九一：二五) のような先行研究でも引用されているが、「システム理論は、生物システムの領域から社会システムの領域に転用されると、その経験的・分析的な有用性を失ってしまう」 (Habermas&Luhmann, 1971＝一九八七：二一〇) というハーバーマスの言説だ。本稿ではハーバーマスによる議論を詳細に検討することはしないが、近年の社会学およびその近接領域ではこのハーバーマスに代表される反システム理論的立場が大きな役割を果たしてきたように思われる。率直に言って、社会システム理論は近年求心力を失ってきた。その理由を理解するためには、近年の社会システム理論がどのようなものなのか軽く触れておかなければならないだろう。

昨今の社会システム理論を代表する研究者として、前述したルーマンを取り上げることができる。ルーマンについては、例えば馬場靖雄 (二〇〇一) のような先行研究で詳細に紹介されているが、ここでは後期ルーマンを代表する『社会の社会』を踏まえて著者自身が簡単に要約しておく。ルーマン社会学の特徴の一つは、社会システムのシステムとしての作動の「リアリティ」を追求することである^[1]。長岡克行 (一九九七) がその重要性を指摘するようにルーマンは社会システムの基本単位を相互行為からコミュニケーション・プロセスへと変更することで、またシステム理論を「システムと環境の区別の理論」 (Luhmann, 1997＝二〇〇九：五一) と定義することで、「認知的自己包含という問題 [何らかの認知が自分自身への認知をも含んでいるとの問題]」 (Luhmann, 1997＝二〇〇九：七) を解決しつつ「独自の自己組織化と自己産出を遂行する」 (Luhmann, 1997＝二〇〇九：三一) ものとしての「包括的な社会システムとしての全体社会」 (Luhmann, 1997＝二〇〇九：七四) の作動を「特定の《本質》や、ましてや特定の道徳 (幸福の普及、連帯、生活環境への適応、理性的な合意による統合など)」 (Luhmann, 1997＝二〇〇九：六五) から切り離した。このようなルーマン社会学は確かに社会システムのシステムとしての作動をより「リアル」で「スマート」に記述している。またギデنز (Anthony Giddens) の諸理論についても同様の傾向がある。ギデنزの諸理論については例えば宮本孝二 (一九九八 b) などが詳細に研究している。宮本 (一九九八 b) によればギデنزの「構造化理論」はギデنزが意味学派、機能主義、マルクス主義の三者の長所、短所を踏まえて「意味や主観性を重視しつつ、マクロな制度やそれを前提にしたパワーと闘争を理論枠組みに組み込もう」 (宮本、一九九八 b：三三) として構築されたものであり、「構造は相互行為のありかたを規定し、あるいは可能にする条件であるとともに、相互行為によって絶えず生産され再生産され

る」(宮本、一九九八 b : 三三) という「構造の二重性」(宮本、一九九八 b : 三三) を強調した理論だ(宮本、一九九八 b : 三一—三四)。このようなギデنزの諸理論もまた社会システムのシステムとしての作動上の「リアリティ」を追求した理論だといえる。同様のことは日本国内における社会システム理論についてもいえる。今田高俊らはシステム生成時の「ゆらぎ」を重視したシナジェティクスの社会システム生成プロセス研究を「社会システム学」と名付けた(今田高俊・鈴木正仁・黒石晋、二〇一一)。この「社会システム学」はまさに社会システムのシステムとしての作動をいかに「リアル」に描写するかの特化した研究領域だといえる。

このように近年の社会システム理論は、システムのシステムとしての作動を「リアル」に描写することに心血を注いできたといえる。この社会システム理論の発展は自然科学の発展とおおむねパラレルで、そういう意味で「正常」だ^[2]。社会システム理論は「サイバネティクス」や「オートポイエーシス」のような自然科学で発達した諸概念を積極的に取り入れてきた。ではなぜ、社会システム理論は支持を失ったのか。この問題については、今田・鈴木・黒石(二〇一一)でも触れられている「理系人間と文系人間の対立」のような問題も関係してくるだろう。しかしここでは、本研究と関係する範囲でこの問題に触れておく。最初に触れたハーバーマスの言説とは焦点が異なるが、理由の一つは前述した作動上の「リアリティ」と重複しつつ同じではない人類学的な「リアリティ」が社会システム理論に欠如しているからだ、と本稿著者は考える。後述するように本研究の主要なテーマの一つはエマニュエル・トッド(Emmanuel Todd)の人類学だが、トッド人類学を代表する研究書の一つである『移民の運命』では、移民受け入れ国における移民の人類学的システム(家族システムなど)が破壊され、受け入れ国の移民に対する態度(同化志向か隔離志向か)とは独立して、移民が受け入れ国の人類学的システムに同化してゆくと主張された(Todd, 1994=一九九九)^[3]。昨今の社会システム理論における言説はこれと対照的だ。徳安彰(二〇〇四)は政治システム以外の社会のサブ・システムのグローバルな拡大を前提としたルーマンの社会システム観を「世界社会」(徳安、二〇〇四 : 一八一)と表現しているが、この見方は、それが歴史的に展開してきた土地と人類学システムとの強固な結びつきを軽視しているように思える^[4]。平たく言えば、人間社会というものはそれが存在してきた土地・空間と本来は不可分である、という前提を軽視しているように見える。たしかに社会システム理論は抽象理論なのだから、経験現象から多くの要素を切り離すのはその性質上当たり前だ。しかし前述した人類学的システムは、決して抽象理論に不要な経験的成分などではなく、実際には抽象モデルとしての社会システムを成立させる要件を含んでいるのではないか。例えば前述したトッドの『移民の運命』における移民の人類学的同化プロセスは、ひょっとすればあらゆる社会システムに書き込まれた作動なのであり、したがって抽象理論としての社会システム理論にも不可欠なのではないか。だとすれば、前述したように既存の社会システム理論が求心力を失った理由の一つがここにある。昨今の社会システム理論

は、社会システムをそれとして成立させる要件を含むはずの人類学的システムを軽視してきたのだ。

したがって社会システム理論を再生させ再び活力を取り戻させるためには、家族社会学、文化人類学、歴史人口学のような、人類学的システムの作動を重視してきた諸研究領域と対話しそれらを再受容する必要があるように感じられる。これに近い関心は油井清光（二〇〇六）のような先行研究にも見出されるし、デュルケーム社会学を数理モデルで表現する落合仁司（二〇一六）は前述した社会システム理論と人類学的諸研究の対話に帰結しようが、このような研究は一般的には少ない。ところで、その基盤が大きく異なる社会システム理論と人類学的諸研究領域をどのようにして「対話」させればよいのだろうか。特に現代社会システム理論はシステム理論の枠組みで前述したように人類学的システムを軽視しつつ発展してきたため、対話は困難なように思える。そこで方法の一つとして以下の事柄を提案したい。社会システム理論と人類学的研究の双方から分野横断的な研究者を一人ずつ選んで両者の理論的な接続を試みる、ということだ。社会システム理論の側からは、昨今の社会システム理論と比べて人類学的システムを相対的に重視している旧世代の研究者を選びたい。そして人類学的研究の側からは、何らかの「革新性」を有する研究者を選びたい。こうすることでシステム理論という点では一歩後退しつつ、前述した人類学的「リアリティ」を有しかつ「革新性」を含んだ「接続」が可能なはずだ。

こうして、本稿著者はシステム理論の側からタルコット・パーソンズ(Talcott Parsons)を選ぶこととした。パーソンズは前世代を代表する社会システム理論の研究者の一人で、その理論はパレート、デュルケーム、ウェーバーらの諸理論を基盤にした『社会的行為の構造』における「主意主義的行為理論」を出発点とし、パターン変数やAGIL図式などのさまざまなアイデアを生み出しつつ社会システム理論としてより洗練されたものになっていった。そして、社会システム、文化システム、パーソナリティ、行動有機体の相互浸透関係を重視していた^[6]ことからわかるように、パーソンズは前述した現代社会システム理論と比べて、人類学的システムに配慮した研究を行っていた。そもそもパーソンズが志向したのは「行為の総合理論」(Parsons, 1951=一九六〇)だった。ここからさらに『宗教生活の原初形態』などで知られるエミール・デュルケーム(Emile Durkheim)等にまで遡れば、人類学的システムをさらに重視した諸研究を我々は見出すことができる。しかしここまで遡ってしまうと、社会システム理論という観点ではあまりに不十分だ。デュルケームはそもそもシステム理論研究者というわけではなかった^[6]。つまり本稿著者の観点からすれば、パーソンズ社会学は絶妙な位置にあるわけだ。

他方で本稿著者は、人類学的諸研究の側からエマニュエル・トッドを選んだ。『新ヨーロッパ大全』、『移民の運命』、『経済幻想』、『文明の接近—イスラーム vs 西洋の虚構』といった著書名からわかるように、トッドは極めて分野横断的な研究者だ。それだけでなく、トッドには「人類学的基底についての仮説」^[7]という革新性がある。「人類学的

基底についての仮説」とは、近代的都市化直前の農民家族システムが潜在的に包含する規範の類型が、近代化以後のその社会システムにおいて優位に立つ価値システムの類型を人々の「無意識」に作用することで決定するとみなす仮説だ。例えばこの仮説において、フランス北東部の平等主義核家族システムが包含する親子を早期に切り離す非権威主義的核家族的規範と平等主義的遺産相続分配規則が、近代フランスの自由・平等主義的価値システムをもたらしたとされる^[8]。つまりここでの「人類学的基底」とは当該地域の近代的都市化以前の家族システムだ。ただしこの定義はトッドの議論を簡略化させたものに過ぎないので、本稿第四章でその形成・変遷を含めて詳細に検討されるだろう。この「人類学的基底についての仮説」はトッドによってさまざまな事象の説明に使用され、「革新的」説明を提供してきた。その代表がイデオロギーについての説明と、近代化プロセスに関する説明だ。

前者については例えば社会民主主義とナチズムの類似性と相違点についての説明がある。『第三惑星』や石崎晴己（二〇〇一）が編集した『世界像革命』をみればわかるようにトッドは、共通した人類学的基底（直系家族システム）に由来する社会民主主義とナチズムのシステムとしての類似性と、両者の倫理的な著しい相違を指摘している（Todd, 1983=二〇〇八：一五七—一六二）。つまり、両者はシステムの性質としての権威主義と不平等主義を共有している点で似ているが、にもかかわらずその帰結—ナチスにおいては戦争と虐殺—からすれば倫理的に全く異なるということだ。このようなトッドにおけるシステムとしての類似性と倫理上の類似性との区別は、特に政治学において問題にされることが少なかったという点で^[9]革新性を有するといえる。

後者の例として、日本の近代化プロセスの説明がある。それによれば、経済的テイクオフに先行する文化的テイクオフが日本では明治維新以前に進行していたが、この西・中央ヨーロッパに次いで早い日本の文化的テイクオフの進展は日本と中央ヨーロッパとの人類学的基底（価値システム）の類似性に由来する（Todd, 1984=二〇〇八：三九一—三九三）。これによって、非ヨーロッパ世界では早期に生じた日本の近代化プロセスを一般法則のみで説明することが可能だ。ルーマンのゼマンティック変動のような既存の社会システム理論はこのような、少なくとも本稿著者には一定の妥当性があるように思える説明を生み出さなかった。その点で、トッドのこの説明には「革新性」がある。

このようにして、本稿著者は社会システム理論の再生のためのパーソンズ社会学とトッド人類学の接続（以下、パーソンズ=トッド接続などと表記）という研究テーマを提案するに至った。しかし本稿の表題—「価値・規範を中心とした社会システム理論の再生のための比較文明学的研究—パーソンズ社会学とトッド人類学の接続を基調として—」—からもわかるように、これまでの議論は本稿で著者が提示すべき問題関心の一部に過ぎない。本稿でこれから著者が提示する研究は前述したテーマ設定に加えて、価値・規範概念を中心としたものであり比較文明学的一本研究での「比較文明学」という言葉の使用は伊東俊太郎編（一九九七）に基づき、本稿でのその定義は後述する—なものだ。

そこで、以下では本稿の研究分野と研究目的についてより具体的な説明を行う。

本稿の研究分野と研究目的について

前述したように、本稿の研究分野は「価値・規範を中心とした社会システム理論の再生のための比較文明学的研究」だ。この分野には以下の三つの要点が含まれている。それらの要点は、一.価値・規範システムを重視すること、二.社会システム理論に依拠すること、三.比較文明学であること、である。ただし、後述するように「比較文明学」には大きく分けて「通時的なもの」と「共時的なもの」の二つが存在する^[10]。本稿での「比較文明学」は「共時的比較」を重視した「比較文明学」を指す。そこで伊東編（一九九七）などを参照しつつ本稿では、「共時的比較」を重視しつつシステム変動を考慮した分野横断的社会研究というような意味で「比較文明学」を定義する。なお本稿で定義する「比較文明学」と「社会学」、「人類学」との具体的な関係性は本稿付論 A で触れる。これら三つの要点のうち、少なくとも二つを含んだ先行研究として、以下のものを提示できる。「価値・規範システムについての社会システム理論」としては本稿のテーマのひとつであるパーソンズの社会学、作田啓一の諸研究、見田宗介の諸研究、などがある。「社会システム理論に依拠した比較文明学」としてはニクラス・ルーマンにおけるゼマンティック概念と関連した諸研究（cf. Luhmann, 1980=二〇一一）、濱口恵俊（一九九七）、今田高俊（二〇〇一）、などを取り上げることができる。「価値・規範システムについての比較文明学」としては、マックス・ウェーバーの諸研究（cf. Weber, 1920=一九八九）、ハンティントンの『文明の衝突』（Huntington, 1996=一九九八）、本稿のテーマの一つであるエマニュエル・トッドの諸研究、などを提示できる。本稿で著者がこれらの研究分野を選択した理由を説明するために、上述した先行研究に適宜触れながら、以下では本稿の研究が含む複数の要素について本稿の研究目的と関連させて記述する。

第一に、本研究が価値・規範システムに重点を置いていることに関して記述する。溝部明男（二〇一一）は、パーソンズ社会学が「価値・規範要素を偏重しすぎ」（溝部、二〇一一：二九）ているという批判を紹介している（溝部、二〇一一：二九、三五―三六）。これはパーソンズの社会変動論において、サイバネティック・ヒエラルキーの上位にある価値システムが重視されすぎているという批判だ（溝部、二〇一一：三五）。松本和良（一九九七）は、パーソンズのウェーバー解釈が規範的要素に偏重しているというポープ（W. Pope）とコーエン（J. Cohen）によるパーソンズ批判を、ここではパーソンズを擁護する文脈で、紹介している（松本、一九九七：三四―四三）。ルーマンの諸理論が価値・規範システムの位置づけをパーソンズ等と比べて相対化しているのは『社会の社会』などをみれば明らかだ。このように、そのなかでの価値・規範システムの位置づけを相対化しようという潮流が社会学の中に存在しているのは明らかだ^[11]。実際、前述した「価値・規範システムについての社会システム理論」の先行研究は、パ

ーソンズ、作田、見田といった一世代前のものが中心だ。ところが、前述したトッド人類学の「革新性」の根底には前述した「人類学的基底」という価値・規範システムを記述するための概念がある。我々の価値・規範システムについての知識が極めて限定的だからこそ、トッド人類学は「革新性」を有するものとして注目されたのではないか。そこで本研究では、旧世代の諸研究への安易な逆戻りを警戒しつつ、価値・規範システムに重点を置く。そこで後述するように本稿では、初期パーソンズのパターン変数—価値・規範システムを記述—とトッドの人類学的基底—同じく価値・規範システムを記述—の「接続」を具体的な研究目的とする。この「接続」は人類学的基底を社会システム理論のなかで取り扱うことに貢献し、社会システム理論に人類学的「リアリティ」を再受容させるための「第一歩」となる。なお、ギデンズの「構造化理論」の意義をパーソンズと比較した価値・規範の相対化だとみなす溝部（二〇一一：三六一三七）の議論を踏まえれば、本稿著者がギデンズではなくパーソンズを研究対象として採用する理由の一つはこの点にある。そして前述したようにトッド人類学もまた「価値偏重」だから、この点でパーソンズとトッドは「近い」。なお本研究でいう「価値・規範」が極めてマクロな視点におけるものであることを断っておく。

第二に、本稿が社会システム理論を研究テーマとして採用することについて記述する^[12]。本稿は「社会システム理論はなぜ求心力を失ったか」という問いかけと、社会システム理論再生のためには人類学的「リアリティ」の再吸収が必要だという本稿著者の返答からはじまった。では、なぜそもそも社会システム理論でなければならないのか。本稿の最初でいわゆる「ルーマン＝ハーバーマス論争」（Habermas&Luhmann, 1971＝一九八七）に触れて指摘したように、「システム」という概念に依拠して社会を研究すること自体が「社会学」という学問のなかでしばしば批判されてきた。これについては、自然科学との接続がその回答のひとつだ。前述した今田高俊らの「社会システム学」はこの点で徹底している。例えばこの「社会システム学」の研究者の一人である中丸麻由子（二〇一四）はエージェントベース・シミュレーションを使用してシナジェティクスの立場からシステムの「進化」を研究している。また前述したようにパーソンズにせよルーマンにせよ、「サイバネティクス」や「オートポイエーシス」のような自然科学の発想をふんだんに取り入れてきた。このように自然科学との接続を考えたとき、社会学の中では社会システム理論に依拠することが有用だ。そして価値・規範システム研究においては、例えば大浦宏邦（一九九六）の研究が示唆する^[13]ように、自然科学の研究対象である動物における価値・規範システムと人文・社会科学の研究対象である人間社会の価値・規範システムは、連続した研究対象として位置付けられうる。実際、後述するトッドの『家族システムの起源』は人間社会における価値・規範システム生成プロセスを霊長類から連続したものとして把握しようとした研究書だと解釈する余地がある^[14]。本稿著者も、あくまで将来の課題としてだが、人間社会の価値・規範システムを動物についてのそれと連続したものとして研究したい。

第三に、本稿が「共時的比較」を重視することについて記述する。近年の人文・社会科学においては「共時的比較」が必ずしも主流とはいえない。高野秀之（二〇〇九）は、構造主義言語学から認知言語学へという文脈の中で、「ことばを使う人間が言語研究の対象に含まれるようになると、特定言語の絶対性や言語間の相対的な差異から、その共通性に関心が以降されていった」（高野、二〇〇九：九二）と指摘している。泉幽香（一九七二）はレヴィ＝ストロース人類学を再検討する文脈のなかで、「社会諸関係の総体を把えるさい、相似性においてとらえるか、差異性においてとらえるかが問題となる」（泉、一九七二：五六）としつつ「価値の分極化が進行する社会（現代西欧社会）および多元的価値の社会（非西欧社会）において、またある社会から他の社会の諸現象に注目する場合、いずれにおいても自己との相似性でとらえる見方が重要になってくる」（泉、一九七二：五六）と指摘している。社会学においても同様の言説が散見される。既に触れたようにルーマンはコミュニケーション・プロセスが覆う範囲を「全体社会」（Luhmann, 1997=二〇〇九）とみなし、「ラディカルに反領域主義的」（Luhmann, 1997=二〇〇九：二二）な立場を採用すると宣言した。前述したように徳安（二〇〇四）はこのようなルーマン社会学の研究対象が「世界社会」（徳安、二〇〇四：一八一）であることを確認している。また、松本和良（一九九七）は本稿のテーマのひとつであるパーソンズ社会学においても、初期における構造と機能のどちらを優先するかという葛藤が機能優先で解決される中で（松本、一九九七：一三—一四）、初期の「社会構造の比較分析を最重要視した」（松本、一九九七：一二）姿勢から一転して後期パーソンズが「特殊な構造主義的要素をもつ社会構造の比較分析という狭い視角」（松本、一九九七：一三）を克服して行為の一般理論を構築したと指摘している（松本、一九九七：一三）。なお、溝部明男（二〇一一）は後期を含めたパーソンズ社会学が社会システムを「境界維持システム」（溝部、二〇一一：三四）と定義したことに関して、「グローバル化の進む今日、境界という概念を強調することには疑問符を付けざるをえない」（溝部、二〇一一：三四）と批判しつつ「境界」と「境界をこえる相互交換」という2段階の概念化作業を1段に簡略化」（溝部、二〇一一：三五）することをパーソンズ社会学以後の課題として提示している（溝部、二〇一一：三四—三五）。これらの先行研究から、近年の社会学には「比較」から「反比較」—特に反「共時的比較」—へという大きな流れがあるといえる。社会学的比較文明学もまた同様だ。濱口恵俊（一九九七）は複雑系として社会システムを把握し「方法論的個別対主義」から「方法論的關係体主義」への転換が必要」（濱口、一九九七：一七七）だと指摘している。しかしながら、「共時的比較」はその重要性を決して失ったわけではない。前述したことを繰り返すが、昨今の社会システム理論は、それが展開してきた土地・空間と強固に結びついた人類学的システムを軽視してきた。この人類学的システムを社会システム理論が「再受容」するためには、その性質から言って「共時的比較」に再注目することが必要だ。そこで本研究は共時的比較に基づく研究の限界を認識しつつも、前述したようにルーマ

ンがあえて「ラディカルに反領域主義的」(Luhmann, 1997=二〇〇九:二二)な立場を採用したのとは逆に「ラディカルに領域主義的」な立場—共時的比較を重視するという意味で—をとる。なおこの点でのパーソンズとトッドの「類似性」は次項で記述する。

最後に、本稿が研究テーマとして「比較文明学」を掲げていることについて記述する。本稿でこれまで取り上げてきた先行研究からわかるように、価値偏重、共時的比較アプローチに関係する諸研究は「社会学」、「人類学」という学問内部にとどまらない。「社会システム理論」という枠組みにおいてさえ、「社会学」という学問領域以外での利用がある。すでに触れたことだがしたがって本稿では、伊東編(一九九七)などを参照しつつ共時的比較を重視しつつシステム変動を考慮した分野横断的社会研究というような意味で「比較文明学」を定義し、本研究をこのような意味での比較文明学的研究だと定義する。本稿で定義する「比較文明学」と「社会学」、「人類学」とのより具体的な関係性は本稿付論 A で記述する。なおこのことは、前述したようにパーソンズとトッドの両者が分野横断的な研究者であることにも対応している。またパーソンズが「近代的展開が最頂点にのぼりつめるといようなことは、まだまだ先の話であって、一多分、1世紀あるいはそれ以上先になると考えるべきであろう」(Parsons, 1971=一九七七:二一六)と指摘しているのに対して、トッドが『文明の接近』で二十一世紀におけるイスラム世界の文化的テイクオフを指摘している点は重要だ。このことはギデンズやバウマンなどと比べて、パーソンズとトッドの「文明観」が近代化プロセスを現役の研究対象とみなす点で類似していることを示している。

以上が、本稿が研究テーマとして「価値・規範を中心とした社会システム理論の再生のための比較文明学的研究」を採用する理由だ。繰り返すが、価値・規範システムを中心に据えるのはトッド人類学の中心が価値・規範システムを記述するための概念としての「人類学的基底」だからだ。社会システム理論に依拠するのは、本稿著者が人間社会の価値・規範システムを動物についてのそれと連続したものとして研究することを志向しているからだ。そして本研究が「共時的比較」を重視しつつシステム変動を考慮した分野横断的社会研究というような意味での「比較文明学」に依拠するのは、社会システム理論に人類学的「リアリティ」を「再受容」させるという本研究の目的にとって必要な立場だからでありパーソンズ=トッド接続を定義する上で有用だからだ。こうして「価値・規範にかかわる社会システム理論の再生のための比較文明学的研究—パーソンズ社会学とトッド人類学の接続を基調として—」という本稿のテーマの構成要素が出揃う。そして既に触れたように、本稿の具体的な研究目的は初期パーソンズのパターン変数と初期トッドの人類学的基底の「接続」だ^[15]。この両者の対応関係を整理し「接続」することが、人類学的基底を社会システム理論の研究対象として取り扱うことに貢献する。これは前述した研究テーマの枠内で人類学的「リアリティ」を社会システム理論に「再受容」させるということの「第一歩」だ。またその過程でパーソンズ社会学が果たした役割を振り返ることで、現代社会学ならびにその近接領域におけるパーソンズ社会

学の位置づけを再評価することもできるだろう。

本稿では具体的に何をするのか

本研究の問題関心の出発点は社会システム理論に人類学的「リアリティ」を「再受容」させるというものだ。そしてそれだけでなく、本稿が研究テーマとして「価値・規範を中心とした社会システム理論の再生のための比較文明学的研究」を採用する理由を概観した。既に触れたように、本稿におけるこれらの問題関心、研究目的を達成することに貢献するために、本稿では初期パーソンズのパターン変数とトッドの人類学的基底の「接続」を具体的な研究目的とする。この「接続」は「人類学的基底」概念を社会システム理論のなかで取り扱うことに貢献し、社会システム理論に人類学的「リアリティ」を再受容させるための「第一歩」となる。本稿第三章で指摘するように、この「接続」はトッドにおける「前近代社会」の「規範」についての記述としての人類学的基底が「近現代社会」における「価値」として「変換」されたものをパターン変数で表現しなおす、という「形式」をとる。人類学的基底がパターン変数によって表現し直されるわけだから、それを社会システム理論において取り扱うことは容易になるはずだ。とはいえこの価値・規範システムについての「接続」だけでは社会システム理論としての体を成さない。本稿におけるこの「接続」を出発点とした社会システム理論の構築は本稿以後の課題だ。そしてこれは社会システム理論に人類学的「リアリティ」を再受容させるための「第一歩」だが、あくまで「第一歩」に過ぎない。そして前述したように本研究のプロセスを振り返ることで、現代社会学ならびにその近接領域におけるパーソンズ社会学の位置づけを再評価する。

本稿でこのパターン変数と人類学的基底との「接続」を行うにあたって、本稿著者が採用するのは（社会）学史的アプローチだ。これまで記述してきたように本研究の問題関心の出発点は社会システム理論についてのものだったし、実際に本稿では「サイバネティクス」のようなシステム理論で使用されてきた概念が登場する。このように社会システム理論に関する研究であるにもかかわらず、本稿での研究において（社会）システム理論を（社会）システム理論として使用することはない。本研究で行われるのは学史的なパーソンズとトッドの検討だ。この検討を通してパーソンズ社会学とトッド人類学の類似点・相違点を可視化し、前述したパターン変数と人類学的基底との「接続」が模索されてゆく。ところでこのような学史的研究に関して、松本（一九九七）は興味深い言説を残している。松本（一九九七）によれば、アレクサンダー（Jeffrey Alexander）らのネオ機能主義は構造主義と機能主義を「止揚する方向へ動きつつある」（松本、一九九七：一八）。また松本（一九九七）自身が、デュルケームにおける「社会生命のコンCEPTION」（松本、一九九七：二六）に基づいて「システム論的方法と歴史的方法とを巧く連結すること」（松本、一九九七：二六）の重要性を強調している（松本、一九九七：二三―二七）。本研究におけるパーソンズ＝トッド接続もまた、このような「相

互補完的」な性格がある。以下では本稿の各章について概観するが、その前に本稿著者の議論の出発点となる、パーソンズ社会学とトッド人類学との類似点、相違点について簡単に議論しておく。

パーソンズとトッドの類似点・相違点についての簡単な検討

ここでは議論の出発点として、パーソンズ社会学とトッド人類学との類似点・相違点についての簡単な検討を行う。松本（一九九七）や徳安（二〇〇四）一すでに指摘したようにパーソンズの「国民社会」とルーマンの「世界社会」を比較（徳安、二〇〇四：一七九—一八三）一の議論を踏まえるならば、比較・反比較という観点からみてパーソンズはウェーバーとルーマンのあいだに位置しているといえる。松岡雅裕（一九九八）もまた詳細に検討した『社会類型』や『近代社会の体系』をみればわかるように、パーソンズは「社会構造の比較」（松本、一九九七：一二）という初期のアプローチを完全に放棄することなく近代社会システム全体の分析を行っている。これは徳安（二〇〇四）のいうところのパーソンズにおける「国民社会を単位とした多元主義的な社会統合」（徳安、二〇〇四：一八六）だ。このような「全体社会システム」（Luhmann, 1997=二〇〇九：七四）に対するパーソンズの研究姿勢は、トッド人類学に近いように思われる。『経済幻想』や『不均衡という病』等の著書をみればわかるように、トッドは近現代の「全体社会システム」（Luhmann, 1997=二〇〇九：七四）一トッドはこの言葉を使用していないが一を考えると、まず国民国家概念とは直接関係しない人類学的基底を考え、次に国民国家内部での人類学的基底の相互作用を考え、最後に国民国家の相互作用を考えている。ただし本稿で後述するように、トッドは近現代の「全体社会システム」（Luhmann, 1997=二〇〇九：七四）に対するこのアプローチを『社会類型』や『近代社会の体系』におけるパーソンズのように「古代社会」にまで遡らせていないし^[16]、それを論じるときも常に国民国家を単位としているわけではない。とはいえ少なくとも近現代社会の「全体社会システム」（Luhmann, 1997=二〇〇九：七四）を記述する際には、トッドとパーソンズには「共時的比較」に依拠するウェーバー的アプローチと「ラディカルに反領域主義的」（Luhmann, 1997=二〇〇九：二二）な立場をとるルーマン的アプローチとの「共存」がみられるという共通項がある。そして、本研究が価値・規範システムを重視する理由を説明したこれまでの議論からわかるように、「価値偏重」もまた両者の共通点である。ところがトッドと異なりパーソンズ社会学が、本研究で定義する「比較文明学」の範疇に入るかについては議論の余地がある。このことについては、遠藤薫（二〇一一）のようなパーソンズ社会学を「均衡理論」の一種とみなす先行研究が課題となる^[17]。本稿ではこれまでパーソンズが分野横断的な研究者だという前提で議論を進めてきたにもかかわらず、パーソンズ社会学が「均衡理論」の範疇に留まるならば、本稿で定義する「比較文明学」一共時的比較を重視しつつシステム変動を考慮した分野横断的社会研究一としては限定的なものとならざるを得ない。そこ

で後述するように本稿第一章ではこのような議論が相対化される。またパーソンズとトッドの両者が十分に比較文明的だとするならば、その次の段階としてパーソンズとトッドの「比較文明学」としての質的な類似点・相違点も可視化されなければならない。後述するように、本稿第二章では「構造主義」概念に依拠してこの点が議論される。本稿第三章もこのような議論の延長線上にある。本稿第三章で「サイバネティクス」というシステム理論由来の概念に基づいてパーソンズ社会学とトッド人類学とが検討されるが、そこでの研究はシステム理論としてのものではない。本稿第三章の議論もまたやはり「比較文明学」としての類似点・相違点についての学史的な研究だ。これまでの議論に基づいて、本稿第四章ではパターン変数と人類学的基底との「接続」が議論される。前述したようにこの「接続」は、トッドにおける「前近代社会」の「規範」についての記述としての人類学的基底が「近現代社会」における「価値」として「変換」されたものをパターン変数で表現しなおす、という「形式」をとる。以下では、各章の内容を概観しておく。

各章の概観について

ここでは本稿を構成する各章についての概観を行う。本稿第一章では、「比較文明学」という共通項をパーソンズ社会学とトッド人類学が共有していることを確認する。前述したように伊東編（一九九七）などを参照しつつ本稿では、「共時的比較」を重視しつつシステム変動を考慮した分野横断的社会研究というような意味で「比較文明学」を定義する。松本（一九九七）は「構造変動を含むシステムの均衡と統合を究明する理論」（松本、一九九七：五）だとパーソンズ社会学を定義しそこでの変動論の存在を認めつつも、パーソンズ社会学が歴史主義的でなく「まったく生気のない社会理論」（松本、一九九七：二六）だと批判している（松本、一九九七）。そして松本（一九九七）は、「そのシステム進化論のなかで、進化の要因として緊張やコンフリクトを重視せず、分化とその過程を強調した」（松本、一九九七：九）というぐあいにパーソンズ社会学における変動論を限定的に捉えている。これに対して、変動論の存在そのものは認める松本（一九九七）を含めて、松岡雅裕（一九九八）や田野崎昭夫（一九七五）そして François Chazel（1974＝一九七七）のような先行研究がパーソンズ社会学における変動論の重要性を強調してきた。本稿第一章ではこれらの先行研究を踏まえつつ、*Theories of Society*、『社会体系論』、『行為の総合理論をめざして』といったパーソンズの著書における変動論、文化システムの変動論の存在を確認し、それらの議論を踏まえて『社会的行為の構造』を比較文明的に読み直した。本稿第一章のこのような議論を通して後期だけでなく初期パーソンズを比較文明的に捉えることが可能となり、初期パーソンズとトッド人類学とが本稿で定義するところの「比較文明学」という土台を共有していることが示される。このことは本稿におけるパーソンズ＝トッド接続の前提だ。

本稿第二章では、「構造主義」概念に依拠してパーソンズとトッドの類似点・相違点

が整理される。ここでの議論は前述したように両者の「比較文明学」としての質的な類似点・相違点の整理であり、両者の「思想」の比較検討であり、そしてトッド人類学の土台でパーソンズ社会学を検討するということだ。本章では「戯画的構造主義」という基準が使用される。本稿第二章で概観するように、「構造主義」と関係する諸研究は言語学、文化人類学、社会学のように多岐にわたる。そしてこれらの先行研究の中で多様な議論が展開されており、そのなかには泉（一九七二）のように従来イメージされてきた「構造主義」に収まらないものもある。そこで本稿ではこれらの先行研究を踏まえつつ、パーソンズとトッドを比較するための道具として単純化された構造主義を「戯画的構造主義」と名づけ、それを基準として前述した作業を行うこととした。またこれに伴って「戯画的構造主義」に当てはまらない議論を油井清光（二〇〇四）の使用した言葉に基づいて「構造主義以後」とする。本稿第二章の結論を要約しておく。トッド自身が構造主義人類学との決別を強調しているにもかかわらず、トッド人類学には構造主義的側面が散見される。その例は、人類学的基底概念が「無意識」の「深層構造」であること、発展段階論を積極的に多用しているように見えること、家族システムを異なる法則の下に置きつつもその他のシステムに「進化」概念を頻繁に適用すること、などだ。他方でパーソンズ社会学は二項対立図式の使用、構造主義的相互連関を伴った「進化」概念の多用、発展段階論の多用といった点で「構造主義的」だが、文化システムの「伝搬」についての議論の存在、西欧・非西欧の二項対立図式の部分的相対化、といった「構造主義以後」的要素が散見される。そしてこのようなパーソンズ社会学についての議論から、構造主義的相互連関を伴った「進化」概念が初期パーソンズ（*Working Papers* 以前）において相対的に弱く、この意味で初期パーソンズが相対的に構造主義的ではないと指摘された。以上から、トッド人類学にせよパーソンズ社会学にせよ「構造主義」的側面と「構造主義以後」的側面の両面を併せ持っているということが言える。そしてパーソンズ＝トッド接続を考えると、両者がともに好んで使用する（発展）段階論を縮減的に使用することが重要であり、また「構造主義」との結合が相対的に弱い初期パーソンズが重要だ、といえる。

本稿第三章では「サイバネティクス」をキー概念としてのパーソンズ社会学とトッド人類学との「接続」を論じる。周知のことだが、先行研究を踏まえつつ後述するように「サイバネティクス」はウィーナー（Norbert Wiener）らの創造した概念だ。「サイバネティクス」という概念は本来、学術的に厳密に定義された概念であり様々な研究領域において重要な役割を果たしてきたものだ。しかし本章における「サイバネティクス」概念は、パーソンズ社会学を参照したものであり、本章におけるその使用は「社会学史」という研究分野でのその使用に限定される。このような「サイバネティクス」概念の使用は、例えば飯田剛史（一九八四）が参考になる。つまり前章における「構造主義」概念と同様に、本章では学術的に厳密に定義された「サイバネティクス」概念に依拠しない。にもかかわらず本章で「サイバネティクス」をキー概念とした議論を行うのは、前

述したようにパーソンズがこの概念を使用しているからであり、またトッドの諸研究に共通するテーマが人類学的基底による社会システムの「制御」だからだ。前章と同様にこの章での議論もまた、「比較文明学」としての両者の類似点・相違点の可視化のための「恣意的」なものだ。本章では「サイバネティクス」概念を「所与の目的のためのフィードバックによる制御理論」と表面的に定義しておく。そして本章ではこの「サイバネティクス」概念が「目的」、「制御」、「フィードバック」という三つの分析的要素に分解されて考察される。これはシステム理論にその基盤をもたないトッド人類学を検討するためだ。この表面的な定義に基づいて、本章ではパーソンズとトッドの類似点・相違点を検討する。そしてこの検討を通して、次章の主題であるパターン変数と人類学的基底との「接続」のための「土台」を提供する。その「土台」とは、「近現代社会」・「前近代社会」の二発展段階と関係したパーソンズとトッドの「特徴づけ」およびそれに基づく両者の接続モデルの提示だ。なお前述したように本章で「前近代社会」・「近現代社会」という二つの発展段階を採用するのは、パーソンズ社会学とトッド人類学には（発展）段階論への選好があるという前章での指摘に基づく。本章では、複数の先行研究に基づいてサイバネティクスとネオ・サイバネティクス—河島茂生（二〇一六）から引用した用語で本稿での定義は付論 A 等を参照せよ—を連続したものとして把握する。そのなかでも本章ではシステムのシナジェティック的発生の後にサイバネティクスの制御モデルが出現するという山内康英・黒石晋（一九八七）による説明を重視する。この山内・黒石（一九八七）の議論とサイバネティクスについての大澤真幸（二〇一一）の言及に基づいて、本章ではパーソンズ社会学とトッド人類学における「サイバネティクス」的要素を「近現代社会」の説明についての要素として捉える。これによって、パーソンズ社会学とトッド人類学とを、「近現代社会」・「前近代社会」の二発展段階と関係させつつ特徴づけることが可能になるはずだ。そしてこの検討によって、次章でのパターン変数と人類学的基底との「接続」がどのように位置づけられるべきかが可視化される。それは前述したように、トッドにおける「前近代社会」の「規範」についての記述としての人類学的基底が「近現代社会」における「価値」として「変換」されたものをパターン変数で表現しなおす、というものだ。なお本章における「サイバネティクス」概念と関係した両者の類似点・相違点の整理のなかで、パーソンズ＝トッド接続における初期トッドの重要性が確認される。

本稿第四章では、いよいよ本研究の主要テーマであるパターン変数と人類学的基底との「接続」が論じられる。本章では議論の準備としてパターン変数と人類学的基底との「形成史」を最初に概観する。パターン変数については、橋本真（一九六二）、川越次郎（二〇〇二）、松本和良（一九八四）、高篠正人（一九七〇）、François Chazel（1974＝一九七七）といった先行研究を踏まえつつ、一九四〇年代における二項対立図式の漸次的形成から *Working Papers* 以後の AGIL 図式まで簡単に触れる。人類学的基底についても、フレデリック＝ル・プレイの研究を参照した二項対立図式の形成から本稿第三

章で触れるより複雑な後期人類学的基底に至るまで、簡単に紹介する。そのうえで本章では、パターン変数の「二重性」—宮本（一九九八 b）を踏まえて前述したギデンズの「構造の二重性」概念とは無関係—という問題を本稿著者は提起する。これは、トッドにおける『第三惑星』—近代化プロセスから切り離された共時的な価値システムの比較研究—と『世界の幼少期』—価値システムと近代化プロセスとの関係性についての研究—との役割分担を踏まえて、パーソンズのパターン変数がこの二つの使用法の「混合物」ではないかという問題提起だ。パターン変数「形成史」を踏まえれば、パーソンズのパターン変数が指示しているのは基本的には後者だ。これをパターン変数の「EnfM (P) 的使用」と命名する。他方で『社会体系論』などには、パターン変数を価値システムの共時的比較に用いているかのように捉えられうる記述がある。木村雅文（二〇一〇）が指摘するような、アメリカ、ドイツ、中国、中南米、についての簡単な分析についての記述だ。そこでこのようなパターン変数の使用をその「TroP (P) 的使用」と命名する。この命名の由来は、前述したトッドの両著書の原書名—『世界の幼少期』（*L'Enfance du Monde*）と『第三惑星』（*La Troisième Planète*）—であり、() 内は Parsons の P だ。このようなパターン変数の「二重性」問題を踏まえつつ本稿第四章では、パターン変数と人類学的基底との「接続」を試みる。本稿のこれまでの議論を踏まえて、「二項対立図式の組み合わせ」という共通点を有する初期パターン変数と初期人類学的基底が重視される。そして松本和良（一九九七）における「規範科学」(normative science)—価値・規範システムそのものを研究—と「説明科学」(explanatory science)—価値・規範システムと行為との関係性を研究—の相違についての記述（松本、一九九七：四八一—四九）に基づいて、本研究での「接続」を「規範科学」としてのものだとみなす。この「接続」の「説明科学」への転換は本稿以後の課題だ。繰り返すが、この「接続」は、人類学的基底を社会システム理論の研究対象として取り扱うことに貢献し人類学的「リアリティ」を社会システム理論に「再受容」させるということの「第一歩」となる。なお、本研究でパーソンズ社会学が果たしてきた役割を振り返ることで、パーソンズ社会学に現代社会学並びにその近接領域における独自の位置づけを提供できる。

以上が本研究の概観だ。最後になったが、以下ではパーソンズ社会学とトッド人類学とに関わる先行研究の一部に軽く触れることを通して、本研究のテーマがオリジナリティを有していることを確認する。

パーソンズとトッドに関する先行研究についての簡単なメモ

ここでは本稿の主題であるパーソンズ社会学とトッド人類学とに関係する先行研究の一部に簡単に触れておく。パーソンズ社会学には膨大な先行研究があり、そのすべてを網羅することは本稿著者の手に余る。そこで前述したように、ここではその一部を断片的に提示する。松岡雅裕（二〇〇七）は昨今のパーソンズ研究の動向について包括的に纏めている。松岡（二〇〇七）によるならば、近年のパーソンズ研究の特徴は「1960

年代の政治的異議申し立て運動の興隆と並行して下火となったパーソンズ研究への反省の上に成り立っている」(松岡、二〇〇七：二三一)ということであり、日本国内におけるパーソンズ研究は「世代間のコラボレーションがうまく実現した例」(松岡、二〇〇七：二三三)である。松岡(二〇〇七)はこのようなコレボレーションの例として『パーソンズ・ルネッサンスへの招待—タルコット・パーソンズ生誕百年を記念して』を提示している(松岡、二〇〇七：二三八)。また松岡(二〇〇七)は日本国内における近年のパーソンズ研究の主要業績として、高城和義の諸研究、進藤雄三(二〇〇六)の『近代性論再考—パーソンズ理論の射程』、油井清光(二〇〇二)の『パーソンズと社会学理論の現在—T・Pとよばれた知の領域について』などを取り上げている(松岡、二〇〇七)。松岡(二〇〇七)もまた指摘しているように、これらの先行研究はおもに「社会学史」という枠組みの中で、パーソンズ自身の思想上の系譜を考察したり現代的な視点からパーソンズ理論に内在する可能性を再考することを通して往年の不十分なパーソンズ理解を乗り越えようとした。これらの先行研究は重要だが、本研究のようにトッド人類学との「接続」を志向しているものはない。

次に、トッド人類学についての先行研究の一部を提示しておく。これらの先行研究の学問領域は歴史人口学、家族社会学、経済学、経営学などが主流だ。まず、重田孝夫(二〇一六)は企業組織の変革という観点からトッド人類学を論じている。解説は一九八〇年代の『第三惑星』から一九九〇年代の『経済幻想』、『移民の運命』、そして二〇一〇年代の『家族システムの起源』にまで及ぶが、あくまで表面的な要約にとどまっている。次に、平賀正剛(二〇一四)は会計システムと文化システムとの対応関係を分析するためのホフステッド(Geert Hofstede)とは異なる枠組みを模索するために、トッドの『経済幻想』に依拠している。直接的なテーマではないが、トッド人類学に言及している先行研究もまた散見される。三原武司(二〇一五)は、ギデンズ社会理論における「再帰的モニタリング」(三原、二〇一五：三六四)について「認知と文化の共進化理論ならびに最近の神経科学の成果を導入することで、理論的な再構成をこころみた」(三原、二〇一五：三六四)論文のなかで、トッドに言及している。三原(二〇一五)によるならば、ギデンズが論じる再帰性の作動の変化の前提としての識字による脳神経の再編成に着目したとき文字の出現に由来する口承文化/伝統文化の非連続性が重要性をもつのであり、ギデンズにおける伝統社会/モダニティ(どちらも文字を有する)の非連続性は相対化される(三原、二〇一五：三七一—三七二)。そしてこの文脈の中で、伝統社会/モダニティの非連続性を検討するヒントとして三原(二〇一五)はトッドにおける「識字化」概念—三原(二〇一五)は指摘していないが「文化的テイクオフ」概念と「移行期危機」概念—toに関係—toに言及している(三原、二〇一五：三七二)^[18]。新睦人(一九九五)はモストモダンにおける家族システムについて検討する文脈の中で、ポストモダンにおいて家族システムが収斂するとみなす言説を否定するための傍証としてトッド人類学に言及している。さらに、上垣彰(二〇〇九)は経済学における比較アプロー

チの重要性を指摘する文脈の中で、『新ヨーロッパ大全』における家族システムおよび農業システムの地理分布についての記述に言及している。河島茂（二〇一七）はトッド人類学について詳述しているが、これは研究論文・研究書というより一般向けの解説書である。上述した先行研究のいずれも、本研究と同じテーマのものはない。

これまでに提示したパーソンズとトッドについての先行研究は一部のものに過ぎないが、パーソンズ＝トッド接続という本研究と厳密に同一のテーマの研究論文は二〇一七年時点では存在しないのではないかとすれば、本研究は最低限度の「オリジナリティ」を確保したことになる。

註

[1] 「リアリティ」という言葉の使用は Luhmann (1997=二〇〇九) を踏まえている。

[2] 最初に取り上げたハーバーマスの言説を踏まえれば、このことを「正常」とみなすべきか議論の余地がある。しかし本稿ではこの重要な問題に立ち入らない。

[3] 『移民の運命』については『家族システムの起源』でトッド自身が類似した要約を提示している (Todd, 2011=二〇一六：一九)。

[4] 「人類学的システムとそれが展開してきた土地・空間との結びつき」という表現は、『不均衡という病』(Todd & Le Bras, 2013=二〇一四) を参照している。ところで、『経済幻想』の「訳者あとがき」で平野秦郎 (一九九九) は「抽象的人間でなく、現実的な人間」(平野、一九九九：三八四) を観察してグローバリゼーションを考察する著書だと『経済幻想』を評価している (平野、一九九九：三八四—三八五)。本稿著者の問題関心はこのようなトッドの研究姿勢の影響を受けているが、システム理論に依拠するところが異なる。

[5] Parsons (1961=一九九一) などを参照せよ。

[6] ただし、システム理論の観点からデュルケームを研究する先行研究は存在する。飯田剛史 (一九八四) を参照せよ。

[7] 「人類学的基底についての仮説」という表現における「仮説」という言葉の使用は、Todd (1999=二〇〇八：二〇) などを参照している。

[8] ここでの価値・規範の区別は Parsons (1966=一九七一：二六一—二七) を参照した。つまり、トッド自身の言葉の使い分けに由来していない。

[9] 例えば、パクストン (Robert. O. Paxton) は『ファシズムの解剖学』の結論部分において「ファシズム」の定義を提示している (Paxton, 2004=二〇〇九：三三六—三四三)。パクストンの優れた研究を本稿で具体的に検討することはしないが、以下の点は指摘しておきたい。パクストンの研究は詳細なものだが、「ファシズム」の定義に「集団の優越性」(Paxton, 2004=二〇〇九：三四一) や「純化された社会をめざすいっそう強力な統合の追求」(Paxton, 2004=二〇〇九：三四二) などが含まれていると

いう点で、本稿でトッドの「革新性」の一つとして提示する「システムとしての類似性と倫理上の類似性との区別」を積極的に行っているとは必ずしも言えない。

[10] 本稿での通時的・共時的という言葉の使用は、高野秀之（二〇〇九）や Todd（1990＝一九九二）などを参照している。

[11] 価値・規範についての研究がなくなったわけではない。そもそも社会学理論・社会システム理論の土台を作った研究者の一人だといえる初期パーソンズのテーマは、価値・規範システムを適切に位置づけることで経済学から独立した社会学を確立させることだった（Parsons, 1937＝一九七六）。現代でも真鍋一史（二〇一七）のように価値・規範システムについての研究は継続されている。しかし、特に社会システム理論においてかつてほど価値・規範という概念が安易に用いられなくなったのも確かだ。

[12] 佐藤俊樹（二〇一一）は「公理論」と「モデル」との差異を指摘している（佐藤、二〇一一：二一一二三）。本研究で例えば「理論」という言葉を使用するとき、このような厳密な定義に基づくものではないということを断っておく。

[13] 大浦（一九九六）の研究は、「ヒトにおける社会秩序の形成メカニズムを、「サルからのアプローチ」によって解明する」（大浦、一九九六：一四二）ことを目指すものであり、本稿の研究対象である価値・規範システムに直接言及しているわけではないことを断っておく。

[14] 『家族システムの起源』では原初人類の未分化な価値・規範システムが家族システムの規範化に伴って形成されてゆく様相が記述された（Todd, 2011＝二〇一六）。この未分化な価値・規範システムしか有さない原初人類は価値・規範という点で霊長類と連続しているのではないか。本稿ではこの問題には深入りしないが、興味深い。

[15] 本稿第四章で記述するようにパターン変数とは、「行為者の状況に出会うとき、彼にとってその状況が決定的な（曖昧でない）意味をもちうる前に、行わなければならぬ五つの基本的な二者択一を定式化」（Parsons&Shils, 1951＝一九六〇：一四〇—一四一）であり「行為理論の関係枠から直接に生起しうる基本的な二者択一のすべてをおおう一体系を構成する」（Parsons&Shils, 1951＝一九六〇：一四〇）とされる。この行為選択についての記述が、転じて価値・規範システムの記述に使用される。

[16] 後述するが、松岡（一九九八）はこのパーソンズのアプローチが「逆演繹」ではないかという批判を紹介している。

[17] 「均衡理論」という概念の使用やそれがパーソンズ社会学と関係しているということは、森岡清美・塩原勉・本間康平編（一九九三：三一七—三一八）等を参照している。

[18] 三原（二〇一五）の議論を踏まえるならば、例えば Chang-kyung-Sup が韓国社会における近代化プロセスを ‘compressed modernity’ と表現した（Chang, 2010）のと対照的にトッドの「文化的テイクオフ」が「圧縮困難」だとみなされる—トッドはそう明言していないかもしれないが『文明の接近』などの議論が参考になる—のは、文

化的テイクオフには脳神経システムと文化システムとの共進化が伴われているからと
いうことになるはずだ。とはいえ、本稿ではこの重要な問題に深く立ち入らない。

付論 A^[1]—諸事項の整理

この付論では本博士論文の本編に入る前に諸事項の整理を行う。諸事項とは 1.本研究で使用される用語、2.本研究におけるパーソンズ社会学とトッド人類学との取り扱い、3.研究領域の定義、だ。

A-1. 用語について

本稿では著者が提示する研究を表現するために著者独自の用語をいくつか使用した。それらを以下に纏めておく。これらの用語は本編での初出時にも解説するが、以下の表を参照すればより分かりやすいはずだ。なお用語そのものは著者独自のものでないが、その使用法が一般的なものと異なる場合も記載した。

初出の章	用語	定義
二章	戯画的構造主義	本稿第二章においてパーソンズ社会学とトッド人類学とを比較するために、単純化された道具として本稿著者が再構築した構造主義。
三章	ネオ・サイバネティクス	河島茂生（二〇一六）を参照しつつ、サイバネティクス以後の社会システム理論の諸展開を総称する語として本稿著者が使用。
四章	EnfM (P) 的使用	パーソンズにおける、近代化プロセスと強く関係した価値・規範の記述としてのパターン変数の使用。由来は初出時に註で記述。
	TroP (P) 的使用	パーソンズにおける、近代化プロセスと直接関係しないトッドの人類学的基底のようなパターン変数の使用。由来は初出時に註で記述。
	パターン変数の「二重性」	パーソンズ自身によるパターン変数の使用が「EnfM (P) 的使用」と「TroP (P) 的使用」との「混合物」であること。なお宮本孝二（一九九八 b）が指摘するギデنزの「構造の二重性」概念と無関係。
	TroP (T) 的使用	『第三惑星』にみられるような、近代化プロセスから切り離された人類学的基底の使用。由来は初出時に註で記述。
	EnfM (T) 的応用	『世界の幼少期』にみられるような、近代化プロセスと関連させた人類学的基底の使用。人類学的基底そのものには近代化プロセスが組み込まれていないため「応用」と表記。由

		来は初出時に註で記述。
	TroP (P-T) 接続	パターン変数の「TroP (P) 的使用」と人類学的基底の「TroP (T) 的使用」との接続。
	EnfM (P-T) 接続	パターン変数の「EnfM (P) 的使用」と人類学的基底の「EnfM (T) 的应用」との接続。
	基底 fna	絶対核家族 (famille nucléaire absolue) —『家族システムの起源』での表記—を基盤とした人類学的基底の短表記。
	基底 fne	平等主義核家族 (famille nucléaire égalitaire) —『家族システムの起源』での表記—を基盤とした人類学的基底の短表記。
	基底 fs	直系家族 (famille souche) —『家族システムの起源』での表記—を基盤とした人類学的基底の短表記。
	基底 fc	共同体家族 (famille communautaire) —『家族システムの起源』での表記—を基盤とした人類学的基底の短表記。

その他にも、本稿では本研究を表現するために様々な概念・用語を使用している。本稿では価値・規範システムのふるまいに関して「作動」という言葉を使用している。また本稿第三章では価値・規範システムの「変換」という概念が登場している。「作動」という言葉の使用は Luhmann (1997=二〇〇九) に基づく。「変換」という言葉の使用に関しては、以下で簡単に説明しておく。「変換」という言葉は例えば線形代数でも使用されている。例えば『岩波数学入門辞典』(青本和彦ほか編、二〇〇五) によれば「変換 (transformation)」概念とは「集合 X からそれ自身への写像」(青本和彦ほか編、二〇〇五：五五五) のことを指す。本研究における「変換」概念はこのような学術的に厳密なものではない。それは単に価値・規範システムの「作動」のあり方が何らかの理由で変容することを厳密な定義なしに表現しているに過ぎない。また本稿第四章ではパーソンズの「パターン変数」概念についてその「一次的」という表現が使用されている。これらと表現が類似しており学術研究において厳密に定義された概念を取り上げるならば、例えば同じく線形代数における「一次結合 (linear combination)」概念だろう。同様に『岩波数学入門辞典』(青本和彦ほか編、二〇〇五) によれば、「一次結合 (linear combination)」とは「ベクトル空間 V の有限個の元 v_1, \dots, v_n の定数倍の和 $a_1v_1 + \dots + a_nv_n$ 」(青本和彦ほか編、二〇〇五：二三) を意味する。また森岡清美・塩原勉・本間康平編 (一九九三：四六一四七) を見ればわかるように、社会科学においても「一次的」という言葉は様々な概念に使用されている。これらとは異なり、本研究にお

ける「一次的」という表現は、パーソンズ社会学におけるパターン変数の使用方法に由来する。本稿第四章であらためて指摘するように、五つの二項対立図式の組み合わせとしてのパターン変数の社会システムの諸要素に対する関りの優先度は、その二項対立の種類によって異なる。例えば『社会体系論』では、「普遍主義—個別主義」および「業績性—帰属性」が「価値志向」に優先的に関与するとされるのに対して、「感情性—感情的中立性」および「限定性—無限定性」は「動機志向」に優先的に関与するとされる（Parsons, 1951=一九七四：一一四）。本研究における「一次的」という表現はこの「優先的に関与する」ということを表現しているに過ぎない。つまり、例えば「普遍主義—個別主義」による「一次的組み合わせ」とは、本研究において「普遍主義—個別主義」によって「優先的に組み合わせられる」ということを意味する。この「優先的」という言葉が意味を持つのは、パーソンズ社会学においてパターン変数の五つの二項対立図式はすべて、所与の経験的事象の分析に関わるからだ。問題とされるのはその優先度に過ぎない。なお本研究におけるこの使用法において、「一次的組み合わせ」の次に優先度の高い組み合わせは「二次的組み合わせ」だ。

以上の本稿における用語ないしその定義は、厳密な定義がなされていないという点で、もしくは学術的に厳密な定義がなされた他の諸概念と類似しているという点で、適切なものではないかもしれない。それにもかかわらずこのような用語・概念を本稿で採用した理由は、本研究を表現するためのより適切な用語・概念を既存の先行研究のなかに見出すことができなかつたからだ。したがって、本稿で使用するこれらの用語・概念は暫定的なものであり、より適切な用語・概念の採用は本稿以後の課題とする。

A-2. 本研究におけるパーソンズ社会学とトッド人類学との取り扱いについて

本稿序論で既に、本研究の目的がパーソンズ社会学とトッド人類学との接続であること、本研究が主に社会学史的アプローチに基づく研究であることを表明した。そこで本研究がパーソンズ社会学とトッド人類学とをどのように取り扱うのかについていくつかの要点を簡単に指摘しておく。

本研究で資料として採用するパーソンズの著作物は、『社会的行為の構造』、『行為の総合理論をめざして』、『社会体系論』、*Theories of Society*、『社会類型』、『近代社会の体系』といった著書、*Essays in Sociological theory*に含まれる一九四〇年代の研究論文、パターン変数についての重要論文である“Pattern Variables Revisited”などだ。本研究が社会学史的アプローチを採用すると本稿序論で表明したことを踏まえれば、本研究で取り扱うパーソンズについての資料が量的に不十分なのは言うまでもない。しかし本研究の目的はパーソンズ社会学のみを社会学史的に掘り下げてゆくことにあるのではなく、パーソンズ社会学とトッド人類学との接続だ。本稿のパーソンズ研究はこの研究目的に貢献する範囲に限定される。その結果として上述した資料に研究範囲を制限した。特に本研究の過程で初期パーソンズの重要性が明らかにされそこに焦点が当てら

れてゆくため、本稿では一九七〇年代パーソンズをほとんど考慮していない。パーソンズについての社会学史的研究であるならば一九七〇年代パーソンズを考慮しないのは考え難いことだが、その理由はこのようなものだ。

本研究で資料として採用するトッドの著作物は、『第三惑星』、『世界の幼少期』、『新ヨーロッパ大全』、『移民の運命』、『経済幻想』、『家族システムの起源』、『文明の接近』、『不均衡という病』といった著書だ。本研究では家族社会学者としてのトッドの研究論文を考慮していない。本稿序論で表明したように、本研究の目的は社会システム理論に人類学的「リアリティ」を再吸収させることでありそのためにパーソンズ社会学とトッド人類学とを接続することだ。本稿の研究プロセスがこれから明らかにしてゆくように前述した研究目的において重要な役割を果たすのが、トッド人類学の分野横断的な側面だ。このような本稿の研究目的に依拠する限りにおいて、家族社会学者としてのトッドの研究論文は優先度が低い—決してそれらを軽視しているわけではないが。したがって前述したように本稿で採用したトッドについての資料には家族社会学者としての研究論文が含まれていない。

また本稿では前述した資料の中でも『第三惑星』、『家族システムの起源』を特に重視している。最初に邦訳が出版された著書でありトッド人類学を代表する『新ヨーロッパ大全』は本稿において副次的に取り扱われている。その理由は本研究の観点からみた前掲書の微妙な立ち位置だ。『新ヨーロッパ大全』では『第三惑星』などで議論された人類学的基底がヨーロッパ地域に対称を絞りつつ詳細に検討されている。特に『第三惑星』で不十分だった「家族制度と農地制度」(Todd, 1990=一九九二: 三九) との「特別なつながり」(Todd, 1990=一九九二: 三九) が議論されている点、『不均衡という病』などに先立って宗教システムについての議論が豊富に存在 (Todd, 1990=一九九二: 一二〇—一六八) する点はトッド研究にとって重要なはずだ。しかし『新ヨーロッパ大全』の議論にはいくつかの問題点がある。その一つは、『新ヨーロッパ大全』で詳述されたヨーロッパにおける家族システムについての検討が、トッド自身の後の著書によってしばしば修正されていることだ。『第三惑星』のように最初期の著書というわけではなくかといって『家族システムの起源』のように最新の研究成果を提示した著書というわけでもない『新ヨーロッパ大全』はパーソンズ=トッド接続という本研究の目的にとって不便だ。よって本研究ではこの点について『新ヨーロッパ大全』の記述を副次的に扱う。また前述したように『新ヨーロッパ大全』では「家族制度と農地制度」(Todd, 1990=一九九二: 三九) との「特別なつながり」(Todd, 1990=一九九二: 三九) が議論されている。ところが前掲書においてトッドは、「家族制度と農地制度はともに安定性がきわめて高いという点が共通している」(Todd, 1990=一九九二: 三九) と指摘している。つまり『家族システムの起源』などと異なり、『新ヨーロッパ大全』においてトッドは両者の関係性を家族システムの生成・変動・伝搬という文脈の中で把握しているわけではない。人類学的基底の恒常性という文脈の中で家族システムと農地システムとのカッ

プリングを取り扱うのであれば、家族システム単体でも人類学的基底の分析はとりあえず可能だ、という結論に帰着しないだろうか。それに対して家族システムの生成・変動・伝搬を考慮しつつ両者の関係性を取り扱う『家族システム起源』や『不均衡という病』において、家族システムと農地システムとはもはやシステムとして不可分—都市化以前の近代社会においては一のはずだ。このことと前述した記述の修正という問題によって、本稿では家族システムと農地システムとの関係性に関して『新ヨーロッパ大全』ではなく『家族システムの起源』や『不均衡という病』の記述を優先した。このように本稿の議論は『新ヨーロッパ大全』を軽視したものだが、その必要性がある場合には前掲書に触れる。

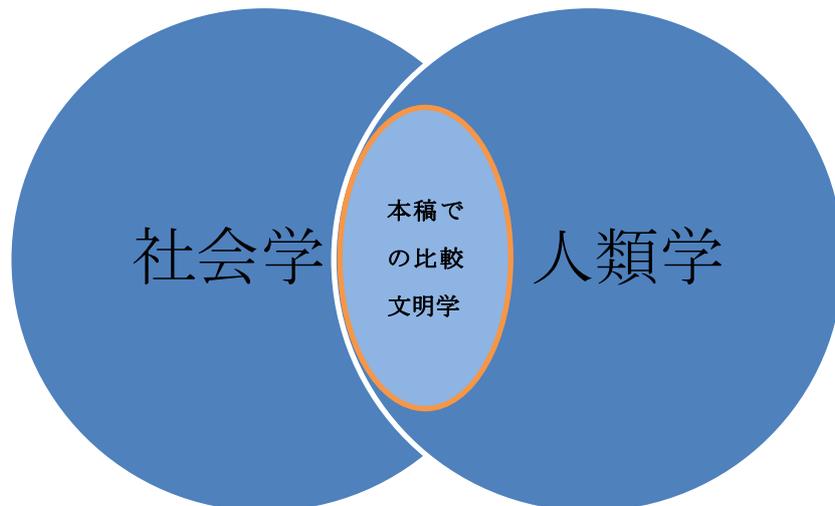
A-3. 研究領域の定義について

本稿序論では既に本研究の研究領域を「比較文明学」だと定義した。そして本稿序論では伊東俊太郎編（一九九七）などを参照しつつ、「共時的比較」を重視しつつシステム変動を考慮した分野横断的社会研究というような意味で「比較文明学」を定義した。ところで本稿序論を見ればわかるように、本研究には「社会学」および「人類学」という二つの研究領域もまた関係している。本研究における三者の関係性はどのようなものだろうか。まず「社会学」および「人類学」という研究領域がどのように定義されてきたか簡単に触れておく。エリクセン（Eriksen, T.H.）は「人類学」という学問の定義、性質について解説している（Eriksen, 2004=二〇〇八）。それによれば、「人類学」とは「類似性とともな差異にも敏感で、人間世界を地球規模の視点だけでなく、現場（local）の視点からも同時に照射する」（Eriksen, 2004=二〇〇八：七）学問であり、それぞれの研究者が「専門とする調査地域」（Eriksen, 2004=二〇〇八：八）を有しつつ「地球規模的（global）な視点での文化的多様性」（Eriksen, 2004=二〇〇八：九）を理解することで「現実世界における文化的多様性にかかわる知識をもたらす」（Eriksen, 2004=二〇〇八：八）ものだ。ただしエリクセンは一世代前の「人類学」が「伝統的な社会の現地の生活を詳細に研究することだけに傾注していた」（Eriksen, 2004=二〇〇八：一〇）とも指摘している。

これに対して、「社会学」の研究対象はより限定的だ。前述したエリクセンは、「社会科学の学問領域はかなり重なりあっている部分がある」（Eriksen, 2004=二〇〇八：一〇）と指摘しつつも「社会学」を「社会生活、とりわけ現代社会のそれを記述し広く深く解明しようとする」（Eriksen, 2004=二〇〇八：九—一〇）学問だと説明している。佐藤俊樹（二〇一一）は「社会学」についてより詳細に説明している。佐藤（二〇一一）によれば「社会学」は、「常識とは無関連に（＝常識に合致するしないにかかわらず）正しい結論を追求する」（佐藤、二〇一一：九）哲学のような学問とは異なり、「いったん常識を手放しておいて、最終的には（別の）常識的な考え方に戻っていく」（佐藤、二〇一一：九）ことを特徴とする。もちろんその研究対象は「自分自身が関わ

る社会事象」（佐藤、二〇一一：三三）だ。

本稿の研究テーマの一つはパーソンズ社会学だ。前述した佐藤（二〇一一）がパーソンズの諸研究を「社会学」として取り扱っていることからわかるように、パーソンズ社会学は確かに「社会学」だ。本稿序論で言及したように、本研究ではトッド人類学の「革新性」を社会システム理論に導入するためにパーソンズ社会学が重要な役割を果たす。このように確かに「社会学」と関係しているにもかかわらず、本研究は「いったん常識を手放しておいて、最終的には（別の）常識的な考え方に戻っていく」（佐藤、二〇一一：九）という「社会学」の本質を軽視している。本研究は「社会学」—特に社会システム理論—と関係する一方で、その研究姿勢は「現実世界における文化的多様性にかかわる知識をもたらす」（Eriksen, 2004=二〇〇八：八）という意味で「人類学」に近い。つまり本研究は、「社会学」と「人類学」の両方に依拠している。そこでこのような本研究の分野横断的な性質を表現するために、本稿では前述した意味で定義した伊東編（一九九七）らの「比較文明学」という用語を使用している。本稿での「比較文明学」という言葉の定義が、伊東編（一九九七）と必ずしも同じでないことに注意されたい。以下の図を参照のこと。



本稿 A-3.の議論に基づいて本稿著者が作成

註

【1】本研究における付論 A、付論 B という言葉の使用がパーソンズの主著の一つである『社会的行為の構造』に由来することを断っておく。

第一章 比較文明学という共通性—おもにパーソンズ社会学再考^[1]

本稿序論で記述したように、本章では、「比較文明学」という共通項をパーソンズ社会学とトッド人類学が共有していることを確認する。繰り返すが伊東俊太郎編（一九九七）などを参照しつつ本稿では「共時的比較」を重視しつつシステム変動を考慮した分野横断的社会研究というような意味で「比較文明学」を定義する。本稿序論で触れたようにパーソンズ社会学の「均衡理論」としての側面を強調する議論が散見されるが、この見方はパーソンズ=トッド接続にとって課題となる^[2]。本章ではこの見方が相対化される。本章では、パーソンズ社会学がシステム変動を重視した理論であるという先行研究による指摘を踏まえつつ、この先行研究による指摘を *Theories of Society*、『社会体系論』、『行為の総合理論をめざして』などで確認しつつ『社会的行為の構造』にまで拡大する^[3]。そしてこの議論に基づいて、パーソンズ社会学は初期から一貫して本稿で定義する意味で「比較文明学」的なのであり、ゆえにトッド人類学との接続はこの「比較文明学」という共通項を前提としてなされうる、ということが確認される。なお、トッド人類学自体が「比較文明学」的なのは『文明の接近』のような著書の存在から明らかである。また繰り返すが、本章で初期パーソンズが注目されるのは本稿第四章で初期パターン変数が議論されるからだ。

ところで本章の議論は、均衡理論・変動理論の二項対立的な視点からパーソンズ社会学を後者に引き寄せるものだ^[4]。しかし佐藤俊樹（二〇一一）は、パーソンズ社会学における構造機能主義は相互行為の挙動の近似モデルとして成立していない（佐藤、二〇一一：二〇八-二一〇）と批判している。構造機能主義全般についての類似の批判は直井優（一九八四）にもある。つまりパーソンズ社会学の変動理論としての側面を強調しても、その変動理論にはシステムの作動上の「リアリティ」が欠如している^[5]。そもそもルーマンは「変動する・しない」の差異に依拠した変動理論へのアプローチを批判している（Luhmann, 1980=二〇一一：二一七-二一九）。パーソンズ=トッド接続への貢献という本章の性質上この問題点には深く論及しないが、一点だけ指摘しておく。つまりシステム理論に基盤を持たないトッド人類学との接続を考えると、パーソンズ社会学における変動論のこの「ぎこちなさ」はむしろ強みになる。とはいえ本稿序論で触れたように本研究はシステムの作動上の「リアリティ」を追求する研究姿勢を排除するものではないから、パーソンズ=トッド接続を「土台」としつつもこの点で現代社会システム理論を受け入れてゆくだらう。しかし、このことはおもに本研究以後の課題だ。

最後になったが、本章に限り高城和義（一九八六）を参照してパーソンズ社会学の時代区分を設定している。それによれば初期：『社会的行為に構造』、中期：『行為の総合理論をめざして』、『社会体系論』など、後期：*Theories of Society* など、だ。

1-1. パーソンズ社会学における変動論の一貫性についての再確認

本題に入る前に、パーソンズ社会学における変動論の時代ごとの一貫性について再確

認しておく。François Chazel (1974=一九七七) の指摘するダーレンドルフのパーソンズ批判^[6]—パーソンズ社会学は社会変動をその視野に入れていないユートピア的なものだという批判—は一九七〇年代以後乗り越えられつつある。社会学史においては、例えば田野崎昭夫 (一九七五) は特に『社会体系論』以後のパーソンズ社会学における社会変動論について詳細に検討しているし、松岡雅裕 (一九九八) はパーソンズ社会学と社会進化論との関係性について詳述している。それによれば、パーソンズは生物学やイギリス功利主義の影響を受けつつ研究者として駆け出しのころから「社会進化論」に関心を持ち続けていたが、その関心が後期パーソンズの『社会類型』や『近代社会の体系』に帰結した (松岡、一九九八)。また松本和良 (一九九七) は、序論で触れたように「そのシステム進化論のなかで、進化の要因として緊張やコンフリクトを重視せず、分化とその過程を強調した」 (松本、一九九七：九) というぐあいにパーソンズ社会学における変動論を限定的に捉えつつも、パーソンズ社会学が「構造変動を含むシステムの均衡と統合を究明する理論」 (松本、一九九七：五) であると指摘している。社会学理論においても、例えば大黒正伸 (二〇一三) がパーソンズ社会学の「均衡理論」としての側面を相対化する議論を展開している。Chazel (1974=一九七七) が端的に指摘しているように、パーソンズにとって変動論は「科学的研究の究極的な対象」 (Chazel, 1974=一九七七：二〇二) なのだ。同様の指摘は小林月子 (一九九七) にも見出される。本項では、このようにパーソンズ社会学の変動理論としての側面を強調する多様な先行研究が存在するにもかかわらず本研究の目的に合わせた形で、パーソンズ社会学の変動論の時代ごとの一貫性を著者自身で追う。一九六〇年代以後のパーソンズ社会学において変動論が大きな役割を果たしているのは自明だ。例えば『社会類型』では段階 (原始社会—古代社会・・) ごとの社会システムの「進化」が取り扱われているし、*Theories of Society Foundation of Modern Sociological Theory* (以下 *Theories of Society*) でも変動論が社会システムにおける「構造変化の問題」として論じられている (Parsons 1961=一九七八：一一六—一三八)。

議論を一九五〇年代初頭に移す。『社会体系論』の前半部分は制度化概念に依拠したシステム均衡の問題に紙面が費やされており、ダーレンドルフ的パーソンズ社会学の様相を呈している。しかし後半部分では変動論が中心的なテーマとなっており、特にXI章では社会システムの変動の性質について詳細な検討が施されている。また、『行為の総合理論をめざして』でも周縁的ではあるが変動論が散在している。例えば、第二部「価値・動機・行為体系」の「まとめ」直前において「社会変動の問題」が一つの項を割いて論じられている点を強調しておく (Parsons & Shils, 1951=一九六〇：三六九—三七四)。

一九四〇年代のパーソンズ社会学についても言及する。変動論への言及という点でもっとも目につく論文に“The Problem of Controlled Institutional Change” (初出は一九四五年) がある。この論文はドイツをいかにして平和的な国家へ変動させてゆくかと

いう問題を扱った戦時色の強いものだが、パーソンズ社会学における制度的変動概念が纏まって表現された論文でもある。そのほかにも変動論を取り扱った論文が散見される。例えば“*The Position of Sociological Theory*”（初出は一九四七年）においては構造についての知識が変動のダイナミクスを理解する基礎であるということが触れられているし（Parsons, 1949b:11）、“*Toward a Common Language for the Area of Social Science*”（初出は一九四一年）においても逸脱と変動の関係性について言及されている（Parsons, 1949c:44）。また、西側世界の攻撃性について分析した論文において分析の焦点のひとつとして動態変動の基本プロセスが提示されている（Parsons, 1949d:255,266-268）ことも指摘しておく。

最後に、『社会的行為の構造』に言及する。よく知られているように^[7]本書はスペンサー社会進化論への言及から議論が始まっており、本書の議論は一貫して社会進化論と深いかかわりを持ち続けている^[8]。マーシャル論においてはマーシャル的実証主義が単線的進化論である原因が論じられている（Parsons, 1937:168=一九八六：六〇-六一）し、パレート論ではパレートにおける価値システムの複数性と変動の循環性が結びつけられている（Parsons, 1937:275=一九八六：二二六）。またデュルケム論ではデュルケムにおける儀礼のなかでの沸騰概念が循環理論の萌芽として捉えられている（Parsons, 1937:450=一九八九 a：二一〇-二一一）。そしてウェーバー論ではウェーバーにおけるカリスマの転移についての議論がデュルケムの儀礼についての議論と対応関係にあるとされている（Parsons, 1937:676=一九八九 b：五八）。このことと、上述したように本書でデュルケムの儀礼論と循環的変動理論が結びつけられていることを踏まえるならば、本書においてウェーバーにおけるカリスマの転移は循環的変動理論とつながっている^[9]。以上から、パーソンズ社会学において変動論への関心が一貫していることが改めて確認された。このことが以下の議論の前提である。

1-2. パーソンズ社会学における文化システムの変動論の一貫性について

本項では前項の議論を踏まえたうえで、パーソンズ社会学において文化システムの変動についての言説が一貫して存在していることを確認する。まずこのことに関する先行研究について触れておく。パーソンズにおける文化システムについて詳細な検討を加えた先行研究として初期丸山哲央の一連の研究^[10]がある。これらの諸研究は文化システムの変動論について包括的に論じたものではないが、そのなかにはパーソンズ社会学において文化システムの変動論が成立する条件^[11]を示唆したものもある（丸山、一九七七：五三）。その他の先行研究として中野秀一郎（一九七五）がある。この研究では文化システムのサブシステムについて詳細な検討が加えられているが、文化システムの変動についての言説に関する言及は乏しい。他方、丸山（一九九一）は *Theories of Society* の解説でパーソンズにおける文化システムの変動論について豊富に言及しているが、この論文はあくまで解説である。このように既存の先行研究は著者の観点からす

れば十分なものではない。

したがって以上のような先行研究を踏まえつつ、以下ではパーソンズ社会学における文化システムの変動についての言説を著者自身で簡単に追う。一九六〇年代以後のパーソンズ社会学において文化システムの変動が豊富に取り扱われているのは自明だ。その一例として *Theories of Society* における議論を確認する^[12]。本書では、文化システムは累積的に発展するものとして定義され (Parsons, 1961:981=一九九一：八一)、そのうえでその発展はヒエラルキーにおける上昇過程を伴った階段状・螺旋状のものとして定義されている (Parsons, 1961:988=一九九一：一一一)。

議論を再び一五〇年代初頭に移す。『社会体系論』における文化システムの変動論もまた豊富だ。本書では文化システムは蓄積的に発達しうるとされており (Parsons, 1951=一九七四：一八二、四九二、五四三)、またその変動は単線的なものではないとされている (Parsons, 1951=一九七四：四八二)。本書では文化システムのサブシステムの変動についても詳細に記述されているが、それらはパーソンズ社会学における科学について論じる次項で記述する。他方で『行為の総合理論をめざして』での文化システムの変動論についての記述は限定的だ^[13]。とはいえ、文化システム変動への言及は確かに存在している (Parsons & Shills, 1951:190=一九六〇：三〇〇)。

一九四〇年代パーソンズ社会学にも言及する。ここでの文化システム変動論は極めて周縁的である。とはいえ、上述したようにシステム変動論そのものについての記述は豊富だから、文化システム変動についての言説もまた散見される。例えば前項で言及した “Toward a Common Language for the Area of Social Science” では逸脱的行動とシステム変動が結びつけられるなかで文化変動が言及されている (Parsons, 1949c:44)。また、プロパガンダについて分析された論文— “Propaganda and Social Control” (初出は一九四二年)— では文化的伝統が持続的変動と間接的に結びつけられている (Parsons, 1949e:279)。このように一九四〇年代まで遡っても、パーソンズ社会学において文化システムの変動論はおおむね一貫して存在している^[14]。なお、『社会的行為の構造』については、1-4.で詳述する。

1-3. パーソンズ社会学における科学の変動に関する記述について

本章ではこれまで、パーソンズ社会学におけるシステム変動についての議論の一貫性を確認し、文化システム変動への言及も簡単に記述した。それらを踏まえたうえでパーソンズ社会学における科学の変動論についてここでは記述する。なおすでに触れておいたように、パーソンズ社会学において科学は文化システムのサブシステムとして取り扱われている。そのほかに文化システムのサブシステムであると定義されているのは、宗教、哲学、イデオロギー、芸術などである。

Theories of Society における科学の変動論の要旨を記述する。本書における科学は、同じく文化システムのサブシステムである宗教から哲学とともに分化したシステムと

して位置づけられている (Parsons, 1961:992-993=一九九一：一二六一一二九)。本書によれば、科学が既述したように階段状・螺旋状に変動するのは再組織化による非連続性を伴っているためである (Parsons, 1961:981-982=一九九一：八二一八三)。ところで、本書では文化システムのそれぞれのサブシステムが文化システムの成分によって定義されている。本書の議論を簡単に表現するならば、科学を特徴づけているのは認知的システムの優位性であり、他のサブシステムでは評価的システムや実存的信念のシステム等がより重要な役割を果たしている。そして本書によれば、「文化の下位システムは、それぞれを比較可能とする高度な一般性の水準において、相互に統合されている」 (Parsons, 1961=一九九一：一〇六) のであり、認知的システムと評価的システムは相互依存的に分化し上昇する (Parsons, 1961:986=一九九一：一〇三)。これらのことから、本書において科学の変動は文化システム全体の変動と相関関係にあるものとして定義されているといえる。なお、本書では社会科学における問題選択と評価的システムとの関係性が指摘されている (Parsons, 1961:992=一九九一：一二七一一二八) 点を強調しておく。これらのことから、本書における社会科学の変動はまさに認知的システムと評価的システムの相互依存的変動の表出物となる。

『社会体系論』に議論を移す。本書には文化システムのサブシステムとしての科学、イデオロギー、宗教、哲学などの変動論が豊富に含まれており^[15]、*Theories of Society*と同様にそれらは認知的システム、評価的システムなどの分析的成分によって表現されている。本書によれば、科学、イデオロギーの変動は単線的なものでないが合理化という方向性を伴っており、そのことに加えてイデオロギーの変動は「科学知識の発達の関数であり、これまで二世代にわたって、社会科学における見解の風土を変えるのに重要な役割を果たしてきている」 (Parsons, 1951=一九七四：五二六)。他方、哲学と宗教の変動は科学と同様に単線的でないが合理化という方向性を伴うとされているが、それに加えて哲学の変動は科学の変動に比べてより大きな抵抗に直面しており社会システムにおける推進力により大きく依存している (Parsons, 1951=一九七四：三五八一三五九) とされる。

*Theories of Society*と同様に、『社会体系論』には変動における科学と文化システムの他のサブシステムとの関係性が記述されている。本書によれば、「科学、応用科学、イデオロギー、哲学、および宗教的信念は、すべてかならず相互に接合しており、いくつかの点でお互いへと徐々に移り変わっている」 (Parsons, 1951=一九七四：三六一) のであり、間接的にはあるがこのことは変動においても適応されることが示唆されている。第一に本書では、科学の変動がイデオロギー、哲学、宗教などの変動のトリガーだと指摘されている (Parsons, 1951:515=一九七四：五〇七)。第二に、上述したように本書ではイデオロギーの変動が科学の変動の関数であると指摘されているが、それだけでなく社会科学が科学とイデオロギーの「葛藤の重要な領域」 (Parsons, 1951=一九七四：三五四) であると指摘されている。第三に、本書では哲学による社会科学への「正

当性の疑われる「侵入」(Parsons, 1951:365=一九七四:三六一)が指摘されている。第四に、本書では宗教が「経験的な研究関心に好都合な仕方

で動態的」(Parsons, 1951=一九七四:五二六)であるときに科学の発達を促進することが指摘されている。最後に、本書では哲学が「近代科学の洗練さとともかくも比肩できる」(Parsons, 1951=一九七四:三七二)まで発達したときに、宗教は「中間的シンボリズムの少なくとも大半が消滅」(Parsons, 1951=一九七四:三七二)するという形で変動しうるとされる。以上から『社会体系論』の議論に依拠しても科学の変動は文化システム全体の変動と相関関係にあるのといえ、また社会科学の変動は認知的システムと評価的システムとの相互依存的変動の表出物として捉えることができる。

1-4. 『社会的行為の構造』再考

1-1.で記述したようにパーソンズ社会学には初期であってもシステム変動についての関心・議論は一貫して存在している。そして1-2.で指摘したように文化システムの変動論もまた初期パーソンズ社会学において相対的に一貫して存在している。さらに、第四項では *Theories of Society* および『社会体系論』における文化システムのサブシステムとしての科学の変動論ならびに、変動における科学と文化システムの他のサブシステムとの関係性について詳述した。本項でこれらの議論を踏まえ、『社会的行為に構造』の再検討を行う。

よく知られているように、本書はイギリス・フランス実証主義の流れを汲む何人かの研究者(パレート・デュルケーム等)とドイツ理想主義を代表する研究者(主にM・ウェーバー)の諸研究に主意主義的行為理論とパーソンズが呼ぶ共通項を見出してゆき、それらの収斂を主張した研究書である。これは科学の変動についての議論である。そしてこれまで論じてきたようにパーソンズ社会学において科学が文化システムのサブシステムとして位置づけられていることを踏まえるならば、本書のテーマは文化システムの変動論にほかならない^[16]。既述のように本書に変動論が豊富にふくまれていることがこのような「読み」を補強している。

次に *Theories of Society* や『社会体系論』における科学の変動の性質についての記述を改めて指摘しておく。これらの著書に基づくならば、科学の変動は単線的でないものの合理化という方向性を有している。そして、文化システムのサブシステムである科学・イデオロギー・宗教・哲学はその変動において相関関係にあるのであり、それらの相関的変動のトリガーは科学である。また、社会科学は認知的システムとしての側面と評価的システムとしての側面の両方を併せ持っており、社会科学の変動は両成分の相互依存的変動の表出物である。これらの議論を踏まえるならば、『社会的行為の構造』で提示された文化システムの変動論としての主意主義的行為理論への収斂は、単に科学の変動だけを表出しているわけではない。それは近代における多様な文化システムのサブシステムの文明学的変動論である。

このような『社会的行為の構造』の「読み」は、先行研究においても示唆されている。例えば、中野（一九九九）は本書が「近代社会を理解する上でも欠くことのできない古典的著作」（中野、一九九九：一四七）であるとしている。また、油井清光（二〇〇二）は『社会的行為の構造』が後期パーソンズにおける「近代社会理論の収斂」（油井、二〇〇二：一四七）についての研究の枠組みを提供していることを指摘しているが、このことは本章における本書の「読み」を補強する^[17]。一九七〇年代パーソンズの宗教的シンボリズムについての小林（一九九七）の研究においても、パーソンズにおける文明学的関心の一貫性が示唆されている。さらに、文化システム概念についての初期パーソンズとソローキンの収斂を論じた大野道邦（二〇一）からも、本書における文明学的視座を導出できうる^[18]。ウェーバー研究者としてのパーソンズ自身が、ウェーバー社会学とその時代の知的状況との結びつきを強調している点（Parsons, 1949f:69,70-71）に注意を向けてもよいだろう。しかし、本章のようにパーソンズ社会学における変動論・文化システム変動論・科学変動論の一貫した流れにこのような「読み」を段階的に位置づけることで、『社会的行為の構造』はパーソンズ社会学に依拠した比較文明学的研究のための経験的素材としてシステム理論の枠組みで現出する^[19]。

1-5. 結論—比較文明学という共通性

本章ではこれまで、中期パーソンズから『社会的行為の構造』へと遡る形でパーソンズ社会学における文化システムの変動論に関して社会学史的にレビューしてきた。そしてそれに基づいて『社会的行為の構造』を本稿で定義する意味での比較文明学—「共時的比較」を重視しつつシステム変動を考慮した分野横断的社会研究一的に読み直すことを通して、パーソンズ社会学が初期から一貫して比較文明学的研究であったということをも小林（一九九七）などの先行研究と比較してより段階的に提示した。いまや、パーソンズ社会学とトッド人類学との共通性について語る事が可能となる。両者はともに初期から一貫して、パーソンズの用語における文化システムのサブシステムについての包括的な変動論を提示した本稿で意味するところの「比較文明学」的研究なのだ。実際、トッドの『第三惑星』には『社会的行為の構造』と類似した科学の変動論がある。それによれば、イギリス・フランスの人類学的基底と結合したそれらの個人主義的で進歩主義的な科学が、二〇世紀にはドイツ・ロシアの勢力伸長に伴いそれらの集合主義的な科学によって相対化された（Todd, 1983=二〇〇八：一六四—一六五）。そして本章の最初で指摘したように、例えばルーマン的な意味で変動論が均衡状態の「もう一つの側」として指示されている両者は社会システム理論の観点からみると共にひと世代前のモデルを採用しているといえるから、その関係づけはトッドとルーマンとの「接続」を図るよりも容易であるはずだ。

ところがこの「比較文明学」という枠組みの中でも、パーソンズとトッドには質的な差がある。トッド人類学において文化システムが変動するのは人類学的基底—本稿序論

でき記述したように前近代の家族システムが産出した価値・規範システム—という「重
力」下においてだ^[20]。これに対してパーソンズ社会学においてそれに寄与しうるのは、
合理化という方向性と宗教的価値の社会システムへの制度化だ。つまり例えば、パー
ソンズと異なりトッドの科学変動論には「合理化」という方向性が存在しない。次章
ではこのようなパーソンズとトッドの相違点を考慮に入れたより詳細な検討を行わな
ければならない。そこで、次章では「構造主義」という文化人類学・社会学などおな
じみの概念を基準として、両者を分析する。本稿序論で触れたようにこれは両者の「比
較文明学」としての質的な類似点・相違点の整理であり、両者の「思想」の比較検討で
あり、そしてトッド人類学の土台でパーソンズ社会学を検討するということだ。

註

[1] 本章の記述のうち、パーソンズ社会学に関する部分は本稿著者の修士論文（小川
晃生、二〇一五）に基づく。また本章の研究内容は小川晃生（二〇一七b）に由来して
いる。

[2] 本稿序論で触れたように、パーソンズ社会学の「均衡理論」としての側面を強調
する先行研究として遠藤薫（二〇一一）がある。また、パーソンズ社会学が「比較文明
学」の枠組みにおいて明示的に捉えられていないことに関しては、柏岡富英（二〇〇九）
をみよ。しかし、パーソンズ社会学を比較文明学と関連付けた先行研究が全く存在しな
いわけではない。池田誠（二〇〇九）および藤田弘夫（二〇〇二）をみよ。ただし、先
行研究における比較文明学的観点でのパーソンズ研究は中期・後期パーソンズ社会学が
中心だ。

[3] 後期パーソンズ社会学の展開を踏まえた上で初期パーソンズ社会学を再考するこ
との重要性は先行研究においても指摘されている。例えば小林月子（一九九七：九八）
を参照せよ。

[4] 「均衡理論」概念の定義は森岡清美、塩原勉、本間康平編（一九九三：三一七—
三一八）等を参照している。

[5] ただしパーソンズ社会学に挿入されているのは変動する・しないの差異というよ
り移動均衡・変動の差異であり、パーソンズにおいて両者は部分的に連続したものとし
て把握されている。Parsons（1951=一九七四）などを参照せよ。

[6] Chazel（1974=一九七七：二四四—二五五）をみよ。

[7] パーソンズとスペンサーとの関係性については、挾本佳代（二〇〇四）等を参照
せよ。

[8] この著書の主要なテーマのひとつがスペンサー社会進化論の超克であったことを
改めて指摘しておく。なお、パーソンズにおいて進化論への関心が初期から一貫してい
ること自体は松岡（一九九八：一一二六）でも指摘されている。

[9] 循環的変動理論がパレート、デュルケーム、ウェーバーの三者に共通しているこ

とが示唆されている (Parsons, 1937:288=一九八六：二四六—二四七) 点を強調しておく。

[10] 例えば、丸山 (一九七七)。

[11] 丸山 (一九七七：五三) が示唆したのは、文化システムと社会システムの関係性の変化 (制度化のみ→相互浸透) と変動論の成立だ。このことは本稿著者も修士論文 (小川晃生、二〇一五) で検討した。

[12] 既述のようにすでに丸山 (一九九一) が要約し解説している。

[13] 神戸大学の油井清光氏は本稿著者の修士論文口頭試問において、『社会体系論』と『行為の総合理論をめざして』におけるこのような相違がパーソンズにおける両著書の位置づけの相違 (前者は社会システムの研究書、後者は概説書) に由来しているのではないかと指摘した。この指摘に依拠するならば、『社会体系論』における変動論の豊富さこそがパーソンズ自身の志向をより強く反映しているといえる。

[14] ただし、文化システムの定義が変化していることに注意されたい。よく知られているように、一九五〇年代初頭までのパーソンズ社会学における文化システムは記号システムだったが、一九五〇年代中盤以後では行為システムのサブシステムとして取り扱われている。

[15] 田野崎 (一九七五) もまた『社会体系論』におけるこれらの変動論に言及している。ただし、社会変動論として。

[16] 『社会的行為の構造』において、パーソナリティ・社会システム・文化システムの三システムがすでに提示されていること (Parsons, 1937=一九八九 b：一六〇) を強調しておく。ただし、本章の主要な議論にこれらの概念は直接関係していない。

[17] ただし、本稿著者が本章で示唆しているのは『社会的行為の構造』における文明の「収斂」ではなくその変動だ。

[18] パーソンズと異なり、ソローキン (Pitirim Sorokin) は「比較文明学」の先行研究として明白に位置づけられている。柏岡富英 (二〇〇九) をみよ。

[19] 小林 (一九九七) は初期パーソンズ社会学を文明学的に解釈することの重要性を示唆しているが、それを体系的に提示したわけではない。

[20] 初期トッドにおいて変動しえないとされているのは家族構造のみであり、その他の社会システムの変動論は家族構造が産出した価値・規範システムの影響下での、という前提で記述されている。このことは、本稿を通して何度か触れる。

第二章 「構造主義」を基準としたパーソンズ＝トッド接続

本章では「構造主義」を基準としたパーソンズ社会学とトッド人類学との「接続」が論じられる。本章の内容は小川晃生（二〇一七 c）に基づく。前述したようにこれは、本稿で定義する意味での「比較文明学」としての両者の質的な類似点・相違点の整理であり、両者の「思想」の比較検討^[1]であり、そしてトッド人類学の土台でパーソンズ社会学を検討するということだ。本章のテーマを着想したきっかけは、後述するようにトッドが自身の研究と「構造主義」との差異を検討している（Todd, 2011＝二〇一六：二四一五九）ということだ。そして後述するようにパーソンズ社会学の側にも「構造主義」と関係した先行研究が存在するため、異なる基盤に依拠するトッド人類学とパーソンズ社会学とを何とか関係づけるためのきっかけとして「構造主義」概念を採用することとした。しかしながら、異質な二つの研究対象を接続するという本研究の性質上、学術的に厳密に定義された「構造主義」概念に基づいた精緻な分析は困難だ。そこで後述するように本章では両者の比較のための「道具」として単純化された「構造主義」である「戯画的構造主義」を「基準」として使用することによって「こじつけ」ともいえる検討を行う。本章における「構造主義」とはこの「戯画的構造主義」だ。この「こじつけ」を通すことで両者の類似点・相違点を可視化する。後述する「構造主義—構造主義以後」^[2]の軸でいえば、トッド人類学は自身を「構造主義以後」の側に位置付けている。とはいえトッド人類学は「構造主義」との接点も有する。他方で油井清光（二〇〇四）も示唆しているように、パーソンズ社会学は行為理論を基盤とした社会システム理論だからそもそも「構造主義」の枠組みで論じられることが少なかった。とはいえ前述したようにこの点での先行研究は存在するし、それらを踏まえればパーソンズ社会学もまた「構造主義」と「構造主義以後」の両方にまたがった理論として把握することができる。そして、「構造主義」概念を踏まえた両者の「接続」を通して次章以降の議論の土台が提示される。

2-1. 本章における「構造主義」について

議論の前提として、本章における「構造主義」の定義を提示する。そのためにまず、言語学における「構造主義」について触れておく。高野秀之（二〇〇九）は、認知言語学—「意味というものは認識しようとする対象に内在するものではなく、その対象を主体的に意味づける人間の認知の営みによって創り出されるものである」（高野、二〇〇九：九六）とみなす言語学—に至るための歴史的一局面として構造主義言語学を提示している。ここでの構造主義言語学は「特定言語のデータを入手し、その構造を正確に記述することを目的としていた」（高野、二〇〇九：八八）言語学として定義されている。それに加えて高野（二〇〇九）は構造主義言語学の特徴として、ソシュールが言語学の目的を通時的研究による「歴史的事実の解明」（高野、二〇〇九：八九）から共時的な一般法則の解明に再転換させたこと（高野、二〇〇九：八九）、「構造を構成する各要

素は階層関係にあり、相互の差異性からその価値は判断される」（高野、二〇〇九：八九）こと＝「ことばは音・語・文という単位から成る記号の体系」（高野、二〇〇九：八九）とされること、アメリカ構造主義言語学における文化相対説が「その言語を使って生活している人間と言語との関係を取り扱う必要がある」（高野、二〇〇九：九一）という視点を導入したこと、などを提示している。三嶋唯義（一九八八）は構造主義言語学の「起源と系譜」（三嶋、一九八八）についてより詳細に紹介している。三嶋（一九八八）によるならば、「構造主義」（structuralisme）という言葉は「1963年ごろから1967年ごろに間に、パリ市第5・6区のセヌ河畔において誕生し、学界において確立された」（三嶋、一九八八：二八）が、「思想態度としての構造主義」（三嶋、一九八八：二八）は一八七六年から一八八〇年までのドイツ留学中のソシュールに遡る（三嶋、一九八八：二八）^{〔3〕}。そして三嶋（一九八八）は「構造主義言語学」の系譜を検討する際に重要な役割を果たすいくつかの研究グループを提示している。それらは、若きソシュールに影響を与えた「19世紀末から20世紀初頭にかけての「パリ学派」（三嶋、一九八八：三二）、「ジャン・ピアジェ（Jean Piaget, 1896,^{8/9}—1980,^{9/6}）のもとで直接指導を受け、かつ、かれの諸学説、諸理論、研究態度を信奉、遵守、継承、あるいは発展させている学者・研究者たち」（三嶋、一九八八：三四）であるジュネーヴ学派、「『変形生成文法』（Transformative Generative Grammar）理論」（三嶋、一九八八：三八）を提示したチョムスキーおよび「チョムスキー学派の「心理言語学」（三嶋、一九八八：四三）、ドイツにおける「言語内容学派」（三嶋、一九八八：五四）、などである。そして三嶋（一九八八）はこれらの研究グループの対立軸として、「表層構造」と「深層構造」との関係性（三嶋、一九八八：四二—四三）、「生得説」か「発生説」か（三嶋、一九八八：四三—四七）、言語と認知・思考・世界像の関係性（三嶋、一九八八：四九—五〇）、などを提示している。なお三嶋（一九八八）は、構造主義の特徴として類似による連合をはかる観念連合説（Associationnisme）とは反対に「異類のもの、反対性質のものこそ相互に結合してひとつの「全体」すなわち「体系」を形造るのであると主張する」（三嶋、一九八八：三一）点を取り上げ（三嶋、一九八八：三〇—三一）、また「質的差異」（三嶋、一九八八：三四）による「発達諸段階」（三嶋、一九八八：三四）に基づくピアジェによる「静的構造主義から動的構造主義への転換」（三嶋、一九八八：三〇）を示している（三嶋、一九八八：三〇）。

次に、構造主義人類学を代表するレヴィ＝ストロースの「構造主義」について確認しておく。中村秀吉（一九七一）によるならば、レヴィ＝ストロースにおいて「無意識的な人間精神の深みにあるものの表現」（中村、一九七一：一〇四）としての親族構造、経済構造、言語構造の三つは「相互に関連し、たがいに他を表現する」（中村、一九七一：九七）。また中村（一九七一）はレヴィ＝ストロースが構造を「簡明な対立項のシステム」（中村、一九七一：一〇七）として捉えていることを指摘している。門口充徳（二〇一二）はレヴィ＝ストロース構造主義人類学の形成過程におけるデュルケームの

『宗教生活の原初形態』の重要性を検討するなかで、レヴィ＝ストロース人類学そのものの検討も行っている。門口（二〇一二）によるならばレヴィ＝ストロースの構造主義は「関係構造主義」（門口、二〇一二：一一九）なのであり、ここにおいて「構造とは、対立や差異の恒常的關係性にかんする変換の原理」（門口、二〇一二：一一九）である。つまり、「普遍的で不変的な原理からの論理的演繹によって経験的現象を説明しようとするのが関係構造主義」（門口、二〇一二：一一九）ということだ。これに対して、泉幽香（一九七二）はより踏み込んだ検討を行っている。泉（一九七二）によるならばレヴィ＝ストロースを含む構造主義は、認識された秩序/体験化された秩序の差異を踏まえている（泉、一九七二：三九）という点で「主体と客体の考え方の確認の必要性」（泉、一九七二：三九）を現象学とは異なる立場から論じている。そして泉（一九七二）はレヴィ＝ストロースにおいて主体が西欧で客体が非西欧であるというある種の西欧中心主義が存在することを踏まえつつ、レヴィ＝ストロースが非西欧（客体）を研究対象に選んだのは西欧（主体）と非西欧（客体）の相互浸透を通して両者にまたがる「精神の無意識構造」（泉、一九七二：四二）を捉えるためであったと指摘した（泉、一九七二：四〇、四一—四二）。泉（一九七二）の描写するレヴィ＝ストロースはここにおいて必ずしも西欧中心主義的ではない。またレヴィ＝ストロースを含む構造主義は、内的インテグレーション・交換論的インテグレーションの差異を踏まえた「交換論的『構造』」概念を導入することで変動論と不可分であると泉（一九七二）は指摘している（泉、一九七二：四三—四八）。なおこの指摘に基づいて泉（一九七二）は構造主義を非歴史的・非時間的とみなすピアジェの言説を批判している（泉、一九七二：四八）。ところで、村瀬雅俊・村瀬智子（二〇一四）は構造主義分析というよりは現代的な構造概念の分析という文脈で泉（一九七二）と相対的に類似した議論を展開している。それによれば、構造概念は「決定論と確率論の中間に位置する」（村瀬・村瀬、二〇一四：三〇）のであり、構造とは「動的過程の絶えざる再構成」（村瀬雅俊&村瀬智子、二〇一四：三〇）である。さらに、村瀬・村瀬（二〇一四）はピアジェが提示した構造の三つの特性—全体性、変換性、自己制御的閉鎖性—を取り上げ（村瀬・村瀬、二〇一四：三〇）、また構造の変動プロセスを「自己・非自己循環理論」（村瀬・村瀬、二〇一四：三二）—「‘自己’と‘非自己’が繰り返し遭遇する過程（中略）によって駆動されて弁証法的にらせん状の軌道を進む構造化の過程」（村瀬・村瀬、二〇一四：三二）—として定義している。泉（一九七二）の研究は構造主義人類学そのものの再解釈であり、他方で村瀬・村瀬（二〇一四）の研究はかつての構造主義とは距離を置いた構造概念の再検討だが、両者に類似した議論が存在する—例えば、構造概念と変動概念とを不可分のものと捉えている点—ことは、構造主義そのものが潜在的に有した理論上の多様性を示唆している。

さらに、社会学者による「構造主義」への言及に触れておく。宮本孝二（一九九八）はギデンズにおける「構造主義」の検討を紹介している。それによるならばギデンズにおいて、「還元的とは、行為主体や行為がそこに還元されてしまう存在であることを示

している」(宮本、一九九八：五〇) ときに「構造主義は構造概念を還元的な概念として使っている」(宮本、一九九八：四九) のであり、構造を還元的な概念とみなすから構造主義において「構造が主体や行為、相互行為から自律的な、閉鎖的で静態的な存在となってしまう」(宮本、一九九八：五〇) とされる(宮本、一九九八)。なお宮本(一九九八)によるならば、ギデンズにおいて「構造は主体的行為の条件であるとともにその帰結でもある」(宮本、一九九八：五〇) という「構造の二重性」(宮本、一九九八)が構造化理論に結びついている(宮本、一九九八)。また宮本(一九九八)によるならば、ギデンズはソシュール、レヴィ＝ストロース、デリダの議論を検討したうえで構造主義の意義を七点に総括している(宮本、一九九八：五一—五五)。本稿ではその内容すべてには触れないが、ここにおいて「主体の脱中心化のテーマを明示したこと」(宮本、一九九八：五四)が構造主義の業績として評価されており、にもかかわらず無意識概念を使用する一方で「言説的ではないが意識されているという実践的無意識」(宮本、一九九八：五二)が「反省作用」(宮本、一九九八)とともに検討されていない点が構造主義(特にレヴィ＝ストロース)に関して批判されている(宮本、一九九八：五一—五二、五四)ことのみを提示しておこう。このことには、トッド人類学と関係して本稿で何度か触れられることとなる。最後に、パーソンズ社会学と構造主義との関係性を検討した油井(二〇〇四)から構造主義の定義を引用しておく。油井(二〇〇四)によるならば、構造主義の特徴は「構造それ自体による構造の再生産であり、人間はそのエージェント(にすぎない)、という見方」(油井、二〇〇四：二二七)である。また油井(二〇〇四)は「人間主体ではなく、いわば構造主体の発想である。したがってそこでは、構造体の構造の解明が科学の課題ということになる」(油井、二〇〇四：二二七)と言い換えてもいる。さらに油井(二〇〇四)はパーソンズ社会学と「構造主義」の「基本姿勢」(油井、二〇〇四：二二六)における類似点を取り上げる中で、収斂と「AGIL 図式の無限拡大運動」(油井、二〇〇四：二二六)を提示している。後者はある種の「進歩」といってよいだろう。なお、油井(二〇〇四)はここにおいて構造主義とカント主義との関連を指摘したボイン(R. Boyne)の言説を紹介している(油井、二〇〇四：二二七—二二八)。

これまで「構造主義」にかかわる先行研究をみてきたが、その内容は多岐にわたる。本章の初めで触れたように異質な二つの研究対象を接続するという本研究の性質上、このように多様な議論が存在する「構造主義」概念の厳密な定義に基づいて両者の精緻な分析を行うのは困難だ。そこで以上の先行研究を踏まえて本章では、パーソンズ社会学とトッド人類学との「比較」のための「道具」として単純化された「構造主義」という意味で「戯画的構造主義」という概念を設定する^[4]。そしてこの「戯画的構造主義」に含まれない諸要素—「戯画的構造主義」の「残余範疇」(Parson, 1937=一九八六)や上述した「構造主義」に関わる言説の一部を含む—を「構造主義以後」—この語は油井(二〇〇四)の使用する「構造主義「以後」」(油井、二〇〇四)という語に由来—と

いう概念で定義する。両者の具体的な定義は以下を参照せよ。なお、以下の定義はすべて先行研究に由来した上記の記述に基づいているが、煩雑になるのを防ぐため以下では引用元を明示していない。これまでの記述から確認されたい。ただし、「戯画的構造主義」の定義における「伝搬理論に敵対的」という記述だけはこれまでの引用に含まれておらず、次項で確認するトッドの言説 (Todd, 2011=二〇一六) を踏まえたものだ。

戯画的構造主義

- ・ 西欧・非西欧の二項対立に依拠したうえで西欧中心主義的。
- ・ 構造にたいして共時的な一般法則からアプローチ。
- ・ 構造は基本的に静的。
- ・ 動的であっても発展段階によって把握され進歩概念と結合。
- ・ 構造を深層構造・表層構図の二区分で把握。
- ・ 深層構造を「無意識的」とみなす。
- ・ 行為などの諸要素を構造に還元。
- ・ 諸構造、諸要素を強固に連関したものとみなす。
- ・ 主体を脱中心化し構造中心主義的。
- ・ 伝搬理論に敵対的。

構造主義以後

- ・ 「戯画的構造主義」の残余範疇
- ・ 西欧・非西欧の相互浸透を考慮するという点で部分的に脱西欧中心主義的。
- ・ 構造そのものだけでなく、構造同士の関係性の把握を重視。
- ・ 構造を動的プロセスの継続した再構成として把握。
- ・ 構造は変動論と不可分。構造を歴史的、時間的に把握。

本章ではパーソンズ社会学とトッド人類学をこの「戯画的構造主義」を基準として検討する。本章で単に「構造主義」と表記するときはおもにこの「戯画的構造主義」を指す。繰り返すがこのような検討を行うのはパーソンズ社会学やトッド人類学に「構造主義」や「構造主義以後」といった「レッテル」を貼り付けるためではなく、「戯画的構造主義」というひとつの基準を使用することでパーソンズ社会学とトッド人類との類似点・相違点を可視化し両者の「接続」に貢献するためだ。繰り返すが、そのための手段として以下では「こじつけ」ともいえる検討をあえて行う。また本章で定義する「戯画的構造主義」は比較検討のための「道具」に過ぎないから、その構成要素を分析的に分けて使用する。例えば、本章で定義する「戯画的構造主義」概念に含まれる「構造を深層構造・表層構図の二区分で把握」ということは、それ単体で比較のための「道具」として使用される。このような「構造主義」概念の使用は学術的に不適当だが、本研究

の目的のためにあえて行う。なお、本章では「後期パーソンズ」を *Working Papers* 以後に、「後期トッド」を『家族システムの起源』以後に設定している。

2-2. トッド人類学と構造主義

本項では、トッド人類学を「構造主義」という基準を使用して検討する。前述したように、ここでは初期トッドと後期トッドを区別して議論する。『家族システムの起源』でトッドは「構造主義的諸研究」の性質を定義したうえで、それらと自身の研究との差異を論じている。このことについては、以下の引用を参照されたい。

「構造主義的思考様式—人類学の構造主義は、その一成分にすぎない—は「社会構造」のさまざまな要素ないし水準の間の関連の必然性を中心的公理として立てる。家族、親族、宗教、経済、教育、政治は、互いに照応し合い、互いにはまり込み合っている。これらの要素は一緒になって「社会構造」を構成するのであり、こうした社会構造は、不動であるか、進歩によって前方へと引っ張られるか、場合によっては対立衝突によって荒廃することさえある、というわけである。」(Todd, 2011=二〇一六：二七)

つまりトッドにおいて「構造主義的諸研究」とは、社会構造内部の様々な諸要素の「単純な」結合を想定する諸研究ということになる。またトッドはこのような「構造主義的思考様式」(Todd, 2011=二〇一六：二七)を「意識的な進化主義的成分を含み持つもの」(Todd, 2011=二〇一六：二八)だとも定義している。さらにトッドは、第二次世界大戦以後の人類学は諸民族の階層序列化を放棄しようとしつつもヨーロッパ人を組み込んだ一般的モデルの構築に成功しなかったと指摘している (Todd, 2011=二〇一六：二八)。このトッドによる「構造主義」の定義は、おおむね前項で著者が定義した「戯画的構造主義」と一致している。

このような「構造主義的諸研究」についての定義を前提としたうえで、トッドは自身の研究と構造主義人類学との差異を指摘している。『家族システムの起源』を参照してその差異を以下に列挙しておく。

1. ヨーロッパ人を一般モデルに組み込んでいる点。
2. システムを支配する法則という点で、家族システムを他のシステムから切り離している点^[5]。
3. 分析において「伝搬メカニズム」を重視する点^[6]。それに伴って、「周縁地域の保守性原則」、「対抗模倣」、「異文化の分離的否定受容」といった諸概念を使用している点。
4. 家族システムの発展サイクルの分析を重視する点。

Todd (2011=二〇一六：二四一五九) に基づいて本稿著者が作成

つまり後期トッドにおいては、ヨーロッパ人を一般モデルとして組み込んだ「伝搬メカニズム」によって構造主義的な意味での「進化」から切り離された家族システムが記述されているということになる。トッドは特に、人類学的基底と言語に関連性がないことを強調している (Todd, 2011=二〇一六：六六一)^[7]。このような家族システムについての記述は先行研究を踏まえた前項での本稿著者の議論を踏まえてもレヴィ＝ストロース的構造主義人類学との相違点が大きく^[8]、「構造主義以後」的といえる。しかしながら、トッド人類学はこのように「構造主義以後」的な立場に依拠しつつ、「構造主義」との接点を保持しつつげている。このことを論じるために、以下ではいったん初期トッドを検討する。

初期トッドを代表する『第三惑星』では、トッドは家族システムの伝搬を考慮せず、家族システム同士の構造比較に終始している。ただしその翌年に出版された『世界の幼少期』ではすでに、ロシア共同体家族システムに対するスウェーデン直系家族の影響についての示唆や朝鮮の直系家族システムに対する中国共同体家族の影響への言及がある (Todd, 1984=二〇〇八：三八〇、三九一)。付論 A で本稿著者は本研究において『新ヨーロッパ大全』を重視しないと宣言したが、にもかかわらず前掲書でトッドが家族システムの発展サイクルを重視している点 (Todd, 1990=一九九二：四〇一四七) を指摘しておこう^[9]。そして『家族システムの起源』でトッド自身が指摘しているように、初期トッドにおける家族システムは「進化」のような概念と結合していない (Todd, 2011=二〇一六：二九)。また『世界の幼少期』では家族システムの「構造」がいったん解体され、「文化的潜在力」という分析的要素に基づいて再構成されている (Todd, 1984=二〇〇八：三一七)。さらに、前掲書では文化的テイクオフの「伝搬」が取り扱われている (Todd, 1984=二〇〇八：三四〇) ことを忘れてはならない。本章における「戯画的構造主義」、「構造主義以後」の定義に基づくならば、これらは初期トッドにおける「構造主義以後」的要素だ。つまり前述した『家族システムの起源』におけるトッド自身の「総括」を踏まえるならば、初期トッドは「構造主義」から「構造主義以後」への「移行期」に相当する。ところがこのようなトッド自身による初期トッドと構造主

義人類学との差異化の試みにもかかわらず、初期トッドにはより多くの構造主義的要素が含まれている。『世界の幼少期』では識字率の継続的上昇などによって表象される「文化的テイクオフ」概念が提示されているが、これは「進歩」にほかならない^[10]。初期トッドにおいて家族システムは確かに「進歩」のような概念と結合していないかもしれないが、社会システムのその他の側面はしばしば「進歩」と結合している。また、このような文化的テイクオフ概念には、文化テイクオフを伴っている社会・伴っていない社会という二つの発展段階が暗黙裡に付随していることも強調しておきたい。とはいえ、『世界の幼少期』においてこの二つの発展段階が硬直した形で議論されているわけではない。なお、初期トッドには発展概念が伴わないある種の「段階論」もまた散見される。前述した『世界の幼少期』の「文化的潜在力」の「非常に強い」から「一般的に弱い」までの段階論（Todd, 1984=二〇〇八：三一七）や平賀正剛（二〇一四）もまた指摘した『経済幻想』における「個人主義の水準」（Todd, 1998=一九九九：四七）についての段階論がその例だ。ところで、初期トッドにおいて文化システムは家族システムの影響下で変動するものとされている^[11]が、後述するように本稿第一章で論じたパーソンズ社会学における文化システムの各サブ・システムの相互連関的変動を構造主義的だと解釈するならば、前述した初期トッドにおける文化システムの変動論は構造主義的だということになる。何故なら、あらゆる文化システムが所与の家族システムの影響下にあるとするならば、そこでの文化システムの各サブ・システムは強固に相互連関的であるはずだからだ^[12]。

このことは後期トッドでも同様だ。後期トッドにおいて、家族システムは単に「進歩」概念と結合していないというだけでなく、明白に「伝搬メカニズム」のような「その他の法則」のもとにある。にもかかわらず、後期トッドが家族システム以外のシステムを記述するときしばしば「進歩」概念が垣間見える。例えば、以下の引用を参照されたい。

「われわれ西欧人は、農業も都市も商業も牧畜も算術も発明したわけではないのに、短い期間とはいえ、発展競争のトップランナーであったのは、技術的・経済的発展にとって麻痺的効果をもたらす家族システムの変遷というものを経験しないで済んだからなのである。」（Todd, 2011=二〇一六：二〇）

「なぜ核家族が、[近代イングランドのような] 複雑な社会システムと未開の共同体とに同時に対応し得るのかということを理解しようとする、われわれは構造主義の公理から脱却しなければならなくなる。」（Todd, 2011=二〇一六：二九）

「双処居住核家族が、同時に、文化的なレベルが正反対の二つの住民集団の特徴をなしているとうことは意味深い。」（Todd, 2011=二〇一六：二八三）

一つ目の引用が含意しているのは、相対的に原始的形態にとどまる家族システムは近代産業社会への適応という点で優越している（パーソンズ的に言えば、適応力が高い）ということだ。二つ目の引用は、近現代社会システムが前近代社会システムと比較して「複雑」だということだ（同じく、分化している）。三つ目の引用は「長い国家としての歴史を生き、世界の主要な宗教の一つ、仏教の信奉を体験して来た」（Todd, 2011＝二〇一六：二八三）スリランカの農民と、「石器時代を生きる狩猟採集民の未開住民集団」（Todd, 2011＝二〇一六：二八三）であるアンダマン諸島人の二つの文化を階層的に論じている。つまり、後期トッドは家族システムに関わる部分については構造主義人類学を批判しつつ、その他の点で構造主義的諸要素を全面的に棄却しているわけではない。

また、トッド自身が前述したような立場をとるにもかかわらず、後期トッドにおける家族システムの変動は構造主義的アプローチと無関係ではない。『家族システムの起源』では家族システムの単系化（双方系・未分化から男系・女系へ）と稠密化という「進化」の方向性が論じられている（Todd, 2011＝二〇一六：八七一八八、九七）。そしてこのように「進化」した家族システムは「農業の稠密化」や「軍事システムの構築」という点でより適応力が高いとされている（Todd, 2011＝二〇一六：一八九一一九二、二〇八一二〇九）。この家族システムの「進化」（Todd, 2011＝二〇一六：四七五）は前述したように他のシステムから切り離され異なる法則の元にあるが、それでもこの変動が「進化」として取り扱われていることには変わりない。ただし『家族システムの起源』において、より「進化」した家族システムが前述したように「農業の稠密化」や「軍事システムの構築」という点でより適応力が高いとされているにもかかわらず近代化プロセスの産出とその適応には相対的に不向きと見做されている（Todd, 2011＝二〇一六：二〇）ということ、家族システムの「進化」には部分的に可逆性があるとされている（Todd, 2011＝二〇一六：四七五―四八一）こと、さらには絶対核家族空間と平等主義核家族空間を含む西ヨーロッパの「直系家族的な概念空間」（Todd, 2011＝二〇一六：六二二）が価値・規範システムの形成とその近代化プロセスへの貢献という点で極めて複雑なものとして取り扱われていること^[13]、に留意しなければならない。例えば、『家族システムの起源』では古代ローマ帝国の家族システムにおける父系性の後退が議論されている（Todd, 2011＝二〇一六：四七五―四八一）。前掲書によるならば、ユーラシア父系ブロックの西端であり当初から父系性の脆弱であったローマが、家族システムが双系制・未分化な地域を征服することでこの逆行が起こった（Todd, 2011＝二〇一六：四七六）。本章での「戯画的構造主義」の定義―特に構造変動が発展段階によって把握され進歩概念と結合しているという点―を踏まえるならば、このような後期トッドにおける家族システムの変動は、構造主義的な変動論と決してイコールでないにせよ、それと密接な関係を有している。

さらに、後期トッドにおいても発展段階が論じられている。後期トッドにおいて父系

制家族システムは三段階の父系制のレベルの：「レベル1、2、3の父系制」によって評価されている（Todd, 2011=二〇一六：一八八、二一二）。ただし松岡（一九九八）が要約するような後述するパーソンズの『社会類型』と異なり、この後期トッドの「父系制レベル」はその社会のあらゆる発展段階を結合させて評価しているわけではない。「人類学的基底」概念を踏まえるならば家族システムの父系制とその社会システムの父系制には相関性があるが、後期トッドにおいて家族システムの父系変動と社会システムの父系変動は必ずしも同一視されていない。トッドによれば、家族システムの共同体家族化と父系変動の間には大きな時間的差異がある（Todd, 2011=二〇一六：二一〇—二一一）のであり例えば中国においては、女性の纏足の出現はトッドの定義する「レベル2の父系制」をもたらす共同体家族の出現からおよそ一〇〇〇年のちのこととされている（Todd, 2011=二〇一六：二一一）。それとは反対に、共同体家族システムであるにもかかわらず家族システムの父系変動の歴史が浅いとされるロシアは父系制の深度が浅いとされる（Todd, 2011=二〇一六：四九七）。また、後期トッドには人類学的基底の変動を考慮する前近代社会・考慮しない近現代社会という発展段階も暗黙裡に付随している。これは『家族システムの起源』において家族システムの生成・変動・伝搬とそれに伴う価値・規範システムの変動が詳細に記述される（Todd, 2011=二〇一六：二一三—二一四）一方で、『不均衡という病』などの著書で現代フランス社会が論じられる際に人類学的基底がより恒常的なものとして把握されている^[14]ことに由来する。ただし、この二つの「発展段階」はトッド自身の議論のなかで緩やかな連続性を伴っている。例えば、『家族システムの起源』では現代中国南部・インド南部における父系制の前進—つまり、現代社会における人類学的基底の変動—が指摘されている（Todd, 2011=二〇一六：四七五）し、また一九世紀アイルランドにおける直系家族システムの出現が論じられている（Todd, 2011=二〇一六：四二一）。初期トッドには存在しなかったこれら二つの発展段階論は、「戯画的構造主義」についての本章での定義—特に構造変動が発展段階によって把握されるという定義—を踏まえるならば、後期トッドと「構造主義」との接点として評価することが可能だ。ただしこれら二つの発展段階論は本章で定義した「戯画的構造主義」のそれと比べて、緩やかな連続性を伴いそして発展段階論としては縮減されたものだ。

最後に、次章でも繰り返し記述するが、トッドにおける「無意識」について記述しておく。初期から後期まで一貫してトッドは人類学的基底が人々の「無意識」に作用するものであると説明している。例えば、『第三惑星』では人類学的基底の再生産プロセスが「盲目的で、非理性的なメカニズムであり、まさに無意識的で目に見えないものであるために強力であり、揺るぎないメカニズム」（Todd, 1983=二〇〇八：二九〇）だと指摘されているし、他方で『不均衡という病』では人類学的基底が「深層における作動様式」（Todd & Le Bras, 2013=二〇一四：三六一）に関わるものだと定義されたうえで「無意識的家族構造」（Todd & Le Bras, 2013=二〇一四：一五）というような表現

が使用されている。また、『世界の幼少期』などで「識字率の継続的上昇」などが表象する「文化的テイクオフ」は人々の「無意識」にかかわる「深層構造」にはかならない。ところで、前述したように宮本孝二（一九九八）は、「無意識」と「言説的ではないが意識されているという実践的無意識」（宮本、一九九八：五二）を混同しているというギデンズによるレヴィ＝ストロース批判を紹介している（宮本、一九九八）。本稿で先行研究に依拠しつつ論じた「戯画的構造主義」の定義—特に、構造を深層構造・表層構図の二区分で把握するという定義—を踏まえるならば、このトッドにおける「無意識」概念はレヴィ＝ストロース的なものであり、さらにいうならば「構造主義的」だということができる。また、同様に前述した「戯画的構造主義」の定義を踏まえるならば、「人類学的基底」という「深層構造」（三嶋（一九八八）の訳出に由来）の使用そのものがトッドにおける「構造主義的」要素だともいえる。

以上から、本章で定義する「戯画的構造主義」を基準としてみたとき、トッド人類学に関して以下のことが確認できる。初期トッドは、家族システムが構造主義的な進歩概念と結合していないという点で「構造主義」と同一視することはできないが、「文化的テイクオフ」概念や人類学的基底を説明する際に用いた「無意識」概念、「深層構造」である人類学的基底そのもののような「構造主義的」な概念を保持している。後期トッドは、家族システムに構造主義的進歩とは明らかに異なる法則を適用しておりこの点で明白に「構造主義以後」の立場をとるが、にもかかわらず初期トッドに見られた構造主義的一面を保持し続けている。したがってトッド人類学は、「構造主義」と「構造主義以後」の境界領域に位置づけられる。

2-3. パーソンズ社会学と構造主義

本項では、前項のトッドについての検討と同様に、パーソンズ社会学を「戯画的構造主義」を基準として検討する。初期パーソンズと後期パーソンズの差異も考慮に入れる。前述したように本章での両者の境界は *Working Papers* (Parsons, 1953) だ。後期パーソンズ社会学は本章の枠組みでは「構造主義」の側に属している。その代表例は、松岡雅裕（一九九八）が詳細に纏めたような、『社会類型』や『近代社会の体系』における「社会進化」についての議論だ。ここでは前述した先行研究を踏まえつつ、後期パーソンズの両著書における「構造主義的」側面を提示しておく。第一に、両著書においてパーソンズは社会の「発展段階」を論じている^[15]。そこでは「原始社会」、「中間社会」、「近代社会」といった社会進化上の段階が想定されているわけだが、これは本章での「戯画的構造主義」の定義—特に構造変動が発展段階によって把握されるという定義—に照らし合わせるならば、構造主義的諸理論の特徴だ。第二に、両著書においてパーソンズが論じているのはまさに「進化」だ。たしかに、松岡（一九九八）が喝破するように、両著書における社会進化論は一九世紀社会進化論と一線を画した「ネオ社会進化論」（松岡、一九九八：四四）と呼ぶべきものだ^[16]。とはいえここでの「社会進化」は、近代

社会への進化の成否という単一の尺度に基づいて^[17]、行為システムのあらゆるサブ・システムを緊密に結合させたうえで^[18]、議論されている。本章での「戯画的構造主義」の定義—特に、構造変動が進歩概念と結合しているという定義や諸構造、諸要素を強固に連関したものとみなすという定義—や前項で引用したようにトッドが「家族、親族、宗教、経済、教育、政治は、互いに照応し合い、互いにはまり込み合っている」(Todd, 2011=二〇一六：二七) ような社会構造を想定する諸理論を構造主義的と定義していることを踏まえるならば、このような後期パーソンズ社会学は確かに「構造主義的」だ。なお既に指摘したことだが、油井(二〇〇四)はパーソンズ社会学と「構造主義」の「基本姿勢」(油井、二〇〇四：二二六)における類似点を取り上げる中で、「収斂」と「AGIL図式の無限拡大運動」(油井、二〇〇四：二二六)を提示している。

同様の構造主義的側面は、パーソンズにおける文化システムのサブ・システムについての議論にも見出される。丸山哲央(一九九一)のような先行研究を踏まえつつ、このことについて記述しておく^[19]。本稿第一章でも論じたように、パーソンズ社会学において文化システムは螺旋状に上昇していくものとされている(Parsons, 1961:988=一九九一：一一一)。そして本稿第一章ではパーソンズ社会学において、科学、宗教、哲学、イデオロギーといった文化システムの各サブ・システムは、相互に関係し合いながら螺旋状に上昇しつつ変動するとされている(Parsons, 1961:986=一九九一：一〇三、一〇六、Parsons, 1951=一九七四：三六一)と指摘した。このような文化システムおよびその各サブ・システムの変動論は同様に、本章での「戯画的構造主義」の定義—構造変動が進歩概念と結合しているという定義や諸構造、諸要素を強固に連関したものとみなすという定義—やトッドによる構造主義の定義(Todd, 2011=二〇一六：二七)を踏まえるならば「構造主義的」だ。そしてこのような議論は本稿第一章で記述したように、『社会体系論』のような比較的初期のパーソンズ社会学にも見出される^[20]。さらに、川越次郎(二〇〇二：一九六)を踏まえて本稿第四章で後述するような初期パターン変数に包含され続けている近代・伝統の二分法も、本章での「戯画的構造主義」の定義—特に西欧・非西欧の二項対立に依拠するという定義—に基づけば、「構造主義的」だ。またこのことと関連して、本稿第一章で指摘したパーソンズ社会学に内在する「変動する・しない」の二項対立もまた「構造主義的」だと呼べるかもしれない。

このように特に後期パーソンズ社会学は本章で定義する「戯画的構造主義」の範疇に属する側面が強い。しかしながら油井(二〇〇四：二三一)が指摘するように、パーソンズ社会学がシステム理論である限りそれが構造主義的諸理論と同一であることはありえない。以下では先行研究を踏まえつつ、パーソンズ社会学と「構造主義」との差異を検討しておく。第一に、本稿第一章で著者は『社会的行為の構造』を本研究で定義する意味での「比較文明学」的に読み直すために、前述した文化システムのサブ・システムの相互連関的変動についてのパーソンズの議論を前掲書に適用した。前章で強調したようにパーソンズ社会学の文脈において、「主意主義的行為理論への収斂」は「科学

システムの変動」なのだから、それには各サブ・システムの変動が伴われているはずであり、それは文化システム全般の変動論に帰結するということだ。ところが、このように読み直された「主意主義的行為理論への収斂」は必ずしも「構造主義的」ではない。たしかに、文化システムのサブ・システムの相互連関が適用されている点、おそらくパーソンズの意図において主意主義的行為理論が実証主義、理想主義に対して「優越」しているとされる点、は本稿での「戯画的構造主義」の定義—構造変動が進歩概念と結合しているという定義や諸構造、諸要素を強固に連関したものとみなすという定義—を踏まえれば「構造主義的」だ。だが、後者—主意主義的行為理論の「優越」—についてはパーソンズの意図とは異なる解釈も可能だ。本稿第一章で『社会的行為の構造』を本稿で定義する意味での「比較文明学」的に再解釈したとき、もっとも重要な役割を果たしたのは文化システムの各サブ・システムの相互連関だ。ここで「螺旋状上昇」が果たした役割は副次的なものに過ぎない。そこで『社会的行為の構造』の再解釈に関して、「主意主義的行為理論」への収斂は、稠密度の低い核家族システム（イギリス・フランス）と縦型でやや稠密度の高い直系家族システム（ドイツ）の両システムと相互関係している二つの科学システムが単に相互作用しているのであり、そこには「進歩」のような概念は伴っていないのだというトッド的解釈も可能だ。繰り返すが、本稿第一章での『社会的行為の構造』についての再検討において、必ずしも文化システムのサブ・システムの相互連関に螺旋状上昇が随伴している必要はない。なお、『社会的行為の構造』の段階で AGIL 図式のような進化論的図式がその理論内部に明示的に書き込まれているわけではない。つまりパーソンズの意図を無視すれば、特に初期パーソンズ社会学の拡大解釈においてパーソンズ社会学を本章で定義する「戯画的構造主義」から離脱させる方向へ傾斜させることは可能だ。なお前述したように油井（二〇〇四）はパーソンズ社会学と「構造主義」の「基本姿勢」（油井、二〇〇四：二二六）における類似点の一つとして「収斂」を取り上げているが、この『社会的行為の構造』のトッド的再解釈に「収斂」概念が伴っていないことも重要だ。

第二に、松岡（一九九八：五〇）が指摘するように、パーソンズは文化システムの「伝搬」を取り扱っている。このことは『社会的行為の構造』—文化システムを「非空間的で無時間的」（Parsons, 1937=一九八九 b：一八三）と定義—や『社会体系論』—文化システムの「三つのきわだった基本的な論点」（Parsons, 1951=一九七四：二〇）の一つとして「伝達の可能性」（Parsons, 1951=一九七四：二一）を提示—などの著書での文化システムの定義に明示的に組み込まれているし、また例えば、これまた松岡（一九九八）も要約しているように、『社会類型』ではイスラエルやギリシャといった「苗床社会」の文化が後世の社会へ伝搬し近代社会の形成に貢献したことが論じられている（Parsons, 1966=一九七一：一四三—一六二）。本章では「構造主義」と「伝搬理論」とを対比的に位置づけるトッドの言説（Todd, 2011=二〇一六：三一）に基づいて「戯画的構造主義」の定義の一つとして「伝搬理論に敵対的」であることを加えてい

るが、この「戯画的構造主義」の定義を踏まえるならばパーソンズにおける文化システム概念の存在自体が、「構造主義」からのある種の逸脱であるといえる。ところで、前述した後期トッドの伝搬理論には伝搬理論の帰結として不確実な類型が議論されている（Todd, 2011=二〇一六：四四三）。それに対して、パーソンズ社会学における伝搬理論は「類型の曖昧さ」についての議論が乏しい。具体例として両者における、現代ヨーロッパに対する古代ローマ帝国の影響についての記述を提示しておく。前述したようにトッドの『家族システムの起源』では緩やかな父系変動を経験したローマの家族システムが非征服地の住民（ケルト、ゲルマンなど）の双系制で未分化な家族システムと相互作用したことにより父系制の後退が生じたことが記述されていたが、それによって形成されたのが平等主義核家族（相続規則の対称性に固執する核家族システム）だと前掲書では指摘された（Todd, 2011=二〇一六：四七六―四八五）。双形制で未分化な核家族から単形制で分化した複合家族へという『家族システムの起源』における当初の類型構築を踏まえるならば、晩期ローマ帝国で誕生し意図せざる結果として近代フランス革命の人類学的母体になったとされる前掲書の平等主義核家族は、当初の類型では捉えられない―核家族なのに対称的相続規則があるという点で未分化ではない―システムだ（Todd, 2011=二〇一六：四八一）^{〔21〕}。それに対して、松岡（一九九八）の要約からもわかることだが、パーソンズの『社会類型』における「苗床社会」としてのイスラエル・ギリシャの文化的革新はローマ帝国を媒介として分析的要素―例えば「神によって定められた道徳的秩序」（Parsons, 1966=一九七一：一五四）―としてはそのままの形で近代西欧社会に伝搬されている。したがって本章での「戯画的構造主義」の定義を参照する限りにおいて、パーソンズにおけるこの伝搬理論は確かに「構造主義」からの逸脱だがそれと同時に極めて限定的な逸脱でもある。

第三に、パーソンズ社会学には部分的に脱西欧中心主義的な面がある。本章では泉（一九七二）やトッドの議論を踏まえて「戯画的構造主義」の定義に西欧を主体、非西欧を客体とみなす西欧中心主義を加えた。パーソンズ社会学にも西欧中心主義的な一面はある。松岡（一九九八）もまた詳述しているが、『社会類型』や『近代社会の体系』においてアメリカ合衆国がもっとも進化した社会だとみなしていると捉えられかねない言説は確かに西欧中心主義的だ。また木村雅文（二〇一〇）も指摘する比較的初期の『社会体系論』でパターン変数をアメリカ、ドイツ、中国、南米の記述に充てている議論（Parsons, 1951=一九七一：一八七―二〇四）は、川越（二〇〇二：一九六）が進藤雄三（一九八六）を引用して指摘しているようにパターン変数が近代・伝統の二分法の系統的整理であることを踏まえれば、西欧により近い地域が近代の側のパターン変数によって記述されているという点で西欧中心主義的である。しかし、これらの記述にも脱西欧中心主義的な側面はある。松岡（一九九八）の描写からもわかるように『近代社会の体系』では「西欧」のなかでもアメリカ・イギリス・フランスの相違点が記述されている（Parsons, 1971=一九七七：一〇九―一二九）。「近代諸社会の体系」（Parsons, 1971

＝一九七七：七七）を構成する欧米諸社会の「機能分化」（Parsons, 1971＝一九七七：一〇九）についての議論だ。この「西欧」のなかでの差異についての記述は西欧・非西欧の二分法を乗り越えるうるのであり、さらにトッド人類学と同様の傾向があることも踏まえれば、脱西欧中心主義に帰結しうる。また本稿第四章で改めて議論するが、前述した『社会体系論』でのパターン変数に基づく記述には近代・伝統の二分法が内在する川越（二〇〇二：一九六）一方で AGIL 図式と比べて進化論との結合が弱いのであり、故にトッドの人類学的基底のような進化論と切り離された価値・規範システムに基づく社会の記述として再解釈することも可能である。この再解釈はパターン変数を脱西欧中心主義的にしてゆくだらう。そもそも川越（二〇〇二：一八六―一八七）が指摘するようにパターン変数はゲマインシャフト・ゲゼルシャフトの二項対立図式を批判的に再構成したものであるから、前述したように近代・伝統という二項対立図式を包含し続けているにもかかわらず、それと決してイコールではない。したがって、パーソンズ社会学は初期であれ後期であれ部分的に脱西欧中心主義的でありうる。繰り返すが、上述した『社会体系論』における記述は本稿第四章で改めて詳細に検討される。

最後に、行為理論・システム理論の性質そのものによる「構造主義」の乗り越えがある。油井（二〇〇四）は「構造主義」において言語にあたるものがパーソンズにおいてはメディアに該当すると指摘している（油井、二〇〇四：二三二）。つまり油井（二〇〇四）によれば、パーソンズには「構造世界と行為世界とのいわば「分離と節合）」（油井、二〇〇四：二三三）が見出されこの点で構造中心主義的ではない（油井、二〇〇四：二三三）。ただし油井（二〇〇四）は、大野道邦（一九九〇）を踏まえつつパーソンズには G・H・ミード的なシンボル論だけでなく「「構成的シンボル論」という構造主義的シンボル」（油井、二〇〇四：二三三）が見出せるとも指摘している。松本和良（一九九七）はパーソンズの構造主義者としての側面と機能主義者としての側面を分析的に区別して論じている。ここで松本（一九九七）は、初期パーソンズには構造優先と機能優先の葛藤がありそのうえで構造を重視していたが一九五〇年代以後に機能主義者としての側面が強くなっていったと指摘している（松本、一九九七：一一二八）。そしてこの文脈の中で、松本（一九九七）は構造とプロセスの結合により機能が遂行されるという一九七〇年代パーソンズにおける構造と機能の関係性を提示している（松本、一九九七：一四）。また松本（一九九七）はレヴィ＝ストロースとパーソンズがともに「システム論者」（松本、一九九七：一六）であると指摘しつつ、両者における構造概念や社会システム概念の位置づけの違いを検討している（松本、一九九七：一五―二三）。それによれば、パーソンズにおいて社会システムが抽象概念で構造が具体的概念であるの対して、レヴィ＝ストロースにおいて構造が抽象概念で社会システムは具体的概念である（松本、一九九七：一六―一八）。これまでの油井（二〇〇四）や松本（一九九七）の言説を踏まえて以下のことが言える。少なくとも後期パーソンズにおいて構造概念はパーソンズ社会学の他の諸要素と複雑に関係しているのだから、本稿での「戯画的構造

主義」—特に、行為などの諸要素を構造に還元するという定義および主体を脱中心化し構造中心主義的だという定義—の水準に厳密にとどまることはあり得ない。

以上の議論を要約しておく。パーソンズ社会学には発展段階論であること、進化概念を一ひょっとすればやや安易に一使用していること、サブ・システム同士の強固な結合を想定すること、といった本稿での「戯画的構造主義」の諸特徴がみられる。油井（二〇〇四）の指摘に基づいてこれに「収斂」を加えてもよいかもしれない。ただし初期パーソンズは二項対立図式などの要素を含むにも関わらず、二項対立図やサブ・システムの諸結合を前提としそれらを統合しているという点で「構造主義」として「より強い」要素である進化論との結合が弱いという意味で、この傾向が弱い。そして、進歩概念、収斂概念を適用せずに『社会的行為の構造』を再解釈しようという点、部分的に脱西欧中心主義的な記述がみられる点、文化の伝搬が論じられている点、行為理論・システム理論の諸特徴が「構造主義」を乗り越えうる点、によってパーソンズ社会学には本章で定義する「構造主義以後」的な側面がある。以上からパーソンズ社会学もまた「構造主義」と「構造主義以後」の境界領域に位置付けられる。ただし松本（一九九七）のような先行研究があるにもかかわらず、前述したようにある面で後期より初期パーソンズのほうが本章で定義する「戯画的構造主義」に固く組み込まれていない。このことは松岡（一九九八）が要約したパーソンズの思想的変遷—社会進化論にいったん魅せられ、その後といったん距離置き、後期に再接近—とも相同する。

2-4. 構造主義を基準としたパーソンズ=トッド接続

これまで本章で定義した「戯画的構造主義」を基準として、パーソンズ社会学とトッド人類学の両者を検討してきた。トッド人類学は、自身を「構造主義以後」の側に位置付けている。その例としてトッド自身が提示したのが、初期については、1.家族構造が進歩概念と結合していない点、後期については、1.ヨーロッパ人を一般モデルに組み込む点、2.家族システムを構造主義的結合から切り離す点、3.伝搬メカニズムを重視する点、家族システムの発展サイクルを重視する点、だった。またこの点で初期トッドについて、1.家族システムの分析的要素による再構成、2.文化的テイクオフの伝搬、3.家族システムの発展サイクル分析の存在、を本稿著者は取り上げた。にもかかわらず本章で定義する「戯画的構造主義」概念に依拠したとき、トッドには「構造主義」的側面が強く残っている。その例として本稿著者は本章で以下の事柄を提示した。初期トッドについては、1.人類学的基底という深層構造の使用、2.深層構造としての文化的テイクオフとその進歩およびそれに依拠した二つの発展段階論、3.人類学的基底の影響下での文化システムの諸サブ・システムの変動、を論じた。これに加えて後期トッドについては、1.家族システム以外のシステムについての進歩概念が随伴した記述、2.家族システムについての部分的に進歩概念が随伴した記述、3.父系レベルや人類学的基底の変動を考慮する・しない、といった発展段階論、を取り上げた。

それに対して、パーソンズ社会学の中心軸は「構造主義」の側にある。後期パーソンズの『社会類型』や『近代社会の体系』は、1.進化概念に依拠した議論を展開している、2.発展段階論に依拠している、3.行為システムのサブ・システムの相互連関的変動が前提とされている、という点で、本章で定義する「戯画的構造主義」の定義からすれば構造主義的だ。また前述した「3.」は『社会体系論』などの初期パーソンズにもあてはまり、さらに初期パターン変数の伝統・近代などにみられる二項対立図式も踏まえるならば、初期パーソンズにもまた構造主義的側面を見出すことができる。ところが、パーソンズ社会学は「構造主義以後」的要素もまた包含している。その例として、本章では以下の事柄を提示した。初期パーソンズについては、1.本稿第一章の記述からわかるように『社会的行為の構造』の本稿で定義する「比較文明学」的再解釈から「進化」概念、「収斂」概念を切り離せる点、2.初期パターン変数を脱・西欧中心主義的に解釈しうる余地—進化的アップグレードや西欧・非西欧の二項対立からの脱却—がある点、を取り上げた。後期パーソンズについては、1.『近代社会の体系』における「西欧」の「機能分化」(Parsons, 1971=一九七七:一〇九)についての議論が西欧・非西欧の二項対立からの部分的脱却に帰結しうる点、を提示した。そして初期・後期に共通したものとしては、1.文化システムの伝搬が論じられている点、を指摘した。このようにパーソンズ社会学は「構造主義以後」的な要素を含んでいる。そして既に指摘したように、二項対立図やサブ・システムの諸結合を前提としそれらを統合しているという点で「構造主義」として「より強い」要素である進化論との結合が弱いという意味で、初期パーソンズのほうがその傾向が強い。前述したようにこのことは松岡(一九九八)が要約したパーソンズの思想的変遷—社会進化論にいったん魅せられ、その後といったん距離置き、後期に再接近—からも伺える。

繰り返すが、これまでの議論はおもに本章で定義する「戯画的構造主義」という恣意的な基準にもとづく「こじつけ」だ。このような学術的に適当とはいえない議論を行った理由は、異なる基盤に依拠するトッド人類学とパーソンズ社会学との類似点・相違点を可視化し、両者の接続を容易にするためだ。そして以上の分析からパーソンズ=トッド接続について以下のことがいえる。まず、両者の類似点について記述する。第一に、トッド人類学は「構造主義」との決別を強調するわりに構造主義的側面を強く有しているが、このことは理論的近さとは別にトッドの思想上の「構造主義」との近さを表現しているのではないか。特にトッドが(発展)段階論をやや好んで使用するように思える点、『家族システムの起源』のテーマとは裏腹に進歩概念を好んで使用するように思われる点、(人類学的基底の影響下での)文化システムの相互連関的変動が論じられうる点、は重要だ。パーソンズもまた発展段階論を使用し、社会進化論を好み、そしてトッドと比べてより明示的に文化システムの相互連関的変動を強調した。これらは、パーソンズ=トッド接続の「接着剤」になりうる。本研究ではこれらの中でも特に(発展)段階論の使用に注目する。第二に、パーソンズ社会学に「構造主義以後」的要素が散見さ

れることもまた、この点での「接着剤」を提供する。パーソンズには、西欧・非西欧の二項対立図式および西欧中心主義からの部分的離脱、文化の伝搬の強調、進歩概念への選好が見られる一方でそれを部分的に切り離す余地がある点、システム理論の性質としての理論上の柔軟さ、がみられた。システム理論ではないという点を除けば、これらはトッド人類学にも見出される—もちろんトッドのほうがその傾向が強い—ものだ。これらの中でも本研究で特に重要な意味を持つのは西欧・非西欧の二項対立、西欧中心主義からの部分的離脱だ。そして、パーソンズと異なりトッドがシステム理論にその基盤を持たないという点は、限定的な形ではあるが次章で補完されることとなる。両者の相違点についても記述しておく。1.既に触れたようにパーソンズとトッドの両者は共に文化の伝搬を論じているが、伝搬理論の帰結としての「類型のあいまいさ」を議論しているかどうかという点で両者は大きく異なる。この点は、パーソンズ＝トッド接続においてトッドに引き寄せて解釈されるべきだろう。ただし本研究ではこの差異を強調しない。最後になったが、すでに触れたように後期と比べて初期パーソンズのほうが「構造主義」的諸要素との結合が弱いように思われる点は重要だ。特にその理論を進歩概念から部分的に切り離す余地は、初期パーソンズのほうが大きく感じられる。このことは、進歩概念を好みつつもそれと切り離された議論—『家族システムの起源』における家族システムの変動—を展開している後期トッドとの接続を考えるうえで重要だし、初期トッドであっても重要だ。本稿で繰り返し指摘してゆくが、本研究では初期パーソンズが重要な意味を持つ。以上の議論を踏まえて、次章では「サイバネティクス」をキー概念としたパーソンズ＝トッド接続が検討される。

註

【1】三嶋（一九八八）のような先行研究で「構造主義」は「思想」として取り扱われている。

【2】この語は油井清光（二〇〇四）が使用する「構造主義「以後」」という言葉に由来する。

【3】三嶋（一九八八）は、ソシュール自身が「構造」ではなく「システム」(le système)という言葉を使用していたことを強調している（三嶋、一九八八：二九）。

【4】「戯画的」という言葉の使用はトッドによるその使用—例えば、Todd（2011＝二〇一五：二二三）—を参照している。

【5】これは『家族システムの起源』における中心的なテーマだ。前掲書でトッドは「進化」した家族システムが「技術的・経済的發展にとって麻痺的効果をもたらす」（Todd, 2011＝二〇一六：二〇）と指摘している。つまり後期トッドにおいて、家族システムの「進化」は社会システム自体の「進化」—近代化することを「進化」と呼ぶならば—と全く連動していない。

【6】トッドは「伝搬理論」を「構造主義」と対比させている（Todd, 2011＝二〇一六：

三一)。

〔7〕ただし初期トッドについてはこの限りではない。『新ヨーロッパ大全』には、人類学的基底と言語との関係性を示唆しているかのような記述がある (Todd, 1990=一九九二：七一)。これもまた初期トッドにおける構造主義的な一面なのかもしれないが、記述の曖昧さから本章では考慮しない。

〔8〕トッド自身もレヴィ=ストロースに言及しているが、それらは必ずしも一方的な批判ばかりではない。例えば『家族システムの起源』においてトッドは「いくつかの未開人集団の家族上の近代性という逆説は、クロード・レヴィ=ストロースも見逃しはしなかった」(Todd, 2011=二〇一六：二六)と指摘している。

〔9〕ただし『新ヨーロッパ大全』における家族システムの発展サイクルの重視は後期トッドと比べて限定的だ。前掲書における家族の発展サイクルは、「不完全直系家族」(Todd, 1990=一九九二：七一)のような例外があるとはいえ、ル=プレイに基づいて予め設定された類型—平等主義核家族や直系家族など—とセットになっている。他方で『家族システムの起源』でのそれは「開かれた類型体系」(Todd, 2011=二〇一六：一〇〇)—構築された類型で評価できない類型が存在することを前提とした類型体系—が前提だ。発展サイクルの重視という点で後者はより本質的だ。

〔10〕ただしトッドにおいて、多様な家族システムを適応力—トッド自身はこの語を使用していない—で評価するとき、文化的テイクオフと経済的テイクオフでは基準が必ずしも同一でないことに注意されたい (Todd, 1984=二〇〇八：三五九)。トッドにおいて、文化的テイクオフという点で最も適応力が高いと見做されているのは直系家族システムだが、経済的テイクオフという点ではおそらく絶対核家族システムだ。このように適応すべき対象を単一のものと見做さない視点は、構造主義的アプローチと明示的に異なる。

〔11〕例えば『移民の運命』では日本の仏教が、直系家族システムが提供する権威—不平等主義の価値・規範に沿って変動したと指摘されている (Todd, 1994=一九九九：一九九—二〇一)。

〔12〕ただし、このような初期トッドにおける文化システムの変動論に後述するパゾンズにおけるような螺旋状上昇が随伴している必要はない。繰り返すがこの点で、初期トッドを「構造主義」と同一視することはできない。

〔13〕Todd (2011=二〇一六：六〇九—六二二)などを参照せよ。

〔14〕この問題は極めて厄介だ。本稿著者が指摘するような「人類学的基底の変動を考慮する前近代社会・考慮しない近現代社会という発展段階」をトッドが本当に想定しているのか議論の余地がある。本章でも家族システムの共同体家族化と父系変動との間には大きな時間的差異があるとトッドが指摘している (Todd, 2011=二〇一六：二一〇—二一一) ことに触れたが、近現代社会において人類学的基底が恒常的要素として捉えられうるのは単にその時間的短さに由来するとトッドは見做しているのかもしれない。

他方で既に指摘したように、前近代社会において「革新」であったはずの家族システムの変動が近現代社会における「技術的・経済的發展にとって麻痺的效果をもたらす」(Todd, 2011=二〇一六:二〇)とトッドは指摘している。つまりこの点でトッドは確かに前近代社会と近現代社会とに差異を設定している。この問題についての研究は、本稿以後の課題とする。

【15】松岡(一九九八)はパーソンズ社会進化論の発展段階説とシンプソンの変異概念との結びつきに言及している(松岡、一九九八:三五)。なお本研究における「進化論」概念の使用がパーソンズの諸著書や松岡(一九九八)に基づいていることを断っておく。また本研究において「進化」概念と「進歩」概念が混同されているということも断っておく。

【16】松岡(一九九八)はパーソンズ社会学における社会進化論を変異概念の強調と進化における分岐概念の存在によって特徴づけ、それをスペンサー社会進化論と明らかに異なる「ネオ社会進化論」と表現した(松岡、一九九八:四九)。

【17】松岡(一九九八:四四)によれば、パーソンズは近代諸社会の出現と展開が明確な目標指向性を持つというウェーバーの見解を継承している。そのため、松岡(一九九八:一一〇)もまた記述しているように、戦前ドイツのような主流の近代社会から分岐した社会を近代化の失敗例としてパーソンズは描写している。この点で、前述の松岡(一九九八)の指摘にもかかわらず、パーソンズ社会進化論の尺度は未だに単一に近い。

【18】パーソンズ社会学における様々なシステムは、相互に緊密に結合しつつ変動する。AGIL図式がその代表である。

【19】小川晃生(二〇一五)も参照した。

【20】本稿第一章で指摘したように、田野崎昭夫(一九七五)が社会変動論としてこのことを論じている。

【21】初期トッドにおいて平等主義核家族は当初の類型に加えられている。ここでの議論はあくまで『家族システムの起源』の文脈に限る。

第三章 「サイバネティクス」を基準としたパーソンズ＝トッド接続

本章では「サイバネティクス」をキー概念としてのパーソンズ社会学とトッド人類学との接続を論じる。本章の内容は小川晃生（二〇一七 a）を発展させたものだ。周知のことだが、先行研究を踏まえつつ後述するように「サイバネティクス」はウィーナー（Norbert Wiener）らの創造した概念だ。「サイバネティクス」という概念は本来、学術的に厳密に定義された概念であり様々な研究領域において重要な役割を果たしてきたものだ。その一端はウィーナーの著書をもて伺える。ところが本章における「サイバネティクス」概念は、パーソンズ社会学を参照したものであり、本章におけるその使用は「社会学史」という研究分野でのその使用に限定される。このような「サイバネティクス」概念の使用は、例えば飯田剛史（一九八四）が参考になる。つまり前章における「構造主義」概念と同様に、本章では学術的に厳密に定義された「サイバネティクス」概念に依拠しない。にもかかわらず本章で「サイバネティクス」をキー概念とした議論を行うのは、前述したようにパーソンズがこの概念を使用しているからであり、またトッドの諸研究に共通するテーマが人類学的基底による社会システムの「制御」だからだ。パーソンズ社会学とトッド人類学という異質な研究対象を「接続」するきっかけを得るために、またしても「表面的」な議論を行わざるを得ない。つまり前章と同様にこの章での議論もまた、「比較文明学」としての両者の類似点・相違点の可視化のための「恣意的」なものだ。本章では後述するように「サイバネティクス」概念を「所与の目的のためのフィードバックによる制御理論」として表面的に定義しておく。そして本章ではこの「サイバネティクス」概念が「目的」、「制御」、「フィードバック」という三つの分析的要素に分解されて考察される。これはシステム理論にその基盤をもたないトッド人類学を検討するためだ。この表面的な定義に基づいて、本章ではパーソンズとトッドの類似点・相違点を検討する。そしてこの検討を通して、次章の主題であるパターン変数と人類学的基底との「接続」のための「土台」を提供する。その「土台」とは、「近現代社会」・「前近代社会」の二発展段階と関係したパーソンズとトッドの「特徴づけ」およびそれに基づく両者の接続モデルの提示だ。本章では、複数の先行研究に基づいてサイバネティクスとネオ・サイバネティクス—河島茂生（二〇一六）から引用した用語で本稿での意味は後述する—を連続したものとして把握する。そのなかでも本章ではシステムのシナジェティック的発生の後にサイバネティクスの制御モデルが出現するという山内康英・黒石晋（一九八七）による説明を重視する。この山内・黒石（一九八七）の議論とサイバネティクスについての大澤真幸（二〇一一）の言及に基づいて、本章ではパーソンズ社会学とトッド人類学における「サイバネティクス」的要素を「近現代的社会」の説明についての要素として捉える。これによって、パーソンズ社会学とトッド人類学とを、「近現代社会」・「前近代社会」の二発展段階と関係させつつ特徴づけることが可能になるはずだ。そしてこの検討によって、次章でのパターン変数と人類学的基底との「接続」がどのように位置づけられるべきかが可視化される。なお前述したよ

うに本章で「前近代社会」・「近現代社会」という二つの発展段階を採用するのは、パーソンズ社会学とトッド人類学には（発展）段階論への選好があるという前章での指摘に基づく。ただしこの二つの発展段階は、本稿第四章の議論でその限界を露呈することとなる。

3-1. 本章でのサイバネティクスの定義とその位置づけについて

本題に入る前に、本章における「サイバネティクス」の定義とその位置づけについて確認しておく。本章では、ウィーナー（[1948] 1956=二〇一一）などの定義を参照したうえで、サイバネティクスを「所与の目的のためのフィードバックによる制御理論」と表面的に定義する^[1]。そして「目的」、「フィードバック」、「制御」をサイバネティクスの三要素として取り扱う^[2]。後述するように本来セットになっているはずの「制御」と「フィードバック」を分析的に切り離している点に注意されたい。つまりここでの分析的要素としての「フィードバック」概念は「自己言及（self-reference）」（赤坂、二〇〇七：八）概念に近い。この分析的区分を行うことにより、システム理論に基盤を持たないトッド人類学を検討しやすくなる。

ところで、河島（二〇一六）は先行研究に依拠して、サイバネティクス—ネオ・サイバネティクス、アロポイエティック・マシン（外部からの出入力が必要なシステム）—オートポイエティック・システムの区分を使用している。本章ではこの河島（二〇一六）の議論を踏まえて、「ネオ・サイバネティクス」を社会システム理論における「サイバネティクス」以後の諸展開全般を指示する言葉として使用する。ここでの「社会システム理論におけるサイバネティクス以後の諸展開全般」にはオートポイエーシス、シナジェティクス、再帰性などを含む。また前述した河島（二〇一六）の議論などを踏まえて本章では、オートポイエーシスを出入力の無い自己産出システムだと簡単に定義する。ところで、Weidlich & Haag（1983=一九八六）によれば、「シナジェティクス」とは「一般に複雑な系が示す挙動に共通した類似性を論ずる理論の枠組み」（Weidlich & Haag 1983=一九八六：i）である。また、山内・黒石（一九八七）によれば、「シナジェティクス」は「ゆらぎ」に由来して創発した新しい情報がシステムを生成するプロセスを取り扱っている。これらを踏まえて本章ではシナジェティクスを前述した概念として取り扱う。

ところで大澤（二〇一一）によれば、サイバネティクスはオートポイエーシス、シナジェティクス等のシステム理論の後の展開と対照的でありつつも、それらの萌芽を包含している。ただし大澤（二〇一一）のこの言説は、ヘーゲルの「理性の狡知」概念を踏まえた思弁的なものであり、サイバネティクスとそれ以後の諸理論との関係性を具体的に論じていない。そこでサイバネティクスとネオ・サイバネティクスとの関係性についてより個別的な先行研究を取り上げておこう。既に触れたように山内・黒石（一九八七）はサイバネティクスとシナジェティクスを相補的なものとしつつ、システムのシ

ナジェティクス的発生の後にサイバネティクス的制御モデルが出現するというシステムの発展プロセスに論及している。山内・黒石（一九八七）によれば、構造変動や秩序形成について研究するうえで「シナジェティック・モデルはサイバネティック・モデルとの対比で考えられるべき」（山内・黒石、一九八七：三五）だ。そして山内・黒石（一九八七）に基づけばサイバネティクスとシナジェティクスにおいて「システムの変動の扱い方が大きく異なっている」（山内・黒石、一九八七：三九）のであり、サイバネティクスには「変動によって初めて生ずるはずの新構造があらかじめ（高次制御者という形で）用意され、それが系に接続」（山内・黒石、一九八七：四〇）されてしまうという「論点先取の困難」（山内・黒石、一九八七：四〇）を有するのに対して、シナジェティクスにおける「系の構造を変動させる外部要因」（山内・黒石、一九八七：四〇）は「偶然の作用に帰着」（山内・黒石、一九八七：四一）することのできる極めて小さいもので「論点先取の困難を最小限に押さえることができる」（山内・黒石、一九八七：四一）ものだ（山内・黒石、一九八七：三九—四一）。そしてこのような議論のなかで山内・黒石（一九八七）は「シナジェティック・システムとサイバネティック・システムとを、システムの「進化」という観点からとらえようとする」（山内・黒石、一九八七：四二）うえで、「発生の初期ではシナジェティクス、発生後の行動はサイバネティクスが適用できる」（山内・黒石、一九八七：四二）としつつその中間過程として「ドゥルーズとガタリの「欲望する諸機械」（山内・黒石、一九八七：四二）を示唆している。以上の山内・黒石（一九八七）の議論を本稿著者は上述したように、システムのシナジェティクス的発生の後にサイバネティクス的制御モデルが出現するというシステムの発展プロセスに論及したものと解釈した。類似した言及は大澤（二〇一）にも見出されるが、山内・黒石（一九八七）の議論はシステム理論としてより具体的なものだ^[3]。

また赤堀三郎（二〇〇九）は、サイバネティクスにおける「フィードバック」・「循環的因果性」に着目して、サイバネティクスと「再帰性」概念とを接続している。赤堀（二〇〇九）がデュピュイ（Jean-Pierre Dupuy）の言説を踏まえて指摘するところによればパーソンズと同様にマートン（R. K. Merton）もまたサイバネティクス概念を積極的に受容した社会学者の一人だ（赤堀、二〇〇九：二六）。そして赤堀（二〇〇九）の指摘に基づくならば、マートンの「予言の自己成就」は単に「トマスの公理」（赤堀、二〇〇九：二七）に由来するというだけでなくサイバネティクス概念に関わる「学際的研究者集団において議論の俎上に置かれて」（赤堀、二〇〇九：二七）おりサイバネティクスのキー概念である「循環的な因果性」（赤堀、二〇〇九）の影響を受けたものであり、またマートンが「マス・メディアの地位付与機能」（赤堀、二〇〇九：二八）を説明する中で「推薦者と推薦される対象とが相互に威信を高め合うプロセス」（赤堀、二〇〇九：二八）を論じていることにもサイバネティクス概念における「フィードバック」・「循環的因果性」の影響がみられる（赤堀、二〇〇九：二七—二八）。そして赤堀

(二〇〇九)によれば、「終戦直後のアメリカにおいてフィードバックや「循環的因果性」といった言葉で名指された事象が「再帰性」というキーワードの下でリバイバルしている」(赤堀、二〇〇九：二九)。以上の赤堀(二〇〇九)の議論は「サイバネティクス」と「再帰性」とを連続したものとして把握したものと本稿著者は解釈した。ただし赤坂真人(二〇〇七)が今田高俊(二〇〇四)を引用したうえでサイバネティクスにおける「フィードバック」概念と「自己言及(self-reference)」(赤坂、二〇〇七：八)概念との差異に関して行った指摘(赤坂、二〇〇七：八)からもわかるように、サイバネティクスにおける「フィードバック」が本来「目的」とセットになっているのに対してここでの赤堀(二〇〇九)における「フィードバック」概念は「目的」概念から分析的に切り離されている。これは後述する本章の議論での「フィードバック」概念の取り扱いと同様だ。

さらに佐藤敬三(一九九六)によれば、「反エントロピーの飛び地」概念^[4]を軸としてサイバネティクスとベルタランフィ(L. Bertalanffy)の一般システム理論とを結合することで「システムサイバネティクス」として一体化させることが可能であり、ここにおいて「反エントロピーの飛び地」概念を媒介としてオートポイエーシス等の概念を射程に収めることが可能となる(佐藤、一九九六)。まず佐藤(一九九六)はウィーナーの議論を引用しつつサイバネティクスを「反エントロピーの飛び地」(佐藤、一九九六：六九)だと指摘している。ここでの「エントロピー」概念は佐藤(一九九六)がウィーナーを引用しつつ「組織性を低下させる自然界の傾向」といった意味で使用しており(佐藤、一九九六：六八―六九)、佐藤(一九九六)自身も認めるようにその使用は「安易な使い方」(佐藤、一九九六：六九)にとどまる。他方で佐藤(一九九六)は瀬在良男の議論を踏まえてベルタランフィの「一般システム論」(佐藤、一九九六：六九)を「ホーリズム(全体論)の立場に立つ有機体論であり、そこにポストモダンな性格が見られる」(佐藤、一九九六：六九)としつつ「ベルタランフィが主に念頭に置いていたシステムは、「反エントロピーの飛び地」とほぼ合致する」(佐藤、一九九六：七〇)と指摘した。これらの議論を踏まえて佐藤(一九九六)は「反エントロピーの飛び地の概念をもとにサイバネティクスとシステム論を結合させ、システムサイバネティクスとして一体化させることは可能である」(佐藤、一九九六：七〇)と結論付けている。そして佐藤(一九九六)によるならば「ここで提示される準拠枠では、人間の行う科学という活動自身が、反エントロピー的飛び地であるシステムとしての人間の活動として研究される」(佐藤、一九九六：七一)のであり「かくて、この準拠枠には自己言及性を認めることができる」(佐藤、一九九六：七一)。佐藤(一九九六)がサイバネティクスを「システムサイバネティクス」(佐藤、一九九六：七〇)概念に拡張することによって自己言及性をより柔軟に取り扱うことのできるモデルが出現するわけだから、本章の観点からすれば佐藤(一九九六)の議論は赤堀(二〇〇九)と同様にサイバネティクスとネオ・サイバネティクスとを連続したものとして把握しているといえ

る。それだけでなく佐藤（一九九六）は、「従来のシステム記述で使われてきた入力—出力の形式」（佐藤、一九九六：七二）を無力化するオートポイエーシス概念は「近代的方法にとっての脅威」（佐藤、一九九六：七二）である一方で、「反エントロピーの飛び地の枠組みにとってアノマリーにはなるが、枠組自身を倒すものではなく、この枠組みとの関連でより良く分析されることになるだろう」（佐藤、一九九六：七二）と指摘している。佐藤（一九九六）がそう明言しているわけではないが、これらの議論はサイバネティクスとオートポイエーシスとを連続したものとして把握する可能性を示唆した言説だと本稿著者は解釈した。

以上の本稿著者による先行研究の説明、解釈は極めて表面的なものであり、システム理論の厳密な理論展開を無視している。しかし本稿著者が解釈する限り、「サイバネティクス」が本章で定義する「ネオ・サイバネティクス」との連続性のなかで把握できるということをこれらの先行研究は示している。ただしここでの「連続性」の質的な相違を看過することはできない。赤堀（二〇〇九）が指摘し佐藤（一九九六）が示唆しているのはサイバネティクスの「理論生成史」のなかでの「連続性」だ。それに対して山内・黒石（一九八七）が提示しているのはシステムの「進化」という枠組みにおいてシナジェティクスとサイバネティクスには相補性があり、進化プロセスの「連続性」のなかで両者に基づく記述を組み合わせることが可能だということだ。これらの「連続性」に関する議論は本章の研究にどう関与するのだろうか。まず前者の「連続性」を本稿著者は、ある経験的事象についてのサイバネティクスの記述がその経験的事象の記述についてネオ・サイバネティクスの記述と共存しうるということを示す（以下、「命題 A」）^[5]ものだと解釈した。ただしこの点での本章の記述は極めて限定的だ。他方で後者の「連続性」は本章におけるパーソンズとトッドの「特徴づけ」と直接関係する。本章では、少なくとも本稿著者が解釈する限りシステムのシナジェティクスの発生の後にサイバネティクスの制御モデルが出現するというモデルを示唆しているように思われる山内・黒石（一九八七）の言説に基づいて、シナジェティクスを含むネオ・サイバネティクスで記述できる前近代社会からサイバネティクスで記述できる近現代社会が出現するというモデルを暫定的に提示する。（以下、「命題 B」）。このことは大澤（二〇一一）がサイバネティクスを「20 世紀の中盤のエピステーメーの中核に関わっていた」（大澤、二〇一一：四〇八）と指摘していることに呼応するように思われる。サイバネティクスが「近現代社会」を代表する「性質」だったからこそ、「近現代社会」—ここでは二十世紀中盤のこと—がサイバネティクス概念を生み出したということだ^[6]。宮本孝二（一九九八 b）が指摘するようなギデンズの諸理論を俯瞰するだけでも、このモデルの不十分さは明らかだ。本章では赤堀（二〇〇九）から引用した「再帰性」（赤堀、二〇〇九：二九）概念はまさにこの「近現代社会」を記述するために使用される概念ではなかったのか。この点については、本章のモデルはパーソンズ＝トッド接続—どちらも「近現代社会」の記述としては「再帰性」概念を強調しない—のためのものだからだ、

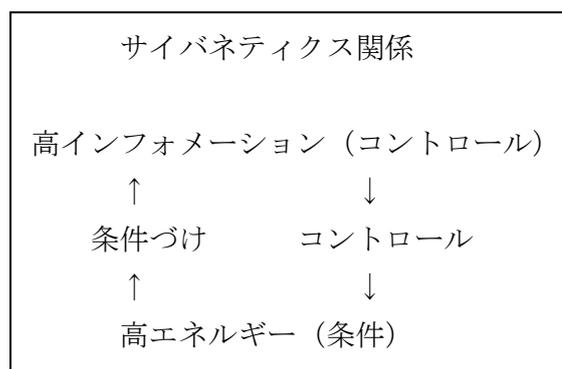
とだけ指摘しておく。この「命題 B」を踏まえて以下の検討では、「サイバネティクス」による記述を「近現代社会」の記述のためのものだと解釈する（「命題 B'」）。ところで繰り返すが、学術的に厳密に定義された「サイバネティクス」概念に依拠して両者を詳細に分析することが本章の目的ではない。本章での分析は次章におけるパターン変数と人類学的基底との接続のための「土台」を提供するために行われる限定的なものにすぎない。

ところで本稿序論でも触れたことだが三原武司（二〇一五：三六七）によれば、ギデンズは文字の出現前後とモダニティ前後の両方での再帰的モニタリングの作動の変更を取り扱っており、三原（二〇一五）はこの変更に関与する神経科学的基礎を提供することを試みている。赤堀（二〇〇九）に依拠して前述したように、再帰性概念の原型のひとつはサイバネティクスの「フィードバック」だから、三原（二〇一五）によるギデンズについての記述をふまえれば「フィードバック」は文字の出現前後とモダニティの前後で作動の変更がなされたはず、ということになる。本章ではこのような「フィードバック」の作動の性質について踏み込んだ議論はしない。

3-2. パーソンズ社会学についての検討

本項ではこれまでの議論を踏まえてパーソンズ社会学について先行研究に依拠して論じる。なお本章では「サイバネティクス」概念を直接に使用しているか否かに基づいて、パーソンズ社会学を初期—サイバネティクス以前—と後期にわけて考察する。ただし、本稿付論 A でふれたように議論を簡単にするために一九七〇年代のパーソンズ社会学を考慮しない^[7]。

まず、『社会類型』などでのサイバネティクス図式を考える。松岡雅裕（一九九八：五二）もまったく同じ図を引用しているが、以下で『社会類型』から図を簡略化して引用しておく。



Parsons（1966＝一九七一：四一）から引用した図に基づいて本稿著者が作成

このような後期パーソンズ社会学でのサイバネティクスは社会学史的研究において

制御理論としての側面が強調されることも多い。この制御理論には明示的に「所与の目的」と「制御」が含まれている。また後述するように大澤（二〇一）は初期パーソンズの「構造—機能主義」をサイバネティクスのであると論じている。所与の目的（構造維持）のための制御として機能がある、ということだ。ここからパーソンズ社会学は初期から後期まで本稿でのサイバネティクス三要素のうちの一つである「所与の目的」・「制御」は明示的に兼ね備えている、といえる。それでは「フィードバック」はどのようなのか。後述するように松本和良（一九八四）は『行為の総合理論をめざして』の議論における「フィードバック」の存在を否定しつつ、後期パーソンズにおける「条件づけ」が「フィードバック」であることを示唆している（松本、一九八四：四三）^[8]。また松岡（一九九八）は、後期パーソンズ社会学におけるサイバネティクスに本章で「三要素」と定義する「所与の目的」、「制御」、「フィードバック」が明示的に備わっている、という前提の下で—「本来、相互因果モデルとしてのサイバネティクス行為論では、体系自身が自己を修正する（進化的）自己言及体系を対象化する」（松岡、一九九八：三九—四〇）という記述に基づく—パーソンズの「サイバネティクス」概念に「体系自身の自己言及」（松岡、一九九八：四〇）概念の萌芽が存在することを指摘している。以下の引用を参照されたい。

「さて、サイバネティクス原理の取り込みを自己の理論形成の一つの要とした後期パーソンズの真の狙いはどこにあったのだろうか。私には、ただそれが社会進化論の一般的な方法論だけの問題であったとは思えず、もっと広い意味で、彼が社会的にめざした構想の重要な意思表示であったような気がする。本来、相互因果モデルとしてのサイバネティクス行為論では、体系自身が自己を修正する（進化的）自己言及体系を対象化する。一方、従来からの直線因果モデルとしての主—客二元論的行為では、行為は主体から対象に向かうだけのリニアなものであり、そこに自省過程はなく、精神の物象化はまぬがれがたく動的な学習的（成長的）進化プロセスの把握は困難といわざるをえない。パーソンズは、社会進化に関する諸論で、特に学習理論について独立的に詳細な論を展開しているわけではなく、一般的に見逃されやすいが、彼の社会進化論は、たんに進化傾向を論じるだけの機械論的な直線因果モデルを脱し、彼自身の初期行為理論に明らかなボランティアの進化論的復活、さらには体系自身の自己言及という、社会学の新たな地平を切り開く端緒ともなる構想を宿していたとはいえないだろうか。」（松岡、一九九八：三九—四〇）

以上の松岡（一九九八）の議論が指摘しているのは、後期パーソンズが「所与の目的」、「制御」、「フィードバック」という本章で定義する「三要素」を明示的に備えた「サイバネティクス」概念を明示的に導入することによって、「体系自身の自己言及という、社会学の新たな地平」（松岡、一九九八：四〇）の萌芽を有することができたというこ

とだ。また前項で指摘したように赤堀（二〇〇九）は、サイバネティクスにおける「フィードバック」、「循環的因果性」概念が現代社会学において「リバイバル」（赤堀、二〇〇九：二九）したものが「再帰性」概念だと指摘している（赤堀、二〇〇九：二九）。松岡（一九九八）と赤堀（二〇〇九）の議論を組み合わせるならば、パーソンズ社会学には「再帰性」概念の萌芽があると見做せるはずだ。ところで前述したように佐藤（一九九六）は「反エントロピーの飛び地の概念をもとにサイバネティクスとシステム論を結合させ、システムサイバネティクスとして一体化させることは可能である」（佐藤、一九九六：七〇）と指摘している。佐藤（一九九六）における厳密な議論の展開を無視するならば、この「システムサイバネティクス」（佐藤、一九九六：七〇）には後期パーソンズ社会学も含まれるのではないか。パーソンズもまた「社会学」及びその近接領域において一般的なシステム理論を志向し^[9]、もちろんそれに「サイバネティクス」概念を組み合わせている。だとすれば「システムサイバネティクス」（佐藤、一九九六：七〇）概念についての、「かくて、この準拠枠には自己言及性を認めることができる」（佐藤、一九九六：七一）という佐藤（一九九六）の指摘とそのオートポイエーシス概念との共存を示唆する言説（佐藤、一九九六：七二）は、後期パーソンズ社会学にも適用できるのではないか。ただしこれらの議論は佐藤（一九九六）の意図を無視するものだ。さらにいえば「進化論」の枠組みの中でのサイバネティクスとシナジェティクスとの「連続性」を示唆する前述した山内・黒石（一九八七）の論及もまた、「所与の目的」、「制御」、「フィードバック」を兼ね備えているはずの後期パーソンズにおける「サイバネティクス」概念に適用できるはずだ。以上の議論から、後期パーソンズ社会学は「サイバネティクス」概念に依拠しつつ「進化論」の枠組みで「シナジェティクス」概念と接続し「再帰性」概念の萌芽を有し「オートポイエーシス」概念と共存するという意味でサイバネティクス—ネオ・サイバネティクスの「連続性」のなかにある、といえる。それでは本章で定義するサイバネティクス以前の初期パーソンズはどのようなのだろうか。

「制御」と「フィードバック」の二要素が存在するための必要条件は少なくともパーソンズ社会学の文脈において、二つの構造、システムないしプロセスが相互依存もしくは相互浸透関係にあることだ^[10]。このことをパーソンズにおける社会システムと文化システムの関係性について検討する。「制御」はここでは「制度化」に対応する。つまりパーソンズにおいて例えば文化システムが社会システムに「制度化」されるということは、文化システムが社会システムを「制御」することを意味している（Parsons,・・・）。そしてこの関係性は決して相互依存、相互浸透関係ではない。初期パーソンズ社会学に論及するとき、松本（一九八四：四二—四三）のように「内面化」や「制度化」といったシステム同士の一方向的関係性がしばしば強調されてきた。実際、初期パーソンズはこれらの概念を強調している。しかし以下で指摘するように初期パーソンズはシステム同士の相互依存的関係を仄めかしてもいる^[11]。

まず『行為の総合理論をめざして』では、文化システムの発生地がパーソナリティや

社会システムであることが明記されている (Parsons & Shils, 1951:160=一九六〇:二五四―二五五)。また『社会体系論』においても、文化システムの発生についての記述 (Parsons, 1951=一九七四:一六)、文化システムの「産出、維持および発展にとって必要な最小限の社会的条件」(Parsons 1951=一九七四:四〇)についての記述、文化システムとしての科学、芸術を創造する役割としての科学者、芸術家についての議論 (Parsons 1951=一九七四:三三四、三九五、四〇三)などが散見される。これらの記述は経験的には「当たり前」のことかもしれないが、「制度化」、「内面化」とは「逆」の関係性を示唆しておりパーソンズ社会学においてシステムの関係性が双方向的なものになるための「萌芽」と呼べるものではないだろうか。ところで、前述したように大澤 (二〇一一) はサイバネティクス導入以前のパーソンズの「構造機能主義」をサイバネティクス的であると評している^[12]。大澤 (二〇一一) が指摘するようにパーソンズ社会学の「構造機能主義」の根底的発想がサイバネティクスに近かったからこそ、サイバネティクス導入以前の『社会体系論』・『行為の総合理論をめざして』においても暗黙裡には社会システムと文化システムとの関係性が相互依存的なのだ、とここでの著者の指摘を言い換えることもできる。

そしてサイバネティクスを明示的に導入して以後のパーソンズは、文化システムと社会システムとの関係性を「相互浸透」とであると明記する。本章の文脈からすれば、このことには因果関係が存在するのではないか。なおこのことは丸山哲央 (一九九一) のような先行研究でも取り上げられているが、本章では *Theories of Society* からの以下の引用で端的に示しておく^[13]。

「第二に、分析的なものとしてのこの区別を扱うことによって、文化システムと社会システムを、完全に「具体的」なシステムとしてではなく、また単に「相互依存的」なものでもなく、相互浸透的なシステムとみなす考え方を発展させることが可能となる。相互浸透の問題を明確にできなかったということが、知識社会学の議論が困難に陥った主な原因の一つである。この〔両システムの〕関係を解く鍵は、すでに繰り返し述べた命題—つまり、社会システムの構造のパターン化は制度化された文化のうちに存するという—ことである。もしこのことが受け入れられるならば、「どちらがより重要か」というような問題は、ある水準では無意味となる。これと逆の〔文化システムと社会システムの〕関係もまた存在する。それは、次のように整理して説明することができる。すなわち、人間は社会システムの中で組織化されるという事実から生じてくる文化的な問題は、「純粋に」文化的な観点から定式化することはできない。これらの問題は、社会システムそのものの活動に含まれるさまざまな緊急要件—丁度、われわれが、「堅固で、丈夫な物質」について語るのと同じような現実というカテゴリー—とかかわっているのである。肝要な点は、文化システムのある側面は、社会システムにかかわ

る諸事実と関係づけなければ理解することができない。また、逆に、社会システムは、文化的焦点と関係なしに分析することはできないということである。この意味で、文化システムと社会システムとは「分離」することができない。」(Parsons, 1961:990=一九九一：一一七一一一八)

このようにパーソンズ社会学において、初期においては暗黙裡に、後期においては明示的に、文化システムと社会システムとの関係性は双方向的なものとして記述されている。よって初期パーソンズは少なくとも「フィードバック」を検出しようするための必要条件を満たしている。以上から萌芽的状态を含めれば、パーソンズ社会学には初期から一貫してサイバネティクス三要素である「所与の目的」、「制御」、「フィードバック」が検出される。したがってサイバネティクス概念に明示的に依拠していないにも関わらず、「進化論」の枠組みで「シナジェティクス」概念と接続し「再帰性」概念の萌芽を有し「オートポイエーシス」概念と共存しようという意味でサイバネティクス—ネオ・サイバネティクスの「連続性」のなかにある、という前述した後期パーソンズについての指摘は初期パーソンズにも部分的に適用できるはずだ^[14]。

以上から初期を含めてパーソンズ社会学に前項で指摘した「命題 A」を適用することができる。また「命題 B」、「命題 B'」に基づいてパーソンズ社会学を、「前近代社会」についてのネオ・サイバネティクスの記述と接続可能な「近現代社会」についてのサイバネティクスの記述だと定義できる。

3-3. トッド人類学についての検討

ここではトッド人類学について初期と後期に区分して、前項でパーソンズ社会学に対して行ったのと同様の検討を行う。初期は『第三惑星』、後期は『不均衡という病』、『家族システムの起源』を中心とする。付論 A で指摘した理由から、『新ヨーロッパ大全』を副次的に取り扱う。繰り返すが本章の目的は「サイバネティクス」概念を軸にパーソンズとトッドの類似点・相違点を可視化し「近現代社会」・「前近代社会」の二発展段階と関係したパーソンズとトッドの「特徴づけ」を行うことによって、次章の主題であるパターン変数と人類学的基底との「接続」のための「土台」を提供することだ。したがって、ここでの分析は本章の目的に貢献する範囲内で行われるのであって、システム理論にその基盤を持たないトッド人類学を「サイバネティクス」概念に基づいて詳細に分析することはしない。

「人類学的基底」概念の定義を踏まえるならば、初期トッドはサイバネティクス以前の「制御理論」に属するといえる。初期トッドが多様な議論を展開しているにもかかわらず、『第三惑星』などの初期の著作から浮上するのは人類学的基底が社会システムに挿入されそれを制御しているというイメージだ。例えば『経済幻想』でトッドは資本主義をアメリカ・イギリス型とドイツ・日本型に区分しているが、この二類型は人類学的

基底の二類型—絶対核家族と直系家族—に還元されてしまう。このことは平賀正剛（二〇一四：七六）が作成した図—ピラミッド底辺の家族構造が上部構造を制御していることを示している—からも明白だ。これは人類学的基底が経済システムを「制御」し続けるというモデルだ。実際、これら初期の著作を執筆している段階において人類学的基底のイメージが「フロイト的、精神分析的なもの」（Todd & Le Bras, 2013=二〇一四：三七六）であり「人格形成の深層に刻み込まれるそうした強力な価値観が、イデオロギーに作用を及ぼし、永続していく」（Todd & Le Bras, 2013=二〇一四：三七六）というようなものであったことを、後にトッドは指摘している。ただし制御のための「目的」は論じられていない。例えば、人類学的基底が「制御」するのは前章で触れた文化的テイクオフを推進するためだ、といった議論はなされない。何より『第三惑星』において人類学的基底の地理的分布は「偶然」だとみなされていた（Todd, 1983=二〇〇八：二八九—二九三）。また、人類学的基底が「無意識」に作用するとされるため「フィードバック」は想定できない。なお、初期トッドにおいて人類学的基底の変動は考慮されていない^[15]。したがって前述したように、初期トッドはサイバネティクス以前の「制御理論」だといえる。したがって初期トッドに前述した「命題 A」、「命題 B」を直接適用することはできない。

このことは後期トッドについても同様だ。後期トッドには「制御」理論としての側面が相変わらず存在している。『不均衡という病』では「人類学的・宗教的基底」によってフランス北東部と南西部の「作動」の差異が説明されている。これは基底による「制御」だ。ただし本稿第二章で指摘したように後期トッドは『家族システムの起源』において家族システムの生成・変動・伝搬とそれに伴う価値・規範システムの変動を詳細に議論している。このことは本章のテーマと関連して何らかの有用な議論をもたらさだろうか。結論をいえば、「サイバネティクス」概念や本稿で定義する「ネオ・サイバネティクス」概念に基づいてトッド人類学を特徴づけることはできない。ただし以下のようなことはいえる。

後期トッドには初期トッドにおいて見出し難い「目的」概念を部分的に抽出できる。例えば、中国中央において直系家族システムが出現したのは、人口が増加し農耕地の新たな開墾が困難になった状況に適応するためだと『家族システムの起源』では記述されている（Todd, 2011=二〇一六：一八九—一九三）。ただしこの「目的」についての記述は極めて限定的だ。トッド自身はそう明記していないが、例えば前述した「目的」によって形成された直系家族システムが近代化プロセスのなかで「権威—不平等」の価値を産出するのはその意図せざる結果だと暗黙裡にみなされている。松岡（一九九八）が要約するように『社会類型』や『近代社会の体系』で AGIL 図式を古代社会にまで適用したパーソンズ^[16]とはこの点で大きく異なる。ただしこのように後期トッドに「目的」概念を見出しうるからと言って、それが「サイバネティクス」概念の分析的要素としての「目的」概念に何らかの形で関係することはない。

次に後期トッドにおける前近代家族システムの伝搬についての議論に言及しておく。本稿第二章でも指摘したように、『家族システムの起源』では家族システムの分析において「対抗模倣」、「異文化の分離的否定受容」といった概念が重要な役割を果たしている (Todd, 2011=二〇一六：三六)。それと関係して、例えば当初は農耕の稠密化と結合していた直系家族システムが定住農耕から分離して伝搬されうる、といった議論がなされている (Todd, 2011=二〇一六：一九二)。家族システムの生成・変動とこの伝搬によって人類の家族システムを一つのシステムから出発し分化したものとみなすこの発想が想起させるのは、後期ルーマンの定義する「全体社会」(Luhmann, 1997=二〇〇九：七四)だ^[17]。ここには「統合」概念がない。システム「統合」に関する徳安彰(二〇〇四：一七八—一七九)のパーソンズ・ルーマンの比較—パーソンズは「統合」を前提とするがルーマンはそれを前提としないというもの—を踏まえれば、本稿著者にはこのことがルーマンと同時代の「エピステーメー(認識の基本枠組み)」(大澤、二〇一一：四〇三)の影響をトッドが間接的に受けているということを意味しているように思われる。ただし『不均衡という病』において現代フランスの人類学的・宗教的基底の多様性に言及しつつ現代フランスを一つの統合されたシステムとして取り扱っている

(Todd & Le Bras, 2013=二〇一四) ことからわかるように、他方でトッドはシステム「統合」のパーソンズ的アプローチ—徳安(二〇〇四)を参照した—を採用し続けてもいる。これは「統合」概念を「近現代社会」の分析に限り適用しようということなのだろうか。このことは、特に「サイバネティクス」概念と「統合」概念とがパーソンズ社会学において同居し、本稿著者がこのようなパーソンズ社会学に「命題 B'」を適用しことからすれば興味深い。ただしこのことが本章のテーマにとって直接的な意味をなすわけではない。

後期トッドが『家族システムの起源』において家族システムの生成・変動・伝搬とそれに伴う価値・規範システムの変動を詳細に議論していることと関連して、以下のことも言える。『家族システムの起源』の主旨は、人類の家族システムは原始核家族の未分化な状態から絶対核家族、直系家族、共同体家族のような規範化され分化した家族システムが出現してゆき多様化した、ということを示すことだ。そして本稿第二章でも指摘したように、前掲書では価値・規範システムの出現と多様化もまた議論されている

(Todd, 2011=二〇一六：二一三—二一四)。それによれば、中国中央において直系家族システムが出現するに従って権威・不平等主義規範が出現してゆき、その後直系家族システムが共同体家族システムに取って代われる過程で不平等主義規範が平等主義規範に置き換わっていった。ところで今津勝紀(二〇一四)は歴史学でしばしば問題となる使用可能な資料の不足を乗り越えるために「シミュレーションによりモデルを構築し、これを歴史の解釈に援用する」(今津、二〇一四：一一九)という研究手法を提起している。今津(二〇一四)自身は「大宝2年御野国加毛郡半布里戸籍を対象としたシミュレーション」(今津、二〇一四：一一九)を行っている。今津(二〇一四)によれ

ばこの研究は、「半布里戸籍を例に、古代の出生時平均余命や死亡率・出生率などを具体的に数値として示し、こうした基礎的条件の下で、婚姻・死別・再婚がどのように発生するのか、血縁関係の連鎖がどのように変化するのかシミュレーションを行」(今津、二〇一四：一一九) うことによって、「当時の「家族構成」についての具体像を示す」(今津、二〇一四：一一九) というものだ。ひょっとすれば、『家族システムの起源』における後期トッドの議論をシミュレーション研究と関係させることによって、価値・規範システムについてのシミュレーション研究を行いうるのかもしれない。もちろんこれは、本稿著者の「思いつき」の域を出ない。

最後に『不均衡という病』^[18]において提示された「場所の記憶」(Todd& Le Bras, 2013=二〇一四：一七) を取り上げておく。「場所の記憶」(Todd& Le Bras, 2013=二〇一四：一七) とは、人類学的・宗教的基底をそれが展開してきた空間において歴史的因果性のなか(時間) で解釈しようということだ(Todd& Le Bras, 2013=二〇一四：三五―三六、二六〇)。付論Aでも指摘したように初期トッドを代表する著書の一つである『新ヨーロッパ大全』では「家族制度と農地制度」(Todd, 1990=一九九二：三九) との「特別なつながり」(Todd, 1990=一九九二：三九) が議論されているが、この「場所の記憶」(Todd& Le Bras, 2013=二〇一四：一七) 概念の背景には『家族システムの起源』において家族システムの生成・変動・伝搬が論じられていることがある。この「場所の記憶」(Todd& Le Bras 2013=二〇一四：一七) を前提とするとき、初期トッドと比較して「人類学的基底」概念のイメージは大きく変わる。これまで触れてきたように、家族システムの変動が考慮されないことによって初期トッドの「人類学的基底」概念にはあたかも社会システムの外部にある人類学的基底がそれを「制御」というイメージがあった。それに対して『不均衡という病』の「人類学的・宗教的基底」では、基底による制御という側面を有しつつ社会の内部で価値・規範が再生産されつづけているというイメージが浮上する。このことは「サイバネティクス」概念や「ネオ・サイバネティクス」概念によってトッド人類学を「特徴づける」という本章の観点からすれば興味深いが、本稿著者はこのことを上手く取り扱えなかった。

以上議論を要約しておく。初期トッドはサイバネティクスの体を成さない「制御理論」と呼ぶほかない。これは後期トッドであっても同様だ。ただし、『家族システムの起源』において家族システムの生成・変動・伝搬とそれに伴う価値・規範システムの変動を詳細に議論していることによって、後期トッド人類学は「サイバネティクス」概念や「ネオ・サイバネティクス」概念による「特徴づけ」を考えるうえでの様々な論点を提供している。ただしこれらの論点は、本稿著者の手に余るものだった。しかしながら、以上の議論を踏まえれば以下の指摘をトッド人類学に対して行うことができる。本章では既に「命題B」を踏まえて、「サイバネティクス」による記述を「近現代社会」の記述のためのものだと解釈するという「命題B'」を提示した。それに対してトッド人類学には、単なる「制御理論」である初期トッドから多様な論点を包含する後期トッド—ただ

し明示的には初期トッドと同様に単なる「制御理論」にとどまる一へという変遷がある。ここで「命題 B'」における「サイバネティクス」を「制御理論」に置き換える。そうすれば、トッド人類学は「近現代社会」の記述に特化しない方向性へと変遷しつつあるといえる。これは初期トッドを代表する『第三惑星』が「近現代社会」のイデオロギーを対象とした研究書であったのに対して、『家族システムの起源』が「前近代社会」における家族システムの生成・変動・伝搬についての研究書であり、『不均衡という病』がこの『家族システムの起源』を踏まえた著書であることに対応する。

3-4. 「サイバネティクス」概念を出発点とした「土台」の提供

これまでの議論を振り返っておく。本章では、「サイバネティクス」をキー概念としてパーソンズ社会学とトッド人類学を検討した。ただし本章の議論は、パーソンズ社会学とトッド人類学という異質な研究対象を「接続」するきっかけを得るための、表面的なものだ。本章では「サイバネティクス」概念を「所与の目的のためのフィードバックによる制御理論」だと表面的に定義した。そして本章ではこの「サイバネティクス」概念が「目的」、「制御」、「フィードバック」という三つの分析的要素に分解されて考察された。これはシステム理論にその基盤をもたないトッド人類学を検討するためだ。この表面的な定義に基づいて、本章ではパーソンズとトッドの類似点・相違点を検討した。この検討に基づいて、次章の主題であるパターン変数と人類学的基底との「接続」のための「土台」をこれから提供するが、その前に本章のこれまでの議論を概観しておく。なお、本章の最初で触れたようにパーソンズ社会学とトッド人類学には（発展）段階論への選好があるという前章での指摘を踏まえて、以下の分析では「前近代社会」・「近現代社会」という二つの発展段階を採用する。

パーソンズ社会学については、先行研究を踏まえて以下の検討を提示した。後期パーソンズは「目的」、「制御」、「フィードバック」、というサイバネティクス「三要素」を備えている。そして赤堀（二〇〇九）、松岡（一九九八）、佐藤（一九九六）および山内・黒石（一九八七）の議論を踏まえれば、この後期パーソンズは「進化論」の枠組みで「シナジェティクス」概念と接続し「再帰性」概念の萌芽を有し「オートポイエーシス」概念と共存するという意味でサイバネティクス—ネオ・サイバネティクスの「連続性」のなかにある。ところで初期パーソンズにおける社会システムと文化システムとの関係性に着目すれば、初期パーソンズには大澤（二〇一一）が指摘するように「所与の目的」、「制御」概念が存在しているだけでなく、「フィードバック」概念が暗黙裡に随伴している。したがって前述した後期パーソンズについての指摘は、初期パーソンズにも部分的に適用できる。以上から、初期を含めてパーソンズ社会学に本章で定義する「命題 A」—サイバネティクスの記述はネオ・サイバネティクスの記述と「同居」できるというもの—を適用することができる。また「命題 B」、「命題 B'」に基づいてパーソンズ社会学を、「前近代社会」についてのネオ・サイバネティクスの記述と接続可能な「近現代

社会」についてのサイバネティクスの記述だと定義できる。

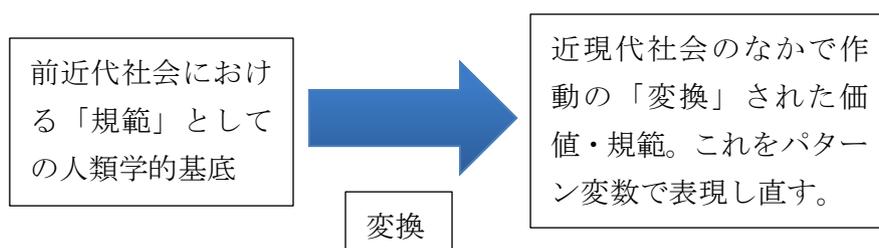
トッド人類学についても同様に考察した。初期トッドはサイバネティクス以前の「制御理論」にとどまる。平賀（二〇一四）の解説からもわかることだが例えば、『経済幻想』でのトッドの資本主義二類型—アメリカ・イギリス型とドイツ・日本型—は人類学的基底の二類型—絶対核家族と直系家族—に還元されてしまう。これは人類学的基底が経済システムを「制御」し続けるというモデルだ。この点は後期トッドも同様だ。『不均衡という病』では「人類学的・宗教的基底」によってフランス北東部と南西部の作動の差異が説明されている。これもまた基底による「制御」だ。ただし後期トッドが『家族システムの起源』において家族システムの・生成・変動・伝搬を考慮していることと関連して、以下の論点を本稿著者は提示した。第一に本章では『家族システムの起源』での前近代家族システムの変動についての記述から「目的」概念を見出した。これは、中国中央において直系家族システムが出現したのは人口が増加し農耕地の新たな開墾が困難になった状況に適応するためだという『家族システムの起源』の記述 (Todd, 2011 = 二〇一六 : 一八九—一九三) に由来する。この「目的」概念についての記述は極めて限定的なもので、それが「サイバネティクス」概念の分析的要素としての「目的」概念に何らかの形で関係することはない。第二に、本章ではトッドが「統合」概念を「近代社会」の分析に限り適用しているように思われると指摘した。このことは、特に「サイバネティクス」概念と「統合」概念—徳安（二〇〇四）を参照—とがパーソンズ社会学において同居し、本稿著者がこのようなパーソンズ社会学に「命題 B'」を適用しことからすれば興味深い。ただし「サイバネティクス」概念や「ネオ・サイバネティクス」概念によってトッド人類学を特徴づけることにこのことは直接貢献しない。第三に本章では、『家族システムの起源』における家族システムと関係づけられた価値・規範システムの生成・変動・伝搬についての議論をシミュレーション研究と関係させることができるのではないかと問題提議を行った。ただしこれは、本稿著者の「思いつき」の域を出ない。最後に本稿著者は、『不均衡という病』における「場所の記憶」 (Todd & Le Bras, 2013 = 二〇一四 : 一七) 概念を提示した。この概念の背景には『家族システムの起源』において家族システムの生成・変動・伝搬が論じられていることがある。この概念によって、初期トッドと比較して「人類学的基底」概念のイメージは大きく変わる。これまで触れてきたように、家族システムの変動が考慮されないことによって初期トッドの「人類学的基底」概念にはあたかも社会システムの外部にある人類学的基底がそれを「制御」というイメージがあった。それに対して『不均衡という病』の「人類学的・宗教的基底」では、基底による制御という側面を有しつつ社会の内部で価値・規範が再生産されつづけているというイメージが浮上する。このことは「サイバネティクス」概念や「ネオ・サイバネティクス」概念によってトッド人類学を「特徴づける」という本章の観点からすれば興味深いが、本稿著者はこのことを上手く取り扱えなかった。以上の議論を踏まえれば以下の指摘を本稿著者はトッド人類学に対して行った。本

章では既に「命題 B」を踏まえて、「サイバネティクス」による記述を「近現代社会」の記述のためのものと解釈するという「命題 B'」を提示した。それに対してトッド人類学には、単なる「制御理論」である初期トッドから多様な論点を包含する後期トッド—ただし明示的には初期トッドと同様に単なる「制御理論」にとどまる—へとという変遷がある。ここで「命題 B'」における「サイバネティクス」を「制御理論」に置き換えれば、トッド人類学は「近現代社会」の記述に特化しない方向性へと変遷しつつあるといえる。これは初期トッドを代表する『第三惑星』が「近現代社会」のイデオロギーを対象とした研究書であったのに対して、『家族システムの起源』が「前近代社会」における家族システムの生成・変動・伝搬についての研究書であり、『不均衡という病』がこの『家族システムの起源』を踏まえた著書であることに対応する。

以上の議論から以下のことを指摘する。本章ではパーソンズ社会学に「命題 A」、「命題 B」、「命題 B'」を適用した。これはつまり、パーソンズ社会学は「近現代社会」の記述に特化したモデルだということだ。本稿序論で指摘したように、溝部明男（二〇一一）は、パーソンズ社会学が「価値・規範要素を偏重しすぎ」（溝部、二〇一一：二九）ているという批判を紹介している（溝部、二〇一一：二九、三五—三六）。これは本稿序論で触れたように、パーソンズの社会変動論において、サイバネティック・ヒエラルキーの上位にある価値システムが重視されすぎているという批判だ（溝部、二〇一一：三五）。本章ではこれまで強調してこなかったが、Parsons（1966＝一九七一：四一）から引用して本稿著者が作成した図における「高インフォメーション」とはパーソンズの文脈において究極的には価値システムを指す（Parsons, 1966＝一九七一：一五—一六、二七、四一—四二）。本章のこれまでの議論から浮上してくるのは、「近現代社会」の記述に特化したモデルであるがために、価値・規範システムによるサイバネティクスの意味での「制御」を重要視するパーソンズ—ただしネオ・サイバネティクスの記述と共存しうる—だ。このパーソンズ社会学において価値・規範システムの記述に使用されるのがパターン変数だ。それに対して本章の議論から導出されるトッド人類学の印象は大きく異なる。パーソンズと異なり「サイバネティクス」概念に依拠しているわけではないが、トッド人類学の基本は人類学的基底という価値・規範システムによる「制御」理論だ。しかしトッド人類学は、「近現代社会」の記述に特化しない方向性—詳細な議論を無視して誇張すれば「ネオ・サイバネティクス」的方向性—へと変遷しつつある。したがって、パーソンズ＝トッド接続において重要な役割を果たすのは、「サイバネティクス」概念に基づいた「特徴づけ」においてパーソンズ社会学に相対的に近い初期トッドだ。ただし「命題 A」に従えば、本稿著者が後期トッドの論点として提示した議論はパーソンズ社会学と両立しうる。しかし後者は本稿以後の課題だ。

パーソンズ＝トッド接続において初期パーソンズが重要だという本稿第二章での指摘とこの指摘を組み合わせるならば、パーソンズ＝トッド接続で重要なのは初期パーソンズと初期トッドだ。そしてこれは初期パターン変数と初期人類学的基底との「接続」

が重要であることを意味する。その中でも本稿第四章の議論では『社会体系論』と『第三惑星』が中心的な役割を果たす。ところで、『第三惑星』の議論は「近現代社会」のイデオロギーが「前近代社会」における農家族システムが提供した価値・規範システムによって「制御」されている—あくまでその舞台は「近現代社会」—ものとみなす研究書だ。これまで触れてきたようにこの著書では「人類学的基底」の変動が考慮されていない (Todd, 1983=二〇〇八：二九〇—二九三) が、議論の性質から言って「近現代社会」のイデオロギーを「制御」するのは「近現代社会」の直近の農家族システムが産出した価値・規範システムだ。トッドがこのような価値・規範システムを本稿でいう「近現代社会」についての記述に使用するのには、トッドによるその疑似的な適用に過ぎない。実際、本稿第四章で検討されるようにトッドは『第三惑星』から一貫して「基底とその作動との逆転現象」を「人類学的基底」概念で「近現代社会」を分析するときに考慮している—例えば本稿第四章で取り上げるように『第三惑星』では直系家族システムの不平等主義規範が二〇世後半の「環境」のなかで平等主義実践に転換されると指摘された (Todd, 1983=二〇〇八：一一六—一一七)。これは「周りの環境」^[19]の変化に伴う価値・規範システムの「変換」^[20]だ^[21]。他方で本稿第四章において指摘するように、川越次郎 (二〇〇二) は進藤雄三 (一九八六) などが初期パターン変数を前近代・近現代の二項対立図式の集大成だと評価していることを紹介している (川越、二〇〇二：一九六)。本章においてパーソンズ社会学を「近現代社会」の記述に特化したモデルだと見做したことからわかるように、これは「近現代」の側から見た前近代・近現代の二項対立図式ということだ。したがって、本研究における初期パターン変数と初期人類学的基底との「接続」は、トッドにおける「前近代社会」の「規範」についての記述としての人類学的基底が「近現代社会」における「価値」として「変換」されたものをパターン変数で表現しなおす、というものだ^[22]。以下の図を参照せよ^[23]。



本稿 3-5. の記述に基づいて本稿著者が作成

最後になったが以下のことを指摘しておく。本研究で使用する「前近代社会」・「近現代社会」の二発展段階には問題も大きい。本稿第四章で改めて指摘するようにトッドは「近現代社会」内部での「暴力的形態におけるイデオロギーの衰退」 (Todd, 2011=二〇一六：一八) を論じている。そしてこのことを考慮に入れるとき「前近代社会」・「近

現代社会」という二つの発展段階はその限界を露呈する。これはバウマンのいう「リキッドモダニティ」(Bauman&Vecchi, 2004=二〇〇七)などに代表されるポストモダン^[24]的議論だ。本稿第四章で改めて触れるように、このことは本研究以後の課題とする。

また、以下のことも指摘しておく。本章では「サイバネティクス」概念に基づいてトッド人類学について議論した。しかし、トッド人類学が「サイバネティクス」の体を成さない「制御理論」に留まるということを除けば、本稿著者は学術研究として有意義な議論を提示できなかった。特に、「ネオ・サイバネティクス」概念に基づく本章におけるトッド人類学についての検討は、本稿著者の「思いつき」の域を出ない。しかしながら本章では、この学術的に有意義な議論を提示できない、ということ自体が意味を持った。また次章の議論を見ればわかるように、トッド人類学についての本稿著者のこれらの「思いつき」は本稿第四章における諸展開に直接影響を及ぼさない。このことは本章におけるパーソンズ社会学についての議論にも当てはまる。トッド人類学についての議論ほどではないが、特に「ネオ・サイバネティクス」概念に基づく本章でのパーソンズについての検討は、厳密さを欠いている。しかしながら次章を見ればわかるように、これらの厳密さを欠いた諸議論は本稿第四章での諸展開に直接影響を及ぼさない。つまり本章の諸議論は研究論文そのものというよりも、本章の結論として提示した初期パターン変数と初期人類学的基底との「接続」モデルを本稿著者が着想した経緯を記述したものだ。

註

[1] 神戸大学の油井清光氏の助言も参照した。

[2] この三要素の分析的区分を本稿著者が提示するにあたって、赤堀(二〇〇九)やParsons(1961=一九九一)も参照した。

[3] 本稿著者はこのほかにも、政治学的サイバネティクスについての山川雄巳(一九八〇)の議論を参照した。

[4] 佐藤(一九九六)は、自己組織性が増大するシステムというものはエントロピーが増大する環境にとって飛び地である、とウィーナーを引用したうえで指摘している。

[5] 村瀬雅俊・村瀬智子(二〇一四)にもこの「命題A」と類似したモデルが見出されていることに留意されたい(村瀬・村瀬、二〇一四：三七―三八)。

[6] 本稿著者のこの言説は村瀬・村瀬(二〇一四)がピアジェ等を踏まえて指摘する「両者は同じ過程から構成される「構造」であるために、理論と実験はどこまでも一致する」(村瀬・村瀬、二〇一四：四一)という言説を踏まえている。

[7] 神戸大学の油井清光氏は著者に対して一九七〇年代パーソンズにおけるサイバネティック・ヒエラルキーの修正(遺伝情報を追加)の重要性を強調した。付論Aを踏まえて本研究で一九七〇年代パーソンズを考慮しないからと言って、本稿著者がそれら

の重要性を軽視しているわけではない。

[8] 本研究ではシステム理論としてのサイバネティクス概念における「フィードバック (feedback)」概念とパーソンズのいう「条件付け」概念とが有するかもしれない微妙な差異を無視していることを断っておく。

[9] 森岡清美・塩原勉・本間康平編 (一九九三) は「構造機能主義」が「一般システム理論 (general system theory)」の影響を受けているということを指摘している (森岡・塩原・本間編、一九九三：五四一五五)。

[10] サイバネティクスの政治学理論についての山川雄己 (一九八〇) の議論から示唆を得た。

[11] 小川晃生 (二〇一五) を参照した。なおパーソンズ社会学においてシステムの関係性が双方向的になることの重要性は丸山哲央 (一九七七) でも示唆されている。

[12] 大澤 (二〇一一) は初期パーソンズのサイバネティクスの発想がウィーナーとは独立に形成されたものだとは指摘している。

[13] 本稿著者の修士論文 (小川晃生、二〇一五：四〇) を参照して引用した。

[14]、パーソンズ社会学において本章で定義するところの「ネオ・サイバネティクス」の萌芽をより具体的に見出すのであれば社会システムの「葛藤」のなかだろう。なお松岡 (二〇〇七) を踏まえれば、進藤雄三 (二〇〇六) や Robertson & Turner (1991 = 一九九五) にも類似した指摘があるようだ。

[15] 初期トッドは家族システムの変動を全く考慮していないわけではない。本稿第二章で指摘した、『世界の幼少期』におけるロシアと朝鮮の家族システムの取り扱いを参照せよ (Todd, 1984 = 二〇〇八：三八〇、三九一)。

[16] 本稿序論で触れたように松岡 (一九九八) はこれが「逆演繹」ではないかという批判を紹介している。

[17] 初期トッドでも文化的テイクオフの「伝搬」が論じられている (Todd, 1984 = 二〇〇八：三四〇) が、この伝搬は「人類学的基底」概念そのものと切り離されている。

[18] 『不均衡という病』はトッドとル・ブラーズ (Herevé Le Bras) との共著だ。そして前掲書において「居住環境」が詳細に議論されていることに関して、「「トッド＝ル・ブラーズ」的総合」(Todd & Le Bras, 2013 = 二〇一四：三七四) だと指摘されている。トッド人類学の変遷を考えると前掲書が共著であることの影響を考慮すべきだが、本稿では議論の簡略のため無視した。

[19] 本稿第四章ではトッドが人類学的基底とその「周りの環境」との関係性を議論していることにより詳細に触れる。本稿著者が価値・規範システムとその「周りの環境」との関係性の重要性を認識したのは、このようなトッドの諸議論の影響が大きい。

[20] 本稿付論 A でも触れたように、ここでの「変換」という言葉は単に価値・規範システムの「作動」のあり方が何らかの理由で変容することを厳密な定義なしに表現

しているに過ぎない。

〔21〕本稿第四章でも改めて触れるがこの「変換」は人類学的基底を構成するすべての要素に関して想定されているわけではない。例えば『家族システムの起源』でトッドは「直系家族につねに付随するヒエラルキー的強迫観念は、科学技術的、経済的あるいは宗教的な発展レベルとは無関係のもののようなものである」(Todd, 2011=二〇一六：一八五一―一八六)と指摘している。人類学的基底の「作動」のどの側面が恒常的もしくは非恒常的なのか詳細な検討が必要なはずだが、本稿4-7.で指摘するように本研究では深く論及しない。

〔22〕ここでの価値と規範の区別はParsons (1966=一九七一：二六一―二七)を参照している。

〔23〕本稿第四章ではこの「接続」を本研究の目的に貢献する最低限の範囲内で行う。例えばトッド人類学のあらゆる著書における価値・規範システムの「変換」についての議論を体系的に整理することは本研究にとって有益なはずだが、このことは本稿以後の課題とする。

〔24〕ポストモダンという言葉の使用については森岡・塩原・本間編(一九九三：一三四―九)等を参照している。

第四章 パターン変数と人類学的基底との接続

これまでの議論を踏まえて、本章ではいよいよパーソンズのパターン変数とトッドの人類学的基底との接続を行う。前章ではこの「接続」の「形式」に言及した。それは、トッドにおける「前近代社会」の「規範」についての記述としての人類学的基底が「近現代社会」における「価値」として「変換」されたものをパターン変数で表現しなおす、というものだ。議論を繰り返しておこう。人類学的基底は基本的には「前近代社会」の「規範」にかかわるものだ。トッドはこれを「近現代社会」の分析にそのまま適用したが、価値システムが展開しているまわりの「環境」が異なる以上、人類学的基底を「近現代社会」に適用するには何らかの「変換」作業が必要だ。トッドによる人類学的基底の「近現代社会」への適用は、あくまで価値・規範の近似的な描写に過ぎない。もちろんトッドはこのことを認識し価値・規範システムそのものとその実際上の作動との相違を強調してきた^[1]が、このことを理論モデルに明示的・体系的に組み込めなかった。パターン変数にもこれと同様の問題がある。人類学的基底について指摘したことの裏返しだが、価値・規範システムの記述としてのパターン変数はあくまで「近現代社会」における価値・規範システムとそこから眺めた前近代社会の価値・規範システムの記述にすぎない^[2]。これまで何度か触れた松岡（一九九八）の「逆演繹」批判はここにも当てはまる。前近代社会の価値・規範システムが我々の理解してきたのと大きく異なる状況下で作動してきた可能性を考慮すべきだ。以上の議論を踏まえたうえで本章ではパターン変数と人類学的基底との接続が議論されるが、その前に両者についての基礎事項を確認する。

4-1. パターン変数についての基礎事項の確認

本題に入る前に、パターン変数についての基礎事項を確認しなければならない。パターン変数について解説している先行研究は多い。日本国内の研究論文としては本章でも、橋本真（一九六二）、川越次郎（二〇〇二）、松本和良（一九八四）、高籙正人（一九七〇）、などの先行研究を取り上げることになる。また、François Chazel（1974＝一九七七）などはパーソンズ社会学全般についての解説書という体をとつつ、パターン変数に照準をあわせた議論を展開している。これらの先行研究では、もちろんパターン変数についての初歩的な解説も記述されている。とはいえ、ここではいったんパーソンズ自身の著書である『行為の総合理論をめざして』や『社会体系論』から議論を直接引用しつつ本稿著者自身の手によってパターン変数を紹介する^[3]。パターン変数は、「行為者の状況に出会うとき、彼にとってその状況が決定的な（曖昧でない）意味をもちうる前に、行わなければならぬ五つの基本的な二者択一を定式化」（Parsons&Shils, 1951＝一九六〇：一四〇―一四一）であり「行為理論の関係枠から直接に生じうる基本的な二者択一のすべてをおおう一体系を構成する」（Parsons&Shils, 1951＝一九六〇：一四〇）とされる。この行為選択についての記述が、転じて価値・規範システムの記述

に使用される。この「五組の二項対立」は以下の通りであった。なおパターン変数は価値・規範のかかわる行為システムのあらゆる諸要素の記述に使用されるが、川越（二〇〇二：一九四—一九五）もまた指摘するように、これらのパターン変数が一次的に関与する諸要素は異なる。役割期待・価値志向の記述に一次的に関与するのは「普遍主義—個別主義」と「帰属性—業績性」、要求性向・動機志向に一次的に関与するのは「感情性—感情的中立性」と「限定性—無限定性」、両方に一次的には関与しないのが「自我志向—集合体志向」だとされている（Parsons & Shils, 1951—一九六〇：三九九—四〇四、Parsons, 1951—一九七四：一一四）。

パターン変数^[4]

- 1.感情性—感情的中立性（Affectivity—Affective neutrality）
- 2.自我志向—集合体志向（Self-orientation—Collectivity-orientation）
- 3.普遍主義—個別主義（Universalism—Particularism）
- 4.帰属性—業績性（Ascription—Achievement）
- 5.限定性—無限定性（Specificity—Diffuseness）

先行研究ではこのようなパターン変数の「形成史」が記述されている。まず、川越（二〇〇二）はパターン変数がテンニース（Ferdinand Tönnies）におけるゲマインシャフト・ゲゼルシャフトの批判的再考から出発していると指摘しつつ、その原型の初出が“The Profession and Social Structure”（初出は一九三九年）だと『経済と社会』におけるパーソンズ自身の記述を踏まえて指摘している（川越、二〇〇二）。Chazel（1974—一九七七）は一九四〇年代におけるパターン変数「形成史」について記述している^[5]。まず Chazel（1974—一九七七）は、パターン変数が『社会体系論』や『行為の総合理論をめざして』以前に漸進的に形成されていったものだと指摘している（Chazel, 1974—一九七七：六九）。そしてそのうえで Chazel（1974—一九七七）は、“The Profession and Social Structure”、“An Analytical Approach to the Theory of Stratification”、“Age and Sex in the Social Structure of the United States”、“Propaganda And Social Control”といった論文を参照し、近代職業システムの分析から普遍主義—特殊主義、限定性—無限定性、自我志向—集合体志向の分離、医師役割の分析からの感情性—感情中立性の分離、近代職業システムと親族システムの対比から帰属性—業績性の分離、といった具合にパターン変数が形成されてゆく様子を概観している（Chazel, 1974—一九七七：七一—八一）。ただし Chazel（1974—一九七七）は「初期の諸論文に現れるような諸変数は、実際に理論的に偉大な将来を運命づけられているとは思われなかった」（Chazel, 1974—一九七七：八一）と記述しているし、また川越（二〇〇二）はこの形成期パターン変数が包括的な価値・規範システムの記述モデルに昇華されておらず「役割ないしは役割期待を中心とした社会システムの構造的諸要素の分類にとどまる」

(川越、二〇〇二：一八八)と暗黙裡に指摘している。

このようにして前述した『行為の総合理論をめざして』や『社会体系論』でのパターン変数が形成されるわけだが、それにも批判はある。例えば橋本真(一九六二)は『行為の総合理論をめざして』におけるパターン変数を要約・整理し、検討と批判を行っている。橋本(一九六二)によるならば、パターン変数が五組に限られているのは不適切なのであり(橋本、一九六二：五六)、またパーソンズがパターン変数の組み合わせの可能性として三二組を提示したことは「過度の図式主義」(橋本、一九六二：六一)である。なお、橋本(一九六二)は前者の批判に基づいて、「即自的—対自的」および「表出的—道具的」という二つの変数を追加している(橋本、一九六二：五九)。このような批判が存在するにもかかわらず、本章ではパーソンズが提示したオリジナルのパターン変数を変更せずに使用する^[6]。なお、本稿第二章でも触れたが、川越(二〇〇二)は進藤雄三(一九八六)などが初期パターン変数を前近代社会・近代社会の二項対立図式の集大成だと評価していることを紹介している(川越、二〇〇二：一九六)。そして周知のようにパターン変数は、*Working Papers in the Theory of Action* (Parsons & Bales & Shils, 1953)以後にその位置づけが大きく変わる。このことについては、例えば松本(一九八四)が詳述している。それによれば、パターン変数が「ベイルズの「四つの機能上の問題」(four functional problem)の理論的図式」(松本、一九八四：四七)と接続することで、いわゆるAGIL図式として定式化された。そして川越(二〇〇二)も触れているように、パーソンズはR. Dubinへの反論を試みた論文(Parson, 1960)においてパターン変数とAGIL図式との接続を再び詳述している。

ところで、ここで初期パターン変数とAGIL図式以後のパターン変数(以後、後期パターン変数と表記)の相違点について、本稿の議論と関係する範囲で論ずる。川越(二〇〇二)は、対立図式として構築された初期パターン変数と親和的図式—AGIL図式の基礎が複数のパターン変数の類似性だという意味—として構築された後期パターン変数とを対比的に論じている(川越、二〇〇二：一八七)。また松本(一九八四)は、初期パターン変数を「経過を問題としたものではなく、行為者のいわば選択的メニューに対する意思決定にかかわる形式的理論に近いものがあり、元来は一時点限りの静態的性質を持つものであった」(松本、一九八四：四六)と表現することで、静的な初期パターン変数と動的な後期パターン変数という対立図式を暗黙裡に主張している。川越(二〇〇二)の指摘は本稿において以下のことを意味する。後述するようにトッドの人類学的基底には特にその初期に対立図式としての側面が強かった。したがってパターン変数と人類学的基底の接続を考えると、対立図式としての側面が強いとされる初期パターン変数を重視すべきだ。このことはパーソンズ=トッド接続での初期パーソンズの重要性を指摘してきたこれまでの議論を補強する。他方で、松本(一九八四)の指摘をそのまま受け入れることはできない。本稿第一章で論じたようにパーソンズ社会学は『社会的行為の構造』以来、動的理論であるという意味で「比較文明学」的なものであり、

そのようなパーソンズ社会学に埋め込まれている初期パターン変数を単に静的だとみなすわけにはいかない。しかし本稿第二章で本稿著者は、初期パーソンズが後期パーソンズと比べて、特に「進化論」に固く組み込まれていないという意味で相対的に構造主義的でないと主張した。実際、松岡雅裕（一九九八）の要約からもわかることだが、後期パーソンズの『社会類型』や『近代社会の体系』において AGIL 図式としてではなく二項対立図式としてパターン変数が使用されるとき、それらは極めて進化論的である^[7]。故に松本（一九八四）の言説を、「進化論に固く組み込まれていない」という意味でなら受け入れることができる。そして後述するように同じく進化論と固く結合しているわけでない人類学的基底との接続を考えると、このような初期パターン変数がやはり重要な意味を持つ。次項では、同様に人類学的基底についての基礎事項を確認する。

4-2. 人類学的基底についての基礎事項の確認

パターン変数につづいてトッドの「人類学的基底」について基礎事項を確認する。本稿序論においてすでに、トッドの「人類学的基底についての仮説」を「近代的都市化直前の農民家族システムが潜在的に包含する規範の類型が、近代化以後のその社会システムにおいて優位に立つ価値システムの類型を人々の「無意識」に作用することで決定するとみなす仮説」だと説明しておいた。つまり簡略化すれば、近代的都市化以前の家族システムを人類学的基底だとみなすことができる。しかしながら、人類学的基底をどう定義しどう取り扱うかについては、トッドにおいて変遷がある。ここでは特に本稿第三章の議論を援用しつつ、人類学的基底の「形成史」に簡単に触れておく。

石崎晴己編（二〇〇一）などの先行研究でもたびたび記述されていることだが、人類学的基底の最初期のものは家族社会学者フレデリック・ル＝プレイのモデルをトッドが修正したものだった。そこで人類学的基底は、自由主義—権威主義、平等主義—不平等主義の二つの軸によって表現されている（Todd, 1983=二〇〇八：三四—五七）。本稿で何度か触れてきたが例えば、フランス北東部の近代的都市化直前の家族システムは親子の早期分離を促すという点で自由主義的、遺産の対照的相続に固執する傾向があるという点で平等主義的な規範を有し、これが近代化プロセスにおいて自由—平等の価値システムとして顕在化する、というような説明がここでなされる。この最初期の人類学的基底にトッドは、『第三惑星』でさらに外婚制—内婚制という軸を付け加えている。この第三の軸はおもに非ヨーロッパ世界の説明のために付け加えられたものだが、本稿第二章で既に触れたように、平賀正剛（二〇一四）もまた要約した『経済幻想』の「個人主義の水準」（Todd, 1998=一九九九：四七）の段階論などに使用された。外婚制が個人主義的で内婚制が集団主義的ということだ。また『第三惑星』では「アノミー家族」という類型が議論されているが、これは『家族システムの起源』でトッド自身が認めるように、強固に規範化された家族システムが「正常」でありその規範が弱った家族システムが「異常」だという認識が『第三惑星』の時点で存在したからだ（Todd, 2011=二

〇一六：八六一―八七)。

ところで本稿第三章では、トッド人類学が一貫して「サイバネティクス」の条件を満たさない単なる「制御」理論だと指摘しつつ、後期トッドにおける多様な論点を記述した。そしてここで『家族システムの起源』における家族システムの生成・変動・伝搬についての議論や『不均衡という病』における「場所の記憶」(Todd& Le Bras, 2013=二〇一四：一七) 概念などと関連して、初期トッドの「人類学的基底」概念のイメージが社会の外側にあって社会を制御するものだったのに対して、後期トッドの「人類学的基底」概念は社会の内側で社会と相互作用するというイメージに近づいたと指摘した。トッド自身が明示的に意図したものかは分からないが、この修正が「人類学的基底」概念に様々な変化をもたらしているように思われる。

第一に、『不均衡という病』において人類学的基底は「人類学的・宗教的基底」として議論されている。これは「人類学的基底についての仮説」に「宗教的要件を加味した」(石崎晴己、二〇一四) ものであり、前掲書では「宗教的基底」は「人類学的基底」と相互関係しつつ部分的に独立した変数と考えられている (Todd&Le Bras, 2013=二〇一四：五〇―五二)。以下の引用を参照せよ。例えば、前掲書ではフランスにおいて「核家族―複合家族」軸 (人類学的基底) に対して「脱キリスト教―ゾンビ・カトリック教」軸 (宗教的基底)^[8] が導入された。本稿付論 A で触れたように宗教システムについての記述は『新ヨーロッパ大全』にも存在する (Todd, 1990=一九九二：一二〇―一六八) が、人類学的基底の恒常性を前提としない後期トッドにおいてこのことはより大きな意味を持つはずだ。

「人類学的システムの分布地図と宗教の分布地図とは、互いに競合的な関係にありながら、相互補完的でもあるのだが、やがて本書の終わりに至って組み合わせられ、フランス文化の核心に他ならない平等主義的個人主義に対する、フランス各地域の当初の関係を定義することになるはずである。」(Todd& Le Bras, 2013=二〇一四：五〇―五二)

第二に、後期トッドにおいて人類学的基底はその「周りの環境」とセットで議論されている。本稿第三章で取り上げた「場所の記憶」(Todd&Le Bras, 2013=二〇一四：一七) はその例だ。より具体的な記述もある。例えば『不均衡という病』では「集村―散村軸」という軸―「集合して村をなしている〔集村〕か、小集落に分散している〔散村〕か」(Todd&Le Bras, 2013=二〇一四：五六) ―が導入され、それと「人類学的・宗教的基底」との結合が議論されている (Todd&Le Bras, 2013=二〇一四：四九―九〇)。ここではもはや「家族はそれだけでは再生産されることはない」(Todd&Le Bras, 2013=二〇一四：五六) のであり、ここで「家族と居住環境を包含する「人類学的システム」」(Todd&Le Bras, 2013=二〇一四：五八) として人類学的基底は明示的に定義された。

そしてこの議論によれば例えば、平等主義核家族システムは集村環境と結合することが多く直系家族システムは散村環境と結合していることが多い (Todd&Le Bras, 2013=二〇一四:五八一六〇)。また『家族システムの起源』では近代的都市化以前の家族システムと農業との関係性が論じられており、その具体例として晩期ローマ帝国で誕生した平等主義核家族と大荘園、ブドウ畑との結合が指摘されている (Todd, 2011=二〇一六:六一六)。ただしここでの平等主義核家族は都市文明と結合していたこともまた指摘されている (Todd, 2011=二〇一六:五八四、六一六) が。また中世北東部フランスにおけるローマの残滓としての平等主義核家族の再台頭と、大規模農業経営、貨幣経済、再都市化との結合も指摘されている (Todd, 2011=二〇一六:六一六—六一七)。ただしトッドは近代的都市化以前の家族システムと「周りの環境」との関係性を絶対視しているわけではなく、例えば「長子相続はそれ自体が、経済的もしくは自然的条件から独立した理想」(Todd, 2011=二〇一六:六一一) になりうるといった言説もみられる。本稿付論 A で指摘したように、初期トッドの『新ヨーロッパ大全』でもまた「家族制度と農地制度」(Todd, 1990=一九九二:三九) との「特別なつながり」(Todd, 1990=一九九二:三九) が議論されている^[9]。しかし本稿付論 A で議論したように、このことがより重要な意味を持つのは人類学的基底の恒常性を前提としない後期トッドであるはずだ。

第三に、初期トッドの人類学的基底が「閉じた類型体系」—すべてを表現できるとされる体系—に依拠していたのに対して、後期トッドのそれは「開かれた類型体系」(Todd, 2011=二〇一六:一〇〇) —その体系で表現しきれない類型を認める体系—に基づいている。これは『家族システムの起源』で伝搬理論が採用されることになったことと対応している。このことはすでに本稿第二章でも後期トッドにおける「タイプのあいまいさ」についての議論として紹介した。

最後に、本稿第三章でふれたことだが、後期トッドでは人類学的基底の生成についての具体的な記述がある。『家族システムの起源』では、原始社会の未分化な規範から前述した自由—権威主義、平等—不平等主義のような価値・規範システムが多様な家族システムの形成を通して構築されるという前提の下で、例えば中世日本においてトッドがフレイザーの議論を引用して言う「サイクル α 」(Todd, 2011=二〇一六:八一) 的な未分化規範から直系家族の形成に伴い権威—不平等主義が出現する様子が記述された (Todd, 2011=二〇一六:二二五—二五八)。なおここにおいて、前述した『第三惑星』の「アノミー家族」概念はもはや採用されない。「規範の未分化状態」と「強固な規範」との関係性が逆転したからだ (Todd, 2011=二〇一六:八六—八七)。

このようにトッドの人類学的基底もまた、その変遷を考慮すれば極めて複雑な概念だ。パターン変数について指摘したのと同様に、人類学的基底もまた二項対立図式から出発しより複雑で精密な概念に彫琢されていった。しかし本稿第三章で指摘したように、本研究の文脈で重要なのは初期人類学的基底だ。これまでの議論からわかるように、初期

パターン変数と初期人類学的基底には二項対立図式の組み合わせという共通項もある。このような、接続の上での基礎事項を次項で整理する。

4-3. パターン変数と人類学的基底との接続の基礎事項

これまでパターン変数と人類学的基底の基礎事項を確認してきた。その次の段階として両者を接続する上での基礎事項を確認する。

第一に、これまで議論してきたように、初期パターン変数と初期人類学的基底との接続を最初に考えることが重要だ。初期パターン変数は AGIL 図式として定式化された後期パターン変数と異なり進化的アップグレードとの結合が相対的に弱い。人類学的基底が初期から一貫して進化的アップグレードとの結合が弱いのは本稿第二章の議論からも自明だが、そのうえで本稿第三章において議論したように「サイバネティクス」概念に基づいた「特徴づけ」においてパーソンズ社会学に相対的に近い初期トッド—初期人類学的基底が重要だ。他方で前述したように、初期パターン変数と初期人類学的基底には二項対立図式の組み合わせという共通項がある。よってこの接続の第一段階は、初期パターン変数と初期人類学的基底の対応関係の整理だ。この「接続」の「形式」については本稿第三章の結論として論じた。つまり本研究における初期パターン変数と初期人類学的基底との「接続」は、トッドにおける「前近代社会」の「規範」についての記述として的人类学的基底が「近現代社会」における「価値」として「変換」されたものをパターン変数で表現しなおす、というものだ。

第二に、松本和良（一九九七）における「規範科学」（normative science）—価値・規範システムそのものを研究—と「説明科学」（explanatory science）—価値・規範システムと行為との関係性を研究—の相違についての記述（松本、一九九七：四八一—四九）からパターン変数と人類学的基底の性質について指摘しておく。パターン変数は松本（一九九七）のいう「説明科学」としてのパーソンズ社会学から「規範科学」としての側面を取り出したものだ。AGIL 図式以前の初期パターン変数は特にその傾向が強い。他方でトッドの人類学的基底は、初期において「規範科学」としての側面が強く、後期において「説明科学」としての側面がやや強まった。前述した人類学的基底の「形成史」からこのことは伺える。この点からも、「規範科学」としての側面が強い初期パターン変数と初期人類学的基底との接続が、議論の簡略化という点から有用だ。そしてこの接続に、本稿第三章で表面的に解釈したそれではなく学術的に厳密に定義され運用されるシステム理論を挿入することで、パーソンズ社会学において現代社会学理論・社会システム理論の観点からみて受け入れがたい部分を棄却しつつ、本研究を「説明科学」に接近させることができる。ただしこのことは、本研究以後の課題だ。

第三に、パターン変数と人類学的基底における行為主体の位置づけについて確認しておく。松岡（二〇〇七）は、パターン変数が「主意主義的行為理論」という枠組みのなかで行為者の主体的選択と結びついていると指摘している（松岡、二〇〇七：二三五）。

このことは前述したパターン変数「形成史」からも明らかだ。それに対して、本稿第二章で宮本孝二（一九九八）のギデンズについての議論を踏まえて指摘したように、トッドはレヴィ＝ストロース的な「無意識」概念によって「人類学的基底」概念を説明している。この差異は重要だが、本研究の議論にとって間接的なため考慮しない。

第四に、パターン変数と人類学的基底の科学的性質の相違について記述する。前述したようにパターン変数の最初の定義は、「行為者の状況に出会うとき、彼にとってその状況が決定的な（曖昧でない）意味をもちうる前に、行わなければならぬ五つの基本的な二者択一を定式化」（Parsons & Shils, 1951＝一九六〇：一四〇—一四一）したものだ。これはパターン変数が分析的最小単位として定義されていることを意味している。それに対して前述した初期人類学的基底の二つの対立図式である、自由主義—権威主義、平等主義—不平等主義は、分析的最小単位だと明言されていない。したがって両者の接続は科学的に異なるレベルのものを接続していることになる。本稿ではすでに人類学的基底とパターン変数との表現の相違に言及してきたが、その理由は両者の科学的レベルの相違に由来するのかもしれない。他方でこれまで触れてきたように、両者の表現が異なるもう一つの理由として本稿では、人類学的基底の基盤となる農民家族システムとパターン変数が展開している「周りの環境」が異なる—前近代的農村社会と近現代的産業社会—ということを指摘してきた。パターン変数と人類学的基底とを「接続」するにあたって本稿では、両者の表現の相違についてのこの二つの解釈のうち前者を考慮せず後者を重視する。そもそもパーソンズは前述した定義にもかかわらず、パターン変数を経験的構成物に寄せて使用する傾向がある。その例は後述する『社会体系論』での議論だ^[10]。

第五に、パターン変数と人類学的基底との「接続」における「地域」について言及しておく。本研究ではこの「接続」にあたって、経験的地域を媒介とする。例えばパターン変数についての「アメリカ」についての言説が、人類学的基底における「アメリカ」についての言説と「接続」される。後述するように本研究で使用されるのは、『社会体系論』におけるアメリカ、ドイツ、中国、中南米といった大規模社会の性質をパターン変数で記述した部分（Parsons, 1951＝一九七四：一八七—二〇五）と、『第三惑星』における議論だ。両者の「地域」についての認識は同一ではない。パーソンズの『社会体系論』では「アメリカ」や「ドイツ」、「中南米」といった地域はそれ以上掘り下げられることなく使用される。他方でトッドの『第三惑星』では「ドイツ」や「中南米」といった地域に対するより詳細な検討も垣間見える。とはいえ『第三惑星』という著書の段階では、トッドは「アメリカ」や「ドイツ」、「中南米」といった地域をほぼ単一の人類学的基底—決して厳密に単一ではない—によって記述している。したがって本稿では両者の「地域」についての認識レベルをほぼ同一のものと見做した。

最後に、本稿付論 A でも触れたことだが、パターン変数と人類学的基底との「接続」と関係した本章で使用する諸概念について改めて整理しておく。本章ではこの接続を表

現するために「変換」という概念を使用する。ここでの「変換」という言葉は単に価値・規範システムの「作動」のあり方が何らかの理由で変容することを厳密な定義なしに表現しているに過ぎない。また本章ではパターン変数の表現に関して「一次的」という概念が使用される。本研究におけるこの表現は、パーソンズ社会学におけるパターン変数の使用方法に由来する。前述したように、五つの二項対立図式の組み合わせとしてのパターン変数の社会システムの諸要素に対する関りの優先度は、その二項対立の種類によって異なる。例えば前述したように『社会体系論』では、「普遍主義—個別主義」および「業績性—帰属性」が「価値志向」に優先的に関与するとされるのに対して、「感情性—感情的中立性」および「限定性—無限定性」は「動機志向」に優先的に関与するとされる（Parsons, 1951=一九七四：一一四）。本研究における「一次的」という表現はこの「優先的に関与する」ということを表現しているに過ぎない。

これまでの議論を踏まえつつ次項ではパターン変数と人類学的基底とを「接続」するためのより踏み込んだ議論を行う。

4-4. パターン変数の「二重性」問題

本項ではパターン変数と人類学的基底とを「接続」するためのより踏み込んだ議論を行う。それによれば、初期パターン変数には進化的アップグレードと結合した価値・規範と、それと切り離された人類学的基底的な意味での価値・規範が「混在」している。このことを本研究では、パターン変数の「二重性」と呼称する。

川越（二〇〇二）をふまえて前述したように初期パターン変数の背景には、前近代社会・近現代社会の二項対立図式が内在している。ただしこれまで論じてきたように初期パターン変数は、後期パターン変数ほどには前近代社会・近現代社会の差異とそれを踏まえた「進化論」に固く組み込まれていない。そして本稿第二章で指摘したように「二項対立図式」よりも「進化論」のほうが「構造主義」—ただし本稿第二章で定義する「戯画的構造主義」概念をふまえたもの—として「強い」ため、初期パターン変数は後期ほどに「構造主義的」ではない。

まず、前述した「二項対立図式」的な初期パターン変数の使用例を『社会体系論』から引用しておく。なお前者の引用は、前近代的な「無文字社会」（Parsons, 1951=一九七四：一八一）に多様な構造分化がみられるというものだ。

「人類学的研究からの膨大な証拠が示しているように、これらの帰属的焦点の優位と帰属的焦点を中心として編成される主として個別主義的—無限定的な役割パターンを突破することなしに、構造的変異だけではなく、さまざまな方向への構造的発達の、広範な多様性がみられよう。」（Parsons, 1951=一九七四：一八一）

「近代的なタイプの「産業的」職業構造の諸問題の若干を論議することにしよう。

その主要な特性は、普遍主義・限定性・感情中立的な・業績性に指向した諸役割の体系である。」(Parsons, 1951=一九七四：一八三)

ところで前述したように、『社会類型』や『近代社会の体系』においても AGIL 図式としてではなく、初期パターン変数のような対立図式としてパターン変数の一部が使用されているケースがある。このことは松岡（一九九八）の要約からもわかることだが、ここでは両著書から直接、このような使用例を引用しておく。

「こうして、ギリシアの哲学的一般化の原則を使用することによって、ローマの法秩序体系はユニバーサリスティックな原理にしたがって定式化されたすべての人間に適用可能なものとなり、古典古代の全文明に共通なものとして制度化された普遍的な規範的秩序観に基礎をおくようになった。」(Parsons, 1966=一九七一：一三一—一三二)

「けれども、すすんだ中間帝国の討論の主要なテーマは、よりパティクラリスティックでより一般化の程度が少ない構造的要素のこうした統合は典型的に不完全であるということであった。」(Parsons, 1966=一九七一：一七一)

「ユニバーサリスティックな法体系〔誰にでも通用する法律制度〕は、産業社会の中心の特徴であるが、強い政府なくしては存在し得ないものである。」(Parsons, 1971=一九七七：一一九)

以上の引用は、川越（二〇〇二）などを踏まえてこれまで議論してきたように、ここでのパターン変数が前近代社会・近現代社会の二項対立図式とセットになっていることを示している。ところが初期パターン変数および後期パーソンズでの初期的パターン変数の一部は、この二項対立図式から切り離すことができる。ヒントになるのは『社会体系論』におけるパーソンズの「社会構造の経験的な分化と変異」(Parsons, 1951=一九七四：一五九) についての章だ^[11]。ここでは、木村雅文（二〇一〇：七）もまた紹介しているようにパターン変数の一次的な組み合わせである普遍主義—業績性、普遍主義—帰属性、個別主義—業績性、個別主義—帰属性が議論され、それらがアメリカ、ドイツ、中国、中南米といった大規模社会の性質と結びつけられている (Parsons, 1951=一九七四：一八七—二〇五)。アメリカ社会が普遍主義—業績性で評価されていることを踏まえれば、これまで議論してきた前近代社会・近現代社会の二項対立図式はここにも内在している。ところで、溝部明男（二〇一一）は、『社会体系論』における、ソ連での「機能的必要条件」と「ユートピア的イデオロギー」の対立についての記述を紹介している（溝部、二〇一一：三三）。実際に『社会体系論』ではソ連において「金銭

的報酬を含めて便益も報酬も著しく分化してきた」(Parsons, 1951=一九七四:一六六)ということと、共産主義との矛盾が指摘されている (Parsons, 1951=一九七四:一六六)。パーソンズにはこのような対立が、近代化の模範としてのアメリカ社会に近い社会ほど少ないとみなす傾向がある。この傾向は、松岡 (一九九八) の要約からもわかるように『近代社会の体系』でさらに顕著だ。ところがトッド人類学を踏まえれば、この要件とイデオロギーとの「対立」もしくは「対立なき相違」はあらゆる社会に普遍のものである。トッド人類学の「革新性」のひとつは、『第三惑星』で記述された人類学的基底そのものと、『世界の幼少期』で記述された近代化プロセスを明確に区別したことだった。本稿第二章ではこのことをトッドにおける人類学的基底の「進化論」からの分離として描写し、パーソンズの『社会的行為の構造』を非進化論的な共時的比較文明学的に再考するために参照した。このようなトッド人類学において、アメリカ社会の人類学的基底である「自由主義—平等への無関心」は、産業社会の価値・規範システムとたとえ類似していたとしても由来が異なる。前者がパーソンズにおけるイデオロギーであり、後者は産業社会が要請する「機能要件」^[12]だ。つまり本稿のこれまでの議論を踏まえて、人類学的基底が近現代社会において「変換」されたものとしてアメリカ社会を普遍主義—業績主義で記述することができるし、他方でアメリカ社会の近代化の結果としてその普遍主義—業績主義を記述することもできる。トッド人類学を踏まえれば、アメリカ社会の価値・規範システムはこの二要素の「混合物」だ。またパーソンズは『社会体系論』の前述した部分でドイツの「内部的緊張の激烈さ」(Parsons, 1951=一九七四:一九八)を指摘し、その原因を無限定性と結びついた強度の政治主義と普遍主義の組み合わせだとみなした (Parsons, 1951=一九七四:一九七—一九八)。このパーソンズの言説もトッド人類学の言説を踏まえれば、文化的テイクオフが生み出した「移行期危機」そのもの—「移行期危機」の存在自体は普遍的—と、ドイツの人類学的基底と「識字化に由来する個人主義」(Todd, 2002=二〇〇三:八三)とのギャップが生み出す緊張—「移行期危機」の規模と関係—との混合物だ。トッドにおける「移行期危機」概念については後述する。したがって繰り返すが、前述した『社会体系論』におけるパターン変数によるアメリカ、ドイツ、中国、中南米についての記述は、この人類学的基底由来の価値・規範システムと近代化プロセスの結果生じた価値・規範システムとの「混合物」だ。パーソンズの意図した議論は後者の側面が極めて強いが、トッド人類学に基づいて検討を行えばパーソンズ社会学に前者が暗黙裡に—もちろんパーソンズの明示的な意図に反して^[13]—含まれていることがわかる。本稿ではパターン変数についてのこのような問題を前述したようにパターン変数の「二重性」問題^[14]と名づける^[15]。そして文化的テイクオフ、産業化などの近代化プロセスに伴う前近代社会・近現代社会の二項対立図式と固着したパターン変数の使用をその「EnfM(P)的使用」と名づけ、イデオロギーや人類学的基底と固着したパターン変数の使用をその「TroP(P)的使用」と名づける^[16]。これまでの議論をアメリカ社会について整理し以下に図示する。なお、以

下の図はパターン変数の「二重性」問題を提示するための暫定的なものにすぎず、以後の議論の過程でその内容が修正されうることを断っておく。

パターン変数の「二重性」(アメリカの場合)

	前近代社会の価値・規範システムの記述としての人類学的基底 (α)	近代化プロセスの帰結としての価値・規範システム (β)	近現代社会の価値・規範システムの記述としてのパターン変数 (γ)
EnfM(P) 的使用	—	普遍主義—業績性	普遍主義—業績性
TroP(P) 的使用	自由主義—平等への無関心	—	普遍主義—業績性

- ・「EnfM(P)的使用」では β と γ の対応関係が焦点
- ・「TroP(P)的使用」では α と γ の対応関係が焦点

本稿 4-4.の議論を踏まえて本稿著者が作成

次項ではこのパターン変数の「二重性」を前提として、パターン変数と人類学的基底の接続のための諸要素を整理する。

4-5. 接続のための諸要素の整理—人類学的基底

次のステップとしてパターン変数と人類学的基底の接続のための、人類学的基底における本研究に必要な諸要素をここで整理しておく。これまで指摘してきたように初期人類学的基底が当該接続の重要な鍵となるため、初期トッドを中心に議論する。ところですでに指摘したように、パターン変数の「TroP(P)的使用」と「EnfM(P)的使用」の対立関係はトッドにおける『第三惑星』と『世界の幼少期』における対立関係に対応する。これ以後前者を人類学的基底の「TroP(T)的使用」と表記し、後者をその「EnfM(T)の応用」と表記する^[17]。

すでに触れたように、人類学的基底の出発点は自由—権威主義、平等—不平等主義の二つの二項対立図式の組み合わせだった。前近代家族システムの規範としては、「自由—権威主義軸」は「子が親元に残ることを規範として促すこと—離れることを規範として促すこと」、「平等—不平等主義軸」は「遺産相続において均等分割相続を規範として促すこと—不均等相続を規範として促すこと」、を意味している (Todd, 1983=二〇〇八：四二—四七)。前述したように、家族社会学者ル＝プレイの研究を踏まえつつこの組み合わせによって、絶対核家族 (自由—平等への無関心)、平等主義核家族 (自由—平等主義)、直系家族 (権威—不平等主義)、(外婚制) 共同体家族 (権威—平等主義) という類型が構築された (Todd, 1983=二〇〇八：四二—四七)。そして絶対核家族は

イングランド・アメリカの家族システム、平等主義核家族はフランス北東部の家族システム、直系家族はドイツ・日本の家族システム、(外婚制) 共同体家族は中国・ロシアの家族システムだとされた (Todd, 1983=二〇〇八: 五九—一〇六)。本稿第二章で論じた「類型のあいまいさ」についての議論は、この段階ではほぼ存在しない。そして、『第三惑星』ではこれらの家族システムと「近代的イデオロギー・近現代的社会システムとしての作動」との関係性が検討されている。本稿第三章を踏まえてすでに指摘したように、これは近代的都市化以前の農民家族システムが産出した規範の、近現代社会への疑似的な適用だ。そのためそもそも近代的イデオロギー・近現代社会システムの作動としての自由—権威主義と平等—不平等主義の直接的な定義が、『第三惑星』では乏しい。ただし後述する各論からもわかるように、自由—権威主義は規律の有無の焦点とされており、平等主義—不平等主義は人間の対照性に固執するかどうか(普遍主義的かどうか)の焦点とされている、ということはとりあえず指摘できる。

「TroP(T)的使用」における前述した四つの類型についての各論を、ここで接続のための要素として『第三惑星』から直接に抽出しておく。ただしこれらの議論はトッド人類学を代表するので石崎晴己編(二〇〇一)のような先行研究でもしばしば言及されていることに留意されたい。また何度も触れているようにトッドの議論は「前近代社会の規範」の「近現代社会の価値」への疑似的な適用としての側面が強いから、以下の記述における「人類学的基底」と「近現代社会のイデオロギー・作動」との区分は本稿著者の「補完」を含む。

直系家族システム(権威—不平等主義)を母体とする人類学的基底(以下、『家族システムの起源』における家族システムの表記 *famille souche* にちなんで基底 *fs* と表記)は、『第三惑星』の時点ではドイツ、フランス南西部、日本などの地域を代表するとされていた。『新ヨーロッパ大全』や『家族システムの起源』などにみられる地域変異や微妙な類型の詳述は、ここではほぼ存在しない。この基底 *fs* と関係する近現代社会のイデオロギー・作動として、1.特殊主義、自民族中心主義、普遍の拒否ないし他者に対する無関心、2.「血統」のような不可視な差異への固執、3.権威主義が規律をもたらすにもかかわらずシステムの細分化が無秩序を招聘すること、4.縦型システムに由来する線的な時間感覚・歴史的永続性への選好およびそれに由来する人種主義、5.経済的平等主義への帰結(基底とその作動との逆転現象の例)、6.権威主義的な父子関係が母親の地位を間接的に上昇させるという前近代的規範としての作動が転じて、近現代社会での女性の地位を相対的に上昇させること、7.権威主義システムに組み込まれた長男とそれから排除された次男以下という前近代的規範が転じて、近現代社会で権威主義システムに組み込まれた人物と自由人の両方を産出すること、8.官僚制の産出と関係していること、9.ヨーロッパ南部の社会主義と区別される官僚制的で効率的な社会民主主義やキリスト教民主主義との結合、10.投票行動の硬直性および一党優位性との結合、11.規律ある労働者の産出、が指摘されている(Todd, 1983=二〇〇八: 一〇七—一六二、一七一)。

これらの記述は人類学的基底の「TroP(T)的使用」であり、したがってパターン変数の「TroP(P)的使用」と大きく関係する。他方で『第三惑星』では、基底 fs の前述した諸特徴が招聘する「矛盾と緊張」(Todd, 1983=二〇〇八：一二〇) — 不平等主義的価値と平等主義的社会実践のような — が議論されている。これは人類学的の「TroP(T)的使用」に依拠すると同時に、後述するその「EnfM(T)的応用」にかかわる。矛盾と緊張が人類学的基底そのものに内在するとしても、その表出と激化はそれを「EnfM(T)的」に応用することで初めて解釈できるということだ。

(外婚制) 共同体家族システムは、『第三惑星』の時点では大雑把に言って中国・ロシアなどの家族システムを代表するとみなされていた。この外婚制共同体家族システムを母体とする人類学的基底(同様に以下、基底 fc)の性質として、1.しばしば男性優位を前提とした前近代的平等主義規範が転化した、近現代社会で作動する普遍主義的価値。この普遍主義はしばしば異質性の排除と結合、2.権威主義とそれが招聘する規律、3.歴史的永続性への嫌悪、4.平等主義的価値の不平等な社会実践への帰結(基底とその作動との逆転現象の例)、が指摘されている(Todd, 1983=二〇〇八：七七—一〇六、一〇九—一一〇、一一五、一一八、一八九)。これらに加えて、共同体家族システムそのものを含む自身の「伝統」への破壊衝動(兄弟の連帯による父殺しという前近代社会での作動の、近現代社会における作動への転化)、が指摘されているが、これは基底 fs についての説明で触れたように「TroP(T)的使用」だけでなく人類学的基底の「EnfM(T)的応用」が関係する。

絶対核家族システムを母体とする人類学的基底(以下、同様に基底 fna)は、『第三惑星』においてイングランドなどを代表するとみなされていた。ただし『新ヨーロッパ大全』ではイングランドの人類学的基底は絶対核家族システムと直系家族システムとの「混合物」だと記述されており(Todd, 1990=一九九二：八〇)、また本稿第二章で触れたように『家族システムの起源』では、イングランドの絶対核家族システムが未分化な核家族システムと直系家族システムとの相互作用の産物だと記述されている。また平等主義核家族システムを母体とする人類学的基底(以下、同様に基底 fne)は『第三惑星』においてフランス北東部などを代表するとみなされていた。ただし本稿第二章で取り上げたように『家族システムの起源』で基底 fne は、ローマ帝国末期に出現し遺産の対照相続に固執する核家族システムが直系家族システムとの相互作用のなかで再活性化したものだと指摘されている。これら基底 fna、基底 fne における近現代社会のイデオロギー・作動として、1.子どもの早期独立を促す規範が転じて産業社会の要請する労働者の流動性を肯定する価値システムに転化、2.全体主義の拒絶と個人主義の尊重、3.非全体主義的な独裁者—全体主義と異なり「市民社会の機能については中立的な態度をとる」(Todd, 1983=二〇〇八：一六九) — の産出。ただしこの独裁者を頻繁に生み出すのはもっぱら基底 fne (いわゆるラテン的軍国主義)で基底 fna は概ね自由主義的、4.反秩序的な労働者の産出。特に基底 fne における規律がなく組織力が弱い組織の産出、

5.非効率的な経済システムの産出、6.基底 fna において平等への関心を示さない規範が転じて女性の地位が相対的に高い社会システムを生成すること、それとは逆に基底 fne において平等主義規範が女性の地位が相対的に低い社会システムを生成すること（基底とその作動との逆転現象の例）、8.基底 fc と異なり異質性の排除とは必ずしも結合しない、基底 fne における普遍主義、が指摘されている（Todd, 1983=二〇〇八：一六三一—二〇四）。これに加えて基底 fne で、自由主義と平等主義の矛盾が招聘する緊張が議論されている（Todd, 1983=二〇〇八：一七七）。またアメリカ大陸に移植された基底 fna と基底 fne において、移植に伴う基底の不安定化が見られることも指摘されている（Todd, 1983=二〇〇八：一八一—一八三）。さらに、普遍主義的でないが攻撃的差異主義でもない基底 fna （不平等主義でなく平等への無関心）に代表されるアメリカ合衆国が普遍主義的実践を行っていることもまた指摘されている（Todd, 1983=二〇〇八：二〇二）。前述したようにこれらのことも、人類学的基底の「TroP(T)的使用」内部での理解だけでなく、その「EnfM(T)的応用」での解釈を要求している。

前述したように『第三惑星』では、家族システムの類型構築の軸として「内婚—外婚制軸」が導入されている。『第三惑星』の時点でこの軸は、外婚制共同体家族—内婚制共同体家族、絶対・平等主義核家族—アノミー家族、といった類型構築に寄与していた。しかしこれまで触れてきたように『家族システムの起源』以後、このような類型はもはや採用されていない。そこで本章では、「内婚—外婚制軸」と近現代社会におけるイデオロギー・作動の関係性のみ記述しておく。なお『第三惑星』の段階では内婚制共同体家族システムがイスラム世界を代表するとされており、『第三惑星』の初出は一九八三年だから、ここでの記述は前近代社会の規範をそのまま記述したものに近い。ゆえに近現代社会のイデオロギー・作動との結びつきを強調した以下の記述は、本稿著者の「補完」を含む。「近代的イデオロギー・近現代的社会システムにおける作動」としてのこの軸の性質として、1.内婚制は前近代社会の規範としてより強固に個人を統合するため近現代社会の作動としてもそのように作動すること、2.個人の強固な統合が、外婚制システムと異なり内婚制では強力な国家機構を生み出さず、また国家機構の成長を妨害すること、3.内婚制は婚姻可能な相手を規則として決定しうるから、権威の源泉が特定の人間ではなく非人格的ルールになりかえって権威主義の弱体化を招聘し水平的作動に到達すること、が指摘されている（Todd, 1983=二〇〇八：二〇五一—二三二）。なお『第三惑星』では内婚制共同体家族システムにおける女性の大幅なステータス低下が指摘されている（Todd, 1983=二〇〇八：二一七一—二一八）が、『家族システムの起源』ではこのことが中東—内婚制共同体家族システムの地域—の歴史の古さによっても解釈されている（Todd, 2011=二〇一六：六九五—六九九）ため、ここでは考慮しない。

『経済幻想』には「内婚—外婚制」軸と近現代社会のイデオロギー・作動との結びつきについてのより包括的な議論がある。本稿で何度か触れているようにこの議論は平賀正剛（二〇一四）が詳述しているが、ここでは『経済幻想』から直接引用しておく。そ

れに基づけば、「内婚—外婚制」軸は近現代社会の作動としての「個人主義の水準」(Todd,1998=一九九九：四五)に「変換」することが可能であり、内婚制は「統合的要素」(Todd,1998=一九九九：四六)で個人主義水準の低下に寄与する。なおここでは、「内婚—外婚制」軸だけでなく「自由—権威主義」軸および「平等—不平等主義」軸と個人主義の水準との関係性も議論されている(Todd,1998=一九九九：四五—四七)。前者については、権威主義が個人主義水準を低下させるとされる(Todd,1998=一九九九：四五)。後者については、平等主義であれ不平等主義であれ価値・規範の存在そのものが個人主義水準を低下させるとされる(Todd,1998=一九九九：四五—四六)。『経済幻想』にはこれらの議論をまとめた表があるので引用しておく。なお平賀(二〇一四)が全く同じ表を引用しているが、ここでは『経済幻想』から直接引用する。

	自由—権威主義	平等・不平等主義—規範なし	外婚—内婚制	総合
基底 fna	1	1	0	2
基底 fne	1	2	0	3
基底 fs	2	2	0	4
基底 fc	2	2	0	4
基底 fs (内)	2	2	1	5
基底 fc (内)	2	2	2	6

Todd (1998=一九九九：四七) から引用。ただし用語などを本稿著者が修正。

なお、基底 fs (内) =内婚制直系家族。また、基底 fc (内) =内婚制共同体家族

ここで人類学的基底の「EnfM(T)的応用」について記述しておく。すでに本稿第二章で触れたように、『世界の幼少期』では人類学的基底が縦型—非縦型(二段階で定義は権威—自由主義軸と同じ)、女性の地位の高低(母系制、双系制、父系制の三段階)、という二つの要素に再構成されて文化的テイクオフ—経済的テイクオフに先行する「心性の変容」(Todd, 1984=二〇〇八：二九九) —との相性が議論されている。本稿第二章で指摘したように、少なくとも本研究で定義する「戯画的構造主義」概念に依拠する限り、この文化的テイクオフは識字率などの表出物で表現される構造主義的な意味での「深層構造」だ。ここでの議論に従えば、基底 fs は「縦型双系制」で文化的テイクオフへの傾向が「非常に強い」のであり、基底 fc は「縦型父系性」でこの傾向が「中位」であり、基底 fna と基底 fne は「非縦型双系制」でこの傾向が「中位」である(Todd, 1984=二〇〇八：三一七—三一九)。ただし本稿第二章で触れたように『家族システムの起源』では「伝搬理論」とそれが招聘する「類型の曖昧さ」に依拠してこの類型は大きく修正されており、例えば基底 fc は常に父系性だとみなされていない(Todd, 2011=二〇一六：一〇四)。また女性の地位の高低についても修正があり、前述した類型では母

系制が最も女性の地位が高いかのように記述されているが、『家族システムの起源』では実践として最も女性の地位が高いのは双系制だと明言されている (Todd, 2011=二〇一六:五〇五)。本章ではこれらの点について、『世界の幼少期』の記述に依拠する。なお、文化的テイクオフを内発的に発生させたのは経験的に基底 fs のみだとされるが、その一方でその伝搬による外発的発生はどの人類学的基底であっても生じうるとされる (Todd, 1984=二〇〇八:三一七、三四〇、三九三)。このような人類学的基底の「EnfM(T)的応用」は、その定義からすればトトロロジーだが、文化的テイクオフという基準に依拠した前近代社会—近現代社会の差異を表現することに寄与している。ただしパターン変数の「EnfM(P)的使用」・「TroP(P)的使用」の差異と異なり、人類学的基底の図式そのものは前近代社会—近現代社会の二項対立図式を含まない。トッドが明示的にそう主張しているわけではないが本稿著者が解釈する限り、文化的テイクオフとの相性が良い基底は、文化的テイクオフの結果生じる社会が要請する機能要件を、意図せざる結果としてより多く含みうるということだ。ただしトッドにおいて文化的テイクオフと相性の良い基底と、経済的テイクオフと相性の良い基底とに「ズレ」があることに留意されたい (Todd, 1984=二〇〇八:三二九—三六八)。パターン変数の「EnfM(P)的使用」との接続を考えるならば後者のほうが重要だ。それによれば文化的テイクオフと最も相性が良いとされるのはドイツ・日本の基底 fs だが、経済的テイクオフ (産業化) についてはイングランドの基底 fna だ。なお前述したように、『世界の幼少期』では内婚制共同体家族システムにおける女性の地位の低さが「内婚—外婚制」軸によって説明されていたが『家族システムの起源』では中東の歴史の古さでも解釈されるため、本稿では後者を重視し「内婚—外婚制」軸を人類学的基底の「EnfM(T)的応用」に関係させない。

人類学的基底の「EnfM(T)的応用」の例としての「移行期危機」について触れておく。「移行期危機」の初出は『世界の幼少期』であり、イギリスの歴史家であるローレンス・ストーン (Lawrence Stone) の議論がその叩き台だ (Todd, 1984=二〇〇八:四四九)。なお「移行期危機」という訳出は、『帝国以後』における石崎晴己 (二〇〇三) のものを参照している。『世界の幼少期』での「移行期危機」の定義は、文化的テイクオフの進展によって識字率が上昇する中でイデオロギーが大衆の手に届くものになり、もしくはそのなかで「伝統的な社会基盤と精神的な枠組みとの断絶」(Todd, 1984=二〇〇八:四五五)が生じることによって、社会の暴力性が一時的に増大するというものだ (Todd, 1984=二〇〇八:四四七—四八七)。前述したように文化的テイクオフは普遍的な現象だから、この「移行期危機」も普遍的な現象だ。このように暴力性が増大した社会—フランス革命やドイツのナチズム—におけるイデオロギー形態を決定するのが人類学的基底だというのがトッドの主張だが、「移行期危機」と前述したイデオロギー形態が独立しているとされている点で (Todd, 1984=二〇〇八:四五九)、ここでの人類学的基底は TroP(T)的に使用されている。ただし人類学的基底によってそれとの相性が左右さ

れる文化的テイクオフが早期に進展した社会で「移行期危機」はより早期に生じるとされ (Todd, 1984=二〇〇八：四五四)、人類学的基底の性質と「識字化に由来する個人主義」(Todd, 2002=二〇〇三：八三) とに差異がある場合に移行期危機がより大規模になりうるとされている (Todd, 2002=二〇〇三：八三一八四)、という点でここでの人類学的基底は **EnfM(T)** 的に応用されてもいる。なお前述した『第三惑星』における人類学的基底内部の矛盾の発露についての議論は、これまでの「移行期危機」についての議論を踏まえれば、人類学的基底の「**TroP(T)**的使用」—基底そのものの性質—と「**EnfM(T)**的応用」—基底の性質の暴力化—との「混合物」だ。

4-6. 接続のための諸要素の整理—パターン変数

前項に続いて、接続のためのパターン変数における諸要素をここで列挙する。前述したパターン変数の「**EnfM(P)**的使用」と「**TroP(P)**的使用」との差異を踏まえる。これまで議論してきたように初期パターン変数が重要な意味を持つため、『社会体系論』などの記述を中心に論じる。なお以下のドイツについての記述は木村(二〇一〇)が詳述しているが、ここではパーソンズの著書から直接引用する。

『社会体系論』においてパーソンズは「純粋に分類学的な観点からみれば、社会構造のなかで親族がなんらかの注目に値するほど卓越することは、概して極めて疑わしいと思われる」(Parsons, 1951=一九七四：一六一)と指摘しつつ、パターン変数による親族システムの分析を試みている。前項で論じたパターン変数の「二重性」問題における「**EnfM(P)**的使用」については、親族システムが無限定的で集合体志向的であることが指摘されている (Parsons, 1951=一九七四：一六二)。また親族システムが帰属性と結びついていることも強調されている (Parsons, 1951=一九七四：一七六)。それに対してパターン変数の「**TroP(P)**的使用」と結びつきうる議論もまた存在する。例えば、パーソンズはドイツの「伝統的な家族構造」(Parsons, 1951=一九七四：一九七)が「階統と権威にたいする一般的協調」(Parsons, 1951=一九七四：一九七)を伴う権威主義的なものと指摘しているが (Parsons, 1951=一九七四：一九七)、ここでパーソンズはこれを帰属性、無限定性、と結びつけている。そのなかでも、パーソンズは帰属性を「地位階統」と一時的に結びつけ、無限定性を「権威主義」と一次的に結びつけている (Parsons, 1951=一九七四：一九六—一九七)。ドイツ社会全般については、帰属性、無限定性、に加えて、普遍主義、集合体志向、であることも記述している。そもそもこのドイツについての記述は、前述したように役割や価値の記述に一次的にかかわる普遍主義—帰属性のパターン変数の組み合わせの検討から出発したものだ。またここでは普遍主義—業績性の組み合わせが「個人主義」(individualistic)と対応関係にあり、普遍主義—帰属性の組み合わせが「集合主義」(collectivistic)と対応関係にあることが指摘されている (Parsons, 1951:194=一九七四：一九八)。さらにこの社会類型の特徴として、普遍主義—業績性と比べてより厳格な感情中立性が要求されることが指摘されて

いる (Parsons, 1951=一九七四：一九七)。後述するようにこれらの議論は、パターン変数の「TroP(P)的使用」と関連付けて議論される。

木村(二〇一〇)を踏まえつつ前述したように『社会体系論』では、アメリカ、中国、中南米についてもパターン変数を用いた同様の記述がある。これらについても本研究に必要な諸要素を列挙しておく。まず、普遍主義—業績性の「一次的組み合わせ」を出発点とした議論について提示する。これは『社会体系論』ではアメリカ社会の記述と必ずしも同一視されていないが、この記述の説明の例としてアメリカが多用されていることや『近代社会の体系』の記述を踏まえて、これを「TroP(P)的使用」としてのアメリカ社会論とみなす。第一に、普遍主義—業績性の「一次的組み合わせ」が、「かかる価値体系における一定の「個人主義的」な傾向の基礎をなしている」(Parsons, 1951=一九七四：一八八)という指摘がある。別の個所では個人主義が、「普遍主義、業績性、および限定性のあいだの連関と結びついている」(Parsons, 1951=一九七四：一九四)と指摘されている。第二に、この普遍主義—業績性の「一次的組み合わせ」が、「進んで新しい目標を定義することを促進し、また手段の効率を改善することに関心をしめず、動的に発展する体系」(Parsons, 1951=一九七四：一八九)である産業社会と結合していることが指摘されている(Parsons, 1951=一九七四：一八九)。前述したようにここにはパターン変数の「二重性」問題があり、産業社会を記述している「EnfM(P)的使用」と同時にアメリカの人類学的基底の近現代社会における対応物を描写する「TroP(P)的使用」を含んでいる。最後に、この社会類型において「主要な普遍主義的な業績パターンと一致しない多様なパターン」(Parsons, 1951=一九七四：一九一)として「帰属地位と無限定的な感情的愛着を中心として構築されている親族集群」(Parsons, 1951=一九七四：一九一)が指摘されている。これは翻って普遍主義—業績性の「一次的組み合わせ」と限定性、感情中立性との結合を指摘するものだ。この言説もまた後述する議論で「EnfM(P)的使用」だけでなく「TroP(P)的使用」が包含されているものとして取り扱われる。

次に、個別主義—業績性の「一次的組み合わせ」から出発した記述について論じる。パーソンズはこの記述を「旧封建的中国」(Parsons, 1951=一九七四：一九九)と結びつけて論じている。まず個別主義—業績性の「一次的組み合わせ」が、「関係的体系そのものの内部の、またはその体系が位置づけられている状況に固有の、一定の準拠点」(Parsons, 1951=一九七四：一九九)に焦点をあわせた業績達成を要求することをパーソンズは強調している(Parsons, 1951=一九七四：一九九)。パーソンズはここで明言していないが『社会的行為の構造』の「マーシャル論」、「ウェーバー論」を踏まえれば、これは普遍主義—業績性の「一次的組み合わせ」が周囲の環境を改良するための業績達成を志向するのに対して、個別主義—業績性の「一次的組み合わせ」が所与の環境の枠内での業績達成を志向するということだ。この記述は「TroP(P)的使用」の入り込む余地があるかもしれないが、「EnfM(P)的使用」としての側面が強い。またパーソン

ズはここで、「封建制度」と業績性を結び付けている (Parsons, 1951=一九七四：二〇〇)。これもまた「封建制度」という概念が前近代社会—近現代社会の二項対立図式と固着しがちなことを踏まえれば、「EnfM(P)的使用」としての側面が強い。さらにパーソンズはここでの「封建的中国」における普遍主義の弱さが、業績性に無限定性を付随させていることを指摘している (Parsons, 1951=一九七四：二〇〇)。これもまた「EnfM(P)的使用」としての側面が強い。なおここでパーソンズは「封建的中国」の無限定性が「集合主義」・「権威主義」と結合していることや、個別主義が「伝統主義」と結びついていることを指摘している (Parsons, 1951=一九七四：二〇〇)。また「自発的感情性は間細胞的なものとしてのみ許容される傾向があり、逸脱の主要な焦点の一つをなしている」 (Parsons, 1951=一九七四：二〇一) という言説によって、「封建的中国」は感情中立性と結びつけられている。これらの言説も「EnfM(P)的使用」を強く感じさせるものだ。このように『社会体系論』における「封建的中国」についての記述は、パターン変数の「EnfM(P)的使用」としての側面が強い。しかし前述したトッド人類学由来の諸要素と照合することで、ここからも「TroP(P)的使用」としての一面が見出されるはずだ。

最後に、個別主義—帰属性の「一次的組み合わせ」を出発点とした記述について論じる。パーソンズはこの結合を「スペイン語圏中南米」 (Parsons, 1951=一九七四：二〇三) に対応させている。まずここでパーソンズは個別主義が「親族と地域社会を中心として、社会構造の編成が結晶する傾向」 (Parsons, 1951=一九七四：二〇一) と結びついていること、帰属性が環境について「所与のもの、受動的に適応するものとみなされる傾向」 (Parsons, 1951=一九七四：二〇二) と結びついていることを指摘している。このことと関連してパーソンズは、業績性の欠如を道具的指向の未発達と結びつけつつ (Parsons, 1951=一九七四：二〇二)、帰属性を表出的指向の優位と伝統主義とに結びつけている。前述したようなトッド人類学から抽出した諸要素を踏まえれば、帰属性と受動性、表出的指向、伝統主義との結合はパターン変数の「EnfM(P)的使用」としての側面が強いように思える。個別主義についての記述は、後述するように「TroP(P)的使用」を含む余地がある。さらにパーソンズは、個別主義—帰属性の「一次的組み合わせ」を出発点として記述できる社会を「集合主義的というよりは個人主義的 (individualistic rather than collectivistic)」 (Parsons, 1951:199=一九七四：二〇二) で「非権威主義的」だと指摘している (Parsons, 1951=一九七四：二〇二)。ただしパーソンズは一次的記述に普遍主義が含まれる場合と異なり、この「組み合わせ」における「個人主義 (individualistic)」が「主として表出的関心と関係しているのであり、それゆえに、ましてや業績達成をとおして状況を形成する機会を問題にしているのではない」 (Parsons, 1951=一九七四：二〇二—二〇三) のでありまた、ここでの「非権威主義」において「表出的自由をあまり多く妨害しないかぎり、権威にたいする固有の反対はみられないし、じっさい権威は安定の一要因として歓迎されるだろう」 (Parsons, 1951

＝一九七四：二〇三)、と指摘している。前述したトッド人類学の諸要素についての議論からわかるように、ここでの議論もパターン変数の「EnfM(P)的使用」と「TroP(P)の使用」の「混合物」だ。

パターン変数の「二重性」問題を提示した前々項でも指摘したように、『社会類型』や『近代社会の体系』において AGIL 図式としてだけでなく初期の二項対立図式としてパターン変数が EnfM(P)的に使用されている。これらの記述についてここで纏めておく。なお何度も触れているようにこの両著書は松岡(一九九八)が詳細に研究しているが、ここでは両著書から直接引用する。第一に、『社会類型』の「原始社会」についての記述の中でパーソンズは、オーストラリア原住民が「性を含んだスペシフィックな親族の地位にしたがってスペシフィックな技術的—経済的機能を遂行」(Parsons, 1966＝一九七一：五五)していることを指摘している。ただしオーストラリア原住民の社会自体は「未分化な状態」(Parsons, 1966＝一九七一：五三) —ここでのパターン変数でいえば限定的 (specific) であるより無限定的 (diffuse) —だという前提がここにはある。第二に、「すすんだ原始社会」への移行を論じる中で、「家系集団」(Parsons, 1966＝一九七一：六七) が「配偶者の交換やディフューズな所有権上の地位」(Parsons, 1966＝一九七一：六七) を伴いつつ、「連邦国家内の州」(Parsons, 1966＝一九七一：六七) のようなものを形成しうることが指摘されている。ここでも、「原始社会」と無限定性 (diffuseness) との結合が前提とされている。また「すすんだ原始社会」の「リーダーシップ制度の政治的構成要素」(Parsons, 1966＝一九七一：七一) が「機能的にディフューズ」(Parsons, 1966＝一九七一：七一) だという指摘もある。前近代社会の諸要素を無限定性と結びつける記述はほかにも多数あるが割愛する。第三に、「歴史的」中間帝国」(Parsons, 1966＝一九七一：一〇三) が議論される中で、古代中国の帝国秩序が「ディフューズでありパティキュラリスティック」(Parsons, 1966＝一九七一：一一〇) だと指摘されている。また古代中国における官僚制が普遍主義的だという指摘もある (Parsons, 1966＝一九七一：一一三)。さらに古代中国の祖先崇拜に「親族パティキュラリズム」(Parsons, 1966＝一九七一：一一四) が投影されているという指摘もある。そして、すでに一度引用しているが、ギリシャ哲学の影響を受けたローマの法システムが「ユニバーサリスティックな原理にしたがって定式化され」(Parsons, 1966＝一九七一：一三一) ていることが指摘されている。これらの議論は、普遍主義 (universalism) —個別主義 (particularism) 軸が近現代社会—前近代社会に対応しているということを指示したものだ。普遍主義—個別主義に関わる言説はほかにも多数あるが、割愛する。第四に、同じく歴史的な中間帝国を論じる中で、イスラムとローマの社会共同体が「原則的には文化—社会共同体に入ることができるすべてのひとびとに拡大可能であった」(Parsons, 1966＝一九七一：一四一) ことから、「アスクリプティブな障害を強調しなかった」(Parsons, 1966＝一九七一：一四一) ということが指摘されている。この記述の前提は、帰属性 (ascription) —業績性 (achievement) の軸において前者が概ね前

近代社会の性質で後者が近現代社会の特徴だということだ。最後に『近代社会の体系』における記述にも触れておく。「普遍主義—個別主義」軸については『社会類型』と同様の記述がみられる。本章でもすでに、産業社会の中心的な特徴が「ユニバーサリスティックな法体系」(Parsons, 1971=一九七七:一一九)だと指摘する言説を引用した。

このように『社会類型』、『近代社会の体系』における初期的パターン変数は概ね **EnfM(P)** 的に使用されるが、**TroP(P)** 的解釈の余地を残す記述もある。前述したローマ法の普遍主義的性格についての記述は、『家族システムの起源』でトッドがローマの家族システムにおける対称性に言及している (Todd, 2011=二〇一六:四八一) ことを踏まえれば、ローマの人類学的基底と結合したパターン変数による **TroP(P)** 的記述だとみなしうる。また、『近代社会の体系』ではキリスト教会の普遍性 (universalism) と封建システムの特異性 (particularism) が対比的に言及されている (Parsons, 1971=一九七七:六一—六二)。『家族システムの起源』などでのトッドの言説を踏まえれば、カトリックのキリスト教は概ね基底 **fne** と結合しており、封建システムは基底 **fs** と関係しているわけだから、前述したパーソンズの記述はパターン変数の「**TroP(P)** 的使用」でありうる。より複雑な議論もある。前述したように『社会類型』では古代中国の官僚制が普遍主義的なものとして取り扱われている。ところがトッドの『家族システムの起源』では、詳細を無視して議論を極めて単純化するならば、古代中国は「秦」以前のものについては基底 **fs**、以後については基底 **fc** と結びつけて議論されている (Todd, 2011=二〇一六:二〇四—二〇七)。そして前掲書ではヨーロッパにおける官僚的価値・国民国家の台頭と基底 **fs** とのつながりが議論されてもいる (Todd, 2011=二〇一六:六二〇—六二一)。つまりパーソンズ=トッド接続のための補完的解釈をするならば、前述した古代中国官僚制の普遍主義は **TroP(T)** 的基底 **fs** (権威主義—不平等主義) の作動としての **TroP(P)** 的普遍主義がパーソンズにおいて **EnfM(P)** 的に誤認されているものと説明できうる。同様の議論は『近代社会の体系』における、プロテスタンティズムの禁欲主義がユニバーサリズムに依拠しているという指摘 (Parsons, 1971=一九七七:一〇六) にもあてはまる。詳細な議論を全く無視するならば、トッドにおいてプロテスタンティズムと結合しているのは **TroP(T)** 的使用としての基底 **fs**—権威主義的で不平等主義—だ^[18]。他方でパーソンズのこのプロテスタンティズムについての記述はパターン変数の「**EnfM(P)** 的使用」だ。つまりここにも「ズレ」がある。この「ズレ」を補って当該接続としての説明を付加するならば、**TroP(T)** 的基底 **fs** の規範—権威主義と不平等主義—が近現代社会の作動としての **TroP(P)** 的な普遍主義を招聘し、それがパーソンズにおいて **EnfM(P)** 的なものとして誤認されているということだ。以上の「**TroP(P)** 的使用」についての議論は、本稿著者がパターン変数の「二重性」問題を指摘した過程を踏まえればトートロジーだが、ここではあえて記述した。

4-7. 規範科学としての接続

本稿ではすでに、松本（一九九七）における「規範科学」—繰り返すが、価値・規範システムそのものを研究—と「説明科学」—同様に、価値・規範システムと行為との関係性を研究—の区別を引用してある（松本、一九九七：四八一四九）。そこで本項では、初期パターン変数と初期人類学的基底との「規範科学」としての接続を試みる。この「接続」の目的は人類学的基底とパターン変数との抽象的な接続モデルを暫定的に創ることだ。ところで、パターン変数と人類学的基底の接続のための「補足」を記述しておく。本稿でこれまで指摘してきたようにパーソンズはパターン変数の「EnfM(P)的使用」と関係した文脈の中で、諸要素の構造主義的結合をしばしば提示する。川越（二〇〇二）などの議論を踏まえたこれまでの記述からわかるように、このことはAGIL図式だけでなく、『社会体系論』、『社会類型』や『近代社会の体系』における初期的パターン変数にも「部分的」・「暗黙裡」に当てはまる。本稿第二章で指摘したが、パターン変数に内在する二項対立図式は構造主義的結合に帰結しうるということだ。本稿で著者が初期パターン変数に着目した経緯からわかるように、以下の接続でパターン変数の「EnfM(P)的使用」が引用されるとき「部分的」・「暗黙裡」にであっても存在するこの構造主義的結合を著者は考慮しない。また繰り返すが、本稿で「EnfM(P)的使用」と「TroP(P)的使用」を定義したプロセスから明らかのように、前者において構造主義的結合を含まない範囲で二項対立図式を考慮するが後者においてこの二項対立図式すら考慮されない。ところで本章で概観した「形成史」からもわかるように、パターン変数と人類学的基底はその「形成史」が大きく異なり、両者の「接続」は簡略化なしでは困難だ。そこで以下の分析では議論を簡略化し、両者の「一次的接続」—明示的で最も優先順位の高い接続—のみを考慮する。なお以下の接続では「アメリカ」や「南米」といった極めて大雑把な「地域」が論じられる。『新ヨーロッパ大全』や『家族システムの起源』における家族社会学としてのトッド人類学の緻密な議論を踏まえれば、このような「荒い」枠組みでパーソンズ＝トッド接続を論じるのは不適切に思われるかもしれない。しかし、パーソンズ社会学はシステム理論として独創性を有するにもかかわらず「地域研究」としては「荒い」ものだし、何より前述したようにここでの接続の目的は人類学的基底とパターン変数との抽象的な接続モデルを暫定的に提示することだ。ゆえに前述した研究目的の枠内である限り、このような経験的地域研究の観点からみて「荒い」議論は許容されるはずだ。なお、前述したように本研究では『第三惑星』と『社会体系論』における「地域」についての認識をほぼ同レベルとみなす。ところでこれまで論じてきたように、以下の接続では前近代社会・近現代社会という二項対立図式が使用される。この二項対立図式はもちろんきわめて「荒い」ものだし、後述する分析が深化するにつれてその限界を露呈する。にもかかわらず本項ではあくまでこの二項対立図式を踏まえて分析を行い、それによって露呈した課題は本項の最後で議論される。最後に、以下の議論ではパターン変数の「TroP(P)的使用」と人類学的基底の「TroP(T)的使用」との接続を「TroP(P-T)接続」などと簡略化して表記することがある。そして同様に簡略化された表記

を、他の概念についても適宜使用することを断っておく。

第一に、人類学的基底における「内婚—外婚制」軸と「個人主義」との関係性についての記述を参照する。以下の接続は「TroP(P)的使用」と「TroP(T)的使用」との接続だ。前述したように『経済幻想』によれば、自由—権威主義軸における権威主義、平等・不平等主義規範の存在そのもの、外婚—内婚制軸における内婚制、が個人主義水準を押し下げる要素だと見做されていた (Todd, 1998=一九九九:四七)。この議論は、「一時的組み合わせ」としてはパターン変数の「自我志向—集合体志向」に対応させることができる。つまり、「前近代社会」における自由—権威主義軸における権威主義、平等・不平等主義規範の存在そのもの、外婚—内婚制軸における内婚制、が「近現代社会」における「作動」としての「集合体志向」に「変換」されるということだ (接続①)。ところが、議論はそう簡単ではない。「個人主義—集合主義」をパターン変数の「自我志向—集合体志向」に対応させることができるという前提で前述した議論を著者は提示した。しかしパターン変数における「諸要素の整理」で取り上げたように、『社会体系論』では「普遍主義—業績性」の「一次的組み合わせ」が「個人主義」(individualistic)に帰結し「普遍主義—帰属性」の「一次的組み合わせ」が「集合主義」(collectivistic)に帰結するとされていた (Parsons, 1951:194=一九七四:一九八)。さらに「個人主義」(individualistic)と「普遍主義—業績性—限定性」の「一次的組み合わせ」が関係しているという指摘もある (Parsons, 1951:190=一九七四:一九四)。そして、「個別主義—帰属性」の「一次的組み合わせ」によって記述できる社会が「集合主義的というよりは個人主義的 (individualistic rather than collectivistic)」 (Parsons, 1951:199=一九七四:二〇二) だという記述もある。これらをどう取り扱うべきだろうか。前述した引用が指示しているのはパターン変数において、例えば「普遍主義—業績性」の「一次的組み合わせ」が「個人主義」と連動しているということだ。この「個人主義 (individualistic)」をパターン変数における「自我志向 (self-orientation)」と同一視すると、パターン変数「形成史」で触れたような「行為理論の関係枠から直接に生じうる基本的な二者択一のすべてをおおう一体系を構成する」 (Parsons&Shils, 1951=一九六〇:一四〇) というパターン変数の定義と矛盾する。「自我志向—集合体志向」のパターン変数が他のパターン変数の従属変数になってしまうからだ。ところが川越 (二〇〇二) なども指摘するように『社会体系論』や『行為の総合理論をめざして』では、「自我志向—集合体志向」のパターン変数は他のパターン変数とその位置づけが明白に区別されている。さらに木村 (二〇一〇) はロッシェの議論 (Rocher, 1974=一九八六) を踏まえて、パターン変数が「自我志向—集合体志向」を除いた四組で構成されていると指摘している (木村、二〇一〇:六)。したがってパーソンズの本来的な文脈とは大きく異なるかもしれないが、ここでの「個人主義—集合主義」—トッドにおけるものやパーソンズの individualistic-collectivistic—をパターン変数「自我志向—集合体志向」に読み替えることができると仮定することに大きな困難は存在しないように思われ

る。このことを踏まえて前述した「接続①」を採択する。そして、「自我志向—集合体志向」が前述したような形で他のパターン変数と関係すると見做しておく。つまり、普遍主義—業績性（—限定性）、個別主義—帰属性の「一次的組み合わせ」が「自我志向」と関係し、普遍主義—帰属性の「一次的組み合わせ」が「集合体指向」と関係すると仮定する（接続①'）。後述する理由から『社会体系論』における「個別主義—業績性」の「一次的組み合わせ」から出発した「旧封建的中国」（Parsons, 1951—一九七四：一九九）についての記述をここでは考慮しない。なお繰り返すがこれまでの議論は「TroP(P)的使用」と「TroP(T)的使用」との接続だから、例えば業績性—帰属性において業績性のほうが近代的、というような EnfM(P)的意味付けが存在しないことに留意されたい。

第二に、パターン変数と人類学的基底におけるドイツについての記述を参照する。本稿 4-5.で指摘したように、『第三惑星』ではドイツを代表するとされた基底 fs（権威主義—不平等主義）と近現代社会におけるイデオロギー・作動との TroP(T)的関係性が議論されていた。なお既に触れたように『経済幻想』において基底 fs [内] が基底 fs と区別されているが、ここでもドイツを代表するのはあくまで基底 fs だとされている（Todd, 1998—一九九九：一〇四—一〇七）ことに留意されたい。他方で本稿 4-6.で指摘したように、『社会体系論』にはドイツに関わる TroP(P)的記述が存在する。これらの記述の中で第一に注目すべきは、『社会体系論』において「帰属性」が「地位階統」と一次的に結びつき「無限定性」が「権威主義」と一次的に結びついているとするものだ。他方で前述したように『第三惑星』では、基底 fs の近現代社会における作動として権威主義・縦型システムが取り上げられていた。したがって、基底 fs（権威—不平等主義）の「近現代社会」のなかでの「作動」がパターン変数「帰属性—無限定性」の「一次的組み合わせ」として記述できるとみなせる（接続②）。またこれまでの記述からこの接続を、人類学的基底の側での平等—不平等主義軸における「不平等主義」の近現代社会における作動が一次的には「帰属性」であり、自由—権威主義軸における「権威主義」の作動が一次的には「無限定性」だと分解することも可能に思える。ところで「形成史」で指摘したように初期パターン変数と初期人類学的基底はともに二項対立図式の組み合わせだから、この接続を「逆もまた然り」とみなしてよいのだろうか。つまり安易に、「平等主義」の作動が「業績性」であり「自由主義」の作動が「限定性」だと考えてよいのだろうか。このことを考察するために、次に「アメリカ社会」を軸とした接続を検討する。また前述した「接続②」の「分解」の妥当性も、この検討を通して考察される。なおここではパターン変数の側におけるドイツの「普遍主義」が無視されているが、このことについても後述する。ところで何度も繰り返すが、これは TroP(P)的使用と TroP(T)的使用との接続だから、例えばこの接続における「権威主義」は前近代的であることを意味しない。

第三に、パターン変数と人類学的基底におけるアメリカについての記述を参照する。

アメリカ社会についての記述を軸とした接続は、すでにパターン変数の「二重性」問題について指摘した本稿 4-4. でその暫定版を指示している。ここではより詳細に検討する。ここでは本稿 4-5. において『第三惑星』から引用した基底 **fna** についての議論を参照する。トッドにおいてアメリカ社会を代表するとされるのは基底 **fna** だ。同様に本稿 4-6. で『社会体系論』から引用した「普遍主義—業績性」の「一次的組み合わせ」についての記述も参照する。なお前述したように、この記述はアメリカ社会の記述と必ずしも同一視されていないが、説明の例としてアメリカが多用されていることや『近代社会の体系』の記述を踏まえて、これを「TroP(P)的使用」としてのアメリカ社会論とみなした。

「普遍主義—業績性—限定性」の「一次的組み合わせ」と「個人主義」との関係性についてはすでに検討したのでここでは考慮しない。またここでおもに検討されるのは基底 **fna** であり、基底 **fne** については後述する。上述したパターン変数についての記述は、パーソンズの意図においては基本的にその「EnfM(P)的使用」だ。ところがこれまで議論してきたように、トッド人類学と組み合わせることでこれらの記述を本稿で定義する「TroP(P)的使用」として再定義できる。パターン変数についての記述で、「普遍主義—業績性」の「一次的組み合わせ」が産業社会の特徴だと指摘されていた (Parsons, 1951 = 一九七四 : 一八九)。その一方で人類学的基底の側では基底 **fna** (自由主義—平等への無関心) の「近現代社会」における作動として、産業社会の要請する労働者の流動性を肯定する価値システムに転化することが指摘されていた。これらの記述を TroP (P-T) 接続とみなし、基底 **fna** の「近現代社会」における「作動」の一次的記述が普遍主義—業績性の「一次的組み合わせ」でありこれがしばしば産業社会それ自体が要請する「作動」と混同されている (接続③)、と指摘できる。上述した『社会体系論』からの引用によって、この「接続③」に限定性—感情中立性を加えることもできる。ところでドイツに関する議論で本稿著者は「接続②」の分解可能性を示唆し、人類学的基底の側での平等—不平等主義軸における「不平等主義」の近現代社会における「作動」が一次的には「帰属性」であり自由—権威主義軸における「権威主義」の作動が一次的には「無限定性」だと記述した。少なくともこれまでの議論からは、人類学的基底の「自由—権威主義」軸がパターン変数の「限定—無限定性」軸と一次的対応関係にある (接続③') とみなしても矛盾は生じない。ところが人類学的基底の「平等—不平等主義」軸と「業績—帰属性」との対応関係については、「帰属性」と対応するのは「不平等主義」だが「業績性」と対応するのは「平等への無関心」であり「平等主義」ではない。後者については基底 **fne** についての考察で改めて取り上げる。ところで『社会体系論』では、パターン変数の「普遍主義」がアメリカとドイツに共通したものとして提示された。他方で人類学的基底の二項対立図式においてアメリカ (自由—平等への無関心) とドイツ (権威—不平等主義) に一次的共通項はない。このことから本章では、ドイツにおける「普遍主義」を EnfM(P) 的なものとみなし、いったん TroP (P-T) 接続から除外する。ただしこのことは後述する議論によって修正される。

第四に、パターン変数と人類学的基底における「南米」についての記述を参照する。まず人類学的基底の側についてだが、『第三惑星』を踏まえて本稿ではこの「南米」を基底 **fne** が代表していると仮定し、本稿 4-5.において『第三惑星』から引用した基底 **fne** についての議論を参照する。他方でパターン変数の側では本稿 4-6.で引用した『社会体系論』における「南米」についての記述を参照する。「南米」という共通項を軸として、まず基底 **fne** の「近現代社会」における「作動」を「個別主義—帰属性」の「一次的組み合わせ」として記述できると仮定しておく（接続④）。ところが、議論はそう単純ではない。まず人類学的基底の側において、基底 **fna**（自由—平等への無関心）と基底 **fne**（自由—平等主義）は「自由主義」という共通項を有している。他方で、「接続③」—基底 **fna** の「近現代社会」における「作動」の一次的記述が普遍主義—業績性の「一次的組み合わせ」と「接続④」—基底 **fne** の「近現代社会」における「作動」を「個別主義—帰属性」の「一次的組み合わせ」として記述—には、パターン変数の側での共通項がない。この点には二つの解決策がある。一つは、「自由—権威主義」軸がパターン変数の「限定—無限定性」軸と一次的対応関係にあるという前述した仮定を採用して、「接続④」に「限定性」を付加することだ。もう一つは、両者の分析的諸要素どうしの厳密な対応関係の整理を放棄することだ。これまでの議論からすれば、前者の解決策は現時点では矛盾をきたしていないため、ここでは前者の解決策を暫定的に採用しておく。次に、「平等—不平等主義」軸と「業績—帰属性」との対応関係についての議論を再び取り上げる。基底 **fna** について検討するなかで触れたように、これまでの議論から「帰属性」と対応するのは「不平等主義」だが「業績性」と対応するのは「平等への無関心」であり「平等主義」ではない、という暫定的な結論が導出された。ところで基底 **fne** と関係する議論を踏まえれば、自由—平等主義で特徴づけられる基底 **fne** の「近現代社会」における「作動」が「個別主義—帰属性」の「一次的組み合わせ」で記述できるとされるわけだから、「帰属性」が「平等主義」と対応関係にあるということになる。これらの矛盾した議論をどう整理すべきだろうか。ここで重要なのが、これまで触れてきた人類学的基底における「基底とその作動との逆転現象の例」だ。本稿 4-5.で指摘したように『第三惑星』における基底 **fna** と基底 **fne** との記述では、基底 **fne** の平等主義規範が実践としての男女の不平等に帰結すること、基底 **fna** で代表されるアメリカ合衆国において「平等への無関心」が「普遍主義的实践」に帰着していること、が指摘されている。したがって前者を踏まえるならば基底 **fne** について、「前近代社会」の規範としての「平等主義」が「近現代社会」における「作動」としての「不平等主義」に帰着しそれがパターン変数「帰属性」によって一次的に記述される、という接続が成立する。また後者から、基底 **fna** における「前近代社会」の規範として「平等への無関心」が実践としての「平等主義」—前述した「普遍的实践」のことに帰着しそれがパターン変数「業績性」によって一次的に記述できる、という接続もまた成立する。以上から、パターン変数「業績性—帰属性」は実践としての「平等主義—不平等主義」と一次的に接続し人類

学的基底との接続は二次的だ、と指摘できる（接続④'）。ただし基底 fs の例で両者の接続が一次的なものであることからわかるように、人類学的基底の側に「基底とその作動との逆転現象」がなければ両者の接続は疑似的に一次的なものとなる。

ところで本稿 4・5.で触れたように、『近代社会の体系』ではキリスト教会の普遍性（universalism）と封建システムの特殊性（particularism）が対比的に言及されている（Parsons, 1971＝一九七七：六一―六二）。そして『家族システムの起源』などでのトッドの言説を踏まえつつその詳細を無視すれば、カトリックのキリスト教は概ね基底 fne と結合しており、封建システムは基底 fs と関係しているわけだから、前述したパーソンズの記述はパターン変数の「TroP(P)的使用」でありうる、と指摘しておいた。これらの記述は、本稿の議論と一見矛盾している。本稿では「接続④」として、基底 fne の「近現代社会」における「作動」を「個別主義―帰属性」の「一次的組み合わせ」として記述できると仮定した。またこれまでの議論では基底 fs の「近現代社会」における「作動」から「普遍主義」を除外してあるが、後述する議論で基底 fs の「作動」としての TroP(P)的「普遍主義」を再提示している。この矛盾について、本稿では以下のように指摘するだけで充分だ。つまり、例えば「接続④」におけるパターン変数の記述はあくまで「近現代社会」に関わるものだ。それに対して前述した『近代社会の体系』からの引用は、あくまで「中世社会」（Parsons, 1971＝一九七七：六二）にかかわるものだ。したがって、基底 fne（自由―平等主義）の「前近代社会」における「作動」はパターン変数「普遍主義」によって記述できると暫定的に仮定しておく（接続④'）。また、基底 fs（権威―不平等主義）の「前近代社会」における「作動」はパターン変数「個別主義」によって記述できると暫定的に仮定しておく。後者については改めて触れる。

第五に、パターン変数と人類学的基底における「中国」についての記述を参照する。本稿 4・6.で引用した『社会体系論』における「中国」についての議論を使用する。これらの記述には、一つ興味深い点がある。それは「旧封建的中国」（Parsons, 1951＝一九七四：一九九）の記述にパターン変数「業績性」が使用されている点だ。これまでの本稿の議論からわかるように、パターン変数「業績性」はしばしばその「EnfM(P)的使用」において「近現代社会」と結合している。ところがここでは「旧封建的中国」（Parsons, 1951＝一九七四：一九九）というパーソンズの文脈において「近現代社会」と程遠い社会の記述に「業績性」が用いられている。このことをパターン変数の「TroP(P)的使用」の萌芽とみなしてよいのだろうか。このことを考察するために、トッド人類学の側での「旧封建的中国」（Parsons, 1951＝一九七四：一九九）の取り扱いについて触れておく。すでに指摘したように、詳細な議論を無視するならば、『家族システムの起源』では古代中国が「秦」以前のものについては基底 fs、以後については基底 fc と結びつけて議論されている（Todd, 2011＝二〇一六：二〇四―二〇七）。そして前掲書で、ヨーロッパにおける官僚的価値・国民国家の台頭と基底 fs とのつながりが議論されてい

る (Todd, 2011=二〇一六:六二〇—六二一) こともすでに指摘した。これらの引用を踏まえて本稿では『社会類型』で古代中国の官僚制が普遍主義的なものとして取り扱われていることに関して、「古代中国官僚制の普遍主義は TroP(T)的基底 fs (権威主義—不平等主義)の作動としての TroP(P)的普遍主義がパーソンズにおいて EnfM(P)的に誤認されているものだ」、という仮説を提示した。ところでこのような『社会類型』に対して、『社会体系論』では既述のように「個別主義—業績性」の「一次的組み合わせ」で「旧封建的中国」(Parsons, 1951=一九七四:一九九)が記述される。つまり「普遍主義—個別主義」軸に関わる「中国」の取り扱いについて、パーソンズ自身のなかに「ゆらぎ」があるように感じられる。このことはパーソンズ=トッド接続という文脈の中では、前述したようにトッドにおいて中国が基底 fs と基底 fc の両方で記述されていることと対応するように思われる。つまりパーソンズの記述に「ゆらぎ」が生じるのは、ある面では中国の人類学的基底の変動に対応するものとみなせるのではないか。そういう意味でこの「ゆらぎ」自体は TroP(P)的でありうる。したがって「中国」を媒介として TroP(P-T)接続を行うことは困難であり、前述した「旧封建的中国」(Parsons, 1951=一九七四:一九九)の記述にパターン変数「業績性」が使用されている点を本稿の分析に活用することはできない。逆に言えば、「中国」に関するパターン変数での記述が本稿の分析と矛盾していたとしても、そのことは本稿の分析の妥当性に影響を及ぼさない。ところでこれまでの議論を踏まえて、ドイツについての TroP (P-T) 接続に若干の修正を加える。アメリカについての TroP (P-T) 接続で触れたように、ドイツにおける「普遍主義」を EnfM(P)的なものとみなし、いったん TroP (P-T) 接続から除外した。ところが前述したように本稿著者は、「古代中国官僚制の普遍主義は TroP(T)的基底 fs (権威主義—不平等主義)の作動としての TroP(P)的普遍主義がパーソンズにおいて EnfM(P)的に誤認されているものだ」という仮説を提示した。また前述した『近代社会の体系』におけるプロテスタンティズムの禁欲主義がユニバーサリズムに依拠しているという指摘 (Parsons, 1971=一九七七:一〇六)についても同様に、「TroP(T)的基底 fs の規範—権威主義と不平等主義—が「近現代社会」の「作動」としての TroP(P)的な普遍主義を招聘し、それがパーソンズにおいて EnfM(P)的なものとして誤認されている」という説明を本稿 4-6.で提示した。『社会体系論』で記述されたドイツの「普遍主義」は EnfM(P)的なものなのだろうか。それとも TroP(T)的基底 fs の近現代社会における作動が TroP(P)的「普遍主義」を招聘したのだろうか。後者はトッドについての議論で経済的平等主義や女性の地位向上について言及した、基底とその作動との逆転現象ということだ。本稿ではこの二つの解釈を併記しておく(接続②')。なお、本稿ではすでに『近代社会の体系』における「封建性」についての議論と関連させて基底 fs (権威—不平等主義)の「前近代社会」における「作動」はパターン変数「個別主義」によって記述できると暫定的に仮定しておいた。ところが他方で前述したように、「古代中国官僚制の普遍主義は TroP(T)的基底 fs (権威主義—不平等主義)の作動としての

TroP(P)的普遍主義がパーソンズにおいて EnfM(P)的に誤認されているものだ」という仮説も本稿では提示した。以上から、「前近代社会」における基底 fs の作動は、「封建性」についてはパターン変数「個別主義」によって一次的に記述でき「官僚制」についてはパターン変数「普遍主義」によって一次的に記述できると仮定しておく(接続②'')。

第六に、TroP (P-T) 接続の最後として、パーソンズにおけるソ連についての言及を参照する。木村雅裕 (二〇一〇b) は「ソ連の発展を評価した論述にあるように理論的にも、またソヴェト社会学界との積極的な交流に見られるように行動的にも、アメリカを第一としながらも同時にソ連の確かな存在を認め、ソ連の改革を促すことによって民主化や自由化が進み、ソ連が収斂して来るような路線を探ってきた」(木村、二〇一〇b: 三二) とパーソンズにおける「ソ連論」を総括している。その過程で木村 (二〇一〇b) が検討したのは、『社会体系論』の第XI章、『近代社会に体系』におけるソ連論、そして“Communism and the West: Sociology of the Conflict” (Parsons, 1969) だった。なお人類学的基底の側では本稿 4・5.で引用した『第三惑星』における基底 fc についての議論を参照する。

まず『近代社会の体系』でのソ連についての記述を検討する。前述したように木村 (二〇一〇b) がこのことについて既に検討しているが、本稿では『近代社会の体系』から直接引用する。木村 (二〇一〇b) もまた指摘するように、『近代社会の体系』における「ソ連論」はその近代化プロセスに焦点が当てられたものだ。ここでもまた本稿で指摘した「パターン変数の初期的使用」に基づく記述がある。パーソンズによれば、ソ連における「産業社会化は、伝統的な地方郷党主義やパティキュラリズムを大きく除去してしまった」(Parsons, 1971=一九七七: 一九一) のでありまた、「ソヴェト制度は、普通教育の普及と確立された信念の大衆教化を通じて、ユニバーサリスティックな尺度を強調し、また、全国民に完全な市民権を与えるように努力している」(Parsons, 1971=一九七七: 一九一)。これらの記述は本研究の文脈においては、パターン変数の「EnfM(P)的使用」に他ならない。他方でパーソンズはソ連における近代化プロセスを肯定的に捉えつつそれが「はるかにヒエラルキー的で、かつ官僚的で権威主義的な社会構造の中に根づいたもの」(Parsons, 1971=一九七七: 一九四) だと指摘している。これらはパターン変数によって記述されていない。しかし本稿ではすでに「接続②'」、「接続③'」として「官僚制」、「権威主義」についての TroP (P-T) 接続を提示してある。「接続②'」によれば「前近代社会の内部」において「官僚制」は「基底 fs—普遍主義」という接続と関係するとされ、「接続③'」によれば「前近代社会」における規範としての「権威主義」は「近現代社会」において「無限定性」によって一次的に表現される。本稿で定義する TroP (P-T) 接続が関係するのだから、前述したパーソンズの記述は TroP(P)的でありうる。ところが、トッドの『第三惑星』でソ連を代表するとされていたのは基底 fc だ。「接続②'」は基底 fs に関するものだから、安易に「ソ連論」に転用することはできない。他方で基底 fc は初期トッドが構

築したル=プレイ由来の二項対立図式において権威—平等主義によって記述されているから、「接続③」を流用することは可能だ。ただし本研究ではこのような形の「流用」をできるだけ避けてきたため、「接続③」の使用をいったん保留する。なお“Communism and the West: Sociology of the Conflict”についても言及しておく。この論文におけるパーソンズの言説は極めて **EnfM(P)** 的だ。そのことを端的に示す引用として、米ソ冷戦に関して「世界の目下の主要な両極化が、二つの深く、異国的・文化的・社会的な動向の衝突ではなく、二つの非常に密接に関係している動向間の一闘争であるということである」(Parsons, 1969=一九七二：四一一) というパーソンズの指摘を提示しておく。木村(二〇一〇b)が指摘するようにこの論文でのパーソンズのソ連認識は西洋諸国との「共存と収斂」(木村、二〇一〇b：二九)だ。

『社会体系論』における「ソ連論」は、まず第V章にみられる。ここで議論されているのはソ連の産業化に伴って「金銭的報酬を含めて便益も報酬も著しく分化してきた」(Parsons, 1951=一九七四：一六六)ということであり、また「職業的に分化した産業体系と強く連帯している親族との結合」(Parsons, 1951=一九七四：一六七)が「成層体系」(Parsons, 1951=一九七四：一六七)を構成するということが「ソビエト連邦の歴史によって十分に確証されている」(Parsons, 1951=一九七四：一六七)ということだ。前者はまったく **EnfM(P)** 的な議論だ。後者もパーソンズの文脈では **EnfM(P)** 的なものだ。ただし『家族システムの起源』などでトッドが共同体家族システムを最も稠密度の高い家族システムだと見做している(Todd, 2011=二〇一六：一〇一)ことを踏まえれば、後者の議論を **EnfM(P)** 的なもの—「職業的に分化した産業体系」(Parsons, 1951=一九七四：一六七)—と **TroP(P)** 的なもの—「親族との結合」(Parsons, 1951=一九七四：一六七)—とに区分する余地はある。木村(二〇一〇b)が指摘するように『社会体系論』の第XI章にはより包括的な「ソ連論」がある。「革命運動の適用的変容」(Parsons, 1951=一九七四：五一六)についてのものだ。木村(二〇一〇b)もまた指摘したようにここでパーソンズは「産業化が普遍主義的—帰属性パターンから普遍主義的—業績性へと、その強調を移行させている」(Parsons, 1951=一九七四：五二三)と指摘した。このパターン変数の使用はその文脈において **EnfM(P)** 的なものだ。ただしここでソ連において産業化以前の焦点とされる「普遍主義—帰属性」の「一次的組み合わせ」を **TroP(P)** 的なものと捉える余地はある。パーソンズの記述を修正して、ソ連社会を「**EnfM(P)** 的な普遍主義—業績性の一次的組み合わせ」と「**TroP(P)** 的な普遍主義—帰属性の一次的組み合わせ」との混合物とみなす解釈だ。本研究では既に「接続①」、「接続②」、「接続③」に基づいて基底 **fs** の「近現代社会」における「作動」を「帰属性—無限定性」の「一次的組み合わせ」で記述できると指摘し、そこに「普遍主義」を加える余地があると指摘した。この解釈は基底 **fc** を、基底 **fs** を基本としつついっそう「普遍主義的」なものとみなすものだ。ただし本稿第二章でパーソンズの「構造主義」からの離脱の兆候として『近代社会の体系』のなかで「西欧」内部の差異をパ

ーソンズが論じたことを取り上げたにもかかわらず、パーソンズにはトッドと異なりドイツとソ連の TroP(P) 的価値・規範を積極的に区別した形跡がない。この解釈を受け入れてよいのだろうか。

『第三惑星』の側からも接続を構築してみよう。初期人類学的基底の二項対立図式において基底 **fc** は権威—平等主義で記述される。そこで一度保留した「接続③'」の使用を認め、基底 **fc** の一次的記述として「無限定性」を採用する。これに対して「平等主義」は厄介な問題を招聘する。上述した『第三惑星』の議論を見ればわかるように、トッドは「前近代社会」の平等主義規範を「不平等な社会実践」(Todd, 1983=二〇〇八:一一八) と結びつけている。ところが基底 **fc** が「近現代社会」における「作動」として産出した「共産主義」はトッドがいうように「イデオロギーの普遍主義」(Todd, 1983=二〇〇八:一一〇) であるだけでなく、平等主義実践ではないのだろうか。この点については前述したようにパーソンズが『社会体系論』においてソ連について「金銭的報酬を含めて便益も報酬も著しく分化してきた」(Parsons, 1951=一九七四:一六六) と指摘するように、その平等主義実践としての側面を相対化している。本研究でこの複雑な問題を深く論及することはできないが、前述した「不平等な社会実践」(Todd, 1983=二〇〇八:一一八) をより限定的に捉える必要性は感じられる。そこで本稿では、「接続④」、「接続④'」を採用し基底 **fc** の記述に「帰属性」を採用しつつここでの記述対象からイデオロギーを排除する。この限定は基底 **fs**、**fna**、**fne** における「業績性—帰属性」についての議論にも適用する(接続④'')。また、ソ連社会を「EnfM(P) 的な普遍主義—業績性の一次的組み合わせ」と「TroP(P) 的な普遍主義—帰属性の一次的組み合わせ」の「混合物」とみなす前述したパーソンズに関する解釈と「家族の平等主義とイデオロギーの普遍主義との関係」(Todd, 1983=二〇〇八:一一〇) を強調するトッドの言説とを採用して、基底 **fc** の記述に「普遍主義」を採用する。以上から基底 **fc** の記述を暫定的に「普遍主義—帰属性—無限定性」としておく。

基底 **fc** についてのこれまでの議論は、本研究で既に構築した接続の二次的流用を含む不適切なものだ。したがって本稿ではこの接続に番号を与えない。本稿でこの接続を提示するのはあくまで参考のためだ。ところが基底 **fc** についてのこれまでの議論は前述した基底 **fne** についての議論に重大な影響を及ぼす。本稿では既に「接続④」として基底 **fne** の近現代社会における「作動」を「個別主義—帰属性」で記述した。ところが「家族の平等主義とイデオロギーの普遍主義との関係」(Todd, 1983=二〇〇八:一一〇) という前述したトッドの言説は基底 **fne** にも適用されるはずだ。これらの議論には矛盾があるように思える。この疑問に対する回答のひとつは「社会実践」(Todd, 1983=二〇〇八:一一八) とイデオロギーとの区別だ。基底 **fne** の記述として「個別主義」を採用した根拠の一つである『社会体系論』の記述はここでいう「社会実践」(Todd, 1983=二〇〇八:一一八) に目が向けられている。それに対して前述したトッドの言説(Todd, 1983=二〇〇八:一一〇) はもちろんイデオロギーについてのものだ。つまり「近現

代社会」における「作動」がイデオロギーを排除する概念としての「社会实践」(Todd, 1983=二〇〇八：一一八)に関するものとイデオロギーに関するものとの異なりうるという仮定を「接続④' ' '」と同様に「普遍主義—個別主義」軸について設定できる〔19〕。すなわち、『社会体系論』に由来する基底 fs、fna、fne での「普遍主義—個別主義」を前述した意味での「社会实践」(Todd, 1983=二〇〇八：一一八)についてのものと見なし、基底 fc におけるそれをイデオロギーについてのものとみなす(接続⑦)。

最後に、パターン変数の「EnfM(P)的使用」と人類学的基底の「EnfM(T)的応用」に関わる議論から、当該接続に有用な要素を抽出する。人類学的基底についてはすでに以下のことに言及した。1. トッドが明示的にそう主張しているわけではないが文化的テイクオフとの相性が良い基底は、文化的テイクオフの結果生じる社会が要請する機能要件を、意図せざる結果としてより多く含むうる。このことは経済的テイクオフにも当てはまる。ただしトッドにおいて文化的テイクオフと相性の良い基底と、経済的テイクオフと相性の良い基底とに「ズレ」があり、前者は基底 fs だが後者は基底 fna だ。なお本稿 4-5. で前述した理由から、ここでの「EnfM(T)的応用」に「内婚—外婚制」軸は関係しない。2. トッドにおける「移行期危機」について、「移行期危機」とその結果として活性化する「イデオロギー」の形態とが独立しているとされる一方で (TroP(T)的使用)、人類学的基底によってそれとの相性が左右される文化的テイクオフが早期に進展した社会で「移行期危機」はより早期に生じるとされ、人類学的基底と産業社会の機能要件との差異が大きくなるほど移行期危機が大規模になりうるとされている (EnfM(T)的応用)。またこれらの議論を踏まえれば、前述した『第三惑星』における人類学的基底内部の矛盾の発露についての議論は、人類学的基底の「TroP(T)的使用」—基底そのものの性質—と「EnfM(T)的応用」—基底の性質の暴力化—との「混合物」だ。

同様にパターン変数の「EnfM(P)的使用」にかかわる議論を要約しておく。本稿 4-6. において、『社会類型』や『近代社会の体系』における AGIL 図式としてではなく初期の二項対立図式としてパターン変数が EnfM(P)的に使用されていると指摘し、その例を引用した。これらの記述を簡単に要約するならば、「限定性—無限定性」軸において「無限定性」、「普遍主義—個別主義」軸において「個別主義」、「業績性—帰属性」軸において「帰属性」が、本稿でこれまで使用してきた近現代社会・前近代社会の二項対立図式を踏まえれば「前近代社会」の側を指示しているということだ。ただし上述した引用の中でも、オーストラリア原住民が「性を含んだスペシフィックな親族の地位にしたがってスペシフィックな技術的—経済的機能を遂行」(Parsons, 1966=一九七一：五五)しているという指摘、古代中国における官僚制が普遍主義的だという指摘 (Parsons, 1966=一九七一：一一三)、はこの枠組みに当てはまらない。後者についてはすでに検討してある。本稿 4-4. でもパターン変数の「二重性問題」を提示するプロセスの中で、『社会体系論』におけるパターン変数の「EnfM(P)的使用」の例を提示しておいた。これらについては以下で再び引用しておく。本稿 4-4. ですでに指摘したように前者の引用

は、前近代的な「無文字社会」（Parsons, 1951＝一九七四：一八一）に多様な構造分化がみられるというものだ。いうまでもなくこの引用の前提は、「個別主義—無限定性—帰属性」の「一次的組み合わせ」で記述される「役割」が「前近代的」ということだ。それに対して後者の引用は、「近現代社会」の側であるはずの産業社会が「普遍主義—限定性—感情中立的性—業績性」の「一次的組み合わせ」で記述できるということだ。

「人類学的研究からの膨大な証拠が示しているように、これらの帰属的焦点の優位と帰属的焦点を中心として編成される主として個別主義的—無限定的な役割パターンを突破することなしに、構造的変異だけではなく、さまざまな方向への構造的発達の、広範な多様性がみられよう。」（Parsons, 1951＝一九七四：一八一）

「近代的なタイプの「産業的」職業構造の諸問題の若干を論議することにしよう。その主要な特性は、普遍主義・限定性・感情中立的な・業績性に指向した諸役割の体系である。」（Parsons, 1951＝一九七四：一八三）

パターン変数の「EnfM(P)的使用」と人類学的基底の「EnfM(T)的応用」にかかわるこれらの記述から何が言えるだろうか。ヒントになるのは、EnfM(T)的応用の側での文化的テイクオフ・経済的テイクオフについての議論だ。繰り返すが少なくとも本稿著者が解釈する限りトッド人類学を踏まえれば、文化的テイクオフとの相性が良い基底が文化的テイクオフの結果生じる社会が要請する機能要件を意図せざる結果としてより多く含みうる、とみなせる。このことは経済的テイクオフにも当てはまる。そしてトッドにおいて文化的テイクオフと相性の良い基底と、経済的テイクオフと相性の良い基底とに「ズレ」があり、前者は基底 fs だが後者は基底 fna だ。このことをこれまで議論してきた TroP (P-T) 接続と組み合わせ、基底 fs（権威—不平等主義）の「近現代社会」の「作動」としてのパターン変数「帰属性—無限定性」が文化的テイクオフの結果生じる社会が要請する機能要件の記述だと仮定しておく（接続⑤）。この議論に、前述したドイツにおける「普遍主義」の二つの解釈—EnfM(P)的か TroP(P)的か—のうちの後者を採用して、「普遍主義」を加えることも可能だ。これは『世界の幼少期』や『家族システムの起源』などを踏まえて平たく言えば、「近現代社会」が存続し続けるにあたって不可欠な「子弟の高い教育水準」を維持するために、特にある程度の「権威主義」が必要ということだ。ただし本稿第二章で触れたように文化的テイクオフは「伝搬」を伴うとされており、前述した「文化的テイクオフの結果生じる社会が要請する機能要件」を多く備えた基底がそれを早期に生じさせるとは限らないことに留意されたい。またこれまで議論してきたように『世界の幼少期』において文化的テイクオフはあらゆる社会に普遍的なものだとされていることにも留意されたい（Todd, 1984＝二〇〇八：三一七、三四〇、三九三）。つまりトッドの文脈においては、前述した「文化的テイクオフの結

果生じる社会が要請する機能要件」をほとんど備えていない社会であっても近隣に文化的テイクオフが進展した社会があれば、早期に文化的テイクオフを生じさせる。前述したようにこのことは経済的テイクオフにも適用できる。したがって同様に、基底 **fna**（自由—平等への無関心）の「近現代社会」における「作動」としてのパターン変数「普遍主義—業績性—限定性（—感情中立性）」が経済的テイクオフの結果生じる産業社会の機能要件の記述だと仮定できる（接続⑤'）。この「接続⑤」と「接続⑤'」を踏まえて以下のことが言える。つまり、とくに『社会類型』、『近代社会の体系』などで強調してきたパーソンズにおける「近代性」（Parsons, 1971=一九七七：一三一）は、実際には基底 **fs** の「作動」としての「（普遍主義）—帰属性—無限定性」と基底 **fna** の「作動」としての「普遍主義—業績性—限定性（—感情中立性）」との「混合物」だ（接続⑤'）。なおこのことは、「近代性」（Parsons, 1971=一九七七：一三一）それ自体が基底 **fna** と基底 **fs** の両者の「作動」に由来するということと、「近代性」（Parsons, 1971=一九七七：一三一）が要請する機能要件が基底 **fna** と基底 **fs** の「作動」に類似しているということ、の両方を併せ持つ。これまでの議論からわかるように、ここでは後者の側面を強く捉えている。したがって「接続⑤」、「接続⑤'」、「接続⑤''」は一次的に **EnfM** (P-T) 接続であり二次的に **TroP** (P-T) 接続だ。トッド人類学が提供した「近現代社会」のこの「複雑さ」^[20]をパーソンズが明示的に把握していないため、当該接続を踏まえれば例えば『近代社会の体系』における「官僚制」についての議論に修正を加えることができる。松岡（一九九八）からもわかることだが、パーソンズは前掲書で「プロシアは、制度上、非常に能率の高い集合組織〔官僚組織〕を展開させた先駆者となったが、この組織こそ、その時以来、近代社会のすべての機能分野を通じて広く普及した一般的な組織手段であった」（Parsons, 1971=一九七七：一一三）と指摘している。これまた松岡（一九九八）からもわかることだが、他方でパーソンズは前掲書において、「こうして現代の「官僚組織」の多くは、「カレジュアル(collegial)」〔すなわち、平等におのおのの役職に従う専門家集団〕的類型の方向にむいてゆくことになった。この「カレジュアル」類型は、官僚組織を協同的組織の方向に修正するものであるが、当人の専門職業にもとづく役割によってその組織のメンバーとなる」（Parsons, 1971=一九七七：一六〇）と指摘している。これらの記述は、近代化とリンクした官僚制の出現以後の「近現代社会」の展開として、「アソシエーション」（Parsons, 1971=一九七七：一四八）が重要性を帯びることを指摘したものだ。ところでパーソンズのいう「近代性」（Parsons, 1971=一九七七：一三一）の「複雑さ」が前述した議論で確認されたのちに、「官僚制の出現の後に近代化の進展とともに共同的組織の重要性が増す」というパーソンズが描いたストーリーを近代化プロセスに内在する性質だけで説明してよいのだろうか。『第三惑星』でトッドが二〇世紀社会科学における個人主義の減衰をドイツ（基底 **fs**）とロシア（基底 **fc**）の台頭で説明した（Todd, 1983=二〇〇八：一六五）ように、「近代性」（Parsons, 1971=一九七七：

一三一) 内部での基底 fna 的要素と基底 fs 的要素の葛藤から説明できうるのではない。だとすればその「葛藤」の勝敗に関係するのは価値・規範システムのまわりで展開している「環境」ではないか。このような議論は重要だが、本研究以後の課題としたい。

最後になったが、トッドの「移行期危機」についての議論も参照しておく。本稿 4-5. で前述したように、「移行期危機」とその結果として活性化するイデオロギー形態が独立しているとされている点で (Todd, 1984=二〇〇八:四五九) ここでの人類学的基底は TroP(T)的に使用されている。他方で人類学的基底によってそれとの相性が左右される文化的テイクオフが早期に進展した社会で「移行期危機」はより早期に生じるとされる (Todd, 1984=二〇〇八:四五四)、人類学的基底の性質と「識字化に由来する個人主義」(Todd, 2002=二〇〇三:八三) とに差異がある場合に「移行期危機」がより大規模になりうるとされている (Todd, 2002=二〇〇三:八三—八四)、という点でここでの人類学的基底は EnfM(T)的に応用されてもいる。そしてこれらの議論を踏まえれば、前述した『第三惑星』における人類学的基底内部の矛盾の発露についての議論は、人類学的基底の「TroP(T)的使用」—基底そのものの性質—と「EnfM(T)的応用」—基底の性質の暴力化—との「混合物」だ、とも指摘した。パーソンズ社会学の側にもこの「移行期危機」と関係する議論がある。本稿 4-4. ではすでに、『社会体系論』におけるソ連での「機能的必要条件」と「ユートピア的イデオロギー」の対立についての記述を溝部 (二〇一一:三三) が紹介していることを出発点として、『社会体系論』における「緊張」についての議論を「移行期危機」と関係させて取り扱った。その例として、『社会体系論』においてドイツの「内部的緊張の激烈さ」(Parsons, 1951=一九七四:一九八) が指摘され、その原因が無限定性と結びついた強度の政治主義と普遍主義の組み合わせだとみなされている (Parsons, 1951=一九七四:一九七—一九八) ことを提示した。そしてこの議論について、このパーソンズの言説も本稿序論で触れたトッド人類学の言説を踏まえれば、文化的テイクオフが生み出した「移行期危機」そのもの(「移行期危機」の存在自体は普遍的)と、ドイツの人類学的基底と「識字化に由来する個人主義」(Todd, 2002=二〇〇三:八三) とのギャップが生み出す緊張(「移行期危機」の規模と関係)、との「混合物」だ、と指摘した。これらの議論と、「接続①」、「接続⑤」、および「接続①」と関連した「自我志向—集合体志向」と他のパターン変数との関係性についての議論から以下のことが言える。すなわち、文化的テイクオフおよびそれに随伴する「移行期危機」は文化的テイクオフの結果生じる社会が要請する機能要件の記述としてのパターン変数「(普遍主義)—帰属性—無限定性」=「人類学的基底の側では疑似的に基底 fs 」に近い基底ほど内発的に(「伝搬」を考慮しなければ)生じさせやすいが、その結果として生じる「移行期危機」が大規模になりやすいかどうかは「個人主義」とかわるパターン変数「自我志向、およびそれと関連した普遍主義—業績性(—限定性)の一次的組み合わせ、個別主義—帰属性の一次的組み合わせ」=「人類学的基底の側では、自由、平等への無関心、外婚制。疑似的に基底 fna および基底 fne 。

ただし基底 **fne** は平等規範あり」と当該社会の基底との差異が関係する（接続⑥）。また、『社会体系論』においてドイツの「内部的緊張の激烈さ」（Parsons, 1951＝一九七四：一九八）が指摘されその原因が無限定性と結びついた強度の政治主義と普遍主義の組み合わせだとみなされている（Parsons, 1951＝一九七四：一九七―一九八）、という前述した引用との整合性を考慮するならば、「接続⑤」に関して前述したドイツにおける「普遍主義」の二つの解釈—**EnfM(P)**的か **TroP(P)**的か—のうちの後者を採用して「普遍主義」を加えることも可能だと指摘したにもかかわらず、「接続⑥」において「文化的テイクオフの結果生じる社会が要請する機能要件」から「普遍主義」を除外すべきだ。前述したドイツについての『社会体系論』からの引用が **TroP(P)**的「無限定性」と **EnfM(P)**的「普遍主義」を示唆しているからだ。

以上の議論を本項の最後にまとめておく。第一にトッドにおける「内婚—外婚制」軸と個人主義との関係性についての議論を出発点として、「接続①」を提示した。本稿のこれまでの議論からわかるように、この「接続①」についてはその「反対」を認める^[21]。またこれと関連して「接続①'」を提示した。第二に、「ドイツ」についての議論を媒介として、本稿では「接続②」を提示した。第三に、「アメリカ」についての議論を媒介として、「接続③」を提示した。また「接続②」と「接続③」を踏まえて「接続③'」を提示した。第四に、「中南米」についての議論を媒介として、「接続④」を提示した。またこれまでの議論を踏まえて、人類学的基底「平等—不平等主義」軸とパターン変数「業績性—帰属性」との関係性について「接続④'」を提示した。さらにこれらと関連して「接続④' '」を提示した。第五に、「中国」についての議論を媒介とした接続を模索する中で、「接続②」と関係した議論を「接続②'」、「接続②' '」として提示した。第六に、「ソ連」についての議論を媒介として基底 **fc** についての接続を演繹的に導出した。この接続は「参考」だ。そしてここでの議論と関連して「接続⑦」を提示した。最後に、**EnfM (P-T)** 接続の文脈の中で「接続⑤」、「接続⑤'」、「接続⑤' '」を提示した。またトッドにおける「移行期危機」概念と関連して「接続⑥」を提示した。これらの「接続」を以下に列挙しておく。

「前近代社会」における自由—権威主義軸における権威主義、平等・不平等主義規範の存在そのもの、外婚—内婚制軸における内婚制、が「近現代社会」における「作動」としての「集合体志向」に「変換」される（接続①）

普遍主義—業績性（—限定性）、個別主義—帰属性の「一次的組み合わせ」が「自我志向」と関係し、普遍主義—帰属性の「一次的組み合わせ」が「集合体指向」と関係すると仮定する（接続①'）

基底 **fs**（権威—不平等主義）の「近現代社会」のなかでの「作動」がパターン変数

「帰属性—無限定性」の「一次的組み合わせ」として記述できる（接続②）

基底 fs における「普遍主義」を **EnfM(P)**的なものとみなす解釈、**TroP(T)**的基底 fs の規範—権威主義と不平等主義—が「近現代社会」の「作動」としての **TroP(P)**的な普遍主義を招聘し、それがパーソンズにおいて **EnfM(P)**的なものとして誤認されているという解釈、の両者を併記する（接続②'）

「前近代社会」における基底 fs の作動は、「封建性」についてはパターン変数「個別主義」によって一次的に記述でき「官僚制」についてはパターン変数「普遍主義」によって一次的に記述できると仮定しておく（接続②' '）。

基底 fna の「近現代社会」における「作動」の一次的記述が普遍主義—業績性の「一次的組み合わせ」でありこれがしばしば産業社会それ自体が要請する「作動」と混同されている（接続③）。この「接続③」に限定性—感情中立性を加えることもできる。

人類学的基底の「自由—権威主義」軸はパターン変数の「限定—無限定性」軸と一次的対応関係にある（接続③'）。

基底 fne の「近現代社会」における「作動」を「個別主義—帰属性」の「一次的組み合わせ」として記述できると仮定しておく（接続④）。なお「接続③'」を採用するとき、「接続④」に「限定性」を付加することができる。

パターン変数「業績性—帰属性」は実践としての「平等主義—不平等主義」と一次的に接続し人類学的基底との接続は二次的だ（接続④'）。ただし、人類学的基底の側に「基底とその作動との逆転現象」がなければ両者の接続は疑似的に一次的なものとなる。

基底 fne（自由—平等主義）の「前近代社会」における「作動」はパターン変数「普遍主義」によって記述できると暫定的に仮定しておく（接続④' '）。

「接続④」、「接続④'」を採用し基底 fc の記述に「帰属性」を採用しつつここでの記述対象からイデオロギーを排除する。この限定は基底 fs、fna、fne における「業績性—帰属性」についての議論にも適用する（接続④' ' '）

基底 fs（権威—不平等主義）の「近現代社会」の「作動」としてのパターン変数「帰

属性—無限定性」が文化的テイクオフの結果生じる社会が要請する機能要件の記述だと仮定しておく（接続⑤）。この議論に、前述したドイツにおける「普遍主義」の二つの解釈—EnfM(P)的か TroP(P)的か—のうちの後者を採用して、「普遍主義」を加えることも可能だ。

基底 **fna**（自由—平等への無関心）の「近現代社会」における「作動」としてのパターン変数「普遍主義—業績性—限定性（—感情中立性）」が経済的テイクオフの結果生じる産業社会の機能要件の記述だと仮定できる（接続⑤'）

パーソンズにおける「近代性」（Parsons, 1971=一九七七：一三一）は、実際には基底 **fs** の「作動」としての「（普遍主義）—帰属性—無限定性」と基底 **fna** の「作動」としての「普遍主義—業績性—限定性（—感情中立性）」との「混合物」だ（接続⑤'）。なおこのことは、「近代性」（Parsons, 1971=一九七七：一三一）それ自体が基底 **fna** と基底 **fs** の両者の「作動」に由来するということと、「近代性」（Parsons, 1971=一九七七：一三一）が要請する機能要件が基底 **fna** と基底 **fs** の「作動」に類似しているということ、の両方を併せ持つ。ここでは後者の側面を強く捉えている。

文化的テイクオフおよびそれに随伴する「移行期危機」は文化的テイクオフの結果生じる社会が要請する機能要件の記述としてのパターン変数「（普遍主義）—帰属性—無限定性」＝「人類学的基底の側では疑似的に基底 **fs**」に近い基底ほど内発的に（「伝搬」を考慮しなければ）生じさせやすいが、その結果として生じる「移行期危機」が大規模になりやすいかどうかは「個人主義」とかかわるパターン変数「自我志向、およびそれと関連した普遍主義—業績性（—限定性）の一次的組み合わせ、個別主義—帰属性の一次的組み合わせ」＝「人類学的基底の側では、自由、平等への無関心、外婚制。疑似的に基底 **fna** および基底 **fne**。ただし基底 **fne** は平等規範あり」と当該社会の基底との差異が関係する（接続⑥）。なお、ここでは基底 **fs** における「普遍主義」の二つの解釈—EnfM(P)的か TroP(P)的か—のうちの前者を採用して「文化的テイクオフの結果生じる社会が要請する機能要件」から「普遍主義」を除外すべきか。

「近現代社会」における「作動」がイデオロギーを排除する概念としての「社会実践」（Todd, 1983=二〇〇八：一一八）に関するものとイデオロギーに関するものとで異なりうるという仮定を「接続④'」と同様に「普遍主義—個別主義」軸について設定できる。すなわち、『社会体系論』に由来する基底 **fs**、**fna**、**fne** での「普遍主義—個別主義」を前述した意味での「社会実践」（Todd, 1983=二〇〇八：

一一八) についてのものと見なし、基底 fc におけるそれをイデオロギーについてのものとみなす (接続⑦)。

基底 fc の記述を暫定的に「普遍主義—帰属性—無限定性」としておく (参考)。

以上の「接続」を以下の表にまとめておく。

TroP (P-T) 接続

表現対象	前近代社会における作動	近現代社会における作動の一次的表現	参照
基底 fs	権威—不平等主義	帰属性—無限定性 普遍主義を TroP(P)的なものとみなすかどうか保留 普遍主義を TroP(P)的なものとみなせば、集合体志向 ただしここでの普遍主義はイデオロギーに関係せず	接続①’ 接続② 接続②’ 接続⑦
基底 fna	自由—平等への無関心	普遍主義—業績性 限定性—感情中立性を加えうる 自我志向 ただしここでの普遍主義はイデオロギーに関係せず	接続①’ 接続③ 接続⑦
基底 fne	自由—平等	個別主義—帰属性—自我志向 接続③’ を採用するならば限定性を付加 ただしここでの個別主義はイデオロギーに関係せず	接続①’ 接続④ 接続⑦
基底 fc	権威—平等主義	普遍主義—帰属性—無限定性 ただしここでの普遍主義はイデオロギーにのみ関係	参考 接続⑦
個人主義	自由—権威主義 平等・不平等主義 規範なし—あり 外婚—内婚	自我志向—集合体志向 (同順)	接続①
個人主義		普遍主義—業績性 (—限定性)、個別主義—帰属性の一次的記述が自我	接続①’

		志向と関係し、普遍主義—帰属性の一次的記述が集合体指向と関係	
自由主義	自由—権威主義	限定—無限定性（同順）	接続③’
平等主義	平等—不平等主義	前近代社会の基底の作動としばしば逆転する実践としての平等主義—不平等主義が業績性—帰属性によって記述される ^[22] 。同順ではない。ただし逆転がない場合もある。	接続④’
平等主義		近現代社会の作動の記述としての業績性—帰属性の記述対象からイデオロギーを排除。	接 続 ④’ ’ ’

本稿 4-7.の議論を踏まえて本稿著者が作成

TroP (P-T) 接続

表現対象	前近代社会における作動の人類学的基底による表現	前近代社会における作動のパターン変数による一次的表現	参照
封建主義	基底 fs	個別主義	接続②’ ’
官僚制	基底 fs	普遍主義	接続②’ ’
基底 fne	基底 fne	普遍主義	接続④’ ’

※この接続は単なる表現の相違だ。

本稿 4-7.の議論を踏まえて本稿著者が作成

EnfM (P-T) 接続（ただし二次的に TroP (P-T) 接続）

表現対象	前近代社会における作動	近現代社会における作動の一次的表現	参照
文化的テイクオフの機能要件	権威—不平等主義	帰属性—無限定性 基底 fs の普遍主義を TroP(P)的なものとみなすときそれを加える	接続⑤
経済的テイクオフの機能要件	自由—平等への無関心	普遍主義—業績性—限定性（—感情中立性）	接続⑤’
近代性	ベースになる基底が基底 fs と基底	TroP (P-T) 接続における基底 fs と基底 fna の近現代社会における作動	接続 ⑤’ ’

	fna。	の混合物（パターン変数で表現可能）。ただしこれはあくまで近似的表現。	
移行期危機	文化的テイクオフおよびそれに随伴する「移行期危機」は文化的テイクオフの機能要件に近い基底ほど内発的に（「伝搬」を考慮しなければ）生じさせやすいが、その結果として生じる「移行期危機」が大規模になりやすいかどうかは「個人主義」とかかわるパターン変数と当該社会の基底との差異が関係する。なお、ここでは基底 fs における「普遍主義」の二つの解釈—EnfM(P)的か TroP(P)的か—のうちの前者を採用して文化的テイクオフの機能要件から「普遍主義」を除外すべきか。		接続⑥

本稿 4・7.の議論を踏まえて本稿著者が作成

この表の含意は、そのまわりの「環境」の差異—前近代社会・近現代社会—を考慮しつつ人類学的基底での記述をパターン変数における一次的記述に「変換」することだ。したがってこの表は、トッドの「人類学的基底」概念をシステム理論の枠組みのなかで考察することを可能にするための第一歩を提供する。しかもそれは、本稿序論でふれたように社会学理論・社会システム理論の内部で周縁化されてきたパーソンズ社会学を使用することによって初めて可能となる。この接続は、本稿序論で指摘した本研究の研究目的—システムのシステムとしての作動を「リアル」に描写することに特化してきた現代社会システム理論に人類学的な「リアリティ」を再び組み込むこと—にとって、明らかな「前進」を提供する。人類学的「リアリティ」を提供するのは接続の一方の側であるエマニュエル・トッドの人類学だ。それに加えてトッド人類学には、これまで議論してきた「人類学的基底」概念による「革新性」が包含されている。それに対して本研究を社会システム理論に接近させているのはパーソンズ社会学だ。パーソンズ社会学が提供するパターン変数は、価値・規範システムの記述のための道具としては極めて独創的なものであり、それでいてその「形成史」についての議論で触れたように社会学理論・社会システム理論の伝統の中に深く根差したものだ。したがって本研究が提供するこの「接続」は、「人類学的リアリティ」やトッド人類学の「革新性」を巻き込みつつ社会学理論・社会システム理論の伝統に根差した形で、価値・規範システムを研究するための「第一歩」となる。そしてこのような研究は、社会学・人類学という特定の研究領域を超えた本稿で定義する意味での「比較文明学」と定義できるものだ。ただし逆に言えば、本研究だけでは松本（一九九七）の言うところの「規範科学」にとどまり社会システム理論として成立しないから、その「第一歩」に過ぎない。本接続を社会システム理

論へと「拡張」する作業は本稿以後の課題だ。

その他にもこの接続には、いくつかの問題点がある。第一の問題点として、パターン変数「感情性—感情中立性」の位置づけが不明確だということが指摘できる。なぜなら本稿では『社会体系論』における社会類型についての記述を重用したが、本稿 4-1.で川越（二〇〇二：一九四—一九五）のような先行研究を踏まえつつ指摘したように、パターン変数において役割期待・価値志向の記述に一次的に関与するのは「普遍主義—個別主義」と「帰属性—業績性」、要求性向・動機志向に一次的に関与するのは「感情性—感情的中立性」と「限定性—無限定性」、両方に一次的には関与しないのが「自我志向—集合体志向」だと位置づけられているからだ（Parsons & Shils, 1951 = 一九六〇：三九九—四〇四、Parsons, 1951 = 一九七四：一一四）。したがって本稿で提示した接続においてパターン変数「感情性—感情中立性」の位置づけを明確にするためには、パーソンズ社会学におけるパーソナリティについての記述を参照しなければならない。ところが本稿の議論の前提となるパターン変数の「EnfM(P)的使用」と「TroP(P)的使用」との差異をパーソナリティにおける記述で区別するための要素が、本稿著者には不足しているように思われる。したがってこのことも、本稿以後の課題としたい。

第二の問題点は、前近代社会—前近代社会の TroP (P-T) 接続の位置づけが不明確なことだ。前述した表ではこの接続について、単なる表現の相違だと指摘した。ところが「封建性」と「官僚制」で基底 fs の表現が異なることからわかるように、ここでは前近代社会—近現代社会の TroP (P-T) 接続と同様の「変換」もまた行われている。そもそも基底 fs における普遍主義が EnfM(P)的か TroP(P)的かの議論を提議するとき、前述した議論が前近代社会—近現代社会の TroP (P-T) 接続についてのものであるにもかかわらず、本稿著者は前近代社会—前近代社会の TroP (P-T) 接続—例えば『近代社会の体系』におけるプロテスタンティズムの禁欲主義を普遍主義とみなす言説（Parsons, 1971 = 一九七七：一〇六）—をこの議論に援用した。結局、本稿においてこの接続の位置づけは不明確なままだ。このことも本稿以後の課題とする。

第三の問題点として人類学的基底の「変換」について指摘しておく。本研究では「前近代社会」の「規範」についての記述としての人類学的基底が「近現代社会」の「価値・規範」についての記述のために使用されるとき、トッドにおいてその「変換」が行われるということを強調してきた。実際、これまで指摘してきたようにトッドは『第三惑星』で平等—不平等主義軸についての「変換」にしばしば言及してきた。ところが『家族システムの起源』において直系家族システムに関してトッドは、「直系家族につねに付随するヒエラルキー的強迫観念は、科学技術的、経済的あるいは宗教的な発展レベルとは無関係のものようである」（Todd, 2011 = 二〇一六：一八五—一八六）と指摘している。つまり本研究が強調するトッドの自由—権威主義、平等—不平等主義、個人—集合主義という諸軸を詳細に検討すれば、「前近代社会」・「近現代社会」という差異に関して恒常的要素・非恒常的要素に分解することが可能なはずだ。

このことも本稿以後の課題だ。

第四の問題点として、トッドの指摘する価値・規範システムの「活性化—減衰」が本研究で考慮されていないことを取り上げておく。このことに関して『家族システムの起源』では、以下のような要約がなされている。

「家族システムによる説明の仮説は、あらゆる事柄を説明する、とりわけ永遠に説明すると称するものはいささかもない。農民的過去から引き継いだ諸価値が、識字化、都市化、工業化が生み出した精神的混乱から生まれたイデオロギーの中に、一時的に具現化されるということを示唆しているにすぎない。その段階が過ぎれば、社会的・心性的安定化が訪れ、それによって暴力的形態におけるイデオロギーの衰退が到来することになる。」(Todd, 2011=二〇一六：一八)

本稿でも EnfM (P-T) 接続として「移行期危機」は既に考慮している。ところが、本稿第三章でも触れたように「近現代社会」の内部での「暴力的形態におけるイデオロギーの衰退」(Todd, 2011=二〇一六：一八) は全く無視されている。そしてこのことを考慮に入れるとき、前近代社会・近現代社会という二つの発展段階はその限界を露呈する。前述したように「暴力的形態におけるイデオロギーの衰退」(Todd, 2011=二〇一六：一八) は「近現代社会」の「内部」におけるものだからだ。このことも本稿以後の課題とする。なお本稿第三章で既に指摘したようにこの問題はバウマンのいう「リキッドモダニティ」(Bauman & Vecchi, 2004=二〇〇七) などのポストモダンの議論と重複する。ところで本稿第三章ではパーソンズ社会学について、「近現代社会」の記述に特化したモデルであるがために価値・規範システムによるサイバネティクス的な意味での「制御」を重要視するモデル、だと指摘した。つまり「暴力的形態におけるイデオロギーの衰退」(Todd, 2011=二〇一六：一八) 一平たく言えば価値・規範システムの役割の縮小—が、パーソンズ社会学がその影響力を失った原因の一つだろう。

最後の問題点として、本接続の最も重要な問題点について指摘しておく。本章では前近代社会・近現代社会という二つの発展段階が使用された。そして本章の議論は、基本的には「前近代社会」における「規範」としての人類学的基底の「近現代社会」における「作動」をパターン変数によって表現し直すという「形式」をとった。ところが本章での分析をすすめるなかで、「基底とその作動との逆転現象」という厄介な問題が浮上した。例えば「接続④」と関係して、「前近代社会」における「平等への無関心」(人類学的基底) が「近現代社会」における実践としての「平等主義」を招聘しそれをパターン変数「業績性」によって記述できる、という説明を本稿著者は提示した。この「逆転現象」を前項でいう「近現代社会」のあらゆる時代に適用してよいのだろうか。実は、『社会体系論』や『第三惑星』が執筆された二〇世紀後半に

しか適用できないのではないか。実際、本章で提示した前近代社会内部での TroP (P-T) 接続は、前近代社会・近現代社会の二発展段階を踏まえたそれと大きく異なるものだ。だとすれば接続の変更が、前近代社会内部と前近代社会・近現代社会の二発展段階を踏まえた場合の二パターンしかないとなぜいえるのか。このことから本研究で作用した前近代社会・近現代社会という二発展段階は限界を露呈する。以上から本研究で提示した「接続」を二十一世紀現代社会に安易に適用すべきではない。二一世紀現代社会の分析に直接使用可能な研究の提示は、本稿以後の課題だ^[23]。

このような諸問題点が存在するにもかかわらず、本稿で提示した接続モデルは前述したように本研究の目的に明確な「前進」を提供する。

註

[1] トッドは『新ヨーロッパ大全』において、「同じ価値体系も、地主の数も地所の数も少ない都市的環境にあつては、これとは違った物質的結果となって現れることであろう」(Todd, 1990=一九九二：四五)と指摘している。

[2] 先行研究にも類似した記述がある。Chazel (1974=一九七七) はパターン変数が「主として近代社会の、もっと正確に言えばアメリカ社会という具体的事例に関する考察の結果である」(Chazel, 1974=一九七七：七一)と指摘した。

[3] 川越(二〇〇二：一九三—一九四)は『行為の総合理論をめざして』の内部におけるパターン変数についての記述の不一致を紹介し、初期パターン変数が「目まぐるしく変化し錯綜している」(川越、二〇〇二：一九四)と指摘している。ただし本章ではこのような「微妙」な変遷を議論の簡略化のため無視した。

[4] Parsons & Shils (1951=一九六〇：一二四—一二五)を踏まえつつ、訳出については『社会体系論』における佐藤勉(一九七四)のものを参照した。

[5] ここでの Chazel (1974=一九七七) についての記述は、著者の学会発表(小川晃生、二〇一六)も部分的に参照している。

[6] 本来ならば、先行研究におけるパターン変数に対する批判を体系的に要約し、そのような批判にもかかわらず本研究がパーソンズ自身のパターン変数をそのまま使用する理由を明記すべきだ。しかし、このことは本稿以後の課題とする。

[7] 本章における『社会類型』や『近代社会の体系』からの引用を参照せよ。なお本稿第二章でふれたように、本稿の議論の前提は「二項対立図式」であることよりも「進化的アップグレード」を伴っていることのほうが、「構造主義」として「強い」ということだ。

[8] ここでの「ゾンビ・カトリック」とは、急速に脱カトリック化することで急激に活性化した旧カトリック地域に対して前述したプロセスに基づいてカトリックが間接的に影響力を行使しているさまを言い表すトッドの造語(Todd & Le Bras, 2013=二〇一四)だ。

[9] 上垣彰 (二〇〇九) もこのことに触れている。

[1 0] パターン変数が分析的最小単位ならば、パターン変数と社会システムのあいだにパターン変数によって構成されるより経験的な「行為」がなければならない。しかし本稿でも引用するように、例えば『社会体系論』では産業社会の性質が普遍主義—業績性によって直接に議論されている (Parsons, 1951=一九七四 : 一八九)。

[1 1] 同様の記述が『行為の総合理論をめざして』にも存在している (Parsons & Shils, 1951=一九六〇 : 二九一) が、本稿では『社会体系論』での記述を優先した。

[1 2] 本研究では「機能要件」という言葉を多用している。森岡清美、塩原勉、本間康平編 (一九九三) によれば、「機能的要件 (functional requisite)」とは任意のシステムが存続、発展するための要請ないしそのために解決すべき諸問題だ (森岡・塩原・本間編、一九九三 : 二五九)。本研究における「機能要件」という言葉の使用が構造機能主義の文脈の中で厳密に定義されたものではないことを断っておく。

[1 3] 「明示的に核家族性と現代性、家族的個人主義と社会移動性とを結びつけている」 (Todd, 1994=一九九九 : 九五) というトッド自身によるパーソンズ評価からも、このことは伺える。

[1 4] 『社会体系論』でパーソンズは「価値パターンが適用される位置の二元性」 (Parsons, 1951=一九七四 : 一九六) に触れている。これは価値システムが適用されるうえで、理想的状態の定義如何で「理想との同調とそれからの離反とのあいだに鋭く確固たる区別をしている」 (Parsons, 1951=一九七四 : 一九五) ということだ。本章でいうパターン変数の「二重性」はこのパーソンズの言説と異なることに留意されたい。

[1 5] 本稿序論では宮本孝二 (一九九八 b) を踏まえつつギデンズの「構造の二重性」 (宮本、一九九八 b : 三三) 概念に触れた。本研究におけるパターン変数の「二重性」という呼称は、宮本孝二 (一九九八 b) が指摘するギデンズの「構造の二重性」概念と言葉の使用が重複するが、その意味に関連性がないことを断っておく。

[1 6] EnfM (P) 的使用、TroP (P) 的使用という用語の由来について記述しておく。前者はパーソンズ (Parsons) におけるパターン変数の『世界の幼少期』 (*L'Enfance du Monde*) 的使用—パーソンズの意図した使用—だから EnfM (P) 的使用、後者はパーソンズ (Parsons) におけるその『第三惑星』 (*La Troisième Planète*) 的使用—パーソンズが意図しなかった使用—だから TroP (P) 的使用だ。

[1 7] () 内の T はトッド (Emmanuel Todd) の T だ。なお「EnfM (T) 的応用」が「応用」と表記されるのは、これまで指摘してきたように「人類学的基底」概念そのものには前近代社会・近現代社会の差異が組みこまれていないからだ。

[1 8] このことについては、Todd (1994=一九九九 : 一九八—二〇三) が参考になる。ここにおいてプロテスタンティズムは基底 fna と結びつけて議論されているが、それを産出したのはあくまで基底 fs だとされる (Todd, 1994=一九九九 : 二〇〇)。よって議論の簡略化のため本稿著者は基底 fna についての記述を考慮しなかった。

[19] トッドは『新ヨーロッパ大全』において宗教システムを「地上的成分」(Todd, 1990=一九九二：一三五)と「形而上的成分」(Todd, 1990=一九九二：一三五)とに分析的に区分し、所与の宗教における価値・規範をも分析的に区分している(Todd, 1990=一九九二：一三五)。それによれば例えば、プロテスタンティズムにおける前者は自由—平等主義であり後者は権威—不平等主義だ。本研究では価値・規範システムの作動のありかたについてイデオロギーを分析的最小単位であるかのように取り扱っているが、その保証はどこにもない。ただしこのことについて、本研究では深く論及しない。

[20] 『第三惑星』をみればわかるように、トッドは「近現代社会の性質」が基底 fna と基底 fs に独占されているとみなしているわけではない。しかし、『世界の幼少期』や『家族システムの起源』を踏まえれば、「近現代社会」の成立において両者が特に重要な役割を果たしたとトッドが見做しているのは自明だ。

[21] 「接続①」の「反対」とは、「前近代社会」における自由—権威主義軸における自由主義、平等・不平等主義規範の不在、外婚—内婚制軸における外婚制、が「近現代社会」における「作動」としての「自我志向」に「変換」される、ということ。

[22] 「接続④」を提示する過程で取り上げた例を再掲しておく。前近代社会における「平等への無関心」(基底)→近現代社会における実践としての「平等主義」→パターン変数「業績性」による記述。

[23] 『不均衡という病』において二一世紀フランスにおける価値・規範システムの作動をトッドは研究している。この研究は重要だが、本稿以後の課題とする。

結論

本稿は社会システム理論がなぜ不人気なのか、という問いかけから始まった。そこで本稿著者は、ルーマン社会学や今田高俊らの「社会システム学」を例示しつつ、近年の社会システム理論はシステムのシステムとしての作動を「リアル」に描写することに心血を注いできた、と指摘した。この社会システム理論の発展は自然科学の発展とおおむねパラレルでそういう意味で「正常」だ。しかしこのような社会システム理論には、前述した作動上の「リアリティ」と重複しつつ同じでない、いわば人類学的な「リアリティ」が欠如しているのではないかと本稿著者は指摘した。本稿序論ではこの具体例としてエマニュエル・トッドの『移民の運命』における議論を提示した。そこでは、移民受け入れ国において移民の人類学的システム（家族システムなど）が破壊され、受け入れ国の移民に対する態度（同化志向か隔離志向か）とは独立して、移民が受け入れ国の人類学的システムに同化してゆくと主張された（Todd, 1994＝一九九九）。このトッドの議論を本稿序論では、徳安彰（二〇〇四）が政治システム以外の社会のサブ・システムのグローバルな拡大を前提としたルーマンの社会システム観を「世界社会」（徳安、二〇〇四：一八一）と表現していることと対比させた。平たく言えば、人間社会というものはそれが存在してきた土地・空間と本来は不可分である、という前提を近年の社会システム理論が軽視しているのではないかと、ということだ。前述した『移民の運命』における政治システムから独立した移民の人類学的同化プロセスは、ひょっとすればあらゆる社会システムに書き込まれた作動なのであり、したがって抽象理論としての社会システム理論にも不可欠なのではないか。だとすれば昨今の社会システム理論は、社会システムをそれとして成立させる要件を含むはずの人類学的システムを軽視してきたのではないかと。そうであるならば、社会システム理論を再生させ再び活力を取り戻させるためには、家族社会学、文化人類学、歴史人口学のような、人類学的システムの作動を重視してきた諸研究領域と対話しそれらを「再受容」する必要があるはずだ。

本稿ではこのような問題提議のもとで、パーソンズ社会学とトッド人類学の「接続」という研究テーマを提議した。本稿序論で指摘したように、パーソンズ社会学は極めて分野横断的であり、前述した社会システム理論と人類学的システムとの対話という点で重要な位置にある。システム理論としてより精緻なはずのルーマン社会学と比べて人類学的システムとより親和的であり、他方でデュルケムやウェーバーの諸理論と比べて社会システム理論としてよく作りこまれているからだ。トッド人類学もまた極めて分野横断的であり、その「人類学的基底」概念にかかわる議論はイデオロギー分析や近代化プロセス分析で「革新性」を有する。したがってこのパーソンズ＝トッド接続が、前述した社会システム理論による人類学的システムの「再受容」にとって重要な役割を果たすはずだ。

本稿の問題提議はこのようにパーソンズ＝トッド接続という研究テーマの提示から始まったが、これに加えて本稿序論では以下のような問題提議を行った。第一に、本稿

で価値・規範システムを中心とした研究を行うことについて議論した。近年の社会学理論・社会システム理論には価値・規範システムの位置づけを相対化しようとする傾向がある。その例として本稿序論では、パーソンズ社会学が「価値・規範要素を偏重しすぎ」（溝部、二〇一一：二九）ているという批判を溝部明男が紹介している（溝部、二〇一一：二九、三五—三六）ことなどを取り上げた。ところが前述したように、トッド人類学はイデオロギー分析などで「革新性」を有している。本稿序論でもこの例として、共通した人類学的基底（直系家族システム）に由来する社会民主主義とナチズムのシステムとしての類似性と両者の倫理的な著しい相違との対比をトッドが指摘している（Todd, 1983=二〇〇八：一五七—一六二）ことを取り上げた。我々の価値・規範システムについての知識が極めて限定的だからこそ、トッド人類学は「革新性」を有するものとして注目されたのではないか。したがって、我々にはいったん価値・規範システムに重点を置いた研究に立ち返ることが必要なのではないか。このことから本稿著者は、研究対象として「価値偏重」という共通項を有するパーソンズ社会学—ギデンズ社会学でなく—とトッド人類学とを選択した。そして両者のなかでもパターン変数と人類学的基底という価値・規範システムの記述にかかわる概念に焦点を合わせた研究が、本稿第四章で展開された。

第二に、本稿が社会学理論のなかでも社会システム理論を研究テーマとして採用することについて議論した。本稿序論ではその理由として、本稿で提示する研究と自然科学との「接続」を視野に入れているからだと指摘した。本稿序論で指摘したように、社会システム理論は自然科学との結びつきが強い。そして大浦宏邦（一九九六）を踏まえつつ本稿序論で触れたように、自然科学の研究対象である動物における価値・規範システムと人文・社会科学の研究対象である人間社会の価値・規範システムは、連続した研究対象として位置付けられうるはずだ。実際、本稿でも検討してきたトッドの『家族システムの起源』における、まったく未分化な原初の社会から様々な価値・規範システムが家族システムの複雑化と連動して出現するという議論は、人間社会における価値・規範システム生成プロセスを霊長類のそれと連続したものとして把握しようとした研究書としても読めるように思われる。あくまで将来の課題としてだが、本稿著者もまた人間社会の価値・規範システムを動物についてのそれと連続したものとして研究することを企図している。以上の理由から、本稿では研究対象として社会システム理論を選択した。

第三に本稿が「共時的比較」を重視することについて議論した。本稿序論では高野秀之（二〇〇九）、泉幽香（一九七二）、Luhmann（1997=二〇〇九）、徳安（二〇〇四）、松本和良（一九九七）、溝部（二〇一一）、濱口恵俊（一九九七）などを踏まえて、近年の社会学およびその近接領域のなかで「比較」から「反比較」へという大きな流れがあるということを指摘した。ところが前述したように本稿では、それが展開してきた土地・空間と強固に結びついた人類学的システムを昨今の社会システム理論が軽視してきたのではないかという問題提議を行った。この問題提議を踏まえれば、共時的比較に基

づく研究の限界を認識しつつもひとまずそれを強調した研究を行うべきだ。したがって本稿が提示する研究では、共時的比較を重視する。

最後に、本稿が研究テーマとして「比較文明学」を掲げることについて議論した。これまでの議論からわかるように、本稿が提示する研究は少なくとも「社会学」や「人類学」といった学問領域におさまらない。そこで伊東俊太郎編（一九九七）などを参照しつつ本稿で提示する研究領域を、共時的比較を重視しつつ変動論を考慮した分野横断的社会研究というような意味での「比較文明学」と定義する。なお本稿付論 A で提示したように、本研究での「比較文明学」は「社会学」と「人類学」との境界領域に位置付けられており、伊藤編（一九九七）などとその定義が必ずしも同じでないことに注意されたい。

以上から本稿では、既存の社会システム理論への問題提議を出発点としつつ、社会システム理論の枠内での価値偏重で共時的比較を重視した比較文明学的研究を志向することが表明された。そして本稿の具体的な研究目的は、初期パーソンズのパターン変数とトッドの人類学的基底の「接続」だった。この「接続」は「人類学的基底」概念を社会システム理論のなかで取り扱うことに貢献し、社会システム理論に人類学的「リアリティ」を再受容させるための「第一歩」となる。これまでの議論してきたように、この「接続」はトッドにおける「前近代社会」の「規範」についての記述としての人類学的基底が「近現代社会」における「価値」として「変換」されたものをパターン変数で表現しなおす、という「形式」をとった。人類学的基底がパターン変数によって表現し直されるわけだから、それを社会システム理論において取り扱うことは容易になるはずだ。もちろんこの価値・規範システムについての「接続」だけでは社会システム理論としての体を成さない。本稿におけるこの「接続」を出発点とした社会システム理論の構築は本稿以後の課題だ。そして本研究のプロセスを振り返ることで、現代社会学ならびにその近接領域におけるパーソンズ社会学の位置づけを再評価できる。なお本稿でこのパターン変数と人類学的基底との「接続」を行うにあたって、本稿著者が採用したのは（社会）学史的アプローチだった。本研究の問題関心の出発点は社会システム理論についてのものであったし、実際に本稿では「サイバネティクス」のようなシステム理論で使用されてきた概念が登場した。このように社会システム理論に関する研究であるにもかかわらず、本稿での研究において（社会）システム理論を（社会）システム理論として使用することはない。本研究で行われたのは学史的なパーソンズとトッドの検討だ。この検討を通してパーソンズ社会学とトッド人類学の類似点・相違点を可視化し、前述したパターン変数と人類学的基底との「接続」が模索された。

以上の記述から、この本稿結論で提示されるのは以下の二つだ。ただしこれらの結論を提示する前に、いったん本稿の各章を振り返る。

1. 人類学的基底がパターン変数によって表現し直され、それによってこの概念を社

会システム理論において取り扱うことが容易になる。

2. 本研究のプロセスを振り返ることで、現代社会学ならびにその近接領域におけるパーソンズ社会学の位置づけを再評価できる。

本稿第一章の要約

本稿第一章では、「比較文明学」という共通項をパーソンズ社会学とトッド人類学が共有していることを確認した。本稿序論で触れたようにパーソンズ社会学の「均衡理論」としての側面を強調する議論が散見されるが、この見方はパーソンズ＝トッド接続にとって問題だ。そこで、パーソンズ社会学がシステム変動を重視した理論であるという先行研究による指摘を踏まえつつ、本稿第一章ではこの先行研究による指摘を *Theories of Society*、『社会体系論』、『行為の総合理論をめざして』などで確認しつつ『社会的行為の構造』にまで拡大した。この章では、まず 1-1.でパーソンズ社会学における変動論の一貫性を確認し、次に 1-2.でその中での文化システムの変動論の存在の一貫性を確認し、さらに 1-3.でその中における文化システムのサブ・システムとしての科学の変動論を議論した。以上の項で主に検討されたのは、*Theories of Society*、『社会体系論』、『行為の総合理論をめざして』、およびパーソンズが一九四〇年代に発表したいくつかの論文だ。1-3.で本稿著者が強調したのは、パーソンズにおいて科学システムの変動論には他の文化システムのサブ・システムの変動論が随伴しているということだった。これは本稿第二章に基づけば、「構造主義」の範疇に含まれる議論だ。1-4.ではこれらの議論を踏まえて、『社会的行為の構造』で指摘されたデュルケームやウェーバーの理論の主意主義的行為理論への収斂が、文化システムの他のサブ・システムの変動を随伴した比較文明学的なものとして再考できると指摘した。これらの簡単な検討を踏まえて本稿第一章では、パーソンズ社会学は初期から一貫して本稿序論で定義した意味で比較文明学的なものであり、ゆえにトッド人類学との「接続」はこの「比較文明学」という共通項を前提としてなされうる、ということが確認された。

本稿第一章の議論は概ね先行研究の追認にとどまる。しかしパーソンズ社会学が変動論を強調した議論であることの確認、およびその「比較文明学」としての再考、において『社会的行為の構造』にまで遡った点では独創性を有する。本稿著者がこのように『社会的行為の構造』を含んだ検討を行ったのは、本稿著者自身もはじめ自覚していなかったが、本稿 1-5.で指摘したように『第三惑星』に本稿で再考された『社会的行為の構造』と類似した議論が存在したからだ。本稿 1-5.で記述したようにその議論に基づけば、イギリス・フランスの人類学的基底と結合したそれらの個人主義的で進歩主義的な科学が、二〇世紀にはドイツ・ロシアの勢力伸長に伴いそれらの集合主義的な科学によって相対化された (Todd, 1983=二〇〇八：一六四―一六五)。しかし本稿 1-5.で指摘したように『社会的行為の構造』と『第三惑星』の議論には相違点もある。前者で前提とされるのは「収斂」でありパーソンズ社会学全体の議論を踏まえれば「合理化」だが、『第三惑

星』では「収斂」も「合理化」も議論されていない。そこで本稿第二章では、本稿で定義する「比較文明学」としてのパーソンズとトッドの類似点・相違点を整理するための検討が行われた。

本稿第二章の要約

本稿第二章では、「構造主義」を基準としたパーソンズ社会学とトッド人類学との「接続」が論じられた。本稿第二章で指摘したようにこれは、「比較文明学」としての両者の質的な類似点・相違点の整理であり、両者の「思想」の比較検討であり、そしてトッド人類学の土台でパーソンズ社会学を検討するということだ。本稿第二章では議論の下準備として、高野秀之（二〇〇九）、三嶋唯義（二〇〇九）、中村秀吉（一九七一）、門口充徳（二〇一二）、泉幽香（一九七二）、村瀬雅俊・村瀬智子（二〇一四）、宮本孝二（一九九八）、油井清光（二〇〇四）、Todd（2011=二〇一六）、といった先行研究を踏まえて「戯画的構造主義」という概念を定義した。本稿での「戯画的構造主義」とは、パーソンズとトッドを比較するための道具として単純化された「構造主義」ということだ。そして本稿第二章では、「戯画的構造主義」から排除された諸要素を「構造主義以後」—油井（二〇〇四）が使用した用語を修正したもの—という概念で一括した。

以上の下準備を経て、本稿第二章ではパーソンズ社会学とトッド人類学が検討された。トッド人類学については以下の結論を導出した。トッド人類学は、自身を「構造主義以後」の側に位置付けている。その例としてトッド自身が提示したのが、初期については、1.家族構造が進歩概念と結合していない点、後期については、1.ヨーロッパ人を一般モデルに組み込む点、2.家族システムを構造主義的結合から切り離す点、3.伝搬メカニズムを重視する点、家族システムの発展サイクルを重視する点、だった。またこの点で初期トッドについて、1.家族システムの分析的要素による再構成、2.文化的テイクオフの伝搬、3.家族システムの発展サイクル分析の存在、を本稿著者は取り上げた。にもかかわらず本稿第二章で定義する「戯画的構造主義」概念に依拠したとき、トッドには「構造主義」的側面が強く残っている。その例として本稿著者は本稿第二章で以下の事柄を提示した。初期トッドについては、1.人類学的基底という深層構造の使用、2.深層構造としての文化的テイクオフとその進歩およびそれに依拠した二つの発展段階論、3.人類学的基底の影響下での文化システムの諸サブ・システムの変動、を論じた。これに加えて後期トッドについては、1.家族システム以外のシステムについての進歩概念が随伴した記述、2.家族システムについての部分的に進歩概念が随伴した記述、3.父系レベルや人類学的基底の変動を考慮する・しない、といった発展段階論、を取り上げた。パーソンズ社会学については以下の結論を導出した。パーソンズ社会学の中心軸は「構造主義」の側にある。後期パーソンズの『社会類型』や『近代社会の体系』は、1.進化概念に依拠した議論を展開している、2.発展段階論に依拠している、3.行為システムのサブ・システムの相互連関的変動が前提とされている、という点で、本稿第二章で定義する「戯

画的構造主義」の定義からすれば構造主義的だ。また前述した「3.」は『社会体系論』などの初期パーソンズにもあてはまり、さらに初期パターン変数の伝統・近代などにみられる二項対立図式も踏まえるならば、初期パーソンズにもまた構造主義的側面を見出すことができる。ところが、パーソンズ社会学は「構造主義以後」的要素もまた包含している。その例として、本稿第二章では以下の事柄を提示した。初期パーソンズについては、1.本稿第一章の記述からわかるように『社会的行為の構造』の本稿で定義する「比較文明学」的再解釈から「進化」概念、「収斂」概念を切り離せる点、2.初期パターン変数を脱・西欧中心主義的に解釈しうる余地—進化的アップグレードや西欧・非西欧の二項対立からの脱却—がある点、を取り上げた。後期パーソンズについては、1.『近代社会の体系』における「西欧」の「機能分化」(Parsons, 1971=一九七七:一〇九)についての議論が西欧・非西欧の二項対立からの部分的脱却に帰結しうる点、を提示した。そして初期・後期に共通したものとしては、1.文化システムの伝搬が論じられている点、を指摘した。このようにパーソンズ社会学は「構造主義以後」的な要素を含んでいる。そして、二項対立図やサブ・システムの諸結合を前提としそれらを統合しているという点で「構造主義」として「より強い」要素である進化論との結合が弱いという意味で、初期パーソンズのほうがその傾向が強い。このことは松岡(一九九八)が要約したパーソンズの思想的変遷—社会進化論にいったん魅せられ、その後いったん距離置き、後期に再接近—からも伺える。

以上の分析に従って本稿第二章では「構造主義」概念を基準としたパーソンズ=トッド接続が検討された。以下がその結論だ。まず、両者の類似点について記述する。第一に、トッド人類学は「構造主義」との決別を強調するわりに構造主義的側面を強く有しているが、このことは理論的近さとは別にトッドの思想上の「構造主義」との近さを表現しているのではないか。特にトッドが(発展)段階論をやや好んで使用するように思える点、『家族システムの起源』のテーマとは裏腹に進歩概念を好んで使用するように思われる点、(人類学的基底の影響下での)文化システムの相互連関的変動が論じられる点、は重要だ。パーソンズもまた発展段階論を使用し、社会進化論を好み、そしてトッドと比べてより明示的に文化システムの相互連関的変動を強調した。これらは、パーソンズ=トッド接続の「接着剤」になりうる。本研究ではこれらの中でも特に(発展)段階論の使用に注目した。第二に、パーソンズ社会学に「構造主義以後」的要素が散見されることもまた、この点での「接着剤」を提供する。パーソンズには、西欧・非西欧の二項対立図式および西欧中心主義からの部分的離脱、文化の伝搬の強調、進歩概念への選好が見られる一方でそれを部分的に切り離す余地がある点、システム理論の性質としての理論上の柔軟さ、がみられた。システム理論ではないという点を除けば、これらはトッド人類学にも見出される—もちろんトッドのほうがその傾向が強い—ものだ。これらの中でも本研究で特に重要な意味を持ったのは西欧・非西欧の二項対立、西欧中心主義からの部分的離脱だ。両者の相違点についても記述しておく。1.既に触れたように

パーソンズとトッドの両者は共に文化の伝搬を論じているが、伝搬理論の帰結としての「類型のあいまいさ」を議論しているかどうかという点で両者は大きく異なる。この点は、パーソンズ＝トッド接続においてトッドに引き寄せて解釈されるべきだろう。ただし本研究ではこの差異を強調しなかった。最後になったが、すでに触れたように後期と比べて初期パーソンズのほうが「構造主義」的諸要素との結合が弱いように思われる点は重要だ。特にその理論を進歩概念から部分的に切り離す余地は、初期パーソンズのほうが大きく感じられる。このことは、進歩概念を好みつつもそれと切り離された議論—『家族システムの起源』における家族システムの変動—を展開している後期トッドとの接続を考えるうえで重要だし、初期トッドであっても重要だ。

本稿第二章で展開したこれらの議論は、確かに「表面的」なものにとどまるが、パーソンズ社会学とトッド人類学を比較検討したという点で「独創性」を有する。ここでの検討によって、パーソンズ社会学とトッド人類学を「接続」する上で注目すべき類似点・相違点が可視化された。そして本稿第二章の結論を土台として、本稿第三章の議論は展開された。

本稿第三章の要約

本稿第三章では「サイバネティクス」をキー概念としてのパーソンズ社会学とトッド人類学との接続を論じた。「サイバネティクス」という概念は本来、学術的に厳密に定義された概念であり様々な研究領域において重要な役割を果たしてきたものだ。ところが本稿第三章における「サイバネティクス」概念は、パーソンズ社会学を参照したものであり、本稿第三章におけるその使用は「社会学史」という研究分野でのその使用に限定される。このような「サイバネティクス」概念の使用は、例えば飯田剛史（一九八四）が参考になる。本稿第三章での議論もまた、「比較文明学」としての両者の類似点・相違点の可視化のための「恣意的」なものだ。本稿第三章では後述するように「サイバネティクス」概念を「所与の目的のためのフィードバックによる制御理論」として表面的に定義した。そして本稿第三章ではこの「サイバネティクス」概念が「目的」、「制御」、「フィードバック」という三つの分析的要素に分解されて考察された。これはシステム理論にその基盤をもたないトッド人類学を検討するためだ。この表面的な定義に基づいて、本稿第三章ではパーソンズとトッドの類似点・相違点を検討した。そしてこの検討を通して、本稿第四章の主題であるパターン変数と人類学的基底との「接続」のための「土台」を提供した。その「土台」とは、「近現代社会」・「前近代社会」の二発展段階と関係したパーソンズとトッドの「特徴づけ」およびそれに基づく両者の接続モデルの提示だ。本稿第三章で「前近代社会」・「近現代社会」という二つの発展段階を採用したのは、パーソンズ社会学とトッド人類学には（発展）段階論への選好があるという本稿第二章での指摘に基づく。なお本稿第三章では「ネオ・サイバネティクス」という語を、河島茂生（二〇一六）が使用した語を踏まえつつサイバネティクス以後の社会シ

システム理論の諸展開—再帰性、シナジェティクス、オートポイエーシス—を総称するものとして使用した。

本稿第三章ではまず「サイバネティクス」概念についての簡単な検討が行われた。前述したように本稿第三章ではウィーナー（[1948] 1956=二〇一一）などの定義を参照したうえで、「サイバネティクス」を「所与の目的のためのフィードバックによる制御理論」と定義した。そして「目的」、「フィードバック」、「制御」をサイバネティクスの「三要素」として取り扱った。そして山内康英・黒石晋（一九八七）、大澤真幸（二〇一一）、赤堀三郎（二〇〇九）、佐藤敬三（一九九六）等の言説に依拠して、以下の諸命題を提示した。それらは、ある経験的事象についてのサイバネティクスの記述がその経験的事象の記述についてネオ・サイバネティクスの記述と共存しうる（以下、「命題 A」）、シナジェティクスを含むネオ・サイバネティクスで記述できる前近代社会からサイバネティクスで記述できる近現代社会が出現する（以下、「命題 B」）、この「命題 B」を踏まえて「サイバネティクス」による記述を「近現代社会」の記述のためのものと解釈する（以下、「命題 B'」）、というものだ。

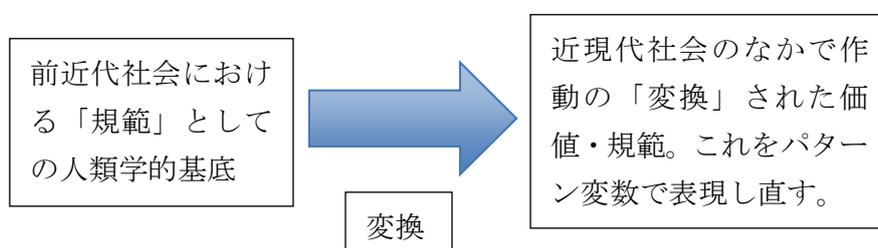
本稿第三章ではこれらの諸命題に依拠して、パーソンズ社会学とトッド人類学とが検討された。パーソンズ社会学については以下の事柄を指摘した。なお本稿第三章での後期パーソンズとは「サイバネティクス」概念を明示的に採用して以後のパーソンズ社会学を指し示す。後期パーソンズ社会学は「サイバネティクス」概念に依拠しつつ「進化論」の枠組みで「シナジェティクス」概念と接続し「再帰性」概念の萌芽を有し「オートポイエーシス」概念と共存しうるという意味でサイバネティクス—ネオ・サイバネティクスの「連続性」のなかにある、といえる。初期パーソンズにおける社会システムと文化システムとの関係性に注目することで、この議論を初期パーソンズに拡張する余地があることがわかる。よって、初期を含めてパーソンズ社会学に前項で指摘した「命題 A」を適用することができる。また「命題 B」、「命題 B'」に基づいてパーソンズ社会学を、「前近代社会」についてのネオ・サイバネティクスの記述と接続可能な「近現代社会」についてのサイバネティクスの記述だと定義できる。トッド人類学についても以下の事柄を提示した。なお以下での後期トッドとは本稿第二章と同様に『家族システムの起源』以後のトッドだ。初期トッドはサイバネティクスの体を成さない「制御理論」と呼ぶほかない。これは後期トッドであっても同様だ。ただし、『家族システムの起源』において家族システムの生成・変動・伝搬とそれに伴う価値・規範システムの変動を詳細に議論していることによって、後期トッド人類学は「サイバネティクス」概念や「ネオ・サイバネティクス」概念による「特徴づけ」を考えるうえでの様々な論点を提供している。ただしこれらの論点は、本稿著者の手に余るものだった。しかしながら、本稿第三章での議論に基づいて以下の指摘をトッド人類学に対して行うことができる。本稿第三章では「命題 B」を踏まえて、「サイバネティクス」による記述を「近現代社会」の記述のためのものと解釈するという「命題 B'」を提示した。それに対してトッド

人類学には、単なる「制御理論」である初期トッドから多様な論点を包含する後期トッド—ただし明示的には初期トッドと同様に単なる「制御理論」にとどまる—へとという変遷がある。ここで「命題 B'」における「サイバネティクス」を「制御理論」に置き換える。そうすれば、トッド人類学は「近現代社会」の記述に特化しない方向性へと変遷しつつあるといえる。これは初期トッドを代表する『第三惑星』が「近現代社会」のイデオロギーを対象とした研究書であったのに対して、『家族システムの起源』が「前近代社会」における家族システムの生成・変動・伝搬についての研究書であり、『不均衡という病』がこの『家族システムの起源』を踏まえた著書であることに対応する。

以上の検討に基づいて、本稿第三章では以下の結論を提示した。本稿第三章ではパーソンズ社会学に「命題 A」、「命題 B」、「命題 B'」を適用した。これはつまり、パーソンズ社会学は「近現代社会」の記述に特化したモデルだということだ。本稿第三章の議論から浮上したのは、「近現代社会」の記述に特化したモデルであるがために、価値・規範システムによるサイバネティクス的な意味での「制御」を重要視するパーソンズだ。それに対して本稿第三章の議論から導出されたトッド人類学の印象は大きく異なる。パーソンズと異なり「サイバネティクス」概念に依拠しているわけではないが、トッド人類学の基本は人類学的基底という価値・規範システムによる「制御」理論だ。しかしトッド人類学は、「近現代社会」の記述に特化しない方向性—詳細な議論を無視して誇張すれば「ネオ・サイバネティクス」的方向性—へと変遷しつつある。したがって、パーソンズ＝トッド接続において重要な役割を果たすのは、「サイバネティクス」概念に基づいた「特徴づけ」においてパーソンズ社会学に相対的に近い初期トッドだ。パーソンズ＝トッド接続において初期パーソンズが重要だという本稿第二章での指摘とこの指摘を組み合わせるならば、パーソンズ＝トッド接続で重要なのは初期パーソンズと初期トッドだ。そしてこれは初期パターン変数と初期人類学的基底との「接続」が重要であることを意味する。ところで、『第三惑星』の議論は「近現代社会」のイデオロギーが「前近代社会」における農民家族システムが提供した価値・規範システムによって「制御」されている—あくまでその舞台は「近現代社会」—ものとみなす研究書だ。これまで触れてきたようにこの著書では「人類学的基底」の変動が考慮されていない

(Todd, 1983=二〇〇八：二九〇—二九三) が、議論の性質から言って「近現代社会」のイデオロギーを「制御」するのは「近現代社会」の直近の農民家族システムが産出した価値・規範システムだ。トッドがこのような価値・規範システムを本稿でいう「近現代社会」についての記述に使用するのには、トッドによるその疑似的な適用に過ぎない。実際、本稿第四章で検討されるようにトッドは『第三惑星』から一貫して「基底とその作動との逆転現象」を「人類学的基底」概念で「近現代社会」を分析するときに考慮している—例えば本稿第四章で取り上げたように『第三惑星』では直系家族システムの不平等主義規範が二〇世後半の「環境」のなかで平等主義実践に転換されると指摘された (Todd, 1983=二〇〇八：一一六—一一七)。これは「周りの環境」の変化に伴う価値・

規範システムの「変換」だ。他方で本稿第四章において指摘したように、川越次郎（二〇〇二）は進藤雄三（一九八六）などが初期パターン変数を前近代・近現代の二項対立図式の集大成だと評価していることを紹介している（川越、二〇〇二：一九六）。本稿第四章においてパーソンズ社会学を「近現代社会」の記述に特化したモデルだと見做したことからわかるように、これは「近現代」の側から見た前近代・近現代の二項対立図式ということだ。したがって、本研究における初期パターン変数と初期人類学的基底との「接続」は、トッドにおける「前近代社会」の「規範」についての記述としての人類学的基底が「近現代社会」における「価値」として「変換」されたものをパターン変数で表現しなおす、というものだ。本稿第三章ではこの指摘を以下の図によって表現した。



本稿 3-5.の記述に基づいて本稿著者が作成

本稿第四章の要約

本稿第四章では、人類学的基底とパターン変数との接続が議論された。本稿第四章では最初にパターン変数と人類学的基底との接続の基礎事項が確認された。以下で記述する。第一に、これまで議論してきたように、初期パターン変数と初期人類学的基底との接続を最初に考えることが重要だ。初期パターン変数は AGIL 図式として定式化された後期パターン変数と異なり進化的アップグレードとの結合が相対的に弱い。人類学的基底が初期から一貫して進化的アップグレードとの結合が弱いのは本稿第二章の議論からも自明だが、そのうえで本稿第三章において議論したように「サイバネティクス」概念に基づいた「特徴づけ」においてパーソンズ社会学に相対的に近い初期トッド—初期人類学的基底が重要だ。他方で前述したように、初期パターン変数と初期人類学的基底には二項対立図式の組み合わせという共通項がある。よってこの接続の第一段階は、初期パターン変数と初期人類学的基底の対応関係の整理だ。この「接続」の「形式」については本稿第三章の結論として論じた。つまり本研究における初期パターン変数と初期人類学的基底との「接続」は、トッドにおける「前近代社会」の「規範」についての記述としての人類学的基底が「近現代社会」における「価値」として「変換」されたものをパターン変数で表現しなおす、というものだ。第二に、松本（一九九七）における「規範科学」（normative science）—価値・規範システムそのものを研究—と「説明科学」

(explanatory science) —価値・規範システムと行為との関係性を研究—の相違についての記述（松本、一九九七：四八一—四九）からパターン変数と人類学的基底の性質について指摘した。パターン変数は松本（一九九七）のいう「説明科学」としてのパーソンズ社会学から「規範科学」としての側面を取り出したものだ。AGIL 図式以前の初期パターン変数は特にその傾向が強い。他方でトッドの人類学的基底は、初期において「規範科学」としての側面が強く、後期において「説明科学」としての側面がやや強まった。前述した人類学的基底の「形成史」からこのことは伺える。この点からも、「規範科学」としての側面が強い初期パターン変数と初期人類学的基底との接続が、議論の簡略化という点から有用だ。第三に、パターン変数と人類学的基底における行為主体の位置づけについて確認した。松岡（二〇〇七）は、パターン変数が「主意主義的行為理論」という枠組みのなかで行為者の主体的選択と結びついていると指摘している（松岡、二〇〇七：二三五）。このことは前述したパターン変数「形成史」からも明らかだ。それに対して、本稿第二章で宮本孝二（一九九八）のギデンズについての議論を踏まえて指摘したように、トッドはレヴィ＝ストロース的な「無意識」概念によって「人類学的基底」概念を説明している。この差異は重要だが、本研究の議論にとって間接的なため考慮しない。第四に、パターン変数と人類学的基底の科学的性質の相違について記述した。前述したようにパターン変数の最初の定義は、「行為者の状況に出会うとき、彼にとってその状況が決定的な（曖昧でない）意味をもちうる前に、行わなければならない五つの基本的な二者択一を定式化」（Parsons & Shils, 1951 = 一九六〇：一四〇—一四一）したものだ。これはパターン変数が分析的最小単位として定義されていることを意味している。それに対して初期人類学的基底の二つの対立図式である、自由主義—権威主義、平等主義—不平等主義は、分析的最小単位だと明言されていない。したがって両者の接続は科学的に異なるレベルのものを接続していることになる。本稿ではすでに人類学的基底とパターン変数との表現の相違に言及してきたが、その理由は両者の科学的レベルの相違に由来するのかもしれない。他方でこれまで触れてきたように、両者の表現が異なるもう一つの理由として本稿では、人類学的基底の基盤となる農民家族システムとパターン変数が展開している「周りの環境」が異なる—前近代的農村社会と近現代的産業社会——ということを指摘してきた。パターン変数と人類学的基底とを「接続」するにあたって本稿では、両者の表現の相違についてのこの二つの解釈のうち前者を考慮せず後者を重視する。そもそもパーソンズは前述した定義にもかかわらず、パターン変数を経験的構成物に寄せて使用する傾向がある。その例は本稿第四章で使用した『社会体系論』での議論だ。第五に、パターン変数と人類学的基底との「接続」における「地域」について言及した。本研究ではこの「接続」にあたって、経験的地域を媒介とした。例えばパターン変数についての「アメリカ」についての言説が、人類学的基底における「アメリカ」についての言説と「接続」された。本研究で使用されたのは、『社会体系論』におけるアメリカ、ドイツ、中国、中南米といった大規模社会の性質をパターン変数で記

述した部分 (Parsons, 1951=一九七四：一八七一—二〇五) と、『第三惑星』における議論だ。両者の「地域」についての認識は同一ではない。パーソンズの『社会体系論』では「アメリカ」や「ドイツ」、「中南米」といった地域はそれ以上掘り下げられることなく使用される。他方でトッドの『第三惑星』では「ドイツ」や「中南米」といった地域に対するより詳細な検討も垣間見える。とはいえ『第三惑星』という著書の段階では、トッドは「アメリカ」や「ドイツ」、「中南米」といった地域をほぼ単一の人類学的基底—決して厳密に単一ではない—によって記述している。したがって本稿では両者の「地域」についての認識レベルをほぼ同一のものと見做した。最後に、本稿付論 A でも触れたことだが、パターン変数と人類学的基底との「接続」と関係した本章で使用する諸概念について改めて整理した。本稿第四章ではこの接続を表現するために「変換」という概念を使用した。ここでの「変換」という言葉は単に価値・規範システムの「作動」のあり方が何らかの理由で変容することを厳密な定義なしに表現しているに過ぎない。また本章ではパターン変数の表現に関して「一次的」という概念が使用される。本研究におけるこの表現は、パーソンズ社会学におけるパターン変数の使用方法に由来する。前述したように、五つの二項対立図式の組み合わせとしてのパターン変数の社会システムの諸要素に対する関りの優先度は、その二項対立の種類によって異なる。例えば前述したように『社会体系論』では、「普遍主義—個別主義」および「業績性—帰属性」が「価値志向」に優先的に関与するとされるのに対して、「感情性—感情的中立性」および「限定性—無限定性」は「動機志向」に優先的に関与するとされる (Parsons, 1951=一九七四：一一四)。本研究における「一次的」という表現はこの「優先的に関与する」ということを表現しているに過ぎない。

このような「接続」についての基礎事項の確認の後で、本稿第四章ではパターン変数の「二重性」問題が指摘された。これは本稿 4-4. で指摘したように、『第三惑星』で記述された人類学的基底そのものと『世界の幼少期』で記述された近代化プロセスを明確に区別したトッド人類学の「革新性」に基づくとき、初期パターン変数による記述を進化的アップグレードと結合した価値・規範と人類学的基底的な意味での価値・規範の「混合物」だと見做せる、ということだ。本稿第四章では前者をパターン変数の「EnfM (P) 的使用」、後者を「TroP (P) 的使用」と表記した。なお本稿第四章ではトッドにおける人類学的基底それ自体の使用を「TroP (T) 的使用」と表記し、その近代化プロセスと関連させた使用を「EnfM (T) 的応用」と表記した。パターン変数の前者としての使用法の例として、本稿第四章では『社会体系論』、『社会類型』、『近代社会の体系』からいくつかの例を引用した。後者としての使用法については、『社会体系論』におけるソ連での「機能的必要条件」と「ユートピア的イデオロギー」の対立についての記述を溝部 (二〇一一) が紹介している (溝部、二〇一一：三三) ことを踏まえつつ、『社会体系論』におけるパーソンズの「社会構造の経験的な分化と変異」(Parsons, 1951=一九七四：一五九) についての章を参照した。これらの議論については、本稿 4-4. で提示

した図を次項で再掲するので参照されたい。

このパターン変数の「二重性」問題を前提としつつ、本稿 4-7.では人類学的基底とパターン変数との「接続」が検討された。前述したようにこの「接続」は、トッドにおける「前近代社会」の「規範」についての記述としての人類学的基底が「近現代社会」における「価値・規範」として「変換」されたものをパターン変数で表現しなおす、という「形式」をとった。また前述した松本和良（一九九七）における「規範科学」と「説明科学」の相違についての記述（松本、一九九七：四八一四九）を踏まえて、この接続を「規範科学」としての接続だと定義した。この接続については、次項で再掲する本稿 4-7.で提示した表を参照されたい。なお本稿付論 A で指摘したようにその表での TroP (P-T) 接続とは、パターン変数の「TroP (P) 的使用」と人類学的基底の「TroP (T) 的使用」との接続であり、EnfM (P-T) 接続とはその「EnfM (P) 的使用」と「EnfM (T) 的応用」との「接続」だ。

本研究の結論

本研究を構成する各章は、それぞれ何らかの「独創性」を含んでいる。本稿第一章は、パーソンズ社会学が変動論を強調した議論であることの確認、およびその本稿で定義するところの「比較文明学」としての再考、において『社会的行為の構造』にまで遡った点で「独創性」を有する。本稿第二章は「構造主義」という概念を基準としてパーソンズとトッドの類似点・相違点を可視化・整理したが、この試み自体が「独創性」を有するといえる。本稿第三章も、それ自体が新しい試みだという点では同様だ。しかし本稿第四章で展開した本稿著者の試みは学術的に重要な意味を持つ。本稿第四章ではパターン変数の「二重性」問題が取り扱われた。これまで議論してきたようにパターン変数の「二重性」とは、パーソンズにおけるパターン変数の使用が「EnfM (P) 的使用」—進化的アップグレードと結合した価値・規範システムの記述としてのパターン変数—と「TroP (P) 的使用」—トッドの人類学的基底的な意味での価値・規範システムの記述としてのそれ—との「混合物」だということを表現する概念だ。本稿 4-4.で指摘したように、「EnfM (P) 的使用」と「TroP (P) 的使用」との分析的区分はトッドにおける『第三惑星』—人類学的基底の「TroP (T) 的使用」—と『世界の幼少期』—その「EnfM (T) 的応用」—との区分に対応する。以下に本稿 4-4.で提示した図を再掲する。

パターン変数の「二重性」(アメリカの場合)

	前近代社会の価値・規範システムの記述としての人類学的基底 (α)	近代化プロセスの帰結としての価値・規範システム (β)	近現代社会の価値・規範システムの記述としてのパターン変数 (γ)
EnfM(P) 的	—	普遍主義—業績性	普遍主義—業績性

使用			
TroP(P) 的 使用	自由主義—平等への 無関心	—	普遍主義—業績性

- ・「EnfM(P)的使用」では β と γ の対応関係が焦点
- ・「TroP(P)的使用」では α と γ の対応関係が焦点

本稿 4-4.の議論を踏まえて本稿著者が作成

本稿 4-1.で先行研究を踏まえつつ触れたように、パターン変数はパーソンズが社会学理論・社会システム理論の伝統に則って漸次的に積み上げた二項対立図式のセットだ。全体としてのパターン変数はパーソンズが創り上げたものだが、それを構成する各々の二項対立図式は社会学理論・社会システム理論の内部に予め埋め込まれていたものだ。したがって本稿で提示したパターン変数の「二重性」は、パーソンズ＝トッド接続という枠組みを超えて社会学理論・社会システム理論の伝統とトッド人類学とを接続する結節点となる。

本稿 4-7.ではパターン変数の「二重性」問題からさらに一步進めて、二項対立図式のセットとしての初期パターン変数と初期人類学的基底とのより具体的な「接続」を検討した。これまで何度も触れたように、「規範科学」(松本、一九九七：四八一四九)としての接続だ。以下に本稿 4-7.で提示した表を再掲しておく。

TroP (P-T) 接続

表現対象	前近代社会における作動	近現代社会における作動の一次的表現	参照
基底 fs	権威—不平等主義	帰属性—無限定性 普遍主義を TroP(P)的なものとみなすかどうか保留 普遍主義を TroP(P)的なものとみなせば、集合体志向 ただしここでの普遍主義はイデオロギーに関係せず	接続①’ 接続② 接続②’ 接続⑦
基底 fna	自由—平等への無関心	普遍主義—業績性 限定性—感情中立性を加えうる 自我志向 ただしここでの普遍主義はイデオロギーに関係せず	接続①’ 接続③ 接続⑦
基底 fne	自由—平等	個別主義—帰属性—自我志向 接続③’を採用するならば限定性を	接続①’ 接続④

		付加 ただしここでの個別主義はイデオロギーに関係せず	接続⑦
基底 fc	権威—平等主義	普遍主義—帰属性—無限定性 ただしここでの普遍主義はイデオロギーにのみ関係	参考 接続⑦
個人主義	自由—権威主義 平等・不平等主義 規範なし—あり 外婚—内婚	自我志向—集合体志向（同順）	接続①
個人主義		普遍主義—業績性（—限定性）、個別主義—帰属性の一次的記述が自我志向と関係し、普遍主義—帰属性の一次的記述が集合体指向と関係	接続①’
自由主義	自由—権威主義	限定—無限定性（同順）	接続③’
平等主義	平等—不平等主義	前近代社会の基底の作動としばしば逆転する実践としての平等主義—不平等主義が業績性—帰属性によって記述される。同順ではない。ただし逆転がない場合もある。	接続④’
平等主義		近現代社会の作動の記述としての業績性—帰属性の記述対象からイデオロギーを排除。	接 続 ④’ ’ ’

本稿 4-7.の議論を踏まえて本稿著者が作成

TroP (P-T) 接続

表現対象	前近代社会における作動の人類学的基底による表現	前近代社会における作動のパターン変数による一次的表現	参照
封建主義	基底 fs	個別主義	接続②’ ’
官僚制	基底 fs	普遍主義	接続②’ ’
基底 fne	基底 fne	普遍主義	接続④’ ’

※この接続は単なる表現の相違だ。

本稿 4-7.の議論を踏まえて本稿著者が作成

EnfM (P-T) 接続（ただし二次的に TroP (P-T) 接続）

はこの「飛躍」を「体系化」することに貢献するものであり、パターン変数という媒介を通して社会システム理論の枠内で人類学的基底を研究する端緒を開くものだ。

本稿は社会システム理論がなぜ不人気なのか、という問いかけから始まった。そして本稿ではその回答のひとつとして、昨今の社会システム理論がシステムの作動上の「リアリティ」と重複しつつ同じでない人類学的な「リアリティ」を軽視しているからではないかということを示した。また本稿は社会システム理論の範囲内で前述した人類学的な「リアリティ」を重視した研究を行うために、「共時的比較」を重視しつつ変動論を考慮した分野横断的社会研究というような意味での「比較文明学」に依拠し、価値・規範システムを過度に重視した議論を行うことを表明した。ただし本稿で実際に行った研究は(社会)システム理論というよりは(社会)学史的なものだ。本研究が提示する上記の表は本稿で定義する意味で「比較文明的」なもので、価値・規範システムを中心としたものだ。そして本研究で提示した表で社会システム理論と関係づけられている「人類学的基底」概念の背後にはトッド人類学の多様な言説がある。その一例は本稿序論で指摘した『移民の運命』における移民の政治システムから独立した人類学的同化プロセスについての分析だ。また本稿では『家族システムの起源』や『不均衡という病』のような著書におけるトッド人類学の様々な言説—家族システムの生成・伝搬・変動についての諸議論や「場所の記憶」(Todd & Le Bras, 2013=二〇一四:一七)、人類学的基底と農村環境との関係性についての言説、など—toに触れてきたし、本稿では付論 A で指摘した理由から副次的にしか触れなかったが『新ヨーロッパ大全』でトッドはヨーロッパにおける人類学的基底とそれを取り巻く環境について様々な議論を展開している。したがって本研究で提示する上記の表は、社会システム理論に人類学的「リアリティ」を「再受容」させるための結節点を提供している。そして本研究が提示する上記の表は、本稿序論で提示したトッド人類学の「革新性」—イデオロギー分析や近代化プロセスについての説明—を包含してもいる。そもそも基底 *fna*、基底 *fs* といった人類学的基底の区分自体にトッド人類学の「革新性」—例えば価値・規範システムについて中央ヨーロッパと日本・朝鮮との類似性を指摘している—が組み込まれている。以上から本研究が提示するこの表は、社会システム理論よる人類学的「リアリティ」の再受容に貢献する比較文明的なものであり、そこで中心的な役割を果たしているのはトッド人類学の「革新性」を包含した価値・規範システムだと明言できる。もちろん本研究が提供するこの表には問題点も多い。本稿第四章では、本研究が提供するこの表だけでは松本(一九九七)の言うところの「規範科学」にとどまり社会システム理論として成立しないということを既に指摘した。また、本研究が「近現代社会」の内部での「暴力的形態におけるイデオロギーの衰退」(Todd, 2011=二〇一六:一八)を全く無視したものであることも指摘した。これらの諸問題点の解決は、本研究以後の課題だ。

最後に本研究でパーソンズ社会学が果たしてきた役割を振り返ることで、現代社会学ならびにその近接領域におけるパーソンズの位置づけを再定義しておく。本稿序論では

パーソンズ社会学が社会システム理論と人類学的諸研究との関係性という点で、ルーマンやデュルケム等と比べて「絶妙な位置」にあるということが指摘された。繰り返すがこれは、システム理論としてより精緻なはずのルーマン社会学と比べて人類学的諸研究とより親和的のように思われ、かつデュルケム等と比べて社会システム理論としてより作りこまれているということだ。この記述が、本研究におけるパーソンズ社会学の位置づけの出発点だった。本稿第一章ではパーソンズ社会学の本稿で定義する意味での「比較文明学」的なものとしての再検討が行われた。前述したようにここでの議論は概ね先行研究を踏まえたものだが、パーソンズ社会学がトッド人類学と同じ「土俵」に乗りうることは確認された。本稿第二章では、「構造主義」概念を基準としたパーソンズ社会学とトッド人類学との類似点・相違点が検討された。先行研究を踏まえつつパーソンズ社会学に「構造主義以後」的側面が確認された点もまた重要だが、それ以上に本稿第二章ではパーソンズの構造主義的側面が単なる「欠点」とみなされなかった点がより肝要だ。トッド自身の意図に反して構造主義的側面を多く含むかのようにみえるトッド人類学との「接続」には、パーソンズ社会学の構造主義的側面が大きく貢献しているように思われた。本稿第三章では、「サイバネティクス」概念を基準としたパーソンズ＝トッド接続が議論された。ここでも本稿第二章と同様に、パーソンズ社会学における「サイバネティクス」としての側面は単なる「欠点」とみなされていない。本稿第三章における山内・黒石（一九八七）や大澤（二〇一〇）の言説を踏まえた議論のなかで、パーソンズ社会学は価値・規範システムの「近現代社会」における形式・作動を記述することに特化した理論モデルとして立ち現れた。このようなパーソンズ社会学の位置づけを可能にしたのは、その「サイバネティクス」としての側面だった。これまでの議論からわかるようにパーソンズ社会学がしばしば周縁化されてきた原因だった複数の側面が、本研究ではその「強み」に転化されてきた。この傾向は本稿第四章の議論で加速される。これまで何度も触れてきたように本稿第四章で提示した表は、トッドにおける「前近代社会」の「規範」についての記述として的人类学的基底が「近現代社会」における「価値・規範」として「変換」されたものをパターン変数で表現しなおす、という「形式」をとった。本稿ではこれまでこの接続におけるトッド人類学の重要性に何度も触れてきた。しかしこの接続において本当に重要な役割を果たしているのはパーソンズ社会学だ。トッド人類学の「革新性」それ自体はトッド人類学の内部で閉じている。しかし本稿でこれまで議論してきたようにその社会システム理論との「接続」は、パーソンズ社会学なしでは困難だ。この接続は、パーソンズ社会学が「近現代社会」における価値・規範システムの本稿で定義する「比較文明学」的記述として優れたものだったからこそ可能だった。確かにパーソンズ社会学は近現代社会—というより二〇世紀社会—の記述に特化しすぎたために、本稿第四章で論じたトッドのいう「暴力的形態におけるイデオロギーの衰退」（Todd, 2011＝二〇一六：一八）の時代—つまり二一世紀社会—のための理論モデルとしては必ずしも適切ではないかもしれない。油井（二〇〇二）のいう「近代

を生き尽くそうとした人間」(油井、二〇〇二：五)としてのパーソンズの負の側面だ。しかし本研究の分析の範囲内では、パーソンズのこの「欠点」さえも「強み」に転化されたように思われる。以上から本研究ではパーソンズ社会学を以下のように位置付けることができる。第一に、本研究の分析の範囲内では、近現代社会—おもに二〇世紀社会—における価値・規範システムの比較文明的記述としてのパーソンズ社会学はその「欠点」を「強み」に転化させてきた。その理由は、本研究が二一世紀現代社会でいままさに生じている現象を記述するための学問としての「社会学」でないからだ。本稿付論 A では本研究における「社会学」、「人類学」ならびに「比較文明学」の関係性が議論された。それによれば、「人類学」が「類似性とともなひ差異にも敏感で、人間世界を地球規模の視点だけでなく、現場 (local) の視点からも同時に照射する」(Eriksen, 2004=二〇〇八：七) 学問であり、それぞれの研究者が「専門とする調査地域」(Eriksen, 2004=二〇〇八：八) を有しつつ「地球規模的 (global) な視点での文化的多様性」(Eriksen, 2004=二〇〇八：九) を理解することで「現実世界における文化的多様性にかかわる知識をもたらす」(Eriksen, 2004=二〇〇八：八) ものであるのに対して、「社会学」は「常識とは無関連に (=常識に合致するしないにかかわらず) 正しい結論を追求する」(佐藤俊樹、二〇一一：九) 哲学のような学問とは異なり「いったん常識を手放しておいて、最終的には (別の) 常識的な考え方に戻っていく」(佐藤、二〇一一：九) ことを特徴としその研究対象は「自分自身が関わる社会事象」(佐藤、二〇一一：三三) だ。伊藤編 (一九九七) などとはその使用法が異なるかもしれないが、本研究では「比較文明学」をこのような「社会学」と「人類学」との重複部分だと解釈した。ところで本研究では既に本稿第一章で、パーソンズ社会学をこのような「比較文明学」だと位置づけている。しかしながら、本研究のなかでパーソンズ社会学が果たしてきた役割を考えるならば、パーソンズ社会学をより「人類学」的に解釈するべきではないか。つまりパーソンズ社会学を「社会学」と「人類学」との重複部分としての「比較文明学」として解釈するというよりも、二〇世紀社会の記述に特化した人類学的研究として積極的に再評価できるのではないかということだ。これは「近代を生き尽くそうとした人間」(油井、二〇〇二：五) という油井 (二〇〇二) のパーソンズ評価と重複するがさらに積極的な評価だ。第二に、佐藤 (二〇一一) はパーソンズを「伝道師」(佐藤、二〇一一：四三一) と評している。佐藤 (二〇一一) はパーソンズのシステム理論を否定的に評価しつつも「パーソンズが社会の論理的構築という形で考えたことで、その失敗にもかかわらず、いやむしろその失敗を出発点にして、社会を考えることや、社会を考えることを考えることを、開かれた問として、継続的に考え直すことができるようになった」(佐藤、二〇一一：二一六—二一七) と指摘している^[1]。しかしながら、前述したように二〇世紀社会の記述に特化した人類学的研究としてパーソンズを再評価するならば、それは決して「失敗」ではない。だからこそ、本研究はパーソンズ社会学なしに成立し得ないのだ。

註

[1] 本稿第一章で取り上げたように、佐藤（二〇一一）はパーソンズ社会学における構造機能主義は相互行為の挙動の近似モデルとして成立していない（佐藤、二〇一一：二〇八―二一〇）と批判している。本研究の諸議論はこのような佐藤（二〇一一）の批判に対する反論としては全く成立していない、ということを断っておく。

付論 B—今後の展望についての示唆

本研究ではその結論として、人類学的基底とパターン変数との「接続」を意味する表を提示した。この表は人類学的基底を社会システム理論の枠組みで取り扱うことに貢献する。そしてこのことは、社会システム理論に人類学的「リアリティ」を再受容させるということに他ならない。ところでパターン変数はパーソンズ社会学の産物なのだから、ここでの「社会システム理論の枠組み」はパーソンズ社会学で表現することができる範囲に限定されるのではないか。だとすれば、本研究のこの結論はその学術的意義を制限されてしまう。しかしながら、もしパターン変数を現代社会システム理論と「接続」することができるならば、本研究の前述した「難点」は解消されるはずだ。この「接続」の一例は、パターン変数の特定の組み合わせと所与の数理モデルの特定の「作動」との「関係性」を定義することだ。もちろんこのような「接続」は本稿著者にとって本研究以後の課題であり、その詳細な議論をこの付論 B で行うことはできない。しかしその「試論」を以下に提示しておく。なお以下の記述は本稿著者の第八九回日本社会学会大会における発表—小川晃生（二〇一六）—に基づく。

本稿第四章でパターン変数「形成史」を記述する中で本稿著者は、パターン変数がテンニースにおけるゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念の批判的再考から出発しているという川越次郎（二〇〇二）の指摘を紹介している。同様の指摘は Chazel（1974＝一九七七）にもある。そして Chazel（1974＝一九七七）によればゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念は理念型なのであり（Chazel 1974＝一九七七：五七）、パターン変数の組み合わせである感情性—無限定性—個別主義—帰属性（ゲマインシャフト）・感情中立性—限定性—普遍主義—業績性（ゲゼルシャフト）で表現される（Chazel 1974＝一九七七：六二）。なお、パターン変数の表記は本稿第四章と統一してある。他方で辻竜平（二〇〇四）は Watts&Strogatz（1998）のシミュレーション・モデルを使い、「信頼関係」に注目したうえで、「都市への適応のあり方」の日米比較を行っている。辻（二〇〇四）によれば前述したモデルを使用してシミュレーションを行うとき都市への適応戦略が複数存在することを突き止めることができる。そして辻（二〇〇四）はそれらの戦略をテンニースのゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念に基づいて定義した。辻（二〇〇四）の研究はこのようにして定義された「戦略」に基づく日米比較だ。以下の引用を参照せよ。

人口規模 N	大きい	大きい
信頼関係の種類	個別的信頼によるコミット関係	一般的信頼による「信頼」関係
交際範囲 $N\sigma$	限定的で小さい	開放的で大きい
被信頼者数 $k\tau$	絶対量・人口比とも小さいが、際範囲の比では大きい	交絶対量が大きく、人口比はやや大きい

ネットワークのランダムさ p	低くても高くても可	ある程度低く維持する必要あり
不確実性への対処	交際範囲を小さくすることによって低減	被信頼者数を大きくすることによって低減
社会の種類	ゲマインシャフト的な要素とゲゼルシャフト的な要素の混在・安心社会	典型的ゲゼルシャフト・典型的信頼社会
場所の例	日本の都市	アメリカの都市

辻 (二〇〇四：六〇) より引用。

ただし簡略化し本研究と関係する部分のみ引用。

なお下線部は本稿著者が誤表記を訂正した部分。

以上の Chazel (1974=一九七七) や辻 (二〇〇四) の議論を踏まえれば、本研究と関連して以下のことがいえる。辻 (二〇〇四) による前述した「戦略」を使用した「都市への適応のあり方」についての日米比較を、ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念を媒介としてパターン変数と関係させることが可能なはずだ。これはパターン変数による記述と Watts&Strogatz (1998) のシミュレーション・モデルの作動とを関係させるということの意味するのではないか。そして本稿で提示したパターン変数と人類学的基底との「接続」をふまえるならば、これは人類学的基底による記述と Watts&Strogatz (1998) のシミュレーション・モデルの作動とを関係させることを意味するはずだ^[1]。

上述した本稿著者の研究は「試論」にすぎず本博士論文公開の時点では全く不十分なものだが、本研究を発展させる方向性の一つを示唆している。今後は、社会システム理論に人類学的「リアリティ」を再受容させることに貢献する形で、価値・規範システムの「作動」の種類による差異をより詳細に研究してゆきたい。

註

[1] ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念と「人類学的基底」概念とを結び付ける言説はTodd自身にもみられる。Todd (1994=一九九九：九四—九五) を参照せよ。ただしパターン変数を媒介としなければ、より精緻な議論は困難なはずだ。

謝辞

本博士論文を執筆するにあたって、さまざまな方からご指導、ご助言を賜りました。主指導教官である白鳥義彦先生は、本稿著者の研究について他分野の研究者として俯瞰的にご指導、ご助言をして下さいました。また白鳥先生は研究についてだけでなく、大学院生活に関わる様々な事柄について相談に乗って下さいました。副指導教官の一人である油井清光先生は、本博士論文のテーマの一つであるパーソンズ社会学について、その専門分野の研究者として随所で貴重なご指導、ご助言をして下さいました。もう一人の副指導教官である松田毅先生は、特に本博士論文の口頭試問において、貴重なご指導、ご助言をして下さいました。この場をお借りして、深謝致します。その他にも本博士論文を提出した神戸大学大学院の先生方からさまざまなご指導、ご助言を賜りました。その中でも、社会学研究室の藤井勝先生には経験的地域研究の専門家として貴重なご指導、ご助言を賜りました。また同じく社会学研究室の平井昌子先生には、特に本博士論文のテーマの一つであるトッド人類学について、貴重なご指導、ご助言を賜りました。さらに、同じく社会学研究室の佐々木祐先生もまた、貴重なご指導、ご助言をして下さいました。この場をお借りして、深謝致します。さらに、本稿著者が所属した神戸大学社会学研究室の研究員、大学院生諸氏からもさまざまなご指導、ご助言を賜りました。その中でも梅村麦生氏は、さまざまな点で相談に乗って下さいました。また王男瀟氏は、本稿著者にとって貴重な研究についての議論の相手になって下さいました。この場をお借りして、深謝致します。本博士論文の一部を日本社会学会ならびに関西社会学会において発表した際に、様々な先生方から貴重なご指導、ご助言を賜りました。この場をお借りして、深謝致します。最後になりましたが、京都大学大学院教育学研究科の稲垣恭子先生は本稿著者の学部卒業以後も相談に乗って下さり、貴重なご指導、ご助言を賜りました。この場をお借りして、深謝致します。

引用・参考文献

- 赤堀三郎、二〇〇九、「戦後アメリカにおけるサイバネティクスと社会学」『経済と社会：東京女子大学社会学会紀要 37』一九—三四頁
- 赤坂真人、二〇〇七、「パーソンズ以降における社会システム理論の展開」『吉備国際大学社会学部研究紀要 第17号』一一—四頁
- 新睦人、一九九五、「現代社会の変動と家族システム—“ポストモダニゼーション”との関連で」『家族社会学研究 7』七一—二二頁、一三二頁
- 青本和彦ほか編、二〇〇五、『岩波数学入門辞典』岩波書店
- 馬場靖雄、二〇〇一、『ルーマンの社会理論』勁草書房
- Bauman, G. & Vecchi, B., 2004, *Identity*, Polity Press Ltd. (=二〇〇七、伊藤茂訳『アイデンティティ』日本経済評論社)
- Bradley, I. & Meek, R. L., 1986, *MATRICES AND SOCIETY Matrix Algebra and Its Applications in the Social Sciences* (=一九九二、小林淳一、三隅一人訳『社会のなかの数理—行列とベクトル入門—』九州大学出版会)
- Chang-kyung-Sup, 2010, *South Korea under compressed modernity: familial political economy in transition*, London Routledge
- Chazel, François, 1974, *La theorie de la société dans l'oeuvre de Talcott Parsons, Mouton* (=一九七七、酒井正三郎訳『社会の分析的理論—タルコット・パーソンズの著作における—』中部日本教育文化会)
- 大黒正伸、二〇一三、「パーソンズと機能システム理論の課題—「構造—機能」理論に新しい意味を求めるための覚書」『ソシオロジカ (1・2)』一二五—一五二頁
- Durkheim, E., 1912, *Les formes élémentaires de la vie religieuse: le système totémique en Australie*, Paris (=一九七五、吉野清人訳『宗教生活の原初形態』上下 岩波文庫)
- 遠藤薫、二〇一一、「〈社会システム論〉再考—歴史変動を理論化する〈社会システム論〉のための覚え書き」『社会システム学をめざして』ミネルヴァ書房 二〇〇—二一四頁
- Eriksen, T.H., 2004, *What is Anthropology?*, Universitetsforlaget AS, Oslo, Norway. (=二〇〇八、鈴木清史訳『人類学とは何か』世界思想社)
- 橋本真、一九六二、「社会構造分析のための概念図式としての型の変数について」『人文学 (61)』同志社大学人文学会 四五—六八頁
- Habermas, J. & Luhmann, N., 1971, *Theorie-Diskussion Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie: Was leistet die Systemforschung?*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main (=一九八七、佐藤嘉一ほか訳『批判理論と社会システム理論—ハーバーマス=ルーマン論争』木鐸社)
- 濱口恵俊、一九九七、「文明としての社会システム」伊東俊太郎編『比較文明学を学ぶ

- 人のために』一七二—一八八頁
- 平賀正剛、二〇一四、「概念フレームワークの文化的基底—エマニュエル・トッドの著作を枠組みとして—」『経営管理研究所紀要 第21号』七一—八四頁
- 平野泰郎、一九九九、「訳者あとがき」『経済幻想』三八四—三八九頁
- 藤田弘夫、二〇〇九、「〈書評〉今田高俊著『意味の文明学序説：その先の近代』」『社会学評論 53 (3)』四二—四二五頁
- Huntington, S. P., 1996, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, Simon & Schuster, New York (=一九九八、鈴木主税訳『文明の衝突』集英社)
- 飯田剛史、一九八四、「デュルケームの儀礼論における集合力と象徴」『社会学評論 35 (2)』一七八—一九二頁、二四三頁
- 池田誠、二〇〇九、「四大文明のシミュレーション・モデルの研究」『システムダイナミックス No.8』六一—七六頁
- 今田高俊、二〇〇一、『意味の文明学的序説：その先の近代』東京大学出版会
- 、二〇〇四、『自己組織性と社会』東京大学出版
- 今田高俊・鈴木正仁・黒石晋編、二〇一一、『社会システム学をめざして』ミネルヴァ書房
- 今津勝紀、二〇一四、「古代家族の復原シミュレーションに関する覚書」『国立歴史民俗博物館研究報告 192』一一七—一二七頁
- 石崎晴己編、二〇〇一、『世界像革命 [家族人類学の挑戦]』藤原書店
- 石崎晴己、二〇一四、「訳者解説」『不均衡という病 フランスの変容 1980-2010』藤原書店 三九六—四一三頁
- 伊東俊太郎編、一九九七、『比較文明学を学ぶ人のために』世界思想社
- 泉幽香、一九七二、「レヴィ=ストロースの『構造』認識について—『親族の基本構造』をめぐる交換論の視点から—」『社会学評論 22 (4)』日本社会学会 三七—五九頁
- 柏岡富英、二〇〇九、「社会学における比較文明論の系譜」『比較文明 25』比較文明学会 九十三—一一〇頁
- 門口充徳、二〇一二、「アボリジニ社会から構造主義へ—E・デュルケム著『宗教生活の原初形態』の位置づけ—」『成蹊大学文学紀要 (47)』一一七—一三一頁
- 小林月子、一九九七、「宗教的シンボリズムと社会進化」佐藤勉編『コミュニケーションと社会システム—パーソンズ・ハーバーマス・ルーマン—』九六—一一六頁
- 熊谷文枝編著、一九九七、『日本の家族と地域性 [上] 東日本の家族を中心として』ミネルヴァ書房
- 鹿島茂、二〇一七、『エマニュエル・トッドで読み解く世界史の深層』ベスト新書
- 河本英夫、一九九五、『オートポイエシス—第三世代システム』青土社
- 河島茂生、二〇一六、「ネオ・サイバネティクスの理論に依拠した人工知能の倫理的問

- 題の基礎づけ」『社会情報学 第5巻2号』五三一六九頁
- 川越次郎、二〇〇二、「「パターン変数」の批判的再構成：三つのテキストにおけるパ
 ックスを中心に」『岐阜聖徳学園大学紀要 教育学部編 41』一八五—二〇四頁
- 木村雅文、二〇一〇、「T.パーソンズとドイツ社会論」『大阪商業大学論集 第5巻第4
 号 社会科学篇』一一—一六頁
- 、二〇一〇b、「T.パーソンズとソヴェト社会論」『大阪商業大学論集 第6巻
 第2号 社会科学篇』一九—三三頁
- Luhmann, N., 1980, *Gesellschaftsstruktur und Semantik 1*, Suhrkamp Verlag
 Frankfurt am Main (=二〇一—、徳安彰訳『社会構造とゼマンティック I』法政
 大学出版局)
- , 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag
 Frankfurt am Main (=二〇〇九、馬場靖雄ほか訳『社会の社会 1』法政大学出
 版局)
- 丸山哲央、一九七七、「文化体系の諸要素：パーソンズの文化体系論の検討を通して」
 『金城学院大学論集.社会科学編 19』二十九—五十三頁
- 、一九九一、「[解説] T・パーソンズの文化システム論」『文化システム論』
 ミネルヴァ書房 一三三—一五八頁
- 真鍋一史、二〇一七、「日本における宗教性の諸相とその構造—「世界価値観調査」の
 データ分析—」『関西学院大学社会学部紀要』四七—六七頁
- 松岡雅裕、一九九八、『パーソンズの社会進化論』恒星社厚生閣
- 、二〇〇七、「テーマ別動向 (パーソンズ) —着実に進行する世代間連携の研
 究姿勢—」『社会学評論 58 (2)』日本社会学会 二三一—二四二頁
- 松本和良、一九八四、「社会学と近接科学 (IV) —パターン変数図式と AGIL 図式につ
 いて—」『人文科学研究 (66)』新潟大学人文学部 三五—六五頁
- 、一九九七、『パーソンズの社会学理論』恒星社厚生閣
- 三原武司、二〇一五、「ギデنز社会理論の遺伝子—文化共進化理論的再構成の試み—2
 つの再帰性とその神経科学的基礎—」『社会学評論 66 (3)』日本社会学会 三六
 四—三七八頁
- 三嶋唯義、一九八八、「構造主義の言語学、その系譜と起源」『京都産業大学論集 人
 文科学系列 15』二六—六〇頁
- 三隅一人編、二〇〇四、『社会学の古典理論 数理で蘇る巨匠たち』勁草書房
- 見田宗介、一九六六、『価値意識の理論 欲望と道德の社会学』弘文堂
- 宮本孝二、一九九八、「構造主義、ポスト構造主義と社会理論—ギデنزの議論の紹介
 と検討—」『桃山学院大学社会学論集 32(1)』桃山学院大学総合研究所 四七—七
 三頁
- 、一九九八 b、『ギデنزの社会理論—その全体像と可能性』八千代出版

- 溝部明男、二〇一一、「社会システム論と社会学理論の展開—T・パーソンズ社会学と残された3つの理論的課題—」『金沢大学人間科学系紀要3』一四—四〇頁
- 森岡清美、塩原勉、本間康平編、一九九三、『新社会学辞典』有斐閣
- 村瀬雅俊・村瀬智子、二〇一四、「構造主義再考—自己・非自己循環理論の視点から」『クオリティ・エデュケーション 6』国際教育学会 二七一—四九頁
- 長岡克行、一九九七、「コミュニケーションと行為」佐藤勉編『コミュニケーションと社会システム—パーソンズ・ハーバーマス・ルーマン—』二七五—二九〇頁
- 直井優、一九八四、「構造—機能主義による説明とテスト可能性」『社会学評論 35(1)』一九—二八頁
- 中村秀吉、一九七一、「レヴィ=ストロースの社会観と方法」『哲学(21)』The Philosophical Association of Japan 九三—一〇七頁
- 中野秀一郎、一九七五、「〈観念の役割〉論から文化体系論へ」田野崎昭夫編『パーソンズの社会理論』誠信書房 一八八—二〇九頁
- 、一九九九、『タルコット・パーソンズ—最後の近代主義者—』東信堂
- 中丸麻由子、二〇一四、『進化するシステム』ミネルヴァ書房
- 小川晃生、二〇一五、「初期・中期パーソンズにおける文化システムの変動論—その一貫性と巨視的視座について」神戸大学大学院修士学位論文 未刊行
- 、二〇一六、「パーソンズ社会学を基盤としたシミュレーション研究についての一考察—パターン変数の数理モデルによる表現をめざして—」『第89回日本社会学会大会報告要旨集』
- 、二〇一七 a、「パーソンズ社会学・トッド人類学の収斂についての試論—「サイバネティクス」概念を中心にすえて—」『第68回関西社会学会大会報告要旨集2017』二頁
- 、二〇一七 b、「初期パーソンズ社会学の社会学史的な再解釈—比較文明学・トッド人類学を志向して—」『社会学雑誌 33』
- 、二〇一七 c、「パーソンズ社会学とトッド人類学の接続についての試論その2—構造主義人類学を基準として—」『第90回日本社会学会大会報告要旨集』
- 大野道邦、一九九〇、「構造主義と構造的な方法」中久郎編『現代社会学の諸理論』世界思想社 二五八—二八〇頁
- 、二〇一一、「ソローキンとパーソンズ—「文化システム」概念をめぐる—」『京都橘大学 研究紀要 第38号』一二五—一四三頁
- 大澤真幸、二〇一一、「サイバネティクス—20世紀のエピステーメの中心に—」『サイバネティクス—動物と機会における制御と通信—』岩波書店 四〇三—四一五頁
- 大浦宏邦、一九九六、「霊長類における群れの成立メカニズムについて」『理論と方法 11(2)』数理社会学会 一二九—一四四頁
- 落合仁司、二〇一六、「デュルケーム、モース、レヴィ=ストロースの数理」『第89回

日本社会学会大会報告要旨集』一六八頁

- Parsons, T., 1937, *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to A Group of Recent European Writers*, McGraw Hill (=一九七六、稲上毅、厚東洋輔訳『社会的行為の構造1』木鐸社)(=一九八六、稲上毅、厚東洋輔、溝部明男訳『社会的行為の構造2』木鐸社)(=一九八九 a、稲上毅、厚東洋輔訳『社会的行為の構造3』木鐸社)(=一九七四、稲上毅、厚東洋輔訳『社会的行為の構造4』木鐸社)(=一九八九 b、稲上毅、厚東洋輔、溝部明男訳『社会的行為の構造5』木鐸社)
- , 1949a, “The Problem of Controlled Institutional Change” in *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.310-345
- , 1949b, “The Position of Sociological Theory” in *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.3-16
- , 1949c, “Toward A Common Language For The Area Of Social Science” in *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.42-51
- , 1949d, “Certain Primary Sources And Patterns Of Aggression In The Social Structure Of The Western World” in *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.251-274
- , 1949e, “Propaganda And Social Control” in *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.275-309
- , 1949f, “Max Weber 1. The Author and His Career” in *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.67-72
- , 1949g, “The Profession and Social Structure” in *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.185-199
- , 1949h, “An Analytical Approach to the Theory of Stratification” in *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.166-184
- , 1949i, “Age and Sex in the Social Structure of the United States” in *Essays in Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.218-232
- , 1951, *The Social System*, The Free Press, Glencoe, Illinois (=一九七四、佐藤勉訳『社会体系論』青木書店)
- , 1960, “Pattern Variables Revisited : A Response to Robert Dubin” in *America Sociological Review*

- ,1966, *Societies: Evolutional and Comparative Perspectives*,
Prentice-Hall, Inc. (=一九七一、矢沢修次郎訳『社会類型 進化と比較』至誠堂)
- ,1969, “Communism and the West: Sociology of the Conflict” in
Hollander P. ed. *American and Soviet society : a reader in comparative
sociology and perception*, Prentice-Hall, Inc. (=一九七二、江藤則義訳編『アメリ
リカ社会とソビエト社会 ①社会理論』鹿島研究所出版会)
- ,1971, *The System of Modern Societies*, Prentice-Hall, Inc. (=一九七七、
井門富二夫訳『近代社会の体系』)
- Parsons, T. & Shils, E. A., 1951, “Values, Motives, and Systems of Action” in
Parsons, T. & Shils, E. A. ed. *Toward a General Theory of Action*, pp47-pp275
Harvard University Press (=一九六〇、作田啓一、永井道雄、橋本真訳「価値・
動機・行為体系」『行為の総合理論をめざして』七五一三九一頁 日本評論社)
- Parsons, T. & Bales, R.F. & Shils, E. A., 1953, *Working Papers in The Theory of Action*,
The Free Press
- Parsons, T. & Smelser, N.J., 1956, *Economy and Society: A Study in the Integration
of Economic and Social Theory*, London: Routledge and Kegan Paul Ltd. (=一
九五八、富永健一訳『経済と社会』岩波書店)
- Parsons, T. & Shils, E. A. & Naegele, K. D. & Pitts, J. R., 1961, *Theories of Society
Foundation of Modern Sociological Theory I II*, The Free Press (=一九七八、
倉田和四生訳『社会システム概論』晃洋書房) (=一九九一、丸山哲央訳『文化シ
ステム論』ミネルヴァ書房)
- Paxton, R.O., 2004, *The Anatomy of Fascism*, Alfred A. Knoff, Publisher, New York
(=二〇〇九、瀬戸岡紘訳『ファシズムの解剖学』桜井書店)
- Robertson R. & Turner, B.S., 1991, *Talcott Parsons: Theorist of Modernity*, London:
Sage (=一九九五、中久郎ほか訳『近代性の理論 パーソンズの射程』世界思想
社)
- Rocher, G., 1974, *Talcott Parsons and American Sociology*, Thomas Nelson and Sons
Ltd. (=一九八六、倉橋重史、藤山照英訳『タルコット・パーソンズとアメリカ
社会学』晃洋書房)
- 挟本佳代、二〇〇四、「パーソンズと 20 世紀の科学」富永健一・徳安彰編『パーソンズ・
ルネサンスへの招待 タルコット・パーソンズ生誕百年を記念して』二一五一二二
三頁
- 作田啓一、一九七二、『価値の社会学』岩波書店
- 佐藤敬三、一九九六、「システムサイバネティクスとポストモダン—インターネット、オ
ートポイエーシスの時代とシステムサイバネティクス—」『科学哲学 29』六十一—
七十五頁

- 佐藤俊樹、二〇一一、『社会学の方法 その歴史と構造』ミネルヴァ書房
- 重田孝夫、二〇一六、「家族システムと世界の多様性」『SBI 大学院大学紀要 第4号』
五〇—六二頁
- 進藤雄三、一九八六、「パーソンズの社会システム論」中久郎編『機能主義の社会理論：
パーソンズ理論とその展開』三六一—五八頁
- 、二〇〇六、『近代性論再考 パーソンズ理論の射程』世界思想社
- 高城和義、一九八六、『パーソンズの理論体系』日本評論社
- 高籙正人、一九七〇、「パーソンズの行為理論研究ノート（I）一型の変数から行為空
間の次元へ」『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学 20』七一
—八二頁
- 高野秀之、二〇〇九、「言語学史概論—認知革命が起こるまで—」『嘉悦大学研究論集
第52巻第1号通巻95号』七七一—九九頁
- 田野崎昭夫、一九七五、「社会体系の変動と歴史分析」田野崎昭夫編『パーソンズの社
会理論』誠信書房 二二二—二五六頁
- Todd, E., 1983, *La Troisième Planète*, Éditions du Seuil (=二〇〇八、石崎晴己訳「第
三惑星」『世界の多様性—家族構造と近代性』三一—二九四頁 藤原書店
- , 1984, *L'Enfance du Monde*, Éditions du Seuil (=二〇〇八、石崎晴己訳「世
界の幼少期」『世界の多様性—家族構造と近代性』二九五—一五一〇頁 藤原書店)
- , 1990, *L'Invention de l'Europe*, Éditions du Seuil (=一九九二、石崎晴己ほ
か訳『新ヨーロッパ大全 I II』藤原書店)
- , 1994, *Le Destin des immigrés*, Éditions du Seuil (=一九九九、石崎晴己ほ
か訳『移民の運命 [同化か隔離か]』藤原書店)
- , 1998, *L'Illusion Économique Eaai sur la stagnation des sociétés
développées*, Éditions Gallimard (=一九九九、平野泰郎訳『経済幻想』藤原書店)
- , 1999, *La diversité du monde : Faille et modernité*, Éditions du Seuil (=二
〇〇八、石崎晴己訳『世界の多様性—家族構造と近代性』藤原書店)
- , 2002, *Essai sur la Decomposition du Systeme Americain*, Gallimard (=二
〇〇三、石崎晴己訳『帝国以後』藤原書店)
- , 2011, “Le Jour où l'euro tombera”, Mediapart (=二〇一五、堀茂樹訳「ユ
ーロが陥落する日」『「ドイツ帝国」が世界を破滅させる—日本人への警告』一九九
—一二二三頁 文春新書)
- , 2011, *L'origine des Systèmes Familiaux Tome1: L'Eurasie*, Éditions
Gallimard (=二〇一六、石崎晴己監訳『家族システムの起源 I ユーラシア上下』
藤原書店)
- Todd, E. & Courbage, Y., 2007, *Le rendez-vous des civilisations*, La République des
Idées (=二〇〇八、石崎晴己訳・解説『文明の接近「イスラーム vs 西洋」の虚構』

藤原書店)

- Todd, E. & Le Bras, H. ,2013,*Le Mystere Français*, Éditions du Seuil (=二〇一四、石崎晴己訳『不均衡という病 フランスの変容 1980-2010』藤原書店)
- 徳安彰、二〇〇四、「近代の社会構造のシステム論的分析-パーソンズとルーマン」富永健一・徳安彰編著『パーソンズ・ルネサンスへの招待 タルコット・パーソンズ生誕百年を記念して』一七五—一八八頁
- 富永健一・徳安彰編著、二〇〇四、『パーソンズ・ルネサンスへの招待 タルコット・パーソンズ生誕百年を記念して』勁草書房
- 辻竜平、二〇〇四、「ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの構造—テンニースの2 概念をつなぐネットワーク・モデル」三隅一人編,2004,『社会学の古典理論 数理で蘇る巨匠たち』勁草書房 三九—六三頁
- 上垣彰、二〇〇九、「比較の意義について：経済学の立場から」『比較経済研究 第46巻第1号』三五—五一頁
- Watts, D. J.&Strogatz, S.,1998,” Collective Dynamics of ‘Small-World’ Networks” in *Nature* 393. pp.440-442
- Weber, M.,1920, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, Aufsätze zur Religionssoziologie (=一九八九、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫)
- Weidlich, W.& Haag, G., 1983, *Concepts and Models of a Quantitative Sociology The Dynamics of Interacting Populations*, Springer-Verlag GmbH& Co.KG (=一九八六、中島久男ほか訳、『社会学の数学モデル』 東海大学出版会)
- Wiener, N., 1956 [1948] , *Cybernetics: or control and communication in the animal and the machine second edition*, The MIT Press, Cambridge, MA. (=二〇一一、池原止戈夫ほか訳、『サイバネティクス—動物と機械における制御と通信—』岩波書店)
- 山内康英・黒石晋、一九八七、「システム理論と秩序の形成」『理論と方法 1987 vol.2 No.1』二九—四四頁
- 山川雄巳、一九八〇、「政治学とサイバネティクス」『年報政治学 vol.31』七七—一〇九頁
- 柳沢謙次、一九九一、「システムと有機体論と法の要素」『浜松医科大学紀要 一般教育第五号』一七一—二七頁
- 油井清光、二〇〇二、『パーソンズと社会学理論の現在—あるいは T.P.と呼ばれた知の領域』世界思想社
- 、二〇〇四、「構造主義「以後」とパーソンズ」富永健一・徳安彰編『パーソンズ・ルネサンスへの招待 タルコット・パーソンズ生誕百年を記念して』二二五—二三七頁

——、二〇〇六、「比較近代化論とグローカル化論-理論形成論へのエスキス-」『社会学評論 57 (1)』一二五—一四二頁